

奇譚クラブ

1959年 12月号

創作『黒井チエの青春』 近藤一
小説『黄色オラミ誕生』 真木不二夫



12月号

昭和三十四年十一月二十日印刷 十二月号(第十三巻第十六号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十四年十二月号

12

奇譚クラブ

昭和三十四年十一月二十日印刷 十二月号(第十三巻第十六号)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

御送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の少額のものを利用下さい。宛先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚振替用紙は当社作成のものは品切となりましたので御諒承願います。

限定版特別号の第二弾 マニア瞠目の書！

緊縛写真と緊縛画集

定価 五百円（送料共）
略号「緊縛」

四馬考緊縛画集 (25枚)

- 1 女体耐久テスト
- 2 女体は美しき玩具
- 3 素晴しき会長
- 4 人間燭台の実験
- 5 ルシメカバと赤ん坊
- 6 物置小屋の怪
- 7 白いけにえ
- 8 生埋めの私刑
- 9 アクロバットの訓練
- 10 奴隷という責め
- 11 女学生嫉妬
- 12 水責にあう美女
- 13 回転する女体
- 14 浴場の悦
- 15 女の御馳走
- 16 鞭の逆恨み
- 17 三醜女の逆恨み
- 18 淫虐な美容師
- 19 遠慮はいらねえ
- 20 狂気の復讐
- 21 女体の荷物
- 22 ヤキを入れてやる
- 23 トランク詰の裸女
- 24 電気責めテスト
- 25 吊し責めの美女

素晴しき写真集 (84葉)

- 序曲「手吊り」のポーズ
第二章 逆手吊と足吊
緊縛感のクローズアップ
拘束女体の経過
股間縛り競艶
麗しき果実列
狂った果実
晒し者なんだワ
腰巻の乱舞曲
女の歓び八態
- きあ、どうでもして
陳列された女体！
忘れられぬ豊満美
黒蛇のふんどし獄
女のサポータ
吊り人形の哀欲
断然、これは凄いの
女囚第14号籠り通る
(計 八十四態)

臨時増刊 限定版 悦特 No 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号第二集（略号「悦特第二」）

巻頭の四馬孝画、緊縛絵画から始まって、百十六葉に亘る特写グラビア写真、本文の昭和二十八年度本誌掲載の傑作サド読物と全巻息もつかせぬ充実した、S一逼倒の編集により二百頁を掩う妖気は、必ずや皆様を完全に圧倒することでしょう。

四馬孝緊縛画集

- ◎柱背負い
- ◎深夜の水浴
- ◎喰込む縄
- ◎あんよは上手
- ◎捕われ人
- ◎椅子縛り
- ◎水道責め
- ◎音打ちの果

悦虐姿態特選集

- ◎逢瀬のポーズ
- ◎しずかなる受縛
- ◎はかなき悶え
- ◎美囚第十四号
- ◎羞姿晒陽
- ◎悦びの一刻
- ◎峻なす白縄
- ◎乱れさく哀花
- ◎柔肌の喘ぎ
- ◎荒縄と美貌
- ◎未知の驚き
- ◎悦虐狂奏曲
- ◎絹川文代
- ◎花坂道子
- ◎田中芳代
- ◎絹川文代
- ◎愛川悦子
- ◎浜本喜美
- ◎三木敏子
- ◎絹川文代
- ◎絹川文代
- ◎平野笑子
- ◎絹川文代
- ◎岩井知子
- ◎大塚啓子

往年の好読物集

- ◎造形美術
- ◎艶肌の拘束
- ◎ロープ・ブラジャー
- ◎往年の好読物集
- ◎花坂道子
- ◎絹川文代
- ◎愛川悦子
- ◎泉 辰之助
- ◎古川 裕子
- ◎黒井 珍平
- ◎山本 百合
- ◎岡田 咲子
- ◎若林 啓子
- ◎竹谷 十三
- ◎岡田 咲子
- ◎浮家 鷹三
- ◎野村恵美子
- ◎岩 広志
- ◎飛田 良二
- ◎大川由紀子
- ◎近見 啓



奇譚クラブ

復刊第五十二号
十二月号

目次

四馬孝傑作集 懲罰室	四馬 孝・画
口 夕ざれの下田	滝 れい子・画
頭 緊縛画 供先を乗り切った紅毛婦人	絹川文代嬢
特写フォト 「明眸皓齒」	絹川文代嬢
巻 緊縛写真 「真紅の腰巻」	絹川文代嬢
悪魔の器具 浣腸器	四馬 孝・画

お仕置をめぐる一考察 罪の意識と外観について	近藤	一	18	
夢三夜 第三夜 “一軒家”	(NTV・快楽黒頭巾より)	牧	高志	25
或るフェチシストの素描 汽車の中にて(2)	早野	勇作	38	
創作 無頼の海	植村	奏	30	
創作 「別れても」	蒼野	礼	40	
黄色オラミ誕生 (第三部)	真木不二夫	50		
手帖難報 櫻	沼	正三	58	
愛好者の記録 (Mに秘められたたのしみ)	とろま・かつひ	62		
乗馬ズボン・シリーズ 「ベルリン最後の日」	藤山	秀緒	64	

創作 「おぼろ月」	三条 卓史	76
九月号と十月号のいろいろ	近藤 一	84
連載告白小説 「或る倒錯生活」(その三)	西村 憲一	86
創作 黒井チエの青春(2)	近藤 一	92
話の肩籠 八雲閣モデルの着脱	辻村 隆	104
マゾヒズム百景	馬場 好男	109
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品		
最後の激突 (乳房に火をつけるな・最終回)	藤木 仙治	112
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	123
告白 「浣腸器とともに」(前編)	栗瀬 良	126
創作 王宮の浣腸室(第四回)	柴崎 黎子	132
麻生保氏の生活と意見(十二)	麻生 保	142
女言葉礼讃	兵頭 庫一	146
考察 「腹を切る事」(その二)	折伏 下男	147
M系観劇レポート 奇想をこらす三流演劇の生態	鬼山 紘策	148
乙女 櫓(おとめやぐら)	桂 牧次郎	154
読者通信		166

限定版特別号 第一弾

「緊縛フオトアラベスク」

略号 (あらべすく) 特価五百円 (送料)

収載内容 二十六項目 写真七十七葉

- 1 鏡……愛川悦子
- 2 銘花二輪……花坂道子
- 3 鉄……鎖……大塚啓子
- 4 諦……観……大塚啓子
- 5 庭園にて……絹川文代
- 6 謎の微笑……田中芳代
- 7 田代悠子表情集(一)
- 8 誇る脚線美田代悠子
- 9 この足どうかしら?……田代悠子
- 10 裏と表と……愛川悦子
- 11 落陽の丘……愛川悦子
- 12 ポリウムの花園……大塚啓子
- 13 緊縛感の綾太塚啓子
- 14 奔放な肢体大塚啓子
- 15 鏡台と腰巻花坂道子
- 16 腰巻と鏡台花坂道子
- 17 奇妙な休憩絹川文代
- 18 田代悠子表情集(二)
- 19 脱がされた高手小手……愛川悦子
- 20 亀甲縛り……愛川悦子
- 21 吊責折檻……村井知可子
- 22 立木縛り……村井知可子
- 23 豊……醇……愛川悦子
- 24 乱れ髪三景大塚啓子
- 25 椅子と絨緞愛川悦子
- 26 組上の美鯉絹川文代

(限定版特別号は一切書店売りを致しませんが、直接発行宛お申込み願います。)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル様の緊縛姿態にて埋めました。

臨時増刊号

略号「S特第二」

「サド特集号 第二集」

定価三百十円 (送料)

【麗美巻頭図絵、四馬孝画集】

- ☆密 質 倉庫
- ☆悪魔のような女
- ☆春美の受難記
- ☆シリーズ 四点
- ☆新品 第一号
- ☆嫉妬の鬼
- ☆奴隷 船
- ☆妙 吊 責
- ☆雨中の引廻し
- ☆奈落のリハーサル
- ☆鼻責めテスト
- ☆黒目鏡の女
- ☆地下室の苦行
- ☆苦 責
- ☆吊 責
- ☆乳 房 責め
- ☆人間フープ
- ☆檻
- ☆アクロの訓練
- ☆捕われた商品
- ☆犬の訓練
- ☆女 体 鞭 馬
- ☆夜 ながし

【被縛女特選集グラビヤ百九葉】

- 絹布と絹肌 (田中)
- 飾り人形 (大塚)
- 台上的賛 (絹川)
- 若妻の秘美 (花坂)
- 白い若鮎 (田中)
- 麗 囚 (絹川)
- 三面鏡 (愛川)
- 仇姿黄八丈 (絹川)
- 縄さばき (浜本)
- 挑発の笑 (絹川)
- 被 襲 (花坂)
- 深海魚 (田中)
- 哀れな賓客 (絹川)
- 豊 胸 (愛川)

【興味尽きぬS的読物】書下し二篇

私の責画 責めの美人と皮革 (四馬孝)
緊縛フオトと緊縛モデル (白頭巾)
南村俊平画ハ猪大人の御乱行、強制女体浣腸器V

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

定価三百円 (送料) 略号「悦特」

悦虐小説傑作集 S的作品のエッセンス

- 離 獄 手 記
- 妻 は 縛 ら ず
- 夕 陽 の 側 面
- 鏡 子 の 主 題
- 私 人 的 主 題
- 色 欲 主 題
- 女 奴 隷 の 手 記
- 怪 奇 漫 陀 羅 教
- 悦 虐 の 旅 役 者
- 悦 虐 の 思 想
- 私 人 的 思 想
- 片 耳 伝 奇
- 縛 ら れ た 妻 以 前
- 地 獄 絵 行 脚
- 鉄 格 子 の 中 に

「グラビヤ緊縛写真」百十四葉の傑作

- 妖 精 (ニンフ)
- 三 ツ 葉 葵 の 横 顔
- 誘 拐
- 羅 致
- プ 陽
- 木 浪 れ
- 夢 路
- 競 花
- 首 シ ユ ミ
- 放 謀 成
- 関 謀 成
- 三 処 責
- 黒 タ イ
- 観 念

四馬孝画責画集 口絵

- 白 魚 の 悶 え
- 苦 悶 の 前 奏
- 鉄 鎖 の き し み
- 籠 の 白 鳥
- 宙 に 踊 る
- ア ク ロ バ ッ ト
- 濡 れ る 朱 唇
- 土 蔵 の 花

懲 罰 室

にふいモーターの音と共に、休みなくペダルは回転する。スイッチの切り換えにより早くもなり遅くもなる。美しい受刑者は額から汗を流しながらこの苛酷な懲罰に呻吟するのだった。



田 下 の ら 夕

「おお、お吉さん、貴女の足は真珠のように美しい。」ハリスはお吉の足下に伏して、真白い足を愛撫するのであった。



滝 麗子・画



供先を乗り切った紅毛婦人

騎馬のまま行列先を乗り切った白人の女を捕えて松の木に縛りつける
供先。「白人でなければ一刀の下に斬り捨てるところだが…」

明眸皓齒

めい

ぼう

こう

し



特写フォト



△モデル 絹川文代▽



モデル 絹川文代



真紅の腰巻

悪魔の器具浣腸器

「いい子だから大人しくしてるんだヨ、見せしめに、これから、いいことをしてやるからネ」女は太いシリンダーを取り上げて、中の空気を慣れた手つきで抜くのだった。



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1959年12月号

(第十三卷 第十六号 通刊第百三十二号)





お仕置をめぐる一考察

——罪の意識と外觀について——

近 藤

一

「お仕置」を愉しむために欠くことのできないものは幾つか考えられるでしょうが、お仕置にかけられる女性が、夢とか空想とか呼ばれるような豊かな創造の世界を持ち、伸びやかな心的作用を実行することが、その最も大事なものであるかと、私は考えます。

マゾヒズムの女は、多く胆汁質であるとか何かの記事で読んで記憶がありますが、私自身は何等統計の裏付けを持たずとも、胆汁質の特性から、このことはかなり確からしいことと思っております。想像力と熱血質とは相互に密接な関連を持っていると思えます。それ故、幻想を愉しむマゾヒスティン

が、胆汁質に多いということは充分にあり得る筈です。

——可哀想な私。でも、これが私の運命なのよ。——

私のお友達の一人も、自分自身を極めて可哀そうな娘だと思ひ込むことが好きで、現実のちよつとしたきっかけから、或いは全く無に等しい処から、広大無辺な想像の世界に遊んでいます。自分を可哀想なものと看することは、他人の同情を一身に集めたい、誰からもこよなく愛されたいと希う娘心の淡く甘美な感傷なのでしょうか。

運命に虐げられることを渴望しているのではないのです。逆境の嵐の中で、木の葉のように弄ばれている自分に寄せら



れる同情が欲しいのです。ですから、これはマゾヒズムではないのかも知れないと私は思うのです。

自分自身を憐れむことは、二個の作用の複合した現象で、つまり、可哀想な自分と、その自分に同情している自分とがある訳です。

本然の自分は可哀想な自分であり、それに同情している自分は、本然の自分以外のものを総て代表しているものなのでしよう。

「愛される」という想いが、まだそれ程切実な問題として迫って来ていない人でも、それなりに、やはり人たる以上は「愛されたい」という願望が、濃厚なモヤモヤになって胸の中に渦巻くものです。現実でないだけに、理想の形が強く押し出され、いろいろな憧憬のイメージが躍動して来るのです。未熟な人生経験の限りでは、何か自分に理解し得る形象を通じて、一種の憧憬を育くんで行くものですが、親子や兄弟姉妹の間にある愛情と異質なものを探し求めている娘心に理解できる感覚は、可哀想なものへの限りない同情という形を示してくれるのです。

同情は正しい愛がなくては生まれないものに違いありません。

少女の世界においては、自分に同情してくれるのは、或る時は大人達であり、或る時は同年輩の少女であっても、同性でしかないのですが、それが思春期に至ると、異性からの同情が憧憬的になって現われます。勿論それまでも男性の登場はありますが、それは父であり兄であり、親切な小父さ

んであって、「人」というのと大して違いがないのです。それに対し、思春期の男性は文字通りの異性であって、未知の異性から自分が対等のものとして扱われ、与えられる愛情が同情の形を取る訳です。

同情を受ける自分、可哀想な自分は、然しながら、何らかの意味における劣等感に起因するものです。優等な境涯に在ることは賞讃や羨望の的ではあっても、同情に値するものではありません。他人より劣弱な資質に生まれついたということこそ、明らかに同情に値する程可哀想なことの筈です。

単純に、例えば頭が悪いとか、手先が器用でないとか、普通一般にできることが不得手だというような才能の問題や、顔立ちやスタイルが美しくないとか、病気がちだとかいう肉体的な条件は、往々にして劣等感の根源になっているようです。そしてこれらの事由は、多くの女性に、社会的な劣後の地位を潜在的に意識づけてしまうのです。

——私は決して美人じゃない。取立てていう程の才能は何一つ持たせていないし、ごくありふれたほんといつまらな女なの。私に許されたものは、身も心も捧げつくして只管奉仕することだけ。だから私はあの方の女奴隷としてふさわしく生まれついた女なんだわ——

世間で所謂つまましい女性、そして私の大好きなこの種の激情に富んだ女性を、私はKKの誌上で幾人も識ることができ、また私自身の周囲にも発見することができました。

彼女は、たった一度こういいました。

「私、この間、約束を守らなかった罪に、今日はどんなこと



でも厭っていわないワ。何でも云付けて。罰として……。」
純情な彼女が、而も意識しすぎて却って間違えてしまった
罰と罪の使い方に、ぼうっと頬を赫らめて、それが癖の、小
さく肩を揺すった風情は、思わず抱きしめたい程に愛くるし
いものでした。

処で、これらの資質の劣等感は、ともすると罪の意識の方
へ傾いて行つて、そして自然に「お仕置」と結びついてしま
うのです。

例えば、女性の生命である容貌に全く自信を持ってない人が
いるとします。この女性は、物心さえつけば早晚必らず、自
分が世の中の美女と対等の評価を受けるなど望むべくもない
ことを経験によって悟らされる筈です。女性は運命に概ね従
順です。彼女は人生のこの現実抗う徒勞を避けて、賢明な
諦観に陥ります。

——私はあの美しい女神達の下僕、女王様の奴隷、従属物
なんだワ——

君臨と服従には必然的に一方的な制定が加えられて、何の
不審もありません。自らを識ることの諦めが、この屈服一途
の境涯を甘受してしまい、それを当然のこととして受け容れ
てしまうのです。

私のお友達は私に向つて、自分は頭が悪いからダメなのだ
と屢々いいます。私は彼女に内緒で彼女の学業成績を調べて
みました。小学校は総代で卒え、中学校も優等生、高等学校
では自治会活動の花形でクラス委員でした。それなのに彼女
は自分自身を私より遙かに頭が悪い娘だということです。極端

な卑下は私の嫌う処なので、少し懲しめる必要があると思
い、彼女を私のサーヴァントにして、私の一方的な監督下に
置くがそれに耐えられるかと訊ねた処、大丈夫というはっき
りした答を得たので、却って私が慌てた位でした。

彼女の場合、自分は頭が悪いから過ちを犯す、その行為は
当然罰せられなければならない。そして彼女を罰する者は彼
女より優れた人、過ちを犯さない人であるから、彼女は潔く
心から罪に服することができるといふのですが、一般に、こ
ういった論理的は自然の筈です。

体が弱い人は、丈夫な人に較べ、より多く罪を犯すので罰
せられるべきなのです。才能の乏しい人は才能の豊かな人に
醜い人は美しい人に、それぞれ罪を得易いのです。

初めは相対的であつたこの関係が、やがて観念の中で変化
し、頭が弱ければそれ自体、罪であり、病弱とか凡庸とを或
いは美しく生まれつかなかつたということがそれ自体で悪を
構成してしまうのです。

彼女は女性に生まれついたばかりに、そしてそれだけの理
由で、男性への隷属的奉仕を何の躊躇いもなく誓うのです。

劣等感と罪の意識はなお複雑に混和して行きます。罪を犯
した者は、文明社会に限らず、劣等の烙印を捺されて然るべ
きです。一方では、人類社会に於いて劣っていることがそれ
自体、罪悪なのです。従つて一旦罪を得た者は抜けることの
できない渦に巻き込まれて、益々強い劣位に落ちて行く訳で
すが、このことは私達が日常、見聞することでもあらうと思
います。



罰には罪が必要です。お仕置には罪の意識が不可欠なのです。お仕置を楽しむためには豊かな想像の世界が無ければならぬと私は冒頭に書きました、そこで要求されている女性の創造力が、罪の意識を創り上げ、或いは昂めて、お仕置の執行者となる男性を魅了し尽くしてしまう心優しいムードを醸し出してくれるのです。

罪を罰するには無実のものでも構わない訳ですが、無実の罪で女性をお仕置にするよりは、何かの過ちを取上げて処罰する方が、刑の執行者の気持はともかくとして、当の女性が安心して悦虐に浸れると思うのです。通常の社会意識からすれば、無実の罪は明らかに違法であるのに、口実さえあれば受刑者にとっては違法でなく不当なものとして受取られてしまうのです。

「お前は俺の命を狙ったのだ！女奴隷の癖に主人を殺そうとする憎い女！逆様だっ！」

けれども身に覚えの無い彼女は強く否定します。苛烈残酷な拷問、幾度か意識も混濁する痛苦に、彼女は遂に負けて無実の罪に服します。現在の苛責の激しさに、いっそ一思いに殺された方が楽だと思わせたのです。そして女死刑囚となった彼女は、最早逃れ難い運命への屈従を強いられて諦めるのです。

——もう駄目、仕方がないワ。私が不運なんだもの。ジャンヌダークだって火焙りになったし、昔から大勢の女の人が無実の罪を着せられて惨いお仕置になったんだワ。女はいつも虐げられる階級なのね。私も諦めて、どうせ殺されるなら

少しでも綺麗に死にたいワ。——

ここには暗い悲劇があります。救いがなく、無実の罪で処刑される女囚は、実は男性と対等な立場の人間として観られているために、女囚の潔白さと罰の非道さが際立ってしまうのです。主殺しは死罪でも、これには実体的真実が伴っていないのです。

好き好きかも知れませんが、とにかく私は無実の罪で女性をお仕置にすることを好みません、必らず現実の罪を求め、罰を与えるのです。その罪は別に盗むとか壊すとかいう必要はありません。

「お前のその恰好は何だ！——その化粧、服装、余りにも可愛すぎるじゃないか！誰がそうしろといった？勝手な真似をする奴は、少し頭を冷やしてやろう。貴様は逆吊りだっ！」

或はこういうのもあるでしょう。

「お前は女だ！男に対して女である奴は罪人だ！くそっ！お前は逆だっ！」

或る行為が罪であるかどうかは、そういう内容の規範があるか否かにかかっています。

——私は彼に内緒でお化粧をしちゃったんだもの、お仕置にされても仕様がななんだワ——

——私は女に生まれちゃった。彼の罪人なんだもの、殺されるのが当り前ヨ——

そういう規範がありさえすれば良いのです。私生活において刑の量定は問題ではありません。現行の法規範でさえ相対的なものです。十両盗んで首が飛んだ時代もあれば、現在の



窃盗罪に死刑はないのですし、姦通は極刑という時代もあれば、現代のように法的に無色な時代もあるのです。私的な生活で、当事者が合意する限り、規範拘制の内容は自由な筈です。掃除を忘れた罰に、座布団代りの縛り上げられた身を夫の体重の下で呻吟させることも、決して不自然ではありません。

悪いことをしたからお仕置にされるんだということは、悪いこともしないのにお仕置にされるということと、とても違うように思います。罪を犯して罰を待つ諦めは、無実の罪に因るものと違い暗さがありません。それはお仕置が贖罪であり、それによって赦されるという希望があるからかも知れないのです。

生活を愉しむためならば、女が罪を犯す事由だけは前以て定めておくべきだと思います。そうすれば女性の側でも、お仕置が恋しい時、適宜に罪を犯す自由が持てる訳です。もしその様な自由を認めたくない方があれば、考えられる凡ゆる行為を罪と決めておけばよいのです。前後左右、まわり中の空気を封じてしまえば、仰向いて頭の上の空気だけを呼吸しながら、それでもやはり美しく愉しいのが女性という生きもののなのです。

罪さえ決めておけば罰は恣意に任せてよい筈です。何の罪には何の罰と定めておくのも確かに便利です。女性は自分の行為がどの様なお仕置にされるものか価値判断が可能になりますし、執行者も規定通り動けばよいのですが、唯、これは機械的に陥り易く、変化に乏しく、主体が加虐者から離れる

かも知れません。これに反して、罰が不定で全くの恣意であれば、同じ行為がある時は平手打で済み、ある時は海老責めや逆吊りということにもなり兼ねませんから、これではスリルが強すぎて、被虐者には毒です。そこで中庸を取って、罰の大綱を定め、種類や懲罰の時間の上下級を定めておいて、その範囲内での自由裁量を加虐者に任せる方法が考えられます。これを採用すると、例えば、この罪を犯したら少くとも三十分の海老縛りを覚悟しなければいけないのだとか、この罪なら長くて五時間の柱縛りで赦されるとか、巾はありながら大体の見当がついて好都合です。

——今夜は特に可愛いから、いつも一時間の処を倍にするか、それともいつも通りの時間でひどい猿轡にするか、選ばせよう——

——今日は一つ時間を決めないで、涙が目からこぼれて口に詰めた布に吸われるまで赦さないことにしよう——
右のような愉しみも殖える筈です。

女性のある行為が罪に問われ、取調べがなされる段階で拷問が用いられます。その行為が罪になるとは知らなかったということは、何の意味もありません。無実の罪に問われることは全くないのです。女囚が罰を怖れて、見えすいた虚偽の否認をする時に限り、容赦無い拷問が威力を示し、嘘の罪深さを思い知らせるのです。

取調べの時、そして刑の言渡しの時、女囚は当然のことながら、身を以てその劣等性を示すべきです。



法廷で裁判官は遙かに高く椅子を列ね、被告人は検察官からさえ睨み据えられて慄え戦いて裁きを受けるのです。奉行所では白州の砂利に敷いた一枚の荒席の上に引据えられ、縛しめも解かれぬまま、ひれ伏して服罪を誓わされるのです。そこに罪人の姿があるのです。罪の償いをすら、冷やかな指弾の中に強いられるみじめさ。そしてこれは、愛すべき女性にも全く同様であるべきです。

刑を言渡す男性は、突っ立っているよりも腰掛けている方が良さそうです。そして受刑の女囚はその足許に引据えられねばなりません。平和なカップルでは畳か板敷が活用されるでしょうし、女性が歎びに目醒めれば、玄關のタタキや庭の沓脱ぎなど恰好のものです。小さいながらも、縁に飾られた土の庭があれば好適です。ひいやりとした地面の肌触りは、もし苔でもあればこの上ないムードを醸し出してくれるでしょう。

ここに於いて行なわれるものは、法の厳正な具現であって人情の容れられる余地は皆無です。人権の尊重など実に有害無益です。女囚に人格は無く、彼女は唯、法の命ずる処に従って相応の取扱いを受けるだけの物に過ぎないのです、すべては定められた掟の通り、峻厳に、淡々と行なわれねばなりません。特にその必要が無ければ、彼女の自由を拘束している鎖や紐を解く必要は無いし、身体の検査などは定めに則っていつでもなさなければいけません。掟の権威のために、掟の遵守には充分な尊敬を強制すべきです。そのためには彼女の置かれている極めて低劣な地位を自ら認識させるために、

その象徴を作ることにも必要です。就中、服装などは最も大切な要素の筈です。生まれたままの姿も良いものです。覆うべき柔肌を隠らせ、余りにもあからさまな女体を隠しもあえぬ姿、これが賤しむべき女囚の彼女の現実なのです。腰に縄打たれる気持は、恐らく想像も及びますまい。本縄で首縄を緊くするのも見る眼を楽しませる姿です。観念しきった神妙な女体でも、相当烈しい禁圧を受けながらも全身で拒否の意志を示すでしょうが、それが掟であって、彼女という特定の女性に限らず、どの女性をその立場に立たせても同様の処遇を受ける定めであれば、現実の被虐者は常に彼女のみであって、恨むべきは掟であって直接手を下して彼女を苦しめている彼ではないのです。女性の生命力の強さは、運命の流れに決して抗わず、忍耐強く生き抜く努力を続ける処にあるのです。その立場に置かれた者は誰と問わず同一の処遇を受けることを知れば、羞恥と屈辱に身悶えしながらも、彼女は慎ましく受忍の喘ぎを発するのです。

ヌードにはいい知れぬ深味があるものの、特殊な着衣、就中、囚衣と呼ばれるものには更に限らない趣があります。色彩による種別、形による差異を組合わせると数多いケースをそれぞれ効果的に娛しむことができます。脱がせたくなれば剥ぎ取るまでのこと、じかに視覚や触覚に訴えて来るものだけに、欲求をかなり直截的に満足させてくれるものです。

猿轡も面白いものです。この場合、懲しめと共に取調に当っての勵りも大切ですから、息もつけぬ程に口に詰物をするものよりは、不明瞭な言葉を許すものとか金属製の棒を咬ま



せるものの方が、実用的で、見た眼にも楽しいものだと思います。何かいわないではいられなくしておいて、その発言をこごとく逆に聴いてやったりすれば楽しい限りです。

「どうも縛り方が緩くて物足りないようだね。僕の力が弱いようなら道具を使って締上げてやろう。遠慮なくいいよ。」

「あああ、こう、うううあ。」

「そうか、じゃそうしてやるよ。何も遠慮してることはなかったのに、水臭い奴だ。」

「うあう、ああ、うあううああ。」

「そんなに嬉しいか？こんなに震えて！涙が出る程嬉しいのか？いい子だよ、お前は、序でにもう一寸喜んでくれよ。」

どうせ囚われた女体は弄り物なのです。口を開いたまま固定した猿轡では涎が出ますから、子供でさえ涎を垂らす者は物笑いとして親の厳しい折檻による躰を受けるというのに、まして妙令の女体に成育した彼女は、年令不相応の所為の恥ずかしさを肝に銘じて知るべきです。大きな赤ん坊はやはり赤ん坊として、涎掛やおむつは不可欠なものでしょう。

罪人としての装いを強いられ、女囚が受けねばならぬ縛しめをかけられ、彼女はそんなやかな女体を彼の足許に引据えられて、彼の極めて主観に満ちた恣意の裁きに晒されるのです。

最早、在るものは大罪人、女囚第何号と名づけられた彼女なのです。行為の内容は何であったか、行為が掟のどの部分に触れたのか等は問う処ではありません。何はともあれ、彼

女は大罪を犯して裁きを受ける女囚だということが大切で、それ以外は問題外です。彼女は自ら歎き、憐れみ、そして諦めるのです。

——可哀想な私、どうしてこんな大きな罪を犯してしまっただの？仕方がなかったのよ。何もしないでも私は生きていられたかったんだもの、当って砕けただけ。同じことなんだワ。そしてとうとう捉まってしまった。バカバカ私のバカ！そしてお裁き。大罪人の私だもの、どうせお仕置は死刑。磔？火烙り？縛り首？それともちよっぴり近代的にギロチンにかけられるかしら？女だからって手加減なんかないでしょうね。却って下品な興味のために余計惨たらしく囂り物にされるかも知れないわ。嫌嫌っ！見せしめなんて嫌っ！こわい！みんなに見られてるなんて、私、気が狂いそう。嫌っ！赦して！

でも、もう駄目ね。口を鍼られて、何をいっても擲論されるだけ。逆に逆に取られて結局、私から頼んでお仕置にして貰うことになったんだもの赦して貰うこともできない。泣いたって駄目。

涙なんか出やしない。あんまり悲しくて誰も本当だと思っちゃくれないけど、私は女囚。重罪人よ。私は死刑にされるのよ。ああっ！

可哀想な私。でも、これが私に神様の下さった運命なのね。——

無上に美しい幻想だと私は思うのです。

(おわり)

牧 高 志

夢 三 夜

NTV

快傑黒頭巾より

第三夜^{ひとつや}＝一軒家＝

三たび、こんな夢を見た……。

何んでも、ひどく冷たい横なぐりの雨に、したたか打たれ慌てふためいて飛び込んだテレビ屋の軒先で、アレコレと独りで下馬評をしていたら、

「一つ、お求めになってはいかがなものかし



軒屋にテレビなどと云う最尖端の近代文化品を売っている事自体、頗る今様に怪気めく処へ、墓所の茶店ならいざ知らず受像の電波を方幾種かの箱の中に押込んで色取り取りの型を指さす浦島婆のセールスマンシップは、どう考えても俯に落ちない——と云って今更、

里へ戻ろうにも、ついぞ今しがた渡った村の一本橋はさき程の雨で流れたとあっては嫌やが応でも今晚はこの一軒屋に泊らざるを得ないハメにどうやらなつて了つた……（ものらしい）。

さて……と人間一匹度胸が据われれば枯れた尾花も何んのそのである。それにしても露出不足のカラーフィルムのように青ざめたつずれの普段着に薄汚れた白の腰巻とヒタヒタの藁草履の老女。

「お婆は独りポッチでいるのかネ。ほかに誰か……年頃の娘さんでも……」

「綺麗な娘っ子が居るンなら、とっくの昔にバーかカフェーになつてましたろ」と、そっぽを向く。

「と釜の底をひっかくような干からびた声として、ボックスの蔭から、白髪の皺顔がぬつと現われてニタリと笑った。持上げた雁首をよく見つめると、その顔は声に似合わず柔和そうである。

そもそもあたり一面ススキが原の野中の一

「じや、何んでテレビなんぞと縁もゆかりもないのを売ってるんだ」と正面切って聞いたですと

「ヘエッヘエッヘエッ……」

と含み笑いをして

「これさア……レエーダー代りややって呉れるッカラサア」

と、すげなく答えた。

雨足が遠のいたものと見え、虫の鳴く声が耳元に手に取るように聞こえて来るが誰一人、表を通る者がいない。夜も大分更けたものらしい。

すると、急に身体が震えて来た……それは尾花ならぬ老婆を見たからではない。店内というか野中の一軒屋の造りが一層、怪気に輪をかけて得体の知れない恐怖のどん底に

突き落としたからであろう。螢光灯に態よくあしらった店先は、なるほど近代センスに溢れたデザインで造られてはいるが、店の奥へ一歩足を運ぼうものなら、ガラリと変って時代錯誤も甚だしい江戸調、歌舞伎風のたたずまい……破れ障子に破れ行燈、すり切れた畳



はよいとして、半ば朽ちかかった軒の雨を避けるために置いた（と思える）古びたタライはリビングキッチンならぬ鍋釜の台所と隣合わせて夜目にも白くピカリと光るデバ庖丁とマッチして無気味である。

「旅の人、何を怪訝な顔をしていなさるだネ。何もあんたの肝ッ玉を取って喰おうと云

うんでなし、安心してこの老婆の接待を受けなされ。いい案配に雨が上ったようだから野天風呂でも入ったら……」

存外、姿に似合わず素顔同様、心の籠ったセリフの様だが実の処寸刻も気は許せない。この上、行燈の蔭で毛耳を立てて油を嘗めら

れちや堪ったものじやない。いくら貧乏スタジオでも、こうも背中合わせに新旧、雨ドラマのセットを家の内に組立てる処は無いだろ。それやこれやで得体の知れぬ老婆の手料理ものを食べはしたものの、御親切なセリフに甘えて帯を解き、あっさり風呂を頂戴する気にはなれなかった。

……その内、ふとこの家は奥州安達ヶ原の一つ家じやないだらうかと思ひ始めた。二、三百年の星霜を経れば家を改造して店先に、テレビが並んでも、別段おかしくもないだらうし、ススキガ原の直ン中に螢光灯が光っても文句はなかるうじやないか……。

「そうだ……そうだと、今時何んで、そんな馬鹿なことを。娘っ子や女っ子は男よりも腕節は強いんだべい。それをわしらみたいないな梅干婆が取って押えて、縛って逆さに吊るすなんて、第一、おっかなくて寿命さア縮まるだに——客人さんの方がわしらより、よっぽど腕節強そうだが、女っ子の一人二人は……ヘエッヘエッヘエッ……この婆めは、はなからチャンと見抜いてますわい。どうじや図星じやろ。滅法好きな癖に……」

「お婆々よ、おどかしっこなしだぜ。野っ原を斜に走ってよ、一軒屋へ飛び込んだんだか

らと云って、すぐ旅人が鬼婆に化ける訳が無
えじやねえか。お婆々だってそうだろう。行
灯があつて、へっついに出入包丁、お跳え向
きにタライの一つ位があつたって驚く事アね
え。汽車が通らねえばかりに三百年このか
た、ずっと野中の一軒屋を守り通し、その一
軒屋が街道筋で何もボタ餅を売るようにテレ
ビを売ろうと不都合は——無えっと、何処の
どなたさんでも思う処だが、……ちつとばか
り気に懸かる節も……（無えことも無え）」
「何が気に懸かるだネ？ 鐘一つ売れぬ日はな
し江戸の春じやもの、四五年このかた続いた
豊作で村中、銭がウナつてホクホク。庄助爺
もテレビを買った。五反百姓の治助どんまで
つい先頃、買うと云うたンやで……セール
スマンシップはこのお婆でも勤るじやろが……
ヘエッヘエッヘエッ……」

「じや訊ねるが……さっき、お婆はコレサア
レーダー代りをやつて呉れるッカラサと云
った、あのレーダーって奴は一体何んでい？
まさかレーダーが風車のように猫じや猫じや
と踊る訳でもあるまいし、台風の眼のように
飛び込んで警報代りをするほど高級設備の無
え……処を見ると、お婆、お婆はさしずめど
う見ても安達ヶ原じやろう？ たとい表はテ

レビ屋で胡魔かそうとも裏へ廻って木戸を開
けると……ブラリンコの鬼婆だろう。凶星、
それに間違いはない。どうだ、野中の一軒家
は、こちらにも内々気があるンだぜ……」
「ヘエッヘエッヘエッ……とうとう、お当て
なさったネ。如何にも左様。流石は江戸から



来なさった商人さんだ。いやさ、通りかかり
の雨宿りの旅人、よくぞ申された。登録商標
の看板はテレビ代理店でも裏へ廻れば仰言る
通りの安達ヶ原の一軒やさ……。サア、そう
と判れば、バレタ序でにお婆のこの世の極楽
を、いやさ、お婆の秘密を、とくと御覧に入
れようかい。そもそも、舌のもつれるレーダ

ーとかなんぞと抜かしたのは、それッ、これ
なのさ……」

と、つぎはぎだらけの押入れの襖をガタビ
シ半開きする。赤ちやけた布のカバーを取り
のける。云つてみれば変りばえのない普通の
14吋版のテレビなのだ、何処か仏壇臭い黒
光りする代物が忽然と現われ
たのである。

「何あーんだ。これがレーダ
ーなのかい？ ただのテレビ
（見たい）じやないか？」
「そう見るのが、誰しも素人
のあさましきじや。お前さん
は、この機械の性能を識らん
から、ハアハーンと早合点し
なさるが、世界でも誰一つ黒
髪の乱れた美しき顔をゆがめ
身を狭めて責めに泣く……ウ

フフフ……下手なお婆の文句より百聞は一見
に如かず、そろそろもう時刻じやろ。どれス
イッチを入れるから、見逃さぬよう隅から隅
まで、ずっと幾久しうお引立ての程を——じや
ない、よく眼ン玉あけて見なさるがよい」
夢想界の仕草は由来、継続と思慮を必要と
しない。俗言で表現するならば、チラリズム

は二度と還って来ない貴重なシーンともなり侍るのだ。

「このボタンでこのように場処を探る。手ごたえがあると赤いランプがついて……チャンネルが合うと、ホラ、御覧、すうっと初めはボンヤリしているが、その内にこの通り娘が映って来た。どうだ、荒縄で縛られている。

いずれ折檻されるところなのじやろう。おう、おう、惨たらしい青竹で打たれる。今度は下のランプの処を御覧。一番端しには娘の名前が出ているじやろ。ゆみと読める。次が娘の居処じや。三河在か、今の愛知県で一寸遠いがの……最後のランプの下は年齢と婚、未婚、後家かどうか、つまり戸籍が現われて来る仕かけなのじやよ」

「成る程、それでお婆は一体これから先、どうしよう云うのかネ？ 他処の安達ヶ原ばかり探ったって何の薬にもならねえじや御座ンせか。もっとも娑婆にやスナップシリーズとか云って、ただ、むやみやたらに被縛の女性をカメラに収めて悦に浸ってる馬鹿なおっ

さんも大勢居ますがネ」

「それじやとて——。ただ映るだけじや、このお婆はその馬鹿なおっさんと少しも変ンねえ。処が——これからが、このレエーダーテレビ大明神様の功顕あらたかの処となりますのじや。つい先頃も一カ月前に映った娘っ子が、この店の前を何気なく通った。ベルがけ



たたましう鳴るので、う、スグさま表へ出てみると確かに見覚えのあるその女御衆。こっちやへ来てお休みと云うたら素直について来たから、云うことを聴くんだよと荒縄で後手に縛り上げて納屋にしまっけて置いたんだが……さて、あの娘はよくつかったかな？ 塩が

甘かったかも知れない……」

「切りもせんで、そのままつけたのかい？」
「天井から吊るし水気を充分きってから、タライのそばでヘタを切り落したまでは覚えとるが、このお婆も、もう齢じやて……」

「じや、物は序で、一つ、そのよくつかったいやつかる前の女御衆を拝見したいなア」

「——なら、今少し待っていなされ。おとこのチャンネルで撮った娘っ子が、そろそろ店の横を通る筈じや。綺麗な娘で、昔は確か武家屋敷の出じやと思える風情。奉公先は江戸は雷門脇の呉服問屋だと出たが、そんなことはどうでもよい。そうそう、云うのを忘れていた。何んでも最近には呉服問屋から見込まれて、何やら云う映画会社に入り、松浦浪路とか名乗って売出しているという風の便りじやが、……」

「早くその何んとか浪路君を撮ってお呉れよ色々ところらも都合があるんだから……」
「レポートの頁数を気にするようなせかし、かたをするもンじやないよ。落ちついて、落ちついて……興味のある話ナンてものは誰も見棄てはしないもんだよ。そら、ヒタヒタ……と藁草履の音とシュッシュッという絹ずれの音がからんでサウンドボックスから聴えて来

るのがお判りかの？その浪路嬢なんだよ。今度はメインスイッチを押して焦点を絞ると——ホラ、まごうかたなく、おとといキャッチした小町嬢が現われて来た。ポチャポチャと黒襟をかけた可愛い女だろ。今お婆が上手にあの娘を捕えて見せる。このお婆の手練はまだまだ、どうしてそんなじよそこの親分衆には負けないよ。こうして背後に廻って、いきなり飛びかかる。口元を押える。そのまゝ五六歩後にひきずって、うつ伏せに倒した処を素早く荒縄で両手首を合わせて縛る。うらめしように睨むようでは美女の貫録も下ろうから、あり合わせの布で目かくしをする。どうじやのう、リハーサルなんぞ要らんでズバリ本番で、ざっとこんな物さ。」

「成程ネ、流石は年期の入ったお婆の手の内は、うまいもんだよ。このまんま野中の一軒屋でチーン、ポクポクになるのは惜しい。それじや塩加減のいい処でタクワン石はどうなるのかネ」

「……だから嫌なっちゃうよ。何とかマニアなんて者共は話の後がしつこくていけねえ。たくわん石で漬ける前にこの娘っ子を何度も云うように、あの天井から、下さ向けて……、そんな馬鹿な、もぎたてのホウズキじ

やあるまいし、着物の裾さ縄でくくって逆さ吊るすの。識りの過ぎる程識っててボケルのがマニアの悪い癖だ位は覚えときな。こちとら何も夢の中でタクワン石を振り廻わしているんじゃないんだから……。最初に娘の水気を切る。娘の後手首の縛り目がきつうになっ
ていないと具合が判らんからのう。上玉か下玉はこの時に判る。だから酷しうても女の両腕は後さア厳しう縛らなけや嘘だよ。タクワン石、そうワンワン云いなさんな。処で——と、一通り、お婆がこのレーダーテレビで捉らえた女娘達を見なさるかいつどうして、どうして、別嬪ぞろい。この扉を押して小っちゃな溝を跨ぐとすぐ右降りの納戸にしまつてある。誰か見るといけないから、いちいち鍵をかけてあるが、そうらそら、見えたかのう？あれが五百羅漢……じやない、女娘仏と云ってな。どうじや、綺麗じやろうが……」

「ウム……流石は名代の一つ家だ。前代未聞の一大絵巻。たといタクワン石の使用法は識らずとも時代と現代を一つに結んだ小憎らしさ、よくもテレビ屋に化けたもの。おッ、お婆。斯うと知ったからにはもう矢も楯も堪らぬ。封印破りしても、あのレーダーボックスを身受けしようじやないか？」

「ヘエッヘエッヘエッ……、そら、始まった雨宿りの下馬評崩れのお大尽にや、並のテレビでよござんしよ。そう安々と身受けされて堪まるものかヨ。来年、来なされ、さ来年、来なされ。新らしいブラウン管持つてな。そうだ、必らず夕立の晩に……それまでの予約じや。あずかりじや」

「そんな殺生な……」

「なにが殺生じや。今いうて今手に入らぬところが、余計値打があるというもんじや。……なんなら、代りに仏壇を持ってかえりなさるカノ？」

「仏壇じやない。テレビじやぜ……判ったのう仏壇は一万円で買えるけど、テレビはそうはいかん。まして女の縛られてる、ヘエッヘエッ……」

「あなた……まあお寝みに。お起きになって御注文の仏壇が来ましたわよ。とても綺麗。黒塗りで立派じや御座いませんか。下にボタンの式金具がついたりして、モダンだわ。まるで、テレビ見たい——」

夕立は降りそうもない或る日の夢。惜しいことにお婆の名前は永久に訊ね損ねた。

(夢三夜、完)



禪 船

—唐津軍兵—彼の過去を知る者は一人もない。彼自身すらそれを忘れている。その名前だって、果して本名かどうかは判らないのだ。いうなれば、彼は過去を持たない男である。

役場の戸籍からも、彼の名は抹殺されているらしい。彼の住居は海だ。そしてまた、墓場も海であるに違いない。

彼の流義に倣って、もっとハッキリいうなら、唐津軍兵こそは海賊の首領である。海賊

創 作

無 頼 の 海

榎 村 奏

青 木 審・画

などという古めかしいが、つまり海のギャングだ。船を相手の強盗だが、客船はあまり狙わない。大抵は貨物船である。しかし、本当の護物は密輸船だった。

海賊船の名前は「海竜丸」。僅か三〇〇屯の木造船である。勿論、一目で海賊船と判ったのでは仕事にならない。よそみには何のへんてつもない漁船だった。船だけでは判らなくても、もしその乗組員の姿を見ることができたら、すぐに判別がつく、たった一つの特徴があった。それは、夏でも冬でも全員が真っ白な六尺禪一本だということである。そし

て、それは他の海賊船との見分けにも役立った。航行する船舶は、唐津の船を「禪船」と呼んで怯気を願っていた。

唐津の子分達にとっては、夏はともかく、真冬に禪一本というのは相当に辛い。しかし親分の命令で掟になっていることだから、異存を唱えるわけにはいかなかった。新入りの手下も、最初は大いに面喰うらしいが、唐津の見るからに豪放な禪姿を見ると、ついそれに憧れる気持になり、己の禪姿にも満足して寒さも或る程度は我慢できた。

全く唐津の体軀は、首領の名に恥じない堂

々たる美事さだった。筋骨隆々という表現は彼の為にあるといえるくらい、鍛え抜いた逞しさは比類がなかった。

ひとたび唐津の子分になった者は、一も二もなく彼を尊敬してしまうが、全然不満がないわけではない。それは唐津が、どうしてもか、ひどく女嫌いだということだった。勿論それが、唐津自身に関する限りでなら何も問題は無い。ところが彼は、子分達にも厳しく女を禁じているのである。

「『犯罪の隣に女あり』という言葉を知ってるだろう。足がつかないアすべて女からだ。悪党になりきるにやア、絶対に女を断たんけりやア駄目だ。そののできねえ奴ア俺の子分じゃねえ。いつでも暇をやるぜ」

それが唐津の口癖だった。そして彼は、陸へ上った子分達が船へ帰って来ると、必ず自から軍隊式の検査を行った。

「親分は昔、よっぽと女から酷え目にあつたんだ。それで女嫌えになっちまったに違えねえ」

「イヤ。ひよっとすると、親分は不具かたわかも知れねえぜ。あんなにうるさくいうのも、ソレ、何ソだ、つまり、嫉妬ってヤツよ」

「バカいえ。俺ア親分が不具でなんぞねえの

を知ってる。やっぱり親分のいうことが本当なんだ」

「不具でねえって、どうして判る？」

「判るサ。見たんだから——」

「見た？ 何を？」

「何をって、証拠をさ」

「証拠だ？ いい加減なことぬかせ」

「とにかく、この眼で見たんだ。親分は絶対に不具じゃない！」

そんな仲間達の無駄口をよそに、橋本は舷側に頬杖をついて妙な笑いを浮かべていた。

（フフ、親分には秘密があるのサ、誰も知らねえ。ところが、この俺だけは見ぬいてる。俺だけはナ……………）

その夜、橋本は当番に当たっていて、船長室に唐津の寝支度をする時、唐津が横になってまだ部屋を出ないでいた。

「もういい。済んだら早く戻れ」

「はい。禪のかえはここへ置きました」

「判ってる」

「はい」

「何をグズグズしてるんだ。もう用はない」

「はア……………」

「どうした。何かいいたい事でもあるのか？」

「親分。私ア、他の奴等たア違います。親分の気持だつて判るつもりなソで……………」

「何をいつてるんだ？ 貴様——」

「私ア、親分の為だつたら何だつてする氣でいるんだ！ それで親分の氣が休まるなら、私アどうなつていいんです」

「……………」

「親分……………」

「何をするかッ！」

ガバと跳ね起きた唐津は、橋本を床に叩きつけた。

「ふざけた真似をしやがると承知しねえぞ！」

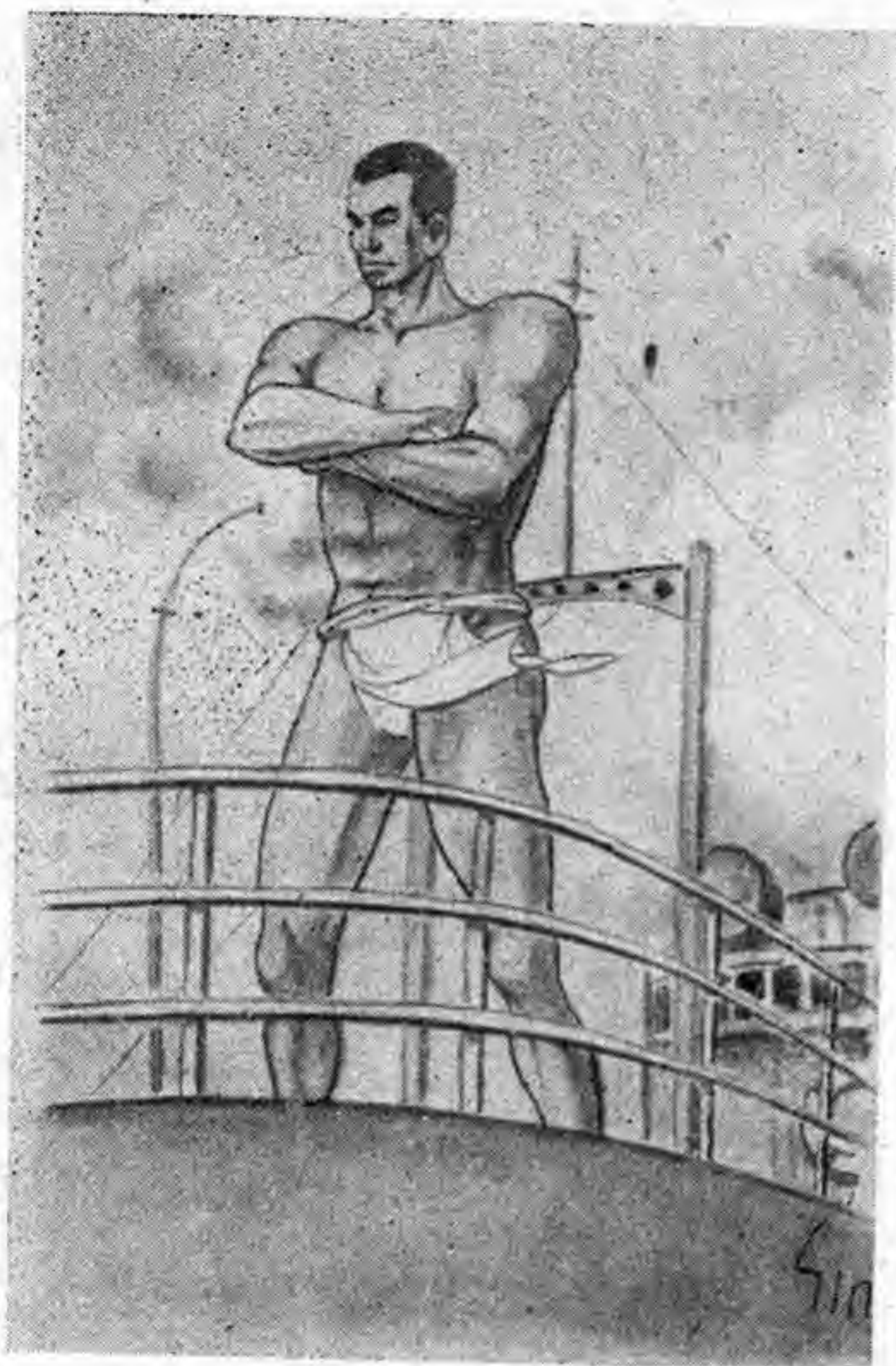
唐津の大喝に蒼くなつて部屋を退散した橋本は、己の誤算をいまいまいしく味った。

赤い布

港町は、どこの酒場へいっても、厚化粧の女達がウヨウヨしている。

唐津のいきつけの酒場「灯台」では、心得ていて、すぐに別室へ通すと、酒肴だけ置いて女は引き退った。

唐津の酒の相手は、伴野という老人で、船では参謀格の男だった。老人とはいっても、背中一面に彫られた自慢の刺青は少しも衰え



をみせていない。元、船乗りだったというだけに眼も確かで、自称前科八犯の前歴は、若い子分の間で充分ものをいっていた。唐津も酒は強いほうだが、伴野のほうが一枚上手だった。そして、唐津は飲めば飲むほど蒼くなり眼が据わってくるが、伴野は陽気になる。適当にすごすと二人は外に出た。ヒンヤリとした潮風が酔った頬に快い。

「親爺さん。寒かアないかね？」

「ご冗談。禪一本に馴れた駄にやア、こんな服ア暑くってかなわねえ」

「ハハ、遅えねえ」

用もなかったが、二人はブラブラと商店街のほうへ歩いていった。

急に唐津が足を止めた。伴野が怪訝そうに唐津の視線を追うと、制服の若い海上保安官

が横断歩道を渡って来ていた。さすがにギクリとして袖を引くと、唐津は頷いて歩きだしたが、どうも何か考え込んでいる様子だ。

「くわばら、くわばら。どうしたんですね？ あんなものに見惚れて——」

「イヤ、ナニ、酔ったかナ……」

「しっかりしてくださいよ。全く」

「親爺。いまの保安官、知ってやしまいな？」
「あつしがですか？ 知るもんですか。もっとも課長や係長ぐらいなら顔だけは見覚ええちやいますかね。あれアあなた、下っぱの小僧ですよ」

「そうだな……」

それっきり唐津はヘンに黙りこくってしまった、伴野が気を引き立てようとして、

「飲み直しましょうか？」といったが、

「いや、俺はもういい。帰るから、おまえナシなら一人で飲んでこい」

といってドンドン歩いていくので、伴野もしかたなく後に従っていった。

次の日の払曉に「海竜丸」は港を離れた。沖に出る頃には、唐津をはじめ全員が六尺一本になっている。昨夜上陸した者は例によって一人々々船長室に呼び出された。女を禁じられていたのでは、上陸しても面白くないの

で、船に残って花札などをしていた者もあり検査を受けたのは四人ばかりだった。

鋭く眼を光らせた唐津の前に立つと、脛に傷もつ身は思わずヒヤリとするが、大抵はうまくパスして部屋を出ると、ペロリと舌を見せる。だが、最後に呼ばれた広田は運が悪かった。彼は、仲間に誘われてはじめて禁を犯したのである。

「広田。おまえ、俺の眼を真ッ直、見られるか」

「……………」

「検査するまでもない。おまえの躰は女の臭いがプンプンする。俺の嫌いな臭いがな」

（バカな。そんな筈はない。親分はカマをかけてるんだ。うまくいい逃れるんだ。早く。そうすれば何のこともなく済むんだぞ）

そう思って焦るのだが、広田にはうまい言葉が浮かばなかった。

「おまえは、俺の命に逆いた。当然、懲罰を受けねばならん。覚悟はいいだろうな」

「私は、ナ、何も——」

「いいわけはきかん！」

広田の額にはベツトリと脂汗が滲みでている。それはもう自分の非を認めてしまったようなものだった。

甲板に引き出された広田は、六尺禪の代りに、真ッ赤な布切を巻きつけられていた。

「みんな聞け。こいつは船を汚した。俺達の締めている純白のこの六尺禪は、清浄な男の象徴だ。こいつにはもうその資格はない。だから禪は剃ぎとった。だが、それだけで済まんことは、みんなもよく承知の通りだ。これから懲罰を行うが、これは私刑じやアない。あくまでも懲戒の為だ」

素晴らしい渡すと、唐津は、すぐ彼をマストに吊るよう命令する。広田は蒼白な顔をしていたが、抵抗の無駄なのを知っているから、観念したように眼を閉じていた。全員が固唾を呑んで見守るうちに、ズルズルと引き揚げられていく広田は、爪先が離れた刹那、「ううッ」と呻き声をあげ、カッと眼を開いた。「引け！もっと高く吊るんだ。まだよしとはいわんぞ」

唐津は冷然として叱咤する。

「ああッ。うッ。ウ、腕が、イ、痛いッ。痛ッ、うううッ」

広田は脂汗を垂らして絶叫した。

子分達の間にどよめきが起る。それは、彼等もいままでに経験したことのない残酷な懲罰だった。中には顔色を変える者もある。

これまでに行われた懲罰といえば、せいぜいマストに括りつけられるか、吊られるにしても足はついていて、平手打ちを十も喰らえばそれで終りだった。広田にしても、勿論そのつもりでいたに違いない。それが思いもかけず恐ろしい責苦に遭わされ、気も狂わんばかりの愕きだったろうが、それよりも、関節を脱した激痛にヒイヒイと泣き叫んだ。だが唐津は容赦しない。いつのまに用意していたのか右手に握った皮ベルトを鞭にして、揺れ動く広田に狙いをつけては打ちはじめた。

「今日は大將、大分荒れてるナ……………」

伴野は、すっかり明けはなつた洋上に眼を逸らすと、独りで呟くようにいった。

その日、一隻の密輸船を発見した「海竜丸」は、執拗にそれを追った。はじめのうちこそ全速で逃げようとした密輸船も、相手が禪船だと知ると、逃げ切れないと諦めて速力をおとした。しかし、密輸船では銃器を隠していて抵抗する惧れがある。舳に仁王立ちに立って指揮する唐津に従って、子分達は各々拳銃を構えながら、喚声をあげて船から船へ跳び移る。そうして、ことはまたたく間に終った。

「おい。誰でもいい。縛ってある奴の中から

イキのよさそうなのを二、三人、船に拉致しろ」

「へえ……………」

と答えたが、子分の一人は怪訝な表情をした。そんな命令は今までまだ一度も受けたことがなかったからだ。

「早くしろ！」

「でも——」

「命令だ！」

「へえ」

子分達が慌てて引き返していくと、伴野は何かいおうとして唐津の顔を見たが、思い直したのか、黙ってその傍を離れた。

現場を後にした「海竜丸」の船上では、やがて、血なまぐさい情景が展げられた。

恐怖に色を失っている三人の虜の男は、衣服を剥かれたうえ、身動きのできぬようマストに縛りつけられた。唐津はニヤリとして、ゆっくりと拳銃の狙いをつける。

「タ、助けてくれッ！ イ、命だけは助けてくれッ。お願いだ。お願いだアッ」

大の男の泣き喚くその声も、唐津の耳には快く響くかのよう。陽の光を真向に浴びた面には、嗜虐の悦びさえ浮かんでいる。

拳銃が火を吐いた。

「ぎやあッ」という悲鳴が起こったが、銃創は一人の男の肩先きである。

「ダン。ダン。——」と続いて拳銃が鳴り、後の二人の腕と腿から血が流れた。至近距離で狙いの外れる筈はない。唐津は、わざと急所を避けて射っているのだ。そして、拳銃はまだ構えられたままである。

苦痛よりは恐怖が、三人の男を狂ったように絶叫させる。その泣き声は、もう人間の声とは思えなかった。

「ダン。ダン。ダン」今度は三発が続けて射ち出された。一人が胸を、後の二人は同じように腹を貫通された。ピタリと喚き声は熄んだが、死んではいけない。低い呻きが断末魔のように聞えている。——唐津は、やっと拳銃を下した。

「親分。後の始末はどうします？」

伴野が心配顔で訊く。

「海へはお入り込んでおけ」

「そんなことをしたら、死んじまいますぜ」

「かまわん」

「しかし、それじゃア、まずいことに——」

「俺のいうことが聞けんというのか？」

「いや……………」

「なら、いう通りにしろ」

「判りました」

そのまま唐津は、何事もなかったような足どりで船室に入っていく。

瀕死の重傷を負わされた三人の男は、伴野の指図で次々に海中へはお入り投げられた。「水葬だ。成仏しろよ……………」

伴野は、哀れな犠牲者の浮きつ沈みつしている海面を暫く眺めていたが、フト思いついたように、唐津の後を追って船室へ下りていった。唐津は、船長室のベッドへ仰向けに転って天井を睨めていた。

「親爺か？——」

「へえ」

「何んだ？」

「明日にでも港に入って、二、三日、陸へ上っちゃどうです？」

「またか……………」

「悪いことはいけません。そうなさい」

「うん。そうだな……………」

「約束してくれまますね」

「ああ。親爺のことじゃナ。しかたあるまい——」

「いつも、そういつてくださりやいいですがね」

「フフフ……………」

残 照

伴野の勧めで、唐津は三日間、ホテルに泊留して静養することになったが、はじめの日に不祥事がもちあがって、予定を変更しなければならなくなった。

ホテル「いかり荘」は、港の裏通にある貸席兼業のいかがわしいうちだが、そんなところのほうで隠れ家としては却って安全だったし、まがりなりにもバス・トイレ付きというのが都合よかった。

「親分。開けてもよござんか？」

伴野の急き込んだ声に、唐津は浴槽の縁にもたせていた頭を上げた。

「何だ？ 流しなら、もういいぞ。いま、あがるところだ」

「そうじゃアないんで——開けますよ」

伴野が戸を開けると、唐津は立ち上って浴槽を出た。伴野はバス・タオルをとって渡しながら、

「橋本の野郎ですよ。あいつ、とんでもねえことをやりやがった」

「どうしたってんだ？」

「酔っぱらいやがって、陽の高えうちから下手な事をしやがったんですよ。もっとも相手

は男の子ですがね。チッ。あいつもドジな野郎だ。すったもんだをお巡りに見つけられて否応なしに連行ですよ。新米のお巡りだもんで、ひつつこいンでさ。とにかくあッしア、すぐにいって来ますからね。何アに、交番にとめられているだけだ。うまく引きとって来まさア」

「ご苦労だな」

「イエ、じゃア——」

「これで静養もフィカ。フフ、おまえにやア悪いが俺にや、やっぱり陸の生活は縁がねえんだよ。橋本を貰いさげて来たら、今夜すぐに出航だな」

「しようがありませんや」

伴野が慌ただしく出ていくと、唐津は、ゆつくりと六尺を締め、船の中と同じように、寝巻も着ないで一眠りする為にベッドへもぐり込んだが、じきに健康そうな寝息をたてはじめた。

いうまでもなく、唐津達にとって当局は鬼門である。たとえ小さな事件でも、かかりあになることは危険だった。まして三人も人を殺しているし、その死体がいつ漂着するか判らない。唐津の為を思っで停泊を主張した伴野だったが、正直なもので港を出るとホッ

とした。

だが、それも僅かな間で、伴野の心はまた重くなった。出航のときは確かにいた筈の橋本の姿がどこにも見えないのである。不吉な予感が雨雲のように湧いてくるのを、年令のせいを取り越し苦労だと思いたかった。といって唐津に黙っているわけにはいかない。

伴野は恐る恐る船長室の扉を開けた。

「——獲物か？」

唐津は、全身の筋肉に斗志を漲らせて、禪の結び目を更に固く締めつけた。

「いえ、そうじゃアないンで……」

「どうした、何かあったのか？ 元気がないようだな——」

「あッしの不注意でした。橋本の野郎が見えねえんです」

「橋本か——」

「たぶん親分のお叱りが恐くて隠れているんだとは思いますが——でも……」

「かまわん。ほっておけ」

「へえ……」

といったが、伴野はまだ何かいいたそうに口ごもっている。

「なッだ？——」

「へえ、あいつア以前から親分に反抗的だっ

たし、まさか裏切るようなことアないこと思
うが油断はできません」

「判っている。もう上へいってろ。ソロソロ、
獲物がかかってくる頃だ」

まるで意に介していないような唐
津の言葉は、いまさらのように伴野
に信頼感を与えはしたが、一方、不
安の念は深くなった。そしてせめて
今日だけは獲物が発見されず仕事の
ないことを祈っていたが、夕方近く
なって見張りの男が大声をあげると
思わず舌打ちが出た。

海は夕映えを溶かして、不気味な
ほど赤くうねっていた。

両眼を生き生きと輝かせ、軸に胸
を張って立った禪一本の唐津の軀も
赤銅色に美しく染まっている。

同じように子分達も、各々の部署
について、張り切った表情をしてい
たが、伴野だけは依然として、うか
ぬ顔付きをしていた。

船と船の距離は、みるみる接近し
た。相手の船は既に観念したのか速
力を落している。
「海竜丸」は舷側をぶつつけるよう

にして相手の船と平行になると機関を止めた
気の早い子分の二、三人がバラバラと跳び移
る。そこまではいつもと全く変らなかつた。

だが次の瞬間、事態は一変した。

もののしく武装した保安官が、降って湧
いたように船上に出現したのだ。

「ワッ」と叫んで海に飛び込む子分もある。

「騒ぐな。抵抗をやめろ！」

指揮官らしい上背のある保安官が
よく鍛えた通る声で制した。

「畜生！やっぱり。親分——」

伴野は咄嗟に唐津の腕をとると、
遮二無二甲板を駆け下りた。

「親分。あっしがいいというまで絶
対にここを出ちやアいけませんぜ。

なアに、ご心配はいりません。あっ
しに委せておくんない。とにかく

逃げられるだけは逃げてみます。そ
れが駄目なら、また、あっしに考え

もあります。とにかく、ここを出ち
やアいけませんよ。ようがすね」

念をおしながら伴野が船長室を出
ていくと唐津は、拳銃をテーブルの

上に投げだし、ゴロンとベッドへひ
っくりかえった。

外の騒ぎは手にとるように聞こえ
てくる。

あんなことをいったが、伴野に成
算があるとは思われなかった。



今度こそは、もう駄目だろう。だが唐津には、いつでも覚悟ができていた。ただ、そのときのくるのが早いか遅いかだけだった。

不意に激しく扉が叩かれた。伴野ではないらしい。はたして若い氣負った声が、「オイッ、開ける!」と呶鳴った。

「錠はおろしてない。入って来い」

唐津は、むっくりと起き上ると、拳銃を構え落着いた声でいった。

勇敢にも一人で室に踏み込んで来たのは、林という若い保安官だった。

「唐津だな! 抵抗はやめろ」

さすがに緊張で林の顔は硬わっている。

「俺の負けだ。抵抗はしない。大人しく、お縄を頂戴するよ」

唐津は何を思ったか、そういうと拳銃を林のほうへ抛った。林は、なお油断なく身がまえている。

「ハハハ。心配はいらねえ。俺も男だ。覚悟を決めた以上汚ねえ真似はしやアしねえよ。」

ただ一つだけ頼みがある。支度をする間、その扉を閉めておいてくれないか。心を乱されたくねえ。誰にも邪魔されたくねえんだ」

林は、唐津の表情から何かを読みとろうとするように眼をしばたいたが、

「よし」と頷くと、後手に扉を閉め、その前に立った。

「すまねえ……………」

唐津はニツコリすると、テーブルの蔭に半身を隠し背をみせて、締めている六尺褌を手早くとき、かわりにきりたての晒をとりだし鮮かな手つきで締めはじめた。

その遅ましい背を、拳銃を擬したまま、林は、まじまじと瞞めていた。何か男の潔さといったものが、若い彼の胸に感動となつて伝つてきた。

「さア、これでよし。待たせたナ。約束通り

手錠をかけて貰おう」

「服は、どうしたんだ?」

「服なンざいらねえよ。この六尺が俺の晴着さ」

「そうか。じゃア——」

「実は、もう一つだけ頼みがあるんだが、きいてくれるかね?」

「何だ?……………」

林が顔を上げると、唐津は眩しげに眼を逸らして、

「もう一度、俺と逢ってほしい——それだけだ」

といったが、なぜかその声は苦しそうだった。

た。林は、相手の真意を測りかねたようにすぐには返事をしなかったが、やがて「よし」といって、唐津の背を軽く押した。

そのとき扉の外に靴音が入り乱れ、

「おいッ、開けるッ! 林。いるのか? どうしたんだ! 開ける。開けンか!」

と保安官達の呶鳴るのが聞えた。

「大丈夫だ。俺は無事だ。唐津は逮捕した。いま開ける。」

林は感情を殺した声でいい、いつとき唐津眼を覗き込むように見てから、大股に扉へ寄つていった。

公判廷に於ける唐津軍兵は、よどみなくすべてを自供した。その態度には、まるで悪びれたところがなく、己の罪を意識もしなければ処刑を恐れてもないかにみえた。死刑を宣告されたときも顔色一つ変えず、真直に面を上げていた。刑務所での彼は、あの暴虐を恣にした男とは思えないくらい、静かに黙々としていた。そしてその姿は、柔順というよりは、むしろ堂々としていた。

その彼が、面会人のあることを告げられたとき、明らかに動揺の色の隠しきれない様子を示したのを、看手は不思議そうに眺めた。

金網の向うに、浅黒く引き締った林の貌を認めると、唐津は一瞬、恥かしそうに眼を伏せ、それからオズオズと近寄った。

「あんだ。本当に来てくれたんだね！ 俺は実をいうと、半分は諦らめてたんだ……」

林は、健康そうな白い歯列を見せて、

「男の約束だからネ」

と微笑した。

「ありがとう……ありがとうヨ！……」

「何も礼をいうことはないサ。それより、元氣そうなんで安心した。何か不自由なことはないかね？ どうせ安月給だからロクなことはできないが、欲しいものがあつたら差入れてやるよ」

「不自由なことといつたら、白い六尺褌が締められねえことぐらいさ。その氣持だけでたくさんだよ」

林は、笑うと子供っぽくなる頬に齧をつくりながら、一寸の間、躊躇^{ためら}らふうだったが、「俺には不思議でならないんだ。あんだが、どうして、あんなことをしていたのか……」

「そいつをいわれると辛いんだ。だが、あんなにはいっちまおう。イヤ、聞いてほしいんだ。本当は、墓場まで誰にもいわずに持ってくつもりだったんだが——」

「或るフェチシストの素描」

△汽車の中にて (2) ▽

早 野 勇 作

汽車はトンネルの中にあつた。

僕は(章と同義語)婦人の黄色い皮革製のハイヒールに接吻する前に、それへの手段として一つの行為を思いついた。

そして、それを実行しようとした。僕の右足先は婦人の靴の方へ這い寄っていた。

僕は、その結果を期待しつつ、静かに瞳を閉じていた。汽車は相変わらず、トンネルの中を走っているらしい。僕の瞳のその裏側は真暗闇である。ハートはスリルとサスペンスの交錯の中をさまよっていた。

唯一つ！、この場合に婦人がゆるしてくれそうな、僕への態度の条件としては、僕が瞳を閉じていることによって、眠ってい

るものと思ひ、それが、その就寝中の一動作と解釈してくれる、ことにあつた。

が、それとて、前に坐っている婦人にスノビズムがあつてのこと。それが單なる一労働階級者を夫に持つ妻であつたならば、不可能、と考えられるのであつた。

僕の右足は、そんな心理の葛藤をよそにして、前に坐っている婦人の、ハイヒールの上へと近づいていった。ストッキングのやわらかいナイロンの感触と、ギヤザーを可愛らしくあしらったガーターに触れ、僕の豊かなセンスを誇るフェチシスト特有の神経質な右足先は、その感触に酔つた。

汽車はトンネルを飛び出したらしい。目

「……………」

「俺も昔からこんな男じゃなかった。人間らしく人を愛したこともあったよ。あんたは戦争を知らねえから判るまいが、戦場というギリギリ結着の場所では、人間が人間を愛する気持なんてもんは、そりやア真剣なもんだ。俺が命をかけて愛した相手は、川口という一等兵さ。だが、そいつは死んじゃった。しかも、上官である俺をかばってだ。そのときの俺の気持がどんなだったか、それはあんたにだって判って貰えると思う。俺は、そんなときから人間を棄てたんだ。そして、誰をも愛さない非情な男になった。事実、女を見ても男を見ても、感情が動くということは全くなかった。そういう俺に、俺は満足していた。ところが、街であんたを見かけたときから、俺の心には変化が起ったんだ。俺は、この世に愛する人間がいたことを知って狼狽した。あんたが川口に似ているとでもいうなら話は判る。そうじゃアないんだ。似ているどころかまるで違ふ。それなのに俺は、あんたが忘れられなくなったんだ。そんなときから、俺にはケチが付きはじめた。俺は内心恐くなったが運命なら仕方がない、堂々と立ち向うだけだと決心した。そして、つまり、この通りサ。」

の裏が急に明るくなった。

次の瞬間、デカタンズ、という言葉の概念が僕の脳裡をかすめた。

デカタンズ、デカタンズ、と僕は同じ言葉の頭の中でくり返えしながら、一つの冒険へと走らせるために、ふんぎりのつかない貧弱な自身の中にある勇気といったものに、リズムというか、或は反動をあたえるきっかけをこしらえようと努力していた。一つの間を置いてから、ついに、僕は決心していた。

足首の部分が、やわらかくストッキングに触れている。僕は自分の性格が、非常に調子屋である事を意識しながら、黙っている前の婦人をいい事にして、徐々に時間をかけて、足首を動かした。

僕は、今起きたばかりといった身体の動

きを演技するために、列車の振動を利用して、眼を開いた。

前の婦人は、僕が眼を開くと同時に、眼を閉じてしまった。それを見て、僕は奇態な気がした。

ひよっとするとか？この人も！ その回答はすぐそのあと起った行動が、それを意味づけてくれた。というのは、婦人のストッキングに触れていた僕の右足首に、二本の足首が、ねっとりとはばりついてきたのであった。

僕の右足首は婦人のストッキングにしっかりと、はさまれてしまった。僕は自分の右足をそこから引き出そうと力をいれかけると、前の婦人は始めて口を開いた。

「あら、いいじゃありませんの、そのままにしておいて！」

(終)

のを感じた。

刑務所のコンクリートの塀はどこまでも続いて、見上げると、僅かな残照が薄く染みみている。やがて長い塀がきれても、林の胸中には、いいようのない孤独感がわだかまっていた。

(完)

短い面会の時間はまたたくうちに過ぎた。看守に伴われた唐津の巾広い背が、扉の向えに消え去ると、林は、何か心が冷えていく、

作

創

別れても

蒼野

礼

薄青い照明が、どこかともなく射し、海底のように、ひっそりとしたホールである。誰かが口笛を吹き、その低い調べに乗って、ブルースを踊る幾組かの男女の影が海草の揺らめきにも似ていた。棕櫚の鉢が二人の席を蔭にしていた。この席ばかりではない。壁に沿って並んだ幾つかの席には皆、鉢植のゴムの木や小竹や芭蕉などが衝立の役をしていた。踊らない一対は、そこで、やはり海草のように黒く蠢めいていた。

口笛は、別れても、を吹いている。条々たるたくみなメロディである。じっと聴いていると、なにか悲哀へ誘われるような哀切な響がある。着物の衿元を乱暴に押しはだけられると、夕子は、ふっと目頭がうるんだ。メロディの物哀しさからばかりではなかった。田宮は自分のハンカチを夕子の口へ押し込み、その上を大型のハン

カチで縛った。それから、夕子の肩口を両手で驚掴みに掴んで、夕子をフロアへひき立てた。

ふくらかな円味を持った肩を握りしめながら、田宮はゆっくりとステップを踏む。その、がっしりした彼に両手をあずけて、苦痛に身をしなわせ、夕子のステップは乱れた。乱れる足を、田宮は肩口を引張ってリードして行く。二人の周りに揺れる踊りの輪も、みならずかである。

女はすべて上半身をしどけなく乱され、双肩を掴まれ、そうして口には狼ぐつわをされている。どんなに苦しくても声はでない。声のないその女たちの背中では、いちように脂汗がにじみ、どこからとも見えず照射する青白い照明に、ぬらぬらと濡れて光った。

口笛は、ブンガワンソロ、を奏しだした。大半が席へ戻ったが、

田宮はステップをつづけた。皮膚が破れそうに彼の爪が喰い込む苦痛に、声なく夕子は全身で泣いた。泪が滂沱と頬を伝う。いつのまにかフロアは、また踊りの輪が多くなって来ている。パンティ一つの羞かしい恰好にされている女もいる。その女の姿をしばらく追った眼を、夕子の顔に戻すと、田宮は薄く笑った。鼻筋の隆く徹った端麗な顔が、照明の色どりに蠟のように白く冷たく冴え、頬にチラリと笑いが流れる。

口笛は、息の乱れもなく、いつそう澄み冴えた感じで、再び別れても、を吹く。田宮は、踊りつづけた。もはや夕子は、ひきずられて歩くだけである。田宮の顔もホールの壁も、泪にかすんで見えない。

ようやく、席に連れ戻すと、田宮は胸を押えてシートにうつ伏した夕子の姿態を笑って眺めながら、煙草に火を点け、片手を伸ばして彼女の猿ぐつわを解いた。

「おい、どうした」

忍び泣く、ふるえる白い衿足へ、煙りを吹きつけた。

夕子が身づくろいをする間、田宮は煙草を喫って待っていたが、

「あの口笛はな、黒人の女が吹いているのだ」と夕子に云った。そうして「すばらしい……」と独りごちた。

外に出ると、初秋の明るい陽差しが不意に眸を打ち、夕子は軽いめまいを覚え、田宮の腕に縋った。

「疲れたわ、私……」

「なんだ、あれくらいで」

咬い歯をだして田宮は笑い、しかし、自身も多少疲れたような眼差しを、雑踏する舗道の人波へ投げた。

二人が、いま立っている場所は、新宿の盛り場のある喫茶店の前である。よく流行る店である。こうしてる間にも、学生やアベック族が次々と硝子扉を押して這入って行く。しかし、彼等はこの店の奥に深海の底のようなひっそりとしたホールがあることは、知らないだろう。知る筈がない。

夕子にしても、田宮からそこへ連れ込まれたとき、驚きは大きかった。賑やかな喫茶店の雰囲気から、扉を一つくぐると突如として青いホールが出現したのだ。

「貴方、あのホールへいつもおいでになっているの?……」

人波に揉まれて歩きだしながら、夕子は田宮の横顔を仰いだ。肩口はまだすぎすぎと疼き、声が喘いでいる。

田宮は答えず、

「おい」

タクシーへ手を挙げ、

「君の家に行こう」

「……私の家へ?」

だめ……と夕子は否々をした。白い顔へ光が当たって華やかである。

切れの美しい眦に泪の痕が見える。

「子供がいるのよ」

「知ってるさ」

「——子供の前で責める気?……」

「とにかく乗った」

田宮はぐいと夕子の腕を掴んで、ドアをひらいた車の中へ、くびれた細腰を押し込んだ。柔らかな弾力の感触が掌に残った。

「桜上水」



と、田宮は運転手へ行先を告げた。夕子の顔色が変わった。

（いつ調べたのだろう？）そこには自分の家がある。三歳になる娘と二人暮したと云うことは、訊ねられるままにいつ洩らした覚えはあるが、桜上水の住所まで云った覚えは決してなかった。

（いや……いや……）

あのときはスタジオの中でだったが、家の中で、子供の前で責められるのは、たえがたい……

「……田宮さん」

不覚にも泪声になって、許して欲しい、と哀願する夕子へ「なに？」

田宮は冷たい眸で睨んで、

「私のアパートで責められるのも、いやだと云うのか？そんな我儘が云えるのかね」

「……」

「それとも、モデル料を返す気か」

「貴方のアパートへ？」

「そうさ、何処へ行くと思っている」

ほっとして、夕子は思わず微笑が顔にのぼった。それを見ると、田宮は急に笑いだして、

「読めたよ。君の家も桜上水か」

そのうちに探し当ててやる、と云ってまた笑った。

本当にその気になれば、容易に探し当てられそうな、夕子の家と近い距離にあるアパートだった。三階建の綺麗な白亜色の建物で、前庭に円い池があり、その縁に仙夢が紅白色の

色をつけている。

三階の自室まで、田宮は夕子を先に立てて、長い階段を登った。和服がよく似合う、すんなりとした夕子の姿形に、田宮は今更にまた見惚れるぐあいだ、細腰のなやかな動きや、優しい裾捌きをする足元へ、視線を凝らした。

田宮の室は北側の2号室である。「田宮典夫」と名札がかかっていた。ドアを開けると、その三和土に新聞紙が散らばっていた。長く留守にしていたのだろう。片付けてくれ、と夕子に云い、自分は上にあがってラジオのスイッチを入れ、ついで戸棚から洋酒を取り出して呷った。新聞紙を集めながら、田宮がどういう職業にある男か、夕子をはじめて一寸した興味を覚えた。客とモデルと云う感情のない関係に、微かながらでも夕子の方に感情の色が動いた。夕子は、日が昏れ落ちるまで田宮の前でモデルになった。

○

空に鳴る木枯……

雨戸打つ吹雪……

冬の夜は嵐に更けて行く……

……

この歌を、あの蒼い海の底のようなホールで、条々と口笛で吹いていたのは、黒人女だとき田宮は夕子に云った。なにげない口吻で云ったことだったが、なぜか強く自分の耳にこびりついていてのを夕子は感じた。

あの口笛の音色に籠もる淋しさは、あの哀感の濃りは、ネグロ独特なものかも知れないと想う。おそらく歌詞は知らずして、メロディに悲哀を汲んでいるものだろう。

何処で吹くのか姿の見えない黒人女と、このヌードモデルの自分と、いずれがより哀れな境遇だろうか……

スタジオの椅子に凭れて、窓敷居に片肘をつき、庭の椎の木を漏らして降る秋の細い雨を夕子は、ほんやり眺めながら想った。

今日は、まだ一人の客も来ない。

マスターの土呂は、受付の小部屋で猫と一緒に昼寝しているし——ミミと云う白い毛をした仔猫は、主人の土呂が寝ると、その横でかならず自分もねむる——四人の仲間のモデルたちは、雑誌を読んだり編物をしたり、或いはマニキュアに熱心だったり、おのおの勝手に退屈を紛らわしている。

四人とも、みな夕子と同じように未亡人の境遇にある女たちだ。年齢はさまざまだが、中で二十九歳の夕子が一番若い。容姿も群を抜いてすぐれている。細身ながら肌がひき締まって円らかで、抜けるように色が白い。実のところ、子供を産んだ女とは見えないものがある。

このヌード・スタジオの名前をいつに云うと、「土呂ヌード・スタジオ」である。場所は池袋の一寸混み入った露地裏だ。はじめて訪れる者は大概、道に迷う。彼等は電柱に看板がかかってないかと見廻すことだろう。無駄である。門前にすら看板がない。ただ「土呂」と表札が出ているだけである。

一切、宣伝をしないマスターの土呂の方式である。「うちは裸の見世物屋とはちがうのだ」と云う。真生目の画家や、美校生、写真作家、そうした人たちの前で裸になってこそ、モデルとしての誇りがあると云う。

自然、客の顔触れは固定して、フリーの客は寄りつかない。商売

としては、これは損なことである。

「わては、金が欲しゅうて裸になっとるんや。商売やで！」

「おっさん、あんたかて商売やろ！そんなら、そこらのチンピラでもスケベエおやじでも、じゃんじゃん引っぱって来たらどや！」

大阪から来たと言う若い女が、いつか土呂の非商人性に愛想をつかして、そんな威勢のいい啖呵を浴びせて、飛びだして行ったことがある。商売と言うものは、どんな商売にしろ、根本は悪徳性を帯びている。原価は安い品物に、べらぼうな掛値をして商う商人と、生の体売る娼婦と、いずれがより悪徳であるかは考えてみてもいい問題だと思う。

話が一寸、横に逸れたが、大阪からやって来ていた女が、土呂へ云った言葉は、その商売の悪徳性をちゃんと踏まえた至言であるかも知れない。

モデルとしてイキのいい若い女は、その彼女に限らず、長くいついた者がない。彼女たちは、景気のよい収入の多い処へほとんど鞍替えして行く。

自然、ここには齡の入った未亡人ばかりが残ったと言う次第である。客もまた、いつも同じ顔触れである——が、時にはフリーの客も来ることもある。至って稀に。

田宮は、その稀なフリーの客であった。

彼は一目見るなり、夕子を選んだ。

その日から四、五日、置いて、再び田宮はあらわれ、夕子を外へ誘い出して、そうしてあの新宿の蒼い深海のホールへ連れて行ったのだった。

なぜ彼女が、二度とも田宮の求めるままに素直に責められたか？

五倍額のモデル料を田宮が支払ったからである。土呂が受取る割前もしたがって五倍になる。土呂は老眼鏡の奥から目玉を剥いて、

「こ、こ、こ……」

ことわる、と言うのかと思ったら、

「……こんなに、すまん」

たちまち受取って、それから急に真剣な表情になり、

「清いものでしょうな」

と云った。肉体の交渉を懼れたのである。笑止と言う位はない。世にアブノーマルと云われる人間たちは、決して好色漢ではない。卑猥ではない。彼等の内部に宿っているものは、美を探る芸術家の情熱であり、詩精神である。女の爪先の動きにさえ詩を感じ得る者を、誰が好色漢と見なすのだ。見なす者こそ精神の汚れたものだろう。

「貴方の心配は馬鹿げている」

田宮は笑って土呂に答えている。事実、二度とも彼は夕子へ欲情を寄せてはいない。——さて、ここでペンを前に戻そう。

絲のように細い雨が、庭にまだ降りつづいている。ぼんやり、夕子は眺めている。

しばらくして、門前にタクシーが停まった。長身の瀟洒な紳士が降りた。

車を降りて石道を歩んで来る田宮の姿に、夕子はすぐ気づいた。田宮の方でも、窓辺の夕子の姿を目敏く視て、一寸咬い歯をこぼしたようである。その顔はすぐ柿の木の蔭に隠れて、ドアの前に立った。

「いらっしやい」

ドアを引いて、夕子は云った。田宮の顔を見るのは、あの日以来十日ぶりのことである。

「傷は治ったか？」

「ええ……」

夕子はなんとなく顔を染める。白い衿足に散った紅の色が、乙女のように初々しい。

「もうお見えにならないかと思っていましたわ」

「このところ、一寸仕事が忙しかったのでね」

一体どんな仕事だろう。金放れの良さから推すと、普通のサラリーマンには見えない。また、サラリーマンなら、こんな時刻に来れもしないだろう。

そんなことを気にする自分を夕子は、ふっと嗤いたい気持ちになつて、

「どうぞ」

受付の室を開ける。土呂が慌てて起きて、「やあ」と田宮へ笑った。何事か田宮が囁くと、夕子は一瞬ぱつと報らんだが、うなずいて室を去った。

「よく降りますな」

田宮は答えず、その土呂の掌へいつもの額の紙幣を握らせた。

スタジオは幾つかの個室に分れている。「3号」と番号が扉にある室に、柱に「新地夕子」と小さな名札がかかっている。

田宮がそのドアの前に立つと、中から微かに、びしびしと云う音が洩れ聴えた。

室にはいると、田宮は上衣を脱いでソファへかけ煙草に火を点け

た。端麗な面に満足げな笑いが、たゆとうている。

「もっと強く、ぶて」

「は……はい……」

室の真中にしつらえられた円形の壇に、一抱えほどの大きさの円柱がある。夕子はその石膏色の円柱を左の片腕で抱いて、右手で我が臀部をぶっているのだった。

田宮が耳に囁やいて命じた事を、夕子は忠実に肯いたのである。

天井からの強烈なライトが壇上の、その凄艶な肢態を皎々と照らし、黒髪が乱れ垂れた背中には、すでに汗がにじみ、形よく盛上った柔かそうな色白な一点が、華奢な繊い手が懸命に力をこめて打ち据えるにつれ、痛々しく赤く腫れ染まっていく。

「それ、それ、もっと、ぶて。もっと、ぶて」

ソファで煙草を喫いながら、田宮は懸声を掛ける。びしびしびし……柔膚が鳴る。全身を反らして、夕子は自ら加える苦痛に唇を噛んだ。腕を変えた。やがてまた腕を変えた。「もうよし」とは、なかなか田宮は云わない。

「もう……貴方がお責めになって……」

とうとう、夕子は泣きだして、その場にしゃがんでしまった。革鞭を手に田宮は迫ると、びしっ、白い体を一打ちし、

「這え」

「……はい」

夕子は犬のように、両手を高く床に突いた。どっかりと、田宮が背中に跨ると、ひしげそうな重みに、夕子の美貌が紅く充血する。猛烈な平手打ちが加えられた。夕子は泣き叫んだ。

「さあ、今度は鞭責めだ」

と、力まかせにひき起されて、柱に縛られだすと、「もう、かんにんして」夕子は泣きじやくって懇えた。

いつのまにか雨は霽れて、窓に垂れたカーテンが陽差しを透かしている。可憐な悲鳴が室をふるわせて響いた。

長い間、それは聴こえていた。

○

その夜、田宮は夕子を新宿のあのホールへ伴っている。そこへ行く前にタクシーで一旦、銀座へ出て、有名なレストラン・Rで二人して夕食をとった。次々と折角の豪華な料理がテーブルへ運ばれるが、夕子は食慾が却って薄れた。果物だけが無性に喰べたく、田宮にそう云うと、彼はフルウツを追加した。

「顔色が青いな」

少し責めすぎたかな、と田宮は笑った。

「まだ痛む？」

そう訊く眼許は、夕子をはじめて見る優しみがあつた。

Rを出て、再びタクシーで新宿へ向った。

例の喫茶店の前で車を降りると

一回踊ったらもう許してやるよと

田宮は云い、夕子の手を引張って

硝子戸を押した。

この前と同じように、姿の見えない黒人女が、蒼い海の色をした

ホールに、口笛を奏でていた。あの

別れても、である。凍るよう

に淋しい音色であつた。

スーツの上衣を脱ぎ、スリッパの肩紐を夕子がそつと落すと、田宮は乱暴な仕ぐさで、ぶるつとふるえるようにさらしだされた肩口を、ぐつと握り締めてひき立てた。

彼女が苦痛に喘いだのは、一曲きりであつた。田宮は云つたことを守ったわけだが、紙のように白ざめた夕子の顔色から、これ以上、責めて卒倒でもされたら面倒だ、と急に思い直したのが本心だろう。

「送って行こう」

外に出ると田宮は云つた。

「いいえ……」

夕子は彼の手をほどいた。

「大丈夫です。一人で帰れます」

「家を知られるのがいやなのか？」

「……そんなわけでも」

夕子は口籠もる。その間に田宮はタクシーへ合図して、「乗れよ」と夕子の肩を押しやった。夕子は、あきらめた。

家の前に着くと、玄関の磨り硝子戸に淡く灯影が洩れていた。隣家の中学生の長女が娘のお守りをして留守番をしていて呉れているらしい。夕子の帰りが遅いときには、いつも世話をかけるから、折々に夕子は一寸した品物を



買って与えている。

送って貰った礼を云って、夕子が車を降りると、

「小じんまりした仲々いい家だ」

田宮も一緒に車を降りた。

「お茶を一杯、御馳走になろうか」

と、夕子の肩を抱き寄せて玄関へひきずって行き、自分で戸を開けて、ためらいを示す夕子へ、

「さあ、どうぞ」

「小母さん、おそかったわね」

と、隣りの娘が笑顔を出したが田宮の姿にびっくりしたふうに、急にそくさ下駄をつっかけ、

「としちゃん、もう寝たわ」

云って、出て行く背中へ、すみません：夕子は心から感謝を覚えた。

寝間に行つて見ると娘の敏江はちやんとパジャマを着せられて眠っている。その、あどけない寝顔へ夕子は、そっと唇を触れた。夕子に似た愛らしい顔立ちである。

「手当をしる」

茶の間で、夕子の淹れた茶を啜りながら田宮は云った。普段によ



く出入している者のように、落着いた態度である。指に挟んだ葉巻が香りのいい煙りを昇らしている。

「……手当していいの？」

半ば、再度の責めを覚悟していた夕子には、彼の言葉は、ふと意外であった。

「もう、おたないぜ」

今日の責めは終わった、と云う。

やがて、この部屋には不思議な光景が見られた。うつ伏した身体へ田宮は甲斐甲斐しく濡れタオルをあてがい、乱れた髪を梳いてやり、純白な美しい背中にマッサージを施すのだった。タオルは幾度も、とり変える。

「すみません……」

夕子は、なにか切ない想いがあった。田宮はその奉仕をつづけてやがて帰った。

家を知ったからには、今度から田宮は直接家へやってくるのでは

ないか？　と云う懸念が夕子にはあったが、あの日から二週間もなんの音沙汰もなく過ぎると、そんなことは、まったくとり越し苦労であったことを彼女は知らされた。そうになると、かえって、はぐらかされたような虚しい気持ちすら覚えた。

日が経って行くにつれ、その内心の虚しさは、水に雲の翳がひろがるように、夕子の内部に、だんだん翳深くひろがってきた。

（ああ……なぜ私は……）

あの人を恋うるのだろうか。夕子の中には煩悶するものがある。

どう云う種類の煩悶であるか、本誌の読者には、説明するまでもなく分ることだろう。詳述を控えた方が味があると云うものだが。

あえて、蛇言をついやせば、夕子の体内にマゾの華が咲いたのである。その妖しく美しい花の芽を意識して、怯えるごとく夕子は悩んだ。

日ましに、田宮への慕情は募る。

スタジオの窓に凭れて、表を眺める時間が多くなってきた。家にあつては、しじゅう玄関の方へ気を配っている。彼の靴音がしないかと。

夕子の内部で悩みは薄らぎ、相手のない時間の中で、マゾの花が一輪ずつ花弁をひらいていった。

責めを募う悶えに耐えきれず、ある夜遂に夕子は自分から田宮のアパートへ、おもむいた。素肌に香水を染ませ、入念に化粧を刷いて訪れた夕子に、だが迎えたものは見知らぬ名札である。「戸田某」とあるその名札を見て、夕子は茫然と立ちつくした。全身から、すっと力が萎えた。一応ノックしてみたが、期待はなかった。やはり、見知らぬ男が顔出した。

「前の方は何処へ行かれましたか……」

「管理人に聞いてみられたら、行先が分るかも知れませんよ」と親切に云うのへ、夕子はもう背中を向けて、力なく階段を降りた。

管理人は五十年配の男だったが、裏の井戸端で洗濯をしながら、

「移転先は聞いていません」

それから、手を休めて、

「あの方の商売は一体なんですか？」

「私に聞いたって知らないわ」

悲しさが、夕子の胸一杯にあふれた。

夕子は、その足で桜上水の駅に行き、その京王線で新宿へ向った。釣皮に下って車窓を流れる闇の色と灯の瞬きを眺めつつ、家に一人寝かして来た娘のことが、ふと頭を掠めた。

新宿南口から、最も賑やかな盛り場の一廓のあの喫茶店へ向って夕子は人波に揉まれながら歩いた。あの蒼いホールに田宮が居そうな予感が、しかし彼女にあるのではなかった。むしろ、居ない予感の方が強かった。ただ夕子はそこへ向って歩いていくだけである。目的もなく、人の洪水と灯の海の中を、踟躕と影のように歩いた。

田宮は、若しかしたら、もう東京にいないのではないか？　その想いが、不意に彼女を震撼させたのは、あの喫茶店の前を歩み過ぎたときであった。夕子はその場にうづくまりたいような衝撃を受けた。

その日は、関東地方一帯に小台風が近づき、朝のうちはまだ天候の崩れを見せなかったが、午後から俄に雨風が襲いはじめ、夜にはいつて吹き降りは、ますます烈しくなった。

夕子は少し早目にスタジオから戻って、雨戸を締めきり、夕食を済ますと、娘の床と一緒にはいって絵本を読んでやった。

「ムカシ　ムカシノ　オ話ヨ

ミギノ　ホホニ　ジヤマツケナ

コブオ　モッテル　オジイサン」

風に絶えず雨戸が鳴り、トタン板でも路を吹き飛んでいるようなけたたましい音が外に聴える。

ふと玄関で人の声がしたようだったが、気のせいだろうと夕子は思った。

俄破と夕子が起上ったのは子供が寝ついてから間もなくだった。

確かに玄関で呼ぶ声がある。田宮の声だと知ると、夕子は感動にわなないた。三和土に降りて、錠を開ける手が、もどかしく、わなわな震えた。長身の黒い影が磨り硝子に射っていて、風に揺れる街灯の光に入道のように揺れた。

「やけに降るな」

待ちつづけた男の、それがのっけの挨拶であった。無帽に、草色のバリバリコートを着た恰好で、顔一面の雨雲を拭い、濡れて乱れた髪を絞るように両手で掻きあげ、

「いつ見ても美人だな」

その田宮の眼差しを、夕子は眸を一杯見詰って受け留めつつ、ふわりと薄いネグリジェを足もとに落した。

「お待ちしてたわ……」

田宮の瞳に喜悦に似た感動の色が走った。

「……………」声が喉にからみ、

「ゆ……夕子——」

高く、云った。

「君は……」

おそらく田宮は三十五、六の齢だろう。その壮年者の顔が、満面少年のように若々しい感動の滾りをみなぎらした。この美しい新地夕子と云う女性に、自分を享け入れる、マゾの開花を知った歓びである。

外は依然、暴風雨である。

その風雨の音を夕子は恍惚たる想いで聴いた。自分のこれからの人生も、田宮と云う男の嵐に吹かれることだろう。母親であるとともに、一人の清らかなマゾ女性として、その嵐に烈しく吹かれたいと思う。

田宮が長く姿を見せなかったことへの不審も、待つ身の苦しい絶望感も、恨みも、今はもう一切、彼女の胸から去っていた。

このとき、田宮は戸外に入り乱れる靴音を聴いた。車のライトがサーチライトのように幾条もこの家へ向って照射された。

(尾行られていたな……)

田宮は苦笑を浮べ、それから不意に夕子と別れる悲しさに胸迫って、俄破と両手で顔をおおった。

刑事の一人が玄関の戸を叩いた。

麻薬密輸業者、田宮典夫こと本名的場安夫は、所持した拳銃で手向うこともなく、包囲陣が拍子抜けするほどひどく神妙に、手錠にかかった。

「あの女は関係がない」

そればかりを云った。その背ろで号泣が挙った。

(了)

黄色オラミ誕生

(第三部)

真木不二夫

二年余の休載、お詫び致します。こんどこそ、たとえ月に五枚、十枚なりとも書きつづけることを、お約束いたします。

作者

咽喉のかわきに、ふと意識がもどった。からだ揺れている。ゴトゴト、ゴトゴト鈍い音がきこえ、ぼくは車の上に載せられているらしい。

「おい、石山、石山……」

耳もとで、ぼくの名を呼ぶ声がした。首をねじまげてふりむくと、同僚の坂井特派員である。

ぼくも坂井も、両腕を背中に縛りあげられていた。恐怖感が、ぼくによみがえった。

「一体ここはどこなんだ。おれたちは、どうしてこんな車の上にいるんだ」

と、ぼくは坂井にきいた。

「生きていたのは、おれとお前だけだよ。あとの連中は、みんなお陀仏らしい。もっとも助かったおれたちだって、こんな有様じや、とても生き延びられそうもないがね。墜落したトルテリヤ号の下敷になっていたお前を、やっとおれがひきずりだしたんだ。お前の足の片っぱ、骨までつぶれているぞ」

長い間走って、やっとな車がとまった。頭の上におおいかぶさっていたホロが、するすると取り除かれた。

ぼくは思わず「アッ！」と叫んだ。

ひげだらけの怖ろしい形相をした砂漠の群盗だとばかり思っていたのに、ぼくの眼の前には、色とりどりの薄衣をまとった女たちが十二、三人、冷ややかな眼つきで突っ立っていたのだ。夕闇にぬけでるような顔の白さ、四肢の白さが、ぞおっとするほどの妖しい美しさであった。

ぼくは、ふと、ぼくを乗せてきた車のさきにつながれている動物をみた。

「アアッ！」と、ぼくはまた叫んだ。

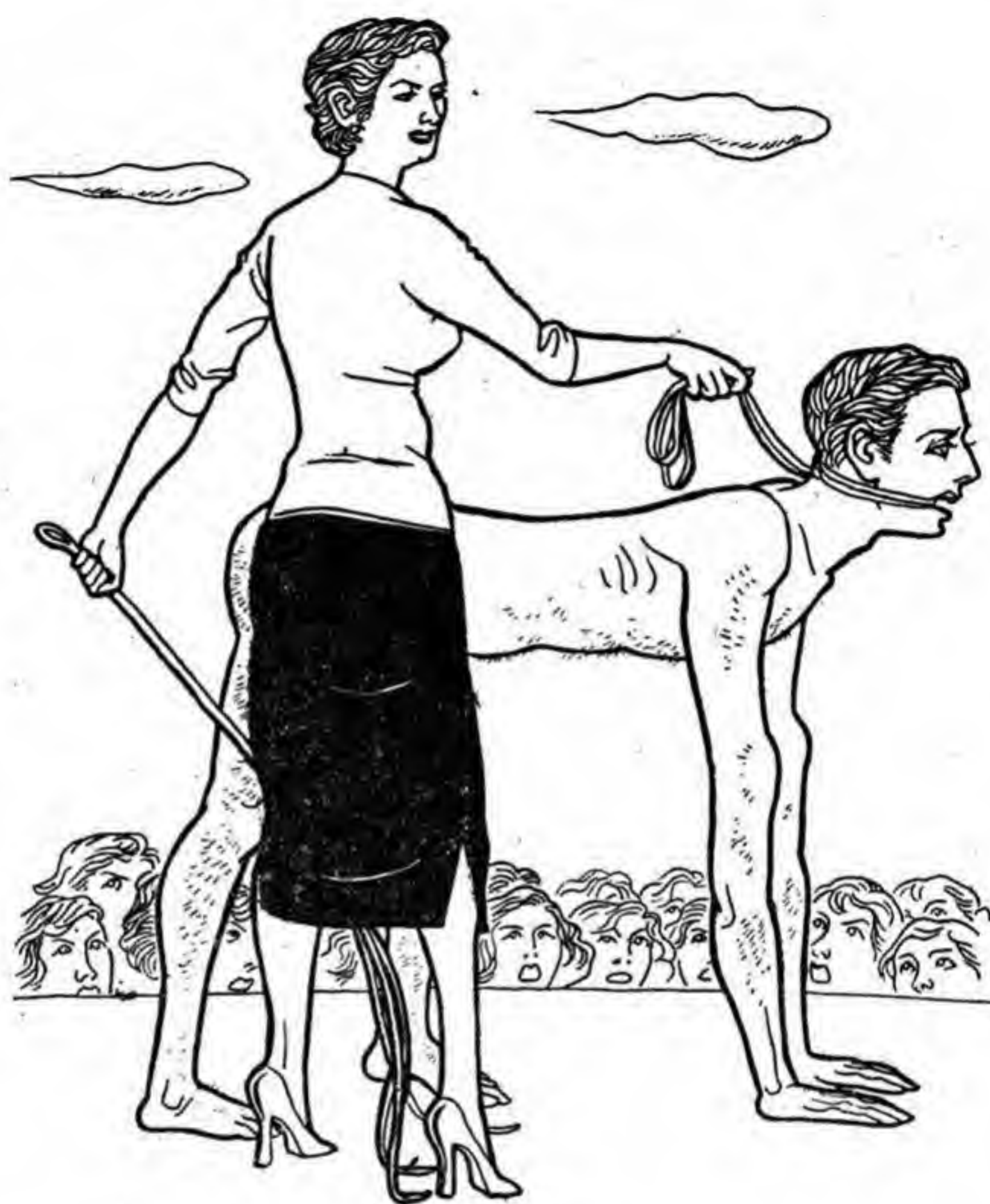
その動物は馬でも牛でもなかった。

(ゴリラ……)と、一瞬、ぼくは思った。

が、そうではなかった。胸にも脚にも豊かな毛が生え、獣的なたくましさであるが、それは確かに、二本足で立っている人間だった

のだ。

その男たちは、腕のひじのところから、胸背中にかけて金属製の帯をはめられ、背中に



ついた環から鎖がのびて、後の車につながれていたのだ。

歩けないばかりは担架に乗せられ、坂井は女たちに縄尻をとられて、砂漠の中にそびえ建つ石造りの門をくぐった。

夜眼にも白い、その巨大な門をくぐると、ぼくの眼の前に、不思議な都が現われた。広い中央の道路には、近代的な建物が建ち並んでいて、それらを真昼のように照らしているのは、電燈ではなく、ガス燈のような光りを放つ街燈であった。

やがて、ぼくらの行く手に一際立派な、コンクリート建て五、六階もあるという、宮殿が現われた。ぼくと坂井を囲んだ女の一行は、無言のまま、その宮殿の中へはいっていった。

まるで光るような美しさをもつ白人の女王に謁見し、ぼくと坂井の二人は、この砂漠のなかの不思議な都の住人となった。

この国の名は、メリールといって、女王の支配のもとに、完全な女尊男卑制度が敷かれていた。

男はすべて「オラミ」と呼称され、全女性の下に、徹底的な奴隷——いや、それ以下の家畜同様の扱いを受けている。

女たちが鞭をふるって男を酷使し、虐待する奇異の風俗習慣におどろきながら、一カ月が経過した。

ある日、坂井は男性としての宿命から、メリール女性に、うっかり手を触れた。そのために彼は嚴罰をうけ、特殊オラミ種繁殖工場へおしこめられてしまう。

坂井に面会を求めて、その工場をたずねたぼくは、そのとき、はじめてわかった。

彼女たちが、なぜぼくと坂井を捕え、この国に軟禁したかということ……

「つまり——指先が器用で、貧しい暮らしでも不平をいわずによく働き、権威に対しては従順で卑屈、少しの恩を受ければ、その恩を一生大事に着て、主人に忠節をつくす日本人、その血をひいたオラミを誕生させ、教育して理想的な家畜に仕上げるのだ……」

と、青白い顔で、坂井はうめいた。

この不気味な女尊国に、やがて、黄色い東洋人の血をひいた、黄色オラミがぞくぞくと繁殖する……ぼくは戦慄した。

メリール国における、ぼくの見聞記は、こうしてまだまだつづく。いや、見聞記などというなまやさしいものでなく、これは実に、ぼくの全身に灼きついた体験記なのである。

ぼくは、この国でただ一人英語を解する、ウーナという美人の通訳の庇護（というよりも、実は愛玩物といったほうが早いのだが）のもとに、ほかの「オラミ」たちよりは、いくらか、マシな生活を与えられている。

ぼくは坂井のような硬骨漢とちがって、環境に順応する融通性——といえはきこえはいが、多分に軟弱でずるがしい性格をもっている。彼女らのごきげんをとりながら生命の安全を守ること第一に心掛けていたのだ。

日数を過ごすうちに、ぼくも次第にメリール語を会得し、彼女らの生活に馴れてきたがすべての男性を虐待するこの国の風習と制度は、やはりおそろしく、脱走のチャンスをおぼらっていた。（以上前回までのあらすじ）

1

ウーナとぼくは、整然と舗装されたこの国の中央十字路を、西にむかって歩いていった。

今日もぼくはウーナのお供だった。

ウーナは、ぼくをつれて外出するのが好きである。ぼくのような毛色の変わったオラミを従卒していることが、ほかのメリール女性たちには得意なのである。

おかげで、ぼくはこの都の隅々までを知ることができる。

ぼくはこの日、西十三番街の市場で、プーチ・オラミの陳列即売会があることを知っていた。

プーチ・オラミというのは、愛玩用オラミのことである。このメリール国には、犬や猫がいない。その代りに、オラミ、つまりこの国の男性たちが、愛玩動物として飼育されていた。

特別な法律の適用をうけて、鎖の束縛をゆるされているぼくは、ウーナとともに、こうした国営プーチ・オラミ市場を見学できる自由があった。これは、たいした恩典なのである。

市場へ通ずる道路には、すでにたくさんの女性たちが集り、なにごとかを楽しげに語らいつながら歩いていった。

大通りから横に曲り、幅七、八メートルのせまい道路の両側に、馬小屋の柵のような仕切りがあり、そのなかに愛玩用オラミがはいっているらしかった。

どの柵の前にも、女性たちが参集して見物したり批評したりしているので、はじめのうち、ぼくには内部がよく見えなかった。

日本の祭礼の風俗を、ぼくは思いだした。神社の境内や広場で催される見世物小屋、その前に寄り集る黒山の人々の姿を……。

もともと、このメリール国の女性たちは、ほとんどが金髪なので、黒山ではなく、金色の波がうねっているように見える。

ぼくは、すでにこの国へきてから半年以上もたっていた。たいていのことには、おどろかなくなっている。しかし、人垣の間から、ふとのぞいたブーチ・オラミの、さまざまの奇怪な姿には、いささかドギモをぬかれた。女性たちの脚の間を這うようにして、なおものぞきこもうとする多くの踵のあたりを、ウーナの靴先が蹴った。

「今日のオラミ市場には、新しい珍種の発表があるのよ。早くそこへいきましよう」

そのウーナの言葉に、ぼくはギョツとしてききかえたのだ。

「珍種の発表って、まさか、黄色オラミが生れたんじゃないでしょうね？」

ウーナは笑ってこたえた。

「まだそれには月日が早すぎるわ。珍種といっても、今日のは後天的、つまり、加工珍種なのよ」

そういわれても、ぼくには加工珍種なるもの

の想像はむずかかった。

2

雑踏の市場を、なおも奥へすすむと、やや広い陳列場があつて、その前に、一人の立派な体格をした女性が、長い皮鞭をふりあげながら、大声で説明していた。

その周囲には、いままでよりもいっそうの貴婦人たちの金髪の波がゆれている。

陳列場は、一段と高い台になっているのでウーナとぼくは、すこし離れたところから見物できた。

察するところ、その皮鞭をもった女性は、売り手らしかった。

「——さあ、みなさん。私がこれから曳きだすオラミを、よくごらんになってください。普通の愛玩用とは、すこしばかりちがいますよ。愛玩用にもなれば、実用にもなるという素晴らしい珍種オラミです。政府のすぐれた科学者たちが、二年もの長いあいだ研究し、改良して、やっと成功してつくりあげたオラミです。さあ、この改良ブーチ・オラミの第一号は、どこの貴婦人の持ち物になるでしょう。これから展示即売をはじめますから、みなさん。どしどしと値段をつけてください。」

一番良い価をつけてくれた方に、おゆずりいたしますよ……」

早いテンポのメリー語なので、はっきりはききとれなかったが、だいたいそんな意味の言葉を、調子よくしゃべっている。

「そんな演説はもうやめにして、早く実物をおみせなさいよ」

と、一人の客が、背のびしていった。

「そうよ、そうよ、早くおみせなさいよ」

と、周囲の女性たちが、口々に期待と好奇の声をあげた。

売り手の女性は、湧きたつ金髪の波を、両手をひろげておさえるようなポーズをして、愛嬌よく眼をクリクリさせた。

そのとき、群集のうしろから、ウーナが売り手の女性に手をあげて声をかけた。

「マルデ、こんにちは！ いつもお忙しいことね」

「あら、ウーナさん、いらっしやい！」

と、売り手のマルデは、こちらにむかって笑顔をみせた。それから、ウーナに対し、敬愛をこめた会釈をする。ウーナは、この国ではかなりハイ・クラスの地位にいるのだ。

「お客さんをじらさないで、早くご商売をはじめなさいよ」

と、ウーナが笑顔でいった。

「それでは……」

と、売り手のマルデは、氣どったポーズで背後の小屋の中へ姿を消した。

と思うと、すぐにまた現われた。左手に鞭をもち、右手には縄尻をつかんでいる。

その縄のうしろには、オラミの首がつながっており、ほくはギョツとした。

むろん首だけではない。その首につながって立派な体格がひきだされてきた。

立派といえば、この国生れのそのオラミの顔は、眼が大きく、鼻すじが高く、まるで古代ギリシャ時代の彫刻のような、堂々たる風貌をもっていた。

その無表情の瞳の底に、悲哀の色がただよっているとみたのは、あるいはほくだけの主観だったろう。

そのオラミは縄に首をひきずられて、買手の貴婦人たちの前へ、まるで馬のように姿を現わした。四つん這いになっているのだ。

そうだ、ほくはいま不用意に、馬という言葉を使ったが、まさにそれは馬、いってみれば人間馬であった。

いうまでもなく人間であるオラミは、足よりも手のほうが短かい。四つに這わせると、

どうしても足は膝から曲げて、のばして支えた手との釣り合いをとらねばならない。

ところがこの人間馬は、足はぴんとおぼせたままで、からだを前にまげさせ、両腕を下に垂直にのばさせ、そのひじを切断して、切断した切り口へ、また他のオラミの肩からさきの腕をもってきて、接続させたのであった。

つまり、ここにいるのは、手長猿のような奇怪な人間なのである。

背を起こし、腰をのばして二本の足だけで立てば、両手の指さきは、おそらく足の脛から踵近くまで、垂れさがらないだろうか……。

3

見物の貴婦人たちのあいだから、いっせいに、ホホウ……という感嘆のどよめきがあがった。展示台上に這った手長オラミは、パランスのよい手と足に支えられ、胴体は水平に保たれ、さながら馬の如き姿になる。ただ、首と顔だけが、馬にくらべて短かい。それが不気味だった。

「観賞用としては、ずいぶん変わっておりますのね。ちよっとグロテスクだわ」

と、客の一人が首を傾けていった。

「ところがみなさん、この奇型オラミは、単に観賞したり、愛玩するだけではごさいませんのよ」

と、マルデがすかさずいった。

そして、その手長オラミにむかって、

「お坐り！」

と、命令した。

哀れなオラミは、まず最初に足の膝を前に折り、つぎに異常に長い腕を内側へ折りまげると、平伏するような形で、台上に坐った。

その低くなったオラミの背中に、マルデはひらりとまたがった。大きな体格をしているくせに、鳥のように身軽な動作だった。

マルデは、得意気に観衆を一眺すると、

「立て！」

と命じて、オラミの脇腹を蹴った。

オラミは、手足を静かにのばして立ちあがった。その背中が、マルデの体重で、弓のようになっただけ。

「ああ、なんという素晴らしい乗りごこちなのでしよう。いかがです、みなさん。ではつぎに、私が乗ったまま、歩かせてみます。よくごらんください……」

マルデはこういうと、オラミにまたがった



まま、その馬の尻を、左手の皮鞭で、ピシリッ
と打った。

「歩け！」

オラミの馬は歩きだした。

みている女性たちは、ふたたび眼をまるく
してどよめいた。羨望と感嘆の声が渦のよう
にまきおこった。

馬オラミは、貴婦人たちの視線を浴びなが

ら展示台の上を何回もぐるぐるとまわった。

すでに高度の調教をうけているらしく、前
足（ああ、それは本来、両手と呼ぶべきもの
なのに……）と後足のバランスが、非常によ
くとれていて、見事な足並みであった。

「いかがです、みなさん。わが誇り高きメリ
ール人は、オラミに車をひかせて、それに乗
るだけでは、もう飽きてしまったのです。そ

んだ。

マルデは、わざとそれにはかまわずに、思
わせぶりなポーズで、なおもオラミを乗りま
わしている。手綱さばきも、あざやかなもの
であった。馬オラミは、次第に荒い息をしは
じめた。

無理もない。いくら頑丈な体格をしている
オラミでも、七十キロはあろうかと思われる

してここに改良を加え、オ
ラミの背に、こうして、じ
かに乗ることに成功したの
です。これさえあれば、ス
ポーツによし、近所への用
足しも気軽にでき、しかも
これに乗ると、すこぶるこ
ちよい爽快味があるとい
うことも、忘れてはならな
い長所であります……」

マルデのその説明が終ら
ないうちに、

「いくらなの！」

「いくらで売ってくれるの
！」

もう待ちきれなくなった
客は、声をはりあげてさけ

マルデのポリウムを背にうけ、責めつけられてはかなわない。

「はい、はい……はい、はい……」

マルデは声をかけて拍手をとる。

偶然の一致か、不思議なことに、その、はい、はい……というかけ声は、日本語の、はい、はい、というかけ声に似ていた。アクセントとイントネーションに多少の違いはあるが、ぼくの耳には、日本語で、はいはいときこえるのでった。

4

「早く値段を教えてくださいだ！」

「あたしも買いたいわ！」

「あたしも！」

展示台をめがけて、客はどっとばかりに殺到した。

「ところが、みなさん……」

マルデはやっとオラミをとめて、その伸びやかな腕を、二、三度ゆすりあげていった。

「このオラミは、実はいまのところ、これ一頭しかないのです。ですから、この珍種にかぎり、競り売りを致します。おそれいます

が、値をつけてやってください」

「百三十ギラ！」と、

声がかかった。

「ごじようだんを言っでは困ります。百三十ギラじや、年寄りのオラミだって買えませんよ」

マルデは笑って首をふった。

「百五十ギラ」

と、べつの方から声がかかった。

「二百ギラ！」

黄色い声が投げられた。

「まだまだ……」

マルデは余裕をもって首をふった。

「二百五十ギラ！」

「三百！」

「三百五十！」

「四百！」

と、値ははげしく競りあがって、ついに七百五十ギラまでいったとき、そこでストップした。

「では、七百五十ギラで、このオラミは、北六番街のナンナさんのお手に渡りました！」

マルデが、一きわ声を張りあげて叫んだ。

ナンナと呼ぶ女性、それだけの金をさっそくマルデの手に渡すと、その高価な買い物を手綱をうけとった。周囲の女性たちから、羨

望と嫉妬の声が洩れた。

「ところで、このオラミの名前は、なんていうの？」

と、ナンナはきいた。

「これは、ハイ・オラミというのです」

マルデのこたえに、観衆が笑った。

うがちすぎた名前だからであろう。

「ハイ・オラミ第一号は、ナンナさんの持ち物になりました。鑑札はのちほど登録庁でお渡しいたします。——では、ハイ・オラミ第一号、よくご主人のいうことをきくんだよ。わかったね！」

というマルデの言葉と同時に、皮鞭がピシリッと、ハイ・オラミ一号の背に鳴った。

第一号は眼をとじ、頭をさげてうなづく。

「坐れ！」

と命令したのは、新しい主人、ナンナであった。この女性はマルデに負けないほどのよくのびた姿態をもっていた。

ハイ・オラミは、こくりと首をふり、手足を折って従順に坐った。

「すてき！よくいうことをきくのね」

若いナンナのよく肥えた体重が、ずっしりとオラミの背中のにしかかった。

馬も牛もないこの国には、したがって鞍

というものもないのだ。

「立て！」

ナンナの命令に、ハイ・オラミは手足をのばして立ちあがった。

女主人の脚が、ぐいぐいと第一号の胴をしめつけた。ナンナは、マルデがやったように背中をのばすようにゆすりあげ、またどしりとおろした。乗りごこちを試しているのだ。

「歩け！」

ナンナは胸を張り得意になって命令した。落ちないように、両手はしっかりと手綱をにぎっている。その手綱は、オラミの口から首へと、三重に巻きついていて、ひきしぼることもゆるめることも自由自在になっていた。とり残されたほかの貴婦人たちは、いつもの羨望と嫉妬の顔で、この逸物を手にいれたナンナを見あげた。

「それではみなさん、おさきに失礼……」

ナンナは、オラミに乗ったままで、これから帰宅するつもりだった。

群衆は、左右にわかれて道をひらいた。

その中を、ナンナをのせた人間馬は、悲しげに瞳をパチパチさせながら歩いていった。いや悲しみの瞳で、と思ったのは、またほ

くのセンチメンタルな推察だったかも知れない。オラミには、悲しいという表情はなかったはずだから……。

「さて、みなさん。ハイ・オラミが買えなかったからといって失望なさることはございません。第二号、第三号がつづいてこの市場に現われ、売り出される日は、そう遠い話ではありません。この加工珍種の評判がよければ今後大量生産される準備までしてございますから……」

マルデは、残った客の群れに、愛想のよい笑顔をふりまいて言った。

「ふうん……」

と感心したような溜息をついたのはばくのご主人のウーナだった。

「あんな奇型の珍種でもたいした人気なのだから、いまに黄色オラミが生れて、みんなの前に現われたら、どんな大騒ぎがはじまるでしょう。ほんとに楽しみね、ねえ、そう思わない？ イシヤマ……」

そのウーナの言葉に、ばくは坂井を思い出した。

あの特殊オラミ種繁殖工場に入れられている哀れな坂井を……。

あと半年……半年たつと、黄色い皮膚をも

ったオラミが出現して、そのオラミたちに家畜としての飼育がはじまるのだ。

黄色オラミ——それは、純粹の日本人ではなくとも、半分は黄色人種の遺伝をうけたオラミたちなのである。

それらのオラミが、この街中にいっせいにあふれたら……ばくは慄然とし、目まいのようなものを感じて立ちすくんだ。(未完)

.....

◎マゾ・フォト焼増◎

マゾ・ファンの要望により編集部作成のマゾ・フォト(春日ルミ女史対小沼正三)(絹川文代嬢対小沼正三)(愛川悦子嬢対愛読者某氏)の各種写真御希望により特に焼増いたします。価格その他返信料同封の上御照会下さい。但し、右はいずれも女性から男性が凌辱され緊縛され飼育される種類のもので、只今のところ、男性対男性、又は男性一人の緊縛写真の焼増はいたしておりません故御諒承願います。

尚、マゾ・フォトに出演御希望の方並に特写御希望の方は御遠慮なくお申込下さい。

(編集部)

手帖雑報欄

沼 正 二

二七九 金子登『性における笑の研究』 小咄には雑報二二九、二七二等であげたものをはじめ、変態性欲現象を扱ったものが少なくない。これらを精神的に解釈したもの。もっともマゾヒズムの理解は深いとは言えない。

二八〇 清水正二郎『エロスの航海』 『肉の砂漠』で著名な強精家の女体行脚空想の十八話。船医の旅行記の体裁。週刊実話特報誌に連載されたもので、現にその続編ともいうべきアメリカ情痴物語(当学生もの)が連載中である。奇クの自肅ぶりが過ぎている様に感ぜられるほどの作品で、小見出しでも「愛液を混ぜた酒」なんてのがある。ユダヤ人の贖罪場を訪れた主人公が汗にむれた足を舌で掃除させた後、洞窟中で美少女に奉仕させる「裸の巡礼たち」の章。贖罪者たちは自分の精でこの洞窟オナンの巡礼道を通せねばならないが、キリスト教徒の精を貰えば十歩の歩みを許される。そこで見物の異教徒に奉仕させて呉れと哀願する。主人公の「傍では、金持のアメリカ婦人が若い男に奉仕させている……」。かくて、ここが旅行者の秘密のアブ欽楽街になっているというのだが、面白い話を考えたものだ。「美少年の受難」の章は、ヤプーの舌人形空想を地でゆくお伽噺。ヨーロッパの富豪階級の未亡人が愛玩用の美少年を買いに来るレバノン。市場では美少年が台の上に立たされてい

るが、その半身は女性そっくり、手術で整形されてるのだ。買手の貴婦人達は「タング(舌を)！」といって、舌を出させて調べる。「少年は口を大きくあけて自分の舌を丸めて突き出して見せた……」養成所を見学すると、手術するところ、傷の治癒後舌の訓練をするところ……「一人は細い試験管の中に舌の先を丸めて入れる練習をさせられていた。少し丸め方をゆるめとガラス管は割れてしまう。その度に少年の背中に激しい鞭が行く。少年は泣きそうな顔で別の試験管の中に舌を入れる。細く固く尖った舌は、試験管の中でさまざまな形に動く。それらの過程を終えた少年たちは、ガラスのコップの底にある砂糖に自分の舌を届けさせようと必死の努力をしていた。……」届かせるのに三カ月かかるという。……こうして市場でせり売りされる日に備えて舌の訓練を積んだ美少年が作られてゆく。……一読、白人貴女達がこの愛玩用人形を使用する有様を空想させられる文章である。もっとも、十八話の大多数はノーマルな男性の欲望の誇大空想であって、本来マゾ的なものではない。

二八一 安部公房『第四間氷期』 マゾとは関係ないが、ヤプーで登場させた水棲人と取り組み、医者らしい、もっともな理窟がついていて面白い。

二八二 マルキ・ド・サド作 渋沢竜彦訳『悪徳の栄え』『ジュリエット』の別題である。同訳者の手によるサド選集三巻中には『ジュスチヌ』もあったが、この雑報では採り上げなかった。然し、このジュリエットの方はヒロインの悪魔的性格故にマゾヒストにも楽しめるものだ。また、書中に表現されるファシズム的な政治哲学も面白い。宰相サン・フォンは専制主義を讃える人物だが、ジュリエットに政治方針を説いていう「……第五に、人民を奴隷状態

に陥れておく。……往時の如く土地に縛りつけて金持の財産の一部とし、あらゆる種類の譲渡を許可する。労働は彼らにおいてのみ維持され、ごく些細な落度にも厳罰が課される。……第九に、昔のラケダイモン（スバルタ）における非人階級のような隷属せる人間の階級をつくる。奴隷と獣とのあいだにはいかなる差異もない。動物と同じように殺したからとて、誰が罰を受ける必要があるか？」この構想は、イース世界における黒奴階級と家畜人種族との隷属二階級制度への示唆となったもので、特に引用紹介しておく次第である。

二八三 ハイソツ・シユマイドラー著、清水朝雄訳『現代文化と性』イワン・ブロッホ（性科学なる語の創始者）の名著『現代の性生活』の衣鉢を継ぐもの。その第二部「倒錯した性」の第五章がマゾヒズムにあてられている。敘述も資料も新味はない様であるが。

二八四 諸家『世界艶本集大成』マゾ文学に関する限り無価値なことは「毛皮のヴェヌス」を録していないのでも分る。「女天下（ジネコクラシー）」など著名作品が挙げられたものの、解説文は、原作を読まずに作られたこと明白で、興を削がれる。

二八五 山岡壮八『おんな天下物語』「雲を呑む女」以下八篇の時代短篇。私には興味少なかった。

二八六 ピエール・ルイス作、江口清訳『女とあやつり人形』既に『女と人形』として訳の知られたもの。痴人文学の古典であるから、未読の方におすすめておく。

二八七 明石和子『現代悪女教室』不道德講座めいた逆説で男性飼育法を論じたものだが、なかなか面白かった。家事一切を引き受けてこそ理想的男性と説く「亭主を酷使すべし」の章、精神的残

酷を讀える「女はよろずに残酷であるべし」の章などもさることながら、「おしなべてクイーンを志すべし」と、美容、教養、挙措の向上を説いて、その効果を述べた……「あなたが足のうらのよぐれを舐めてよ——」といえ、四、五人の男がわれ先にと、あなたの膝下にひざまずくでしょう。あなたがマットレスを修繕に出したいのだけど——と洩らせば、七、八人の男がメザシのようにベッドの上に横たわって随喜の涙と共にあなたの敷き布団になるでしょう。あ、クイーンたるや、なんたる快きことでしょう」の一節など、内容はマゾ男性の妄想文めいているが、これがレッキとした二十代女性（昭和五年生れ）によって書かれた文章と知ると、平静に読み過せないではないか。戯文ながら珍重すべきものとしてあげておく。

二八八 広池秋子『男性不用論』は雑誌二五八が完結した単行本だが、大したことはない。この作者は、雑誌二四四の「変な男」以来注目していたが、その後『間違いだらけの恋愛』中「男の変態性欲について」の章下に「変な男」と同材料のエッセイがあるのを見出した。これによると、男性マゾには全然理解がないらしいので、失望した。

二八九 武田泰淳『貴族の階段』、遠藤周作『月光のドミナ』はそれぞれ雑誌二五〇、一七五の単行本である。また、マゾとは無関係故番号は付さないが、舟崎淳『お唐さん』（沖繩の海賊と女体仲買人）は、本誌サド派読者には好読物であろう。なお、深見杏子『朱い挑戦者』にはイチジク灌腸の記述がある（五八頁）ことを紹介しておく。

二九〇 裏窓誌のマゾもの 七月号では「貴婦人と犬」「足のしもべ」。後者は作者名とやま・かつひことある。十月号では「河馬

を崇める男」麻生和夫氏好みのもの。「女たちの檻」はドイツの捕虜収容所ものだが、他誌で見たことがあった。同誌のマゾ作品はどれも質が落ちる様だ。

二九一 毬百合子「男は可愛いケモノ」(読切クラブ誌十月号)

二八八と同趣の戯文だが、男をケダモノ(野獸的暴力的存在)と見るのでも、毛物(胸毛ある肉体の所有者)と見るのでもなく、正に獸畜として飼育の対象とするという書き振りが面白かった。

二九二 大宅壮一「忠誠あまりにも忠誠」(文春九月号) 氏が

沖繩に行つて、動物の訓練からの愛国心といった発言をしたので、発狂者さえ出て非難されたという。それに答えたこの文では、日本における沖繩は即ち世界における日本の縮図なので、日本民族の忠誠では飼ひならされた家畜の主人に対する忠誠心(奴隸道德)に過ぎず、それが大和魂の実態なので、だから、二世部隊の米国史上空前の忠勇も生れたのだ、と説く。家畜的忠誠心という表現が気に入ったのであげておく。

二九三 吉田精一「風流江戸小咄」(漫画読本五月号) 齊藤茂

吉全集から九条武子の固形物の「太い太い」話を引いた次に、類似の例をあげ、明治帝のを小ワケにして食へてしまったという話に及ぶ。雑誌一七〇「黒い菊」を想起させる。

二九四 石原裕次郎滯欧写真集(全映画アルバム) 「ボクの女性観——世界の恋人といわれる金髪碧眼の典型的な北欧の美女たち……眼の保養に絶好の美しさ。十人のうち九人半は美人だね」とい

う述懐を手帖新第一三章の参考に引いておく。さすがのサムライもスエーデン美人には、すっかりイカサレタらしい。

二九五 夢声対談「馬は男ばかり」(週刊スリラー八月一〇日

号) チェコ国立サーカスの馬は、全部去勢してない雄馬ばかり。「女たちはこたえられない」とか。

二九六 皇太子妃御懷妊(週刊サンケイ八月二日号巻頭) 妊娠

予知法として小動物へ妊婦の尿を注射することは先に沼だより(三年七月号一六六頁雑誌一九七の前)で述べたし、ヤブーでも応用する予定(三四年九月号中絶挨拶)であった。これは産婦人科医の間では周知の方法だが、美智子妃殿下の場合も、身を以て御懷妊を祝福申し上げた兎がいたのである。羨ましい。

二九七 女ばかりの館(週刊サンケイ九月一三日号) 元久通宮

家の女王様島津明子、元子爵夫人税所百合子の両三十代女性を代表取締役に、他の取締役も、相談役も女性で、この女性重役達が四十人の社員を駆使して、民放やテレビの広告代理業界にグングン進出したという日放株式会社を紹介。貴婦人にして女性経営者という点がヘラ型とアテネ型を兼ねて(手帖新第一章参照)、マゾヒストを喜ばせる。

二九八 毛利誠子「ある公爵夫人の回想」週刊文春連載九月七日

号完結) これも貴婦人にして女スパイで、右の両型を兼ねるが、ヘラの要素の方が強い。公爵夫人としての教養も流石だし、往年の才色兼備ぶりも窺えるが、特に気位の高いのがよい。無礼な男をなぐりつけたことが一度ならずあったことを述べて「わたくしは日本の女性としてはどっちかという気強い方です」と自分で言っている。(七月一三日号)

二九九 娘よオリンピック前に何故死んだ(週刊実話九月二一日

号) 御前大会で二等入賞し、オリンピックでの活躍を期待されていた令嬢騎手水田早苗さんの死(乗馬中の事故)の記事。「顔の長

い男と結婚する」と生前言っていたそう。もう一つ令嬢騎手の記事として

三〇〇 話題の女プロデューサー（週刊文春九月七日号）は鈴木元首相の孫娘道子さんのパレスクラブでの騎乗姿を撮している。長い乗馬鞭を手にベテランらしい風格、ただし顔がゆがんで写っているのが残念。

三〇一 女と暴力（別冊週刊サンケイ一〇月号）巻頭の「おとこ顔負け」のグラビアでは、空手、合気道、フェッシング、棒術等の女流武道家が紹介される。私自身はフェッシングの井川志津江さん（23）の西欧的雰囲気と魅力を感じた。外にも、「碧い眼の女丈夫たち」とか「おんな刑事」とか言った特別記事あり。

三〇二 週刊東京誌七月一七日号の表紙 モデル松本弘子が傘を右手にかざし、両脚を開いて道路に立ち上がった下にマンホールがあつて、中年の工夫が首を出して見上げている、という構図。漫画では再々見るが、実写でこうはつきり意図的に撮されると刺戟的だ。

三〇三 十五年目の基地（朝日新聞京浜版八月連載）手帖旧第二六項に書いた様な光景がまだあると知る。例えば八月二五日（9回）「根岸ハイツの島」によると、島の住人は指紋をとられ自転車にも乗れず、全戸暖冷房つきという贅沢なハイツに囲まれて下水もガスも引けない……。

三〇四 沖縄新刑法典施行とか、ミシシッピー州パパラビルでの黒人未決囚私刑（四月二五日）とか新聞記事にはまだ色々あるが、一々番号を付けて出すのは止めておこう。兼高かほるさん（この女性にはドミナタイプであると同好者から聞いた）の向うを張ってジェ

ット機による世界早廻りを実行する曾野綾子さんも、本誌の出る頃は新記録を樹立しておられよう。これらが美しい女性によって行われる様になったことだけでも新時代に生きることは楽しい。

三〇五 漫画も、今までの基準では列挙に骨が折れる位に、「性の難破」的表現の数が多い。ここでは、「動物は科学を進歩させる」（漫画読本八月号）の末項で、動物が進化して人間を征服し、家畜化し、逆に、人間をモルモットの使用する場面を妄想して、「人間は科学を進歩させる」ともじった着想の奇抜をあげておく。

三〇六 映画「お嬢さん、お手やわらかに！」パスカル・プティ、ジャクリヌ・ササル、ミレーヌ・ドモンジョの三美人が、後半美青年アラン・ドロンをやっつけるところは、女群の攻撃を妄想するマゾヒストに喜ばれるだろうが、さて以上の見所は、三人三様にドロン殺しを夢見るところだ。ことに、ドモンジョが美青年を自動車で駆り立て遂に轢き殺す場面で彼女が痛快そうに笑うところ。プティに毒を飲まれたドロンが解毒剤に手を伸ばすのを彼女が瓶を足蹴にし、ドロンがこぼれた薬液を舐める犬と同じ様に床に這って死ぬところなど、女性サディズムの表現として卓抜である。三人の中ではドモンジョが一番マゾ好みでしよう。先だって訪日の折、素顔を拝む機会を得たが、金髪が眩しかった。邦画「日本誕生」で、天照大神に扮する原節子が金髪のかつらをつけると聞いていたが、いっそドモンジョに特別出演して貰ったら、とさえ思ったことだった。

三〇七 映画「プリンス・シシー」はじめの方にロミー・シュナイダーの横鞍式乗馬姿が出て来る。大公妃が彼女に皇后の心得を説く場面で「乗馬は美容にいい」という文句もある。三部作だそ

うだが、あと二部も乗馬場面が出ることは確実。実在のエリザベト皇后自身「騎馬女王」(手帖新第二章一三四頁上欄)として有名な女性だった。この映画の解説や批評は、美智子さんロマンスとの暗合ばかり気にしていて、気づかなかった様だが、このシーンが、後年暗殺されて、コクトーの戯曲「双頭の鷲」のモデルとなり、エドウィージェ・フィエールの馬上の雄姿をマゾヒストの脳裡に遺したあの映画の女王になったのである。(原忠正氏が度々この映画を論ぜられた)

歴史映画では、「狂乱のボルジア家」が近く封切られるが、先にマルチーヌ・キヤロルの演じた「ボルジア家の毒薬」(原氏時評にあり)のルクレチアが、今度は兄以上に酷烈な悪女として登場するそう、楽しみである。

三〇八 日本映画では「暴力娘」「男性飼育法」「銀座のお姐ちゃん」など記憶にあるが、洋画ほどのコクのある場面はない。お姐ちゃんトリオと、三〇六のお嬢さんトリオを比較するが良い。それでも中島そのみの令嬢が文士を投げとばす場面はまず及第。

この夏に、かづひこが顧問をしているA出版社の社員十二名の男女が、ここへ二泊するとい、社長からカントクとして同行をたのまれた。

久しぶりのキャンプは快適であった。

夜がふけ唄いつかれた一行は、そろそろ寝ようといいだした。男たちは飲みたりないからとて、ふもとの売店へ出かけ、タキ火のまわりには、かづひこの他には女性ばかり。

「この火、どうするの？」

編集の石井嬢が、まだアカアカと燃えているキャンプの火を指さして相談をかける。

「困ったねえ。消さなきゃ危いし、かといつて水はなし……」

かづひこは思案した。そのとき、胸の中にステキなアイディアが浮んだ。



愛^マ好^ニ家^ヤの記^ノ録^ト

とやま・かづひこ

(112)

キャンプ・ファイヤー

正丸峠は、キャンプ場として戦前から知ら

れた所。時期にはキャンプ・ファイヤーの歌声が響き渡る若人達の天国。

「よしよいいことがある。消防隊だ」
いいながら、かづひこは火に向って突立つた。

火が、ジューツと音と煙をたてる。

「キヤアー」

女性たちはこの奇抜な消火法に驚きながらも、立ち去りもせずに鎮火状況をみている。しかし、かづひこ一人分では消えっこない。

「サ、君たちも手伝ったり、手伝ったり」

かづひこは、みんなをうながす。さすがに皆、モジモジしていたが、中で一人勇敢な、

総務部の木下嬢が

「やっちやおう」

と、すすみでる。つづいて石井嬢が

「センセイ、むこう向いてて」

と、かづひこにいい出した。

うしろ向きに、眼をつむったかづひこの背に、この消防隊の前にはみるみる火も衰えてゆくのが感じられた。

眼を閉じたままじつとかづひこはその雰囲気

に酔う。こんな気持を味ったのはこれがはじめてである。

現実と、夢想とが入りまじって、かづひこの頭を去来する。

あろうが、かづひこにとっては何にもまさる芳香であり、めったに得られない幸福の一ひときであったのだ。

去る八月十二日の思い出である。

(113) レイ

「週刊新潮」八月二十四日号より

……首にパンティーのレイをかけられて、テレビに撮し出されたのが、さきのオールスター戦で最高殊勲選手に選ばれた大毎の山内選手。山のような賞品、そして、首にかけたレイ。球場で見ていたお客さんも、「きれいな花のレイだ」と思うくらいだから、テレビからでは判るはずがない。ところがこれは色とりどりのパンティーやスリッパをつないだもので、下着デザイナーのK女史が贈ったもの。「とんでもものい前レイになった」と選手たちはいまだに苦笑している。……

とていねいに、その珍しいレイを首からかけられた山内選手が、ニコリ笑っているスナップまで添えられたニュース。しかも満目のスタンド。

下着フアンのみなさんだったら、カタズを

のむシーンであろうか。かづひこなども、パンティという文字だけみても胸がときめくのだもの、そうした同好の人々だったら、さぞうらやましいだろうと思う。

(115) おんな牢秘抄

週刊誌「実話特報」連載の、おんな牢秘抄は、同好の皆さんには一読の価値があらうと思う。

作者は、山田風太郎氏。

その第二十二回には「女牢酒盛」と題して江戸小伝馬町のおんな牢のリンチの様子をリアルに描いている。

そのクライマックスでは、山盛りの『走』を新入りにたべさせるところ。

『山盛りにした腕に、杉箸二本』とか、『そのど馳走を、二杯や三杯、無理に喰べても、ゆるしてはくれまい』とか、汚物のおぞましさがよく出ていて、ゾクゾクさせられるのは作者の手腕というものであらうか。

場面がかわれば、縛ったり、ムチが登場したり、とにかく我々にとっては、近來にないたのしい作品として、同好の人々に迎えられ

るものではないかと思う。

乗馬ズボンシリーズ

ベルリン

藤山秀緒



ヒトラー総統

最後の日

地下壕

ここはベルリンの総統大本営。

広い地下壕の中の一室には、ヒトラーとその愛人のエヴァ・ブラウンが、迫り来る運命のあしおとを、ヒステリックな物腰で振り払っていた。でも、ベルリンの陥落はもう目の前にあった。彼等は親衛隊の手で何とかして虎口を逃れたいと念じている。親衛隊員は、八方に飛んで総統の脱出出来る場所を探していた。

親衛隊員は、ヒトラー総統一人でさえ、この脱出は難しいのに、ましてエヴァ・ブラウンを連れて行くことは不可能と判断していた。

しかし、誰ひとりそれを総統にいう者は居ないのだった。

時折、ズシンと大きな地ひびきが伝って来るのは、ソ連軍の砲弾が、間近に打ちこまれはじめたからだろうか。

親衛隊員が続々と引揚げて来た。ベルリンは包囲されてしまったので、ここでヒトラーを脱出させるには乞食にでも姿をかえさせ、単身、どちらかへ落ちのびる以外はなかった。

「私が総統にお話しします……」

重苦しい一座の空気を破って、澄んだ女性の声。

静かに立上ったのは、リンダ・ユンケルであった。彼女は、外交官だった父の、日本滞在中に生まれた、日本人との愛の結晶であった。

母を日本に残し、リンダは父に従って祖国ドイツへ帰り、志願してナチスの親衛隊に入ったのだ。ナチスの軍服、それに、きっちりとした乗馬ズボンと長靴がよく似合った。

二十四といえば、娘ざかりの筈を、彼女は軍服の拘束の中で生きて来た。彼女の心の秘密……。いや、それはあとで述べよう。

リンダは総統の室へ入って行った。

戦時ではあっても、女のたしなみはあった。リンダは、薄化粧に、短かめにカットしたブロンドの髪をかき上げ、帽子をかぶってりりしい軍装を総統の前へ運んだ。

「総統。申上げにくい事ですが、もはや、運命は定まったものと思われます。この上は変装して単身脱出されるか、ここで自決されるかしか方法はございません。」

ヒトラーは、リンダの美しい軍服姿に見とれながら、蒼白い顔でうなずいた。

「エヴァ、脱出しよう、支度を！」

「お待ち下さい……。残念乍らエヴァ夫人をお連れになりましたは、親衛隊の人々の手前もあり、脱出は不可能かと思ひます」

「なぜだ？」

「総統……。国民は総統のために血を流しております。けなげに戦っております。妻子も捨て、親も捨てて戦っているのです。」

いま貴方が、愛人に未練を残して見苦しい振舞をなさいますは恥を世界にさらすことになりましょう。」

「では、どうすればよいのかね、ユンケル」

「脱出なさるのでしたら、……エヴァ様の……お命を……」

「わしに殺せというのか」

「申訳けございません……」

リンダは総統に立派な態度で進言した。

その顔には、ナチス・ドイツの名誉を守りぬこうとする、悲壮なまでの真心が現れていた。

「エヴァを殺して、どうしようというのだ」

「はい。夫人をお手にかかけられましたらば、きつと親衛隊の人々も身命をなげうって御奉公するでございましょう。及ばす乍ら私もきつとお供いたします！」

これまで黙っていたエヴァが冷たくほほえんだ。

「リンダさん。その手にはのれないわ。私、ちやんと知ってるのよ。あなたの軍服姿の美しさ。総統もあなたに思召があるのよ。」

「冗談はおよしになって下さい。私は、真剣に、総統とナチスの名誉のために……」

「わかりました。あなたはお利口ね。お為どかしに私を片付けて、総統と手をとって墮落ちをしようというんでしょ。」

「エヴァ様。取乱した御発言は迷惑いたします。私も死は覚悟しております。いまさら総統のお情をいただくために、そのような情ない企てはいたしません。……エヴァ様……お願いです、部下の士気にかかわる、一大事です。どうか死を以て全軍を激励して下さい！」

「お黙り。リンダさん。私はいやよ。でもね、もし、あなたが私たちの目の前で、死んで見せてくれるのでしたら、あなたを信用してもいいことよ。」

「えっ！」

「そうそう。あなたは日本人とのあい、のこさんでしたね。日本には、ハラキリ、っていうすばらしい自殺方法があるそうね。リンダさ

ん。あなたも、女だてらに軍服を着けて男装するからには、くやしかったらハラキリでもしてみせることね。あなたが死んだら私も死なせていただくわ。どう？」

リンダは、はらはらと涙を流した。この女のおさはかさが、同性の一人としてやりきれなかったのだ。リンダは、ナチスの名誉にかけても、女に溺れた総統の姿は抹殺しなければと固く決心していた。いや、彼女自身、ここから生きのびようとは思っていないのだ。

あらぬ疑いをかけられたリンダは、無言のまま不動の姿勢で立ちつくした。そして、「今晚が、ベルリン最後の夜となりましょう。私の運命も、今晚かぎり。きっと、エヴァ様のお疑いの晴れるようにいたします」「おや、ではハラキリをするおつもり？」

「……はい。腹の切り方も、母に教えてもらっています。母の守り刀で、ハラキリを御覧に入れます。そして、私の、あかい血汐と、どす黒い臓腑を肴に、お別れの宴をなさいます。そして、立派に、御最期をとげて下さいませ。」

「エンケル、待ちたまえ。君は死んではいけない」

「総統、止めて下さるほど、エヴァ様の御最

期を乱し、ナチスの名誉を傷けます。リンダは、女乍らも軍人です。名誉のために命を捨てるのは嬉しうございます。今宵の別れの宴を合図に、立派に腹を切ってエヴァ様の御案内役をさせていただきます。」

憔悴しきったヒトラーは、それ以上は止める気力もなかったのであろう。リンダは、りりしい軍服姿をドアの外へ消して行った。

回想

個室へ戻ったリンダは、じいっと考えこんでしまった。果して総統は逃げることが出来るだろうか、先ず不可能に近い。不可能とすれば、私が死を急ぐまでもない。腹を切るのは苦しいもの。総統夫妻の死を見届けた上ピストルをこめかみにあてることの方が、はるかに苦痛が少いではないか。

しかし、別の声が、ささやく。

リンダよ。女の倖せを知らぬお前に、たった一つ残されたこのすばらしい自決のチャンスをなぜ恐れるのだ。日本の名誉をあげ、しかもナチスに殉ずる軍装の乙女の苦しみこそお前に残された輝かしい使命ではないか。

リンダは、祖国の名誉のために、目の前で散って行った英国の女スパイを回想する。

リンダの思いは、つい半年前の、捕虜収容所へ飛んだ。

リンダは、女囚の監守長として、ある刑務所に赴任した。

赴任して三日目に、英国の女スパイが入所した。彼女の名はジュリー。

ジュリーは、一切の取調べに黙秘をつづけた。

彼女は、落下傘で、勇敢にもドイツ軍の後方へ降下し、出先スパイとの連絡に当たっていたのである。

捕まった時、彼女は隠れ家の一室で書類を焼き、英国軍人の正規の服装一切をカバンにつめ、飛行服に身を固めて、覚悟の態であった。

調べはつづけられたが、彼女は黙りつづけて遂に拷問にかけられることになった。

リンダの処へ来たのは、女囚として拷問をうけるためであった。

彼女は凄惨な拷問をうけた。逆釣り、海老責め、鞭打ちと言語に絶する責苦がつづいた。しかし彼女は、時々休えかねて、

「ウーッ！」

と呻くほかは、歯をくいしばって声を立てぬほどの気丈さであった。

リンダは、凄絶な拷問の場を見て、ジュリーに憐れを催した。リンダは、監守に話してジュリーを貰いうけ、自室に呼んだ。やつれては居たが、飛行服をがばと着こな

したジュリーのりりしきは、リンダを圧倒した。その日以来、リンダは、ジュリーに接する時には、必ず乗馬ズボンに身を固めた。スカ

ート姿では、この女丈夫を扱う勇気が出ないような気がしたからである。

「ジュリー、いいましたね。おかけなさい。貴方は勇敢な人ね。敵中ふかく女の身で、落下傘降下をするだけでも大変なのに、捕えられて拷問されても、少しも見苦しい振舞いをなさらない。……感心しましたわ。」

でもね、あなたのような勇敢な人を、ドイツ軍としても殺したくないの。あなたが、こちらの質問に答えれば、命を助けてあげたいと思うの。私にお話しして下さいませんか？」

ジュリーは嘲笑うようにいった。「将校さん。私は何といわれても、決して喋りません。命も惜しくありません。不名誉な生き方をする位なら、名誉ある死をのぞみます。殺して下さい。」

押問答がつづいた。とうとうリンダも業を煮やしてしまった。「ジュリー、わかったわ。じゃあ、あなたと私の根くらべよ。あなたへの拷問は私がするわ。ゲルマン民族は残虐よ。私も、その血をうけてる



わ。……いいこと？責め衣は其の飛行服。飛帽もかぶりなさい。その代り、私は何をするかわからないわよ。」

「将校さん。リンダさん。あなたも私も、祖国の名誉をかけている、苦しいけれど、私、がんばります。負けません！」

「私も負けないわ！」

世にも奇妙な光景だった。二人とも、決して相手を軽べつしていない。それどころか、お互に愛国心に燃えるひとみを輝かせて此の拷問を、より凄絶なものにしようと気負い立っているのであった。

祖国を愛する心。めざす祖国は異っても、その情熱は二人を強く動かした。

二人の間には、いいようのない信頼感が湧き、二人はニッコリとほほえみ合うのだった。

女 斗 美

二人は、拷問室に立った。

監守は退き、室内には二人が居るだけである。ジュリーは、いつものように厚地の飛行服に半長靴、飛行帽をかぶり、完全武装の姿で後手にいましめられている。

リンダは、ナチス軍の正規の軍装に、乗馬

ズボン、乗馬靴、右手に鞭をさげている。「リンダ。いよいよこれからです。覚悟はよいこと？」

「ジュリー。それはあなたにいうことよ。弱音を吐いてはだめよ」

「うめいて、のたうち廻って、あなたを失神させてあげるわ」

ジュリーはいたずらそうに笑った。

リンダは、乗馬ズボンをぐっと押上げて、かるく身震いする。そして軍服の太いベルトをきりと締めあげた。緊張しているのであろう。

ジュリーは、ゆっくりひざまずいた。飛行服が、ごわごわと音を立てた。

この沈黙の何というすばらしさ。

二人の荒い息遣いが、嵐の前の静けさを、一層凄絶なものにしている。

リンダは、乗馬靴の脚をあげて、ジュリーの背へのせた。

ぐーっと踏みつけられてジュリーの上体は少しずつ前へのめって行く。手が後へ廻っていなければ、飛行服姿の女腹切りと、そっくりの形だ。のめって、あえぐのだ。

一分、二分、三分……

ジュリーの顔が、次第に赫らみ、息遣いが

乱れて来た。苦しい筈。上体が二つ折れになって、しかも後手にしぼられ、足は不自由な半長靴が拘束しているのだ。

リンダは、ジュリーの苦しむのを、上からこまかく観察している。背に乗せた乗馬靴が時々、びくっ、とけいれんする。そのたびに自分の心の底が妖しく疼くのをどうすることもできないのだった。

ジュリーは脂汗にまみれて行った。十分が過ぎた。

「ジュリー。参ったかった！」
うわずったリンダの声。

「うーむっ、なんの！」

ジュリーもいよいよのないおののきを泳えながら体をかがめて苦しむ。

「強情者っ！」

リンダは、いまいましそうに乗馬靴で蹴倒した。ジュリーの飛行服は、どさりと床に横転した。そして、リンダは、ジュリーを踏みに踏んだ。

「これでもか、これでもか！」

リンダの乗馬靴が、ジュリーの厚地の飛行服へ、容赦なく喰込んでいく。

いくら飛行服に護られていても、これではなんてたまるう。

ど、どつ、と乗馬靴がひびくと、ジュリーの体は蛇のようにのたうつののである。

「これでもかっ」

「ウツ、ウツ、ウーツ」。

遂にリンダは、両の乗馬靴で、ジュリーの背の上に乗った。女とはいえ、完全武装の軍服を着けた一人の人間が乗ったのだ。

ジュリーも泳えかねてか、

「あうっ！」

凄惨な呻きをあげて飛行服のズボン姿を泳がせている。半長靴の両肢が、がばがばと、のたうつののである。

リンダは交互に足ぶみしながらジュリーの呻きを、うっとりときいていた。

妖 し き 花

リンダは、その日、遂にジュリーの口を割ることが出来なかった。気を失うばかりに疲れ果てたリンダは、ジュリーの勝誇った美貌を無念そうに見据えながら居室へ引取ったのであった。

そして翌日は、彼女の胸を、革ベルトで締めあげて見た。

ウエストが、革ベルトのきしむのにつれて引きしぼられて行く。ジュリーは、いつもの

飛行服姿だが、手錠はなく、四肢ともに自由であったため、腹を絞られる苦しさが、次第につるにつれて、両手で空をつかんでのたうった。

口もとからは涎が流れ、ぜい、ぜい、と息遣いも荒く、激しかった。

「ううっ、ううっ、ううっ……」。

がばがばと飛行服が泳ぐ。

ベルトの鳩目が、一コマ、一コマしめつけられて行く。

でもジュリーは弱音はあげない。

「ぐ、ぐうっ……」。

ジュリーは精根つき果てて前へのめった。しかし、ジュリーは、くじけなかった。床をかきむしり、飛行服をすりつけて泳えつけたのだった。

その翌日は、飛行服のネック・ベルトを、のどのつまらぬ程度に締めつけられた。

その翌日、リンダは凄絶な鞭打ちを行った。飛行服と飛行帽に護られて居なかったらジュリーは血まみれになったことだろう。

ピシリッ、ピシリッ！

とひびく鞭の音、泳えかねて、

ウームッ！

とばかりに歯をくいしばる凄惨な光景が、

つづくのだった。

優美な英国製の飛行服も、汗と脂と、塵にまみれて、ジュリーの前途は暗かった。

その翌日は、リンダと、監守が力を合わせてジュリーを天井から逆釣りにして責めた。

しかし、ジュリーは航空隊で訓練をうけただけあって、この異様な宙返りにも、苦しみはしたが堪えぬいてしまった。

いまでは、責めるリンダの方が、ぐったりとして眠れぬ夜がつづく有様だった。

ジュリーは、こうして毎日のように責めさるいなむリンダに、いつしか特異な愛情を抱きはじめていた。彼女に責められるのが、不思議なほど憎めなかった。

木馬に四肢をしぼって、こづき廻された時など、ジュリーは、たとえようもないおののきに、苦しむとみせて心の悶えを絶叫しつけたのだった。

リンダも、ジュリーへの責めが、次第に、祖国への忠誠をはなれて行くのを自覚していた。ひどく苦しむ時は手加減したり、そっと薬を与えたりするようになった。

美しい二人の、加虐对被虐の「祖国愛」こそ、戦争末期に咲いた妖しい花だったのである。

相寄る心

リンダも、ジュリーも、いまでは、人目のある時だけしか、激しい責めは行わなくなった。二人だけの時は、プレイとも呼べる程の悩ましいMS行為がつづけられた。

いつしかジュリーは乗馬ズボン、リンダは飛行服に異常な愛着を感じはじめていた。やがて、二人は離れがたい気持を自覚はしたものの、そこに待っていたのは、ジュリーの処刑であった。

リンダは司令部から、ジュリー処刑の命令をうけた。それは一週間後に迫っている。

普通の場合、受刑者にそれを知らせるのは死の直前にかざられているけれど、リンダには、ジュリーにこれを知らせずに置くことは出来なかった。

リンダは、拷問室にジュリーと二人きりになったとき、そっと運命の日を告げた。

「ジュリー、とうとうお別れの時が来たわ。

私は、あなたに負けた。やっぱり、あなたは一言も喋ってはいくれなかったわね。」

「では、いよいよ死刑がきまったのですか」

「……。」

「いつです？」

「十一月十日、午前五時……。」

「十一月十日……。あと一週間ありますわ。」

「……立派に死ぬことを考えなければ。」

「ジュリーさん！ あなたは何という素晴らしい女性なのでしょう。死を予告され、悲しむどころか、誇らかでさえある……。」

「ねえ、ジュリー。私の責任において、あなたに名誉ある自決の機会を与えましょう。……自決者が出れば、監守長は責任をとらねばなりません。でも、あなたなら、私も喜んで責任を受けたいのです。」

敗北をみとめたリンダの、いまは只一つのはなむけだった。

ジュリーは、じっとリンダの美貌を見つめている。

「私は、勝ったのね。……ゆるして下さい、リンダさん。私は、あなたを尊敬していました。でも、祖国を売ることは出来ません。すまないと思っています。……聞けばあなたのお母様は、日本人とのこと。……日本には、ハラキリ、というすばらしい死に方があるそうですね。」

「そうよ。日本人は、名誉をかけた自決の時、みんな腹を切って死ぬのよ。人手にかかるよりは、自らの手で腹を裂いて、笑って死

んで行くのです。……あなたのお国には、切腹こそないけれど、自決は名誉な事と聞いています。……自決して下さい！」

ジュリーは、懇願するリンダにほほえんで見せ、落着いた態度でいった。

「……リンダさん。お願いがあるの」

「え？」

「私に、そのハラキリの様子、見せて下さらない？ うん、本当に切らなくていいんです。作法や、死んで行く姿を見たいの。……ね、お願い、やって見せて！」

この注文は、リンダを当惑させた。でも、愛するジュリーのためなら、と思い直したリンダは、

「……ジュリー。お見せするわ、夕方、調べという表向きで、あなたの室へ行きます。……待っていてね。」

リンダは、拷問を型の如くに切上げて、早めにジュリーを獄舎へ帰した。そして、リンダは、下着までも真新しいものと取りかえ、乗馬ズボンを穿き、完全軍装に身を固め、用意の短刀を胸にしのばせて、ジュリーの許へ急ぐのであった。

花のうたげ

うすあかりの下に、飛行服姿のジュリーとナチス軍正規の軍服を着けたリンダが、向き合っていた。

やがて、数刻がすぎた。

ジュリーは、我にかえると、リンダに、

「さあ、リンダさん。……お約束のハラキリはまだ？」

いたずらそうに催促した。やがて死を控えた女性とは到底、思えない落着いた物腰だった。

「ジュリー。……お見せするわ。」

リンダは、膝をついた。

乗馬靴が、ぎゅうっ、ときしんだ。

「ジュリー、見て。ここが左の脇腹。ここへ、こうして突立てるのです。」

リンダは、切先まで白布を巻いて、負傷しないようにした守り刀で左の脇腹を押した。

「リンダ。その時の苦しみはどの位なの？」

「……そう。あまり痛まぬそうね。でも、だんだん痛くなるので、早く引廻さないと切り損じるんですって。」

「苦しんで見せて！」

「まあ、私だって死んだことはないんだもの。苦しんで見せるわけには行かないわ。」
「ううん、いいの、ただ、リンダが、切腹し

て、苦しむ処を見ておきたいの。うそでもいいの。ね、ね……。」

甘えるジュリー。

リンダも、いいしれぬ気持ちに思わず

「ううっ……」

刀を押す手に力がこもった。

堰を切ったように。リンダは、守り刀を抉って、のたうち、引廻して行く。

「う、ううううっ……ああっ。」

ジュリーの燃えるようなひとみを、リンダは全身に感じながら、

「ウーッ！」

体を硬直させる。

ジュリーも、のめるように床へ膝をついた。

リンダは、右脇迄引廻した刃を抜取るや、鳩尾めがけて突込んだ。

誰も来てはならないと申渡した女監房、しかも個室のこと、二人の世にも不思議なプレイは、夜のふけるのも知らぬように、いつ果てるともなくつづくのだった。

妖 精

リンダは、この異様なハラキリ・プレイをジュリーに見せてから、いままで漠然としていた慾求不満が、ハラキリのおかげで次第に

形をととのえて行き、いいようのない焦燥が少しずつ消えて行くのを感じた。

翌日も翌々日も拷問は休み、ジュリーに最後の身支度もゆるした。リンダは身を灼く思いで、時間の経つのを呪う気持ちだった。

そして、処刑の日は二日後に迫っていた。

リンダは、見廻りのような顔をして、ジュリーの個室を覗きに行った。

個室を見通せる小窓のガラス。そっとうかがうリンダの顔が、思わずハツとする。

……そこに、はしなくもジュリーの切腹姿を見たのであった。

ジュリーは、とっておきの英国将校の軍服を着け、乗馬ズボンを穿き、黒光りのする長靴の足を不自由そうに片膝立てて、苦しげに跪いている。

リンダは、喰い入るように見つめている。

ジュリーは、リンダの存在には全く気がつかないのである。刀のかわりに用いたらしいペーパーナイフが、右に、左に引廻わされ彼女の凄絶な呻きが、ぴたり閉った鉄扉の僅かのすきまから洩れる。

リンダは、ジュリーを、この時ほど、いとしく思ったことはなかった。

リンダは、そっと小窓をはなれて自室へ帰

って行った。今のジュリーの気持を乱してはすまない。

そして、いよいよ明朝は処刑されるという日、リンダは、最後の責めをジュリーに課した。此の世で出来る最後のプレイの機会だった。

二人は緊張して拷問室に相対した。

「処刑のきまった者に拷問は必要ないのだけれど、特に願ひ出て許されました。上官は、かえって私の職務熱心をたたえてくれたし、あなたの勇氣にも感銘をうけているようでし

た。さあ、ジュリー、最後の責めがはじまるのよ。力一杯、やりましょうね。」

拷問がはじまった。

厚地の飛行服に、ヒシヒシと革ベルトが喰込んで行く。吊り責めだった。

脂汗をうかべ、飛行帽のほほに滝のように

流れる涙を泳えながら、ジュリーは齒をくい

しばって吊り責めに堪えた。

「ウ、ウーッ……む、むうっ！」

押泳えた呻きが惱ましかった。

吊り責めのあとは、海老責めだった。

体をゆがめられ、容赦なくしばらくつけられた。骨がメリメリと音をたてんばかりである。いまにも気が遠くなるうとするのを、ジュリーは必死になって泳えぬいた。顔は赫くなり、やがて蒼白に変わった。

「ウ、ウーム、ウウムッ！」

リンダは、軍服の上衣を脱ぎ、乗馬ズボンにワイシャツの姿で、この美しい女囚の苦悶を、わずかでも見逃すまいとしている。

誇りに死ぬは



ジュリーは激しい責めに、口から泡を吹いて悶絶した。

リンダも、しばらくは立ち上ることさえ出来ぬほどに疲れ果て、二人は拷問室に俯伏せになって数刻をすごした。

やがて、リンダは、ジュリーを抱きおこして用意の薬をふくませてやった。

やがて、リンダはいった。

「ジュリー。自決しますか。それとも、銃殺をうけますか。」

ジュリーは顔をあげた。涙に洗い流されたその顔は、澄み切



って美しかった。

「リンダ。私は刑をうけましょう。……でも、お願いがあるの。……リンダ……」

あなたが処刑して下さい。あなたの弾丸をうけて死にたいんです……」

「ジュリー。それは難しいことです。……でも、私も、あなたを見知らぬ者の手にかけてくはない。……願出てみましょう。……さあジュリー、お別れの支度を！」

ジュリーは、ニコリ微笑んで独房に消えて行った。

リンダは、まもなく、ジュリーからの形見を受取ったが、それはジュリーの汗と脂がにじんで、どす黒くこわばった思い出の飛行服と、あのペーパーナイフであった。

処刑

十一月十日、午前四時三十分。

リンダは軍装に身を固めて、ジュリーの処刑に参加した。

リンダも、英国軍人として、正装して死につくのである。

男装に身を固め、化粧までしてジュリーは落着きはらった態度であった。

リンダ、ジュリー、敵味方二人の女性が、

凛々しい軍服姿で握手した。

「お世話になりました」

「心静かに御最期を」

古武士を思わせる潔い挨拶がかわされた。

二人の眼は、激しくぶっかかりあい、そして物云わぬ唇が、互の名を呼び合った。

リンダの願いは許され、ジュリーは、リンダの銃口の前に倒れることになっている。

ジュリーは、悪びれず、処刑の場所となっている石塀の前に立った。

手錠も、眼かくしもなかった。

ナチスの執行官たちも、ジュリーの立派な態度に感銘を受けたのであろう。

きっちりとウエストをしぼった上衣、婦人騎兵将校の乗馬ズボン、黒の長靴、拍車。

ためいきが洩れるほどの美しさである。

ナチスの軍服を着けたリンダも、ナチス第一の美人といわれる女性。ああ、この美しい二人は、いま幽明その境を異にしようとしているのだ。

「いいのこすことは、ありませんか。」

万感をこめてリンダがきいた。

「ありがとうございます。武人の本望です、最期に、英国の勝利を信じて、死んで行きます。さようなら。」

リンダの手は小さきみに震えた。五メートルの処にジュリーが居る。リンダの右手には拳銃が光っているのだ。

刻々とせまる午前五時。

ああ、遂に処刑の時が来た。

リンダの拳銃が火を吹いた。

轟然一発！

「ウーッ！」

ジュリーが泳えかねて呻いた。左の脇腹を抑えている。

ああ、美しいジュリーの顔が苦痛に、ゆがんだ。傷口を抑えた両手の間から、鮮血が乗馬ズボンへ滴り落ちて行く。

すかさず第二弾がリンダの銃口から火を吹く。

今度は鳩尾であった。流石のジュリーも堪えかねて、

「ウムーッ！」

と激しく呻き、膝をついて前にのめった。リンダは狂気のように走り寄った。ああ、

ジュリーは死にきれないのだ。

「ウ、ウ、ウムム」

ジュリーは取乱すまいと必死に泳えている。左腹をうち、鳩尾を射たのは、リンダの、せめてもの心やりであった。

ジュリーは、リンダの志を読みとっていた。かけ寄ったリンダに、ジュリーは一言、「う、嬉しい！はやく！」

といった。リンダは、ジュリーが苦悶の中で「嬉しい」といつてくれたことに、たえようもないしびれを感じた。

もう、ジュリーを、この上、苦しませてはならない。リンダは、ジュリーを抱きおとし、拳銃を心臓にうち込んでいた。

はげしいいれんの末、こうしてジュリーは短い、輝かしい一生を終ったのであった。

思いでのハラキリ

リンダは、ベルリンの地下壕で、今宵にせまる自分の運命を思いながら、ジュリーの劇的な最期をすずかに振り返っていた。

リンダは、自分の死場所が、この地下壕とまいった以上、切腹して死ぬことは願ってもない事のように思えて来た。

そうだ。名誉のために笑って死んで行ったあのジュリーが、切腹はすばらしいといったではないか。

彼女は、静かに守り刀をとって抜き、あの日あの時、ジュリーに見せたと同じように、白布をまきしめて左の脇腹にあてるのだった。

た。

居室に飾った造花が、太陽に見放されたナチスを思わせてあわれであった。

ここでリンダは、思いのかぎり腹かき切つて見た。たえようもない苦痛に、リンダは絶叫した。呻き、のたうち、そして決りに決った。

ウーッ、ウームッ。

リンダは絶叫して、どさりと俯伏した。

乗馬靴が床を蹴ってけいれんをつづける。

そして、リンダは、氣を取直して立上りカバンの中にかくした、いとしいジュリーの写真に口づけをするのだ。リンダは、飛行服姿もりりしいジュリーの写真を眺め、やがて隠されたように形見の飛行服を引張り出して着はじめるのであった。

リンダは、飛行服姿に身を固めるや、再びハラキリの稽古に身を灼いた。リンダの、個室でのこの物狂わしい出来事も乱軍の中ではさして感附かれることもないのである。

栄光につつまれて

夜が、ふけた。

リンダは、飛行服を脱ぎ、ナチスの正装で時刻を待った。

食事の時刻となった。

リンダは、晴れの場所へ急ぐのである。

ゲルマン風の、サディステイックな軍装が彼女の凛々しさを引立たせていた。

食堂には、エヴァ・ブラウンも居た。

しかし意外なことに、テーブルの上には、酒だけしかなかった。

ヒトラーは、リンダの姿を見て、覚悟の様子を感じた。

ヒトラーは、リンダにいった。

「リンダ、私も死のう。だが、君は、私に決意させてくれた人だ。いまも此の私に忠誠の心があるならば、私の前で、潔い死をとげてくれ、私に見守れて死ぬことを、君は光榮に思ってくれるだろうね」

リンダは感泣した。

ナチス統合の元首ヒトラーに見送られて死ぬるなら、どのような苦しみも本望であった。

エヴァ・ブラウンも涙ぐんでいる。

「総統……」

リンダは泣きぐずれていた。

やがて時刻が移ると、従卒は、リンダにグラスを捧げた。一同はリンダの安らかな死を祈って乾盃した。

リンダは、雄々しく立上り、食堂の一隅に作られた死の祭壇に進むのであった。

總統心づくしの絨氈が、畳二畳ほどの広さに敷かれた最期の場合。

「肌をあらわします。おゆるし下さい。」

リンダは男のように、てきばきといった。

軍服の上衣ボタンが一つ、又一つ、静かに外されて行く、がちやり、とベルトが除かれる。

下はワイシャツに乘馬ズボンだ。

地ひびきが近い。

砲弾が炸裂しているのか。

その地ひびきと地ひびきの間は、死の静けさである。

迫り来るリンダの死が、人々の心を嵐の前の静けさにも似た、異様な悲愴感の中に置いていたのだった。

リンダは、流石に、小さきみにふるえる手もとで、守り刀を押しいただいた。

エヴァ・ブラウンも自分の浅はかさを恥じている以上、リンダにとって復讐すべき相手はない。いまは、全員の死を励まし、自らの死を栄光のもとに置くことが、リンダの最後の希望なのである。

リンダは勇ましく腹を切った。

右脇へ引廻すまで、一度も呻かなかった。

やがてリンダは鳩尾へ刃を突込み、腹から絞り出すような悲痛な呻きのうちに、十文字腹を仕とげたのである。

彼女は齒をくいしばり、そして、のたうち廻った。

臓腑を切り取られたリンダは、満足げではあったが、その苦しみは、目をおおはしめるものがあつた。

死は迫っていた。でも、それ迄に、彼女には、残された幾つかの試練があつた。

想像以上の激しい苦しみに、ハラキリを甘くみていた彼女の脳髓がうろたえたようだった。幾度かその烈苦に打ち負かされそうに感じられた。

ジュ、ジュリー

リンダは、その度に声の呼びかけをした。

あなたの立派な最期に負けないワヨ

混濁した網膜にジュリーの笑顔が浮び上って力づけてくれるようだった。

リンダ頑張っ！

その、ジュリーの幻がリンダの自決を、見る者をして、信ぜられぬほど壮烈なものにしていった。

エヴァは失神してしまった。

リンダは、気丈な呻きをあげながら、ジュ

リーとの、あの身を灼くようなハラキリ・プレイを苦悶のうちに、かえりみていた。

ハラキリ・シヨウは、リンダの長い長い苦悶の末に、終った。

リンダは、軍服のボタンをかきむしり、乗馬ズボンの両脚を泳がせて、いつまでも、いつまでも、のたうち廻った。

そして、リンダにとってプレイと違うことは、あまりにも苦痛の大きいことであつた。

でも、リンダは、立派に、泳えぬいた。介錯という者の居ない異国の空の下であつた。

リンダは、名誉と栄光につつまれて昇天して行く。ヒトラーの手が、リンダの血まみれの手をとった。

リンダは、屹と目をひらいた。

それがリンダの最期であつた。

男装のリンダは、ヒトラーの手に、くずれるように倒れて行った。そして国に殉じたりリンダの魂は、いとしいジュリーのもとへひた走るのであつた。

(終)

【お断り】本誌の寄稿家、投書家の住所氏名は一切公表いたしませんから御照会しないで下さい。

おぼろ月



三 々 木 卓 史

作 画

三郎は、料亭の玄関で友人と別れると、柳並木の続く川沿いの道をぶらぶらと下宿の方へ帰っていた。川の水は黒く淀んで、柳の上に春の月が暈を冠っていた。

三郎が歌でも唄いたような気分がゆっくりと歩いている傍を、ふいと、すり抜けるように追い越した女があった。髪を丸髷に結って前垂れをし、出前箱を右手に提げていた。

その店へは行った事がなかった。
——一体何処で見たらう——
あれこれと考えて見たが、何とも思い出せなかった。
——ひとつ、あの店へ入って見るか——
大分酔いは廻っていたが、何だかその女が

その女が彼の横を通り抜ける時、近くの街灯のほのかな光が女の頬を浮き上らせたが、三郎はその顔を見て、はッとして立停まった。
——はて、何処かで見たような顔だが——
何となく見覚えがあるような気がする。それも、ただ単に顔見知りと云うのではなく、彼の脳裡に特異な印象で残っている顔であった。

三郎は、少し足を早めてその女の後を追うともなく跟けながら頻りに考えていた。女はそこから、ものの半町もない先の、橋の袂にある小さい居酒屋の暖簾を潜って入った。

「ははア、あの家の女将か」と、少し失望したが、彼はまだ

気になって仕方がないので、思い切って店へ入った。

「いらっしやいませ」

調理場で後向きになって、洗い物をしていたその女は、手拭で手を拭きながら、軽く頭を下げてニコリと笑った。三十才位であろうか色白の瓜実顔に丸髷がよく似合っていた。

「お燗をしましょうか、それともおビール」

「そうだねえ、今夜は大分飲んでいるから、ビールにしようか」

「はい、でもつまみ物が何もないのでございますよ」

女はそう云って小皿の上へ塩豌豆を盛って出した。

客は誰もいなくて、三郎だけであった。

「おかみさん、と云っちゃ悪いかな。僕はどこかでおかみさんと逢ったような気がするんだが、どうも思い出せない」

「あら、そうでございますか。わたしはちっとも存じ上げませんけれど。」

「そうかなア、僕も酔ってるんで、何だか錯覚でも起したかな」

「でもこれをご縁に、これからごひいきにしてくださいませよ」

女はそう云うと三郎の空けたコップにビー

ルを注ぎながら焉然と微笑んだ。

○ 「あッ、あの時の女だ」

三郎は不意にそう叫ぶと、思わず蒲団の上に起き直った。頭の底に沈んでいた四年前の出来事が、まざまざと彼の脳裡に蘇ってきたのである。

その当時三郎は高等学校の学生であった。

暑中休暇を利用して、彼は伊豆の山中へ植物の標本採集に出掛けて行った。伊豆鉄道がまだ建設されていない頃なので、熱海から海岸沿いに網代へ出、そこから亀石峠を越えて修善寺へ出る予定であった。

珍らしい植物を探して行くうちに、三郎は道に迷ってしまった。尾根へ行けば富士山が見える筈だ、そうすれば方角の見当はつく。

そう簡単に考えていたが不可なかった。かなり高い処まで登ったが、どの方角にも富士の姿は見えなかった。道らしい道にも辿りつけなかった。勿論人影らしいものはなく、深い谷が、足下に大きく拡がっていた。

——ええい、仕方がない、野宿でもするか

そう呟きながら、適当な場所はないかと見廻している時、遙かの谷間から何だか煙の

ようなうすい物が揺れて立ち昇ったように見えた。

——おやッ、あそこに人家があるかも知れない。しかし、また何という山深い処だろう——

三郎は不審に思いながらも、人家があるかも知れない、と云う希望に勇気づけられて、煙らしい物の出たあたりに見当をつけながらそろそろと熊笹を分けて尾根を下りていった。

日が暮れかかって、足許がほんのりと暗くなりかけていた。三郎は採集した植物を入れた平たい大きな鞆が、雑草に遮られて肩からすべり落ちそうになるのを掻き上げ掻き上げ、漸やく谿底へ辿り着いた。疲れた足を夕暮れの谿川の水に浸して、少し元氣を取戻した三郎の眼に、繁みを透して洩れてくるかすかな灯りが眼についた。

——ああ、やっぱり人家があったんだ——

彼は飛び上るような思いで、その灯を目当てに進んでいった。谿川から少し離れた所の雑木に囲まれた林の中に、文字通り竹の柱に萱の屋根といった、粗末な小屋があって灯りはその小屋から洩れていた。

戸も何もない三尺程の入口から

「ごめん下さい」

と声を掛けた。

小屋の中は半分が土間で、奥の方は細い丸太を筏のように組み、その上に萱のようなものを敷きつめてあり、六帖ぐらいの一部屋きりの小さな天井から、白い大きな笠の吊りランプが一個、にぶく辺りを照らしていた。

三郎は一わたりの小屋の中を見廻したが、人影が見えないので、ぐるりと小屋を廻って裏手へ出たが、そのはずみに

「あッ」

と小さな驚ろきの声を上げた。丁度裏手で焚き物の片付けをしていた女が、人声を聞いて、表へ廻ろうとしていたのと、小屋の角で出会いがしらに、ぶっつきかそうになったからであつたが、三郎の驚ろきはその不意の出会いだけではなかつた。

夕闇に白く浮んだ女の姿は、髪を束髪にして片手に小さな桶を提げていたが、その服装が変っていた。晒しのような白布を、ぐるぐる胸から胴に巻きつけてあるだけの奇妙な姿に面くらつたのである。

女も一瞬、驚いた表情で、この見知らぬ不意の来訪者をみつめたが、その顔は夕闇に白く美しかった。

「あの、修善寺へ行こうとして、道を迷つたものですが……」

三郎はときまぎしながら、そう云うと、二歩後へ退つた。二十五六才であろうか、若い女の肩の丸みがみずみずしい。

女は暫らくの間、三郎の正体を見究めるように身を固くして様子を見ていたが、白いカバーをした学生帽を冠り、採集鞆を肩に掛けた彼の姿に、少し安心した様子で

「どうぞ、中に入って……」

と小さな声で三郎を小屋へ入るように促した。

三郎は、云われるままに再び小屋に入り、萱草を敷いた上に腰を下したが、女は直ぐには入って来なかつた。裏手でござごと物音がしているので夕飯の支度をしているのであらうと推測した。

——若い女がひとりで、こん人里離れた処で暮している。これは一体どうした訳だらう——

三郎の頭に新しい疑問が起つた。

○

「山の中の事で何も差上げられませんが、どうぞ充分に召し上って下さい」

小半刻の後、三郎は女の盛って呉れた芋粥

の茶碗を前に、変に照れていた。

「とんだお世話をかけて済みません」

三郎はそう云って、いがぐり頭をべこりと下げた。

ランプの灯の下で見る女の姿に、彼はいいようのない眩惑を感じていた。

水々しい女のむき出しの肩からは、何か彼の心を蕩かすような香気が発散しているように感じられて、見まいとする眼が、どうしても女の方に向いた。彼は心も空の気持で、すめられた芋粥を嚙りながら何か話しかけようとしたが、何か恥かしいようで、声にはならなかつた。

女は三郎の給仕をしながら、頻りに足の先を気にしていた。三郎も、彼女が小屋に入つて来た時から不審に思っていた。それは女の左右の足首が短い鎖で繋がれている事であつた。その鎖の長さはせいぜい五寸位なので、女は、よちよち歩きしかできないのである。

——なぜそんな不自由な格好をしているのです——

と問いたかつたが、無論こんな不躰な質問ができる筈はなかつた。だが、三郎のそうした疑問も暫らくすると解けた。彼が「ご馳走になりました」

と云って箸を置いた時、荒々しい音をさせて外から男が帰って来たのである。

「おい誰だい、この男は」

髭だらけの男は、萱草で編んだ背負い籠を小屋の隅に下すと大きな眼をギョロリとさせて三郎と女の顔を見た。黒い素肌の上に半纏様のものを着、腰引を穿いた四十がらみの遅ましい男である。三郎は、瞬間この女の亭主だな、と覚った。すると、こうした女の扮装も、足の鎖もみなこの男がさせたに違いない。だが、そうだとすると、これはまずい処へ飛び込んで来たものだ、と心の中で困惑した。

「あなた、この人が修善寺へ行くのに道に迷って困ってたんです。だから」

「なに道に迷ったと」

男は迂散臭そうな眼で注意深く三郎の様子をうかがった。この女を、自分の手から奪い去ろうとする、追手の者の変装ではないかと疑っているような眼付である。

「僕は、浜成高校の学生です。夏休みなので珍らしい植物を採集しようと思ってやって来たんですが、つい道に迷ってしまって……」

三郎は、この男に急に疑われては怖いと思って、口早やに言訳をした。



「それに違えねえのだな」

男は庄し付けるような口調で念を押した。

「ええ、違いありません。この通り学生証も持っています」

三郎はそう云って上衣のポケットを探って学生証を示したが

「俺ア字なんか読めねえ」

そう吐き出すように云うと、足を上げて草鞋わらじを解いた。

「おいお咲、籠の中の酒を持って来い」

男は枯萱の上にどっかと胡坐を組むと三郎にむかって

「飯は食ったか」

と少し警戒心を解いた口調で訊いた。

「ええ、つい今しがた戴きました」

三郎もやっと救われた、と云う気持で答えた。

「蒲団と云うほどの物もない。そこらに転んで寝んでもいいぜ」

と無雑作に云うと、縁の欠けた湯呑を持って、竹筒に入れた酒を、お咲と呼ばれた女がとくとくと酌ぐのを、さもうまそうに口へ運んだ。

三郎は、どうやら男の誤解も解けたようなので、すっかり良い気持になり、一日中歩き廻った疲れも出て、ついとろとろとまどろんだが、暫らくして二人の声にふと眼が覚めた。何だか様子がおかしいのである。

「どうだお咲、お前、俺が帰るまでに……」

「もうそんな事を云わないで下さいまし」

「いいや、お前の眼がそう云っている」

「いいえ違います」

「違うものか、永い間山へ閉じ込められている若い女が、久し振りに町の若者と逢ったんだ。何も訳のない筈はない」

「あなた、わたしはそんな……」

「そんな女だ！」

「あの人に訊いて下さいまし」

「男には訊かなくてもよい。お前に訊いてい

るのだ」

「あなた、許して」

「なに、許して？じやア俺の云う通りだと云うんだな」

「いいえ、それは違います」

「まだ白状しないのか。こいつ」

三郎は、二人のただならぬ気配に愕いて、急に起き上ると

「待って下さい。奥さんは何なさりはしませんでした」

と、男の腕に纏った。女が組み敷かれ、左手を後ろに捻じ上げられているのである。

「お前さんは出て来るンじやアねえ。あそこで寝てろ！」

男は酒に酔った眼で、ぎよろりと三郎を睨んだ。

「でも奥さんが……」

「お咲は俺の女さ。これから俺がお咲をどんなにするか、そちらの機嫌でゆっくり見物してる。いらぬ役者が、のこのこ顔を出すんじやねえぜ」

男のそうした強い言葉に、三郎は仕方なく又小屋の隅へ横になったが、もう眠られる処の騒ぎではなかった。

男は三郎が横になるのを見ると、お咲の手

を離して

「立て」

と云った。お咲は胸や腹に着いた萱草の屑を払いながらよろよろと立ち上った。足は矢張り鎖で繋がれたままである。

「あなた、今夜はお客様があるのです。どうぞお許し下さいまし」

「なに？ そのお客様を接待したろうと云っているんだ」

「あなた、どうしてそんなことが……」

「まだ云い張るのか。ようし、じやア調べてやる」

そう云うと男はスッと立ち上った。

「調べるなんて、そんな、ああ」

女は哀願するように両手で男の手を押えた。

「馬鹿！」

男の平手が女の頬に飛んだ。

「あッ」

女は叫んで顔をおおった。

「よく覚えておけよ、お咲。お前は俺の女だぜ。お前はそこの若い男に気兼ねをしているようだが、却って見物人があって張り合いがあらアな。今夜は存分にお前の仕草を見せ貰うぜ」

男はそう云うと、女の肩に左手を廻して、束ねた後髪をぐいと掴み、右手で顎を支えて女の顔を自分の方にねじ向けた。

「あなた、今夜だけはお許し下さいまし」

女の切れ長い臉がうるんで、眼が頻りに哀れみを乞うている。

「いいやならん、その眼は何だ。俺に逆らうのか！」

「いいえ、でも……ああ」

女は遂に観念したように眼を瞑った。男は女の顔の表情を読み取ると、にたりと笑った。

○

それからの数刻、三郎はただ息をつめて異状な小屋の中の様子を見まもるばかりであった。そしてそこには、彼が今まで想像もした事のないような、奇異な女の責場が展開されていた。

男は三郎が小屋の隅で見ていると云う意識で一層妖しい感情を昂ぶらせたようだった。今夜のお咲は——他人が見ている——という羞かしさが、言葉の端々や表情にまで表われて、一きわ清艶さを増していた。——三郎と浮気をした——というのは男のお咲に対する責めの口実で、その嘘を、真実らしく女に白状させる処に、得難い責めの興味を感じるら

しかった。

「主人を裏切った女は、どうされればいいんだい？」

「あんたの、お気の……済むようになさって……」

「ふん、気の済むようにな」

「でもひどい事はお止しになって」

「俺が憎いか」

「いいえ、でも……」

「ようし、一寸待ってろ」

男はそう云うと小屋の奥から数本の竹を持って来た。長いのが短かいのが色々あって、中には両端に穴を明けて綱を通したもののや、先端を細かく割ってささらのようになってい

るものなども混っていた。

「竹はいとしやお咲の胸に、しばしば仮病の夢を見る」

男は、何かの替唄でもあろうか、そんな唄を歌いながら、中の一番長い竹を取って女の背に立てた。そして女の両腕を垂直に伸ばして上の先端に縛りつけ、次には竹の中程に取付けた縄で女の胴を一巻きして締めつけた。そうして置いて男はお咲の足許に屈むと、初めて彼女の足の鎖を外した。

「さア、足は自由になったぜ。これでうんと

あばれるがいい」

後の竹が背骨に添って床につき、女は三本足のような格好になった。

「どうだ。白状する気になったか」

「そんな……」

女が顔をそらせて身をくねらせると、縄は一層喰い込んで痛々しいようなくびれが出来た。男は細い竹の先端を、女の胸に押し立てて、ぐいぐい押し出した。

「あれッ、あなた、そんなに押して……」

女は押されてタジタジと退る。男はゆるめずに押しに行く。とうとう一方の羽目板へびつたりと押しつけられてしまった。

「どうした、押せ押せ、押し返さないのか」

「ああッ、あなた、もうゆるして……」

女は足を爪立てて悲鳴に似た声を上げた。

「今からそんな声を出してどうする」

男はそう云うと、棒の先をはなした。女が思わず肩を大きく波打たせて一息入れるその鼻先きへ竹を突き出した。

「なアお咲、お前の体がこの竹のムチを欲しがっているぜ」

そう云って、張りのある彼女の胸の辺りを二、三度、軽く叩いた。

「いいえ、そんな……どうぞ、もうおゆるし

になつて」

「この竹じや頼りないと云うのだな」

「ああ、そうじやアないのです。どんな事でもしますから、叩くのはやめて」

「他人には叩かれてもいいが、俺にはいやだと云うのだな」

「違うんです。でも、お願い……」

「お願いだから、存分に責めてくれッて？」

「ああ、あなた……」

両手を真上に縛られて、避けようのない無防備な女体に、先を割った竹がピシッ、ピシッと打ち下ろされた。そればかりではない。割った細い竹の先端が、伸ばした腕の腋を掠めるので、女は背中を串刺しにされた魚が跳ねるように

「ひえーッ、やめてッ……」

と金切り声を挙げながら身をよじった。

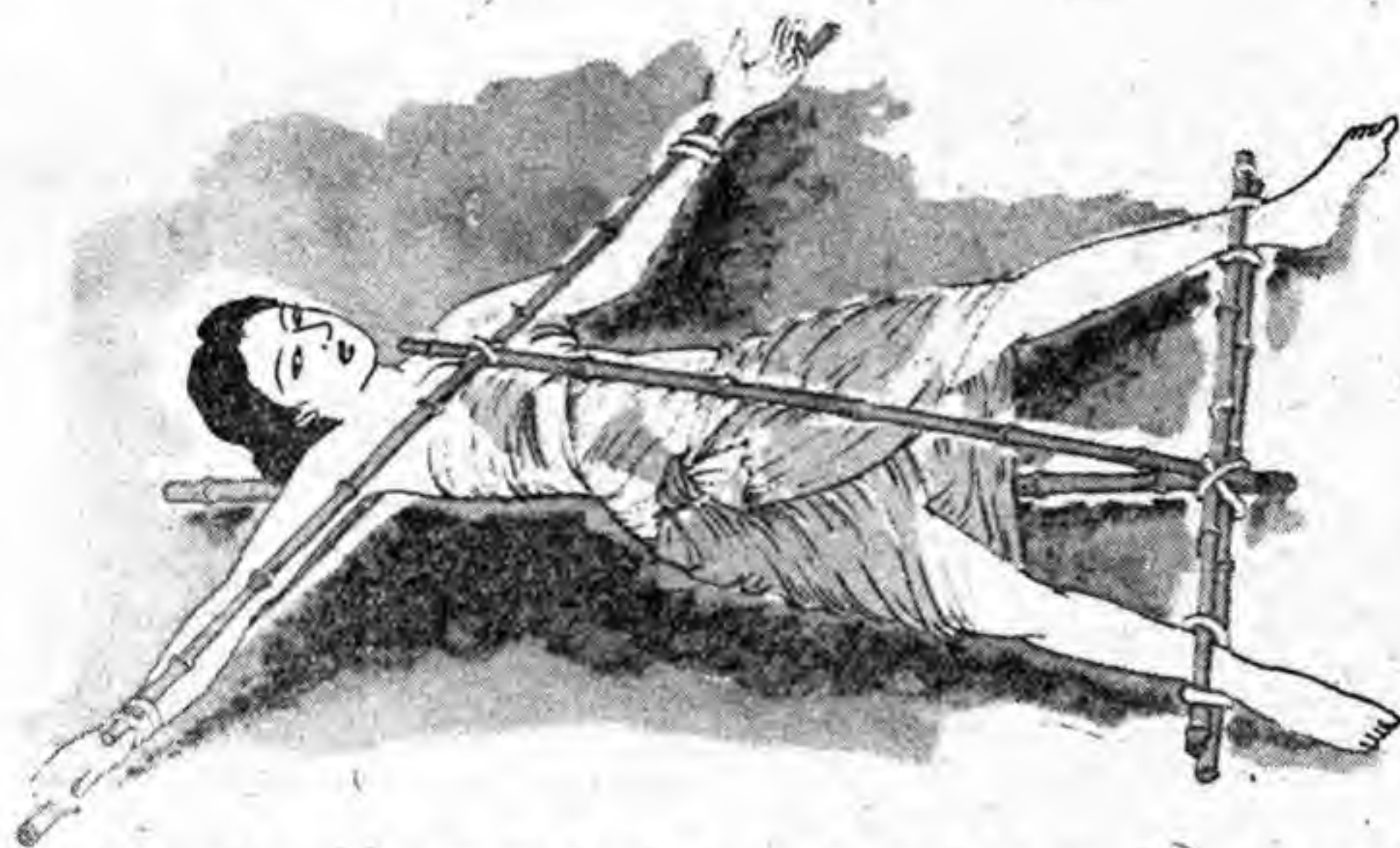
「そら、好い色になった。うんと張りも出て来たぜ」

三郎は、思わず飛び出して行きたくなるような衝動を辛うじて抑えて、じっと横になっていた。

——いくら自分の女房と云つても、あんまりひどい——

彼は云い知れぬ憤りを感じていたが、お

咲の身体には夜通しつきつきと無残な責めが加えられていった。



○ 暁方近くなつて、男は三郎とお咲を小屋に残したまま

「ちよつと出て来るが、二人共、そのままじつとしてゐるンだぜ」

と云い置いて戸口から出て行つた。

お咲は萱草の上へ大の字にされて仰向けになつてゐた。彼女の両手両足は「エ」の字形に組んだ竹の先端に縛りつけられてゐる。

その「エ」の字形の竹は、二組同じ物で、それが彼女の胸もとを前後から挟んでいるのである。前面の方の竹が細いので、それが弓なりに撓つて悲しい程圧迫している。女の肩から腕へかけて、一面に小さな赤い点々が無数についてゐるのは一刻前、男がお咲の肌に蜜を塗り、捕えておいた十数匹のかぶと虫を這わせて蜜もろとも噛ませた虫責めの痕であつた。

あまりの痛々しさに、三郎が

「おじさんはひどい事をしますね。苦しいでしょう」

と、慰さめようとする

「お願い、近寄らないで。あっち向いてて」と云つて眼をそらした。

ややあつて男が再び帰つて来た時、手に一

匹の大きな野兎を提げていた。

男は二人の様子を見ると、黙ったまま裏手へ廻って器用に兎を料理した。

夜がしらじらと明けて、谿間に霧が流れていた。

男は朝の支度が出来ると、三郎を促して、縛られている女の体を食卓代りにして食事をした。

「臍を動かすんじやアねえ、茶碗が落ちる」

と云いながら、兎の肉を箸で挿むと

「どうだい、うまいぜ。喰わしてやろうか」

お咲の口へ持って行ったが、彼女はだまって首を振った。

「お咲、お客人を送って帰ったら、もっとうんと可愛がってやるからな」

男は、そう云って立ち上ると

「お客人、そこまで送って行こう」

と云って三郎の前に立った。

三郎はお咲に挨拶して出ようと思ったが、

そうした姿のお咲には言葉の掛けようもなく

帽子を取って軽く頭を下げると、そのまま男の後に従った。

「どうだい客人、驚いたろう？」

谿川に沿って下りながら、男が三郎に話しかけた。

「あの女は、結構あれで喜んでいるんだ。賑やかな町からこんな淋しい処へ連れて来て、毎日の暮しは實際、単調過ぎるものなア」

「でも、どうしてこんな山深い処に」

「誰にも言えねえ訳があるんだ。そら、あそこの三本松の処へ行くと修善寺へ出る道があるア。今度は迷わないで行くこったよ」

男はそう云うと、さっと身を隠して今来た道を返って行つた。三郎が言葉を掛ける間もなかつた。

教えられた三本松の上空を、鶯が一羽ゆうゆうと舞っていた。

○

その時の伊豆の谿の女の顔が、居酒屋の女将の顔に生き写しだったのである。

三郎は蒲団の上に起き上ろうとして、その部屋が自分の下宿の部屋と異っているのに気が付いた。

「おや、此処は何処だろう」

と呟きながら考えた。

——女の後を追つて居酒屋へ入つて、ビールを飲んで、お女将と話をして、それから——

はて。といふかりながら中連の障子を聞けた。と、この部屋は二階で、続きの屋並の向

うに川端の柳が見え、その上に春の夜のおぼろ月が傾いていた。

その時、横の襖がさらりと開いた。

「あつ、お女将さん」

「とうとう思い出して下さいましたわね」

「でも、あの時の人がどうして此処に」

三郎は、自分の眼を疑う様に二三度しばたいた。

「さあ、どうしてでしょうねえ。でも良いじやアありません。春の夜の、夢のような会いですもの」

女は丸髷に燃えるような緋の長襦袢を着ていたが

「こちらの部屋へお出でになつて」

と、三郎の手を取るようにして次の間へ誘つた。その部屋には、竿竹を「エ」の字に組んだ物が、伊豆の小屋のとそつくり置いてあつた。

「あの人のかわりに、今夜はあなたの思い通りなさつて」

と云いながら、するりと肩から長襦袢をずらすと、白布をぐるぐると体に巻きつけたままの、あの夜と同じ姿である。

「あなたがお寝みになっていらした間に準備しましたのよ。この竹、少し太いかしら」

と含み笑いをしながら、「エ」の字の竹の上に横たわった。

翌る日——

九月号と十月号のいろいろ

近 藤 一

九月号、竹谷十三氏の「愛する」は挿画も比較的佳良で、加代子の心情が可愛く描写されていたと思います。女性は、やはり可愛い女でなければ魅力半減だ思うのです。そして私にとって、幾分か積極的な関心を被虐に感じない女は無意味なのです。三条卓史氏の「白い蟬」も面白い作品でした。母と子の心理的な、つながりを省略したあたり少々物足りませんが……。水沢雅美氏のイメージは写真か絵画にしてグラビアを飾って欲しいもの。日下絹子氏の作品はマゾヒズムの潜在する女の哀感が滲み出て、男のような女給との生活を伏線に杉田との交渉を淡々と綴り、終末の余韻はしみじみと胸に迫るものがあります。流石に入選作ですが、女性のマゾヒズムを識るために缺くことの出来ない寄稿家として、得難い人だと思っています。嵯峨紀世氏の「続・運命の少女」は、映画のカット・シーンを愉しむ思いです。分別臭い心理描写より直接的な責めの詳細な描写が、この種の作品

の特徴でしょう。蒼野札氏の「青火宴レポート」は氏独得のリファインされたムードのヒップ責めが描かれて魅せられました。女性が、すべて美女というだけでなく、意欲的で、それぞれ個性豊かな上に責め手にも美がある処、正に珠玉というべきでしょう。責めのアイデアも愉しいし、何よりも責め手が被虐者に、こよない愛情を抱いている処が抜群です。松井頼子氏の「自分をハダカにする」は毎号、繰り返し繰り返し読ませて頂いています。ゆるぎない構成と冷酷なまでの自己観察が、烈しい情熱を内包して惹きつけてくれるのです。平源次氏の「アパートの住人達」は各種の嗜好を並べて浮き上らせる走馬灯のような佳品でした。明るいムードが生命でしょう。林千恵三氏のアイデアは是非、実現してほしいもので、また実現できるものだと思います。藤木仙治氏の「裏切の掟」は近來の大作になりそうですね。牧高志の「演技の表情」は氏の健在を誇示するものですし、久留木

三郎は会社が退けると早速、昨夜行った居酒屋をめざして歩を急がせた。

竹と綱とに責められて、悦虐に白身をのたせた女——。

三郎は今日一日中昨夜の事、四年前の伊豆の谿間の事ばかり考え続けていた。

——どんなことがあっても、あの女とは離れられない——。

そう一途に想い続けながら、柳並木を橋の袂まで来ると、昨夜彼が泊った居酒屋は、のれんもなくて戸が締まっている。

——おや、今日は休んでいるのであろうか

と訝りながら戸を叩こうとしたが、その戸にはひどい埃がくっついていて、早や何年も手を触れたことのない様子である。

——はて——

と、彼は小首をかしげながら、それでもトン、トンと軽く二三度、訪うて見た。

「あなた、其処は空家ですぜ。何ぞ御用ですか」

筋向いの古道具屋の主人が、大きな布袋和尚の置物の蔭から禿頭を出した。

「あの、此の家のお女将さんに一寸用事があるんですけど」

栄氏の「謎の緊縛フォト」は、いよいよ佳境に入る処で次号以下が期待されます。この他、傾向は異なるものの、菅良太氏、真崎伸一の作品は愉しく拝見したものでした。十月号、滝畑三郎氏の「バスガールの運命」は楽しみな構成です。力作が期待できそうですね。東町三郎氏の「孝行息子」ヒロインのミサ子の健康を破壊することが当然のような構成は暗い感じがします。雪俊遙氏「石を抱いた女」は久しぶりで氏の作品に接して感激しました。ただ、ポイントとなるべき石抱きの描写がなかったのは何故でしょうか。牧高志の「夢三夜」も楽しいものです。藤木仙治氏の「鮮血の対決」も新しい展開が見え、次回が期待される処ですね。三条卓史氏の「海の灯」もよいものでした。知性を凌ぐマゾヒズムが潜む女の素晴らしさが今更のように感じられます。南時夫氏の「ひめごと」、しみじみとした情感の漂う落ち着いた作品でした。文章の陰に在る加勢子の「女」が心をうつ作風です。今後も健筆を振るって頂きたいと思えます。松井頼子さんの「自分をハダカにする」が、いよいよ完結しましたが勇気や愛情や、そして人間が生きて行くことのいろいろを教えて頂けたことを本当に感謝しています。十号号の読みものとしては以上の

他、山田那津子、菅良太、西村憲一、皆川波留子、清水暗星、東福次郎、各氏の作品をそれぞれ愉しく読ませて頂きました。特写フォトはこの処、絹川嬢一辺倒の使い方であつた感じがします。最近の作品から見ると、絹川嬢は今が絶頂という感じがしますから無理ないこととも思いますが、他のモデルもいることでしょうか。絹川嬢のフォトには少々独りよがりの不熱心な処が目について来ました。ポーズや表情に勿論、演出方針もあるのでしょうか、雑で投げやりな態度が出ています。九月号「はずれた脇息」の右ページ下や左ページ中、「山小屋にて」の右ページ右側二葉など大した意味もないと思います。十月号でも視線や口許に不用意な点が見え修正も暗いところがあります。四馬氏の九月号はアイデアが私の好みにぴったりでしたが十月号は余り感動しませんでした。滝氏の九月号は特に美しく、裸馬に跨らされたお七の盛装も哀れです。向こう気の強そうなお富も素敵です。十月号の人質の苦悶と少女の悶えも好調でした。北原氏の九月号、十月号共に可愛いく、殊に九月号の柔らかなみは旧号時代の線の細さと変った画風が出て来ましたね。目次カットは相変わらず快調で夢がありますが表紙、裏表紙はよくわかりません。

三郎は、そう云って振り返った。

「そこのお女将さん？そこのお女将さんは早や五、六年も前に何処かへ家出してしまつてそれ以来、空家ですよ。器量のよい女だった何処へ行ってしまつたか知らん。あなた、その人のお知合いか」

「い、いや、そう云う訳じゃないんです」

三郎は、余りの以外さに、ただ茫然としてしまつた。

——昨夜のあれは夢だったろうか。いやいやそんな事はない。たしかに此の家だ。そしてあの二階だった。おぼろ夜の部屋で白い裸身を竹に縛られ、切ない呻き声をあげて悦虐に身悶えした女——。

三郎は、今にも二階の障子が開いて匂うような丸鬘の女が、はたきを持って顔を出しそうな気がして、いつまでもその場を去り兼ねていた。

ペンペン草の生えた庇の下を、燕が、すいすいと渡って行った。

——終——

〔御断り〕

「影の国」(雪俊遙)は誌面の都合で掲載できませんでしたが、来月号で二回分発表いたします。

或る倒錯生活

(その三)

西村 憲 一

(舞 扇)

三月二日の夜の事であった。

桃の節句の宵祭りに常は、りえから招待されて浮々と訪れたのである。

今迄も常の来訪を拒んだり迷惑がたりした事は一度もなかったけれど、其れは飽く迄常の一方的意志であり、曾って、りえの方から誘った事はなかったが、二月の末、始めて彼女の方から常に来てくれるよう請うたのである。

手土産に帯締めを買うため心齋橋へ寄り、

いろいろ買物をしたので、車を廻して着いた時には、すっかり陽は暮れて、余寒が忍び寄っていた。

門燈が点じられて居るだけでどうしたのか邸内は真暗であった。車のクラクションの音を聞いたのか、待つ間も無く開かれた門の中に昔風の縄張りの手燭を手にした、りえが立って居た。

「お待ち申上げて居りました。」

再び門は閉められ門燈も消されて、柔かい手燭の灯に導かれて奥へ通されたのである。

勝手知った家の中も手燭の灯に導かれると昼

間とはこうも変わるものかと異様に思うほどであった。八畳の部屋の床の間一杯に飾られた雛壇に見事な人形と其の道具が並べられ、雪洞と間接の僅かな照明に浮き上って夢幻的な雰囲気包まれて居た。

呆氣に取られて座す常の前に手を突いた、りえの姿は、桃割れの髪に花かんざしが揺れ華かな振袖の裾を長く曳いて、金と紅の大きな市松の帯を文庫に結んで居るのである。

江戸の昔は、斯うもあったであろうかと思える様な妖しい雰囲気は常は圧倒されて行つた。

「良くお出で下さいました。」

「有難う。だが驚きましたね、これは」

「お宜しかったら、お風呂も立てて御座居ますわ」

「ありがとうございます……でも、湯覚めしてもいけないから」

「折角来て頂いても何も御座居ませんのよ」

磨出しの卓を運び、次々と皿小鉢を並べて行くのであった。温室物であろう、桃の花は白く柳の糸は未だ細く大きな花瓶に生けられて雛壇の上へ垂れていた。

「いやあ、こんなに沢山喰べられるものですか」

「お口に会いませんでしょうが、お気に召した物だけ召上って頂戴」

白酒が汲まれ酒が温められた。

唐金の火鉢に鉄瓶が沸つて、部屋は適度に暖まって



いた。離して置いた瓦斯ストーブが時々鳴って、早春の宵は静かに更けて行くのであった。

常の需めに応じ舞扇を開き裾を曳いて踊る、りえの裾から紅がこぼれ、差す手引く手も嫋々として優しくも美しい艶姿に恍惚と眼を細めて眺め入る常であった。

突然、門からの呼鈴が屋敷の静けさを破って鳴り亘り、二人を吃驚させたのである。

「今頃、誰かしら？」

顔を見合わせて部屋を出ると、廊下の一隅にある門との私設電話の電源を入れた。

「どなたで御座居ましかうか？」

と聞く声に、不安が隠し切れなかった。

「弓野君か？私だよ。東京

の藤倉だ！」

静寂の中に男の声が、はね返った。

「まあ、お師匠さん、今時どうして此方へ？」

「昨日から来て居るんだ！君の事を思い出してね、急に訪ねてきたんだ。もう寝たかい？」

「いいえ、起きて居ますわ。今お開けしますから一寸お待ちになって！。でも良くお判りになりましたのね。」

電話を離れると常の方へ引き返し、

「東京の花柳のお師匠さんが見えましたの。此処へお通ししても構いませんか？」

さも常が主の如く許しを求める態度が、いじらしかった。

「ええええ、構いせんとも」

「済みません。一寸、御免遊ばせ」

軽く棲を取り廊下につつ艶めかしさ。

暫くして藤倉と座に帰り、双方を引合させた。彼女は、ほの暗い部屋の燈を普通の照明に切替えた。藤倉の為に座を設け料理を整えるのであった。

「家も中々立派だが、一段と綺麗だねえ、君は」

盃を受け乍ら彼女の姿に感嘆した。

「仰有らないで！恥かしいわ」

うつむく衿足の白さ、窈窕たる肢体に嬌羞が溢れて、春宵は桃色に彩られる様であった。一別以来の挨拶やら人々の消息の噂が交され、中でも大村せい、は共通の話題であり三人は其れ其れの想出を新にしたのであった。盃も、しきりに交わされ料理も乱れて行った。

「然し、此のお雛様は大したものですね」

今更の様に雛壇を見上げて嘆声を洩らせば

「そうですね、珍らしいお雛様ですね」

「君が買ったの？」

「いいえ、旦那様ですわ」

「ふうむ、何処に在ったのか能く手に入ったものですね」

「わざわざ、お作らせになりましたの。半年も掛ったって去年の春届けて下さいましたのです」

「成程ね、名のある人形師だろうね、きっと！」

二人が雛壇に見惚れて居る後で、えは袂で面を覆った。口を洩れる嗚咽の聲に驚いた二人が振り返ると裾を乱して立上り、逃げる様に出て行くのである。

「どうしたんですか」

「さあ？」

顔見合せて審^{いざ}かる常と藤倉は狐につままれた様な気持であった。やがて酢^すの物の小鉢を二つ盆に乗せて入ったり、えは眼を赤くして居た。

「失礼致しました。」

二人に向って手を突くと小鉢を卓に乗せるのである。

「どうしたんですか？」

「何にか、気に障る様な事でもいいましたか？」

「いいえ、そうじや御座居ません。只今の御話しを伺って居るうちに旦那様の深いお気持ち判りまして……。」

再び語尾が震え、ハンカチを取り出すと眼に当てた。

「あたくし……何にも知らないものですから顔が昔風過ぎるとか……もっと小さな方が好かったとか、我儘許り申しました。今になって思えば申訳ない事ばかり……。」

肩をふるわせて、すすり泣いた。

「今晚、こんな恰好を致しましたのも、電燈を消して雪洞に替えましたのも、皆んな旦那様のお言葉で御座居ました。お亡くなりになって見て、今更に旦那様のお情けが判り、あ

たくしの様な変り者を、これ程迄お可愛がり下さいました御恩を、あたくしは遂々お返しする事も出来ませんでした。」

遂に泣き伏して了ったのである。常も藤倉も今更の如くせいがりえの為に何物をも惜しまずに愛し、りえも又せい程の者をしてそうさせずには置かなかった真情を以って応えた情愛の深さに眼を見はる思いであった。よよと泣き濡れるりえの姿は雨に打たれた花の無惨さと美しさがあつた。

「そんなに思いつめては毒だよ、りえさん。お前さんの仕方がよかったらこそせいさんもしたのだ。」

「そう、恩返しは、とくに済んでるよ」世間並な慰め言葉を口にし乍らりえの妖しい魅力にひき付けられて行く二人であった。今は亡きせいに対し嫉妬に似た羨望を覚えるのである。

「取り乱しまして申し訳ございません。」

漸く激情から解放されて涙を納め、銚子と汚れものを持って台所へ立った。

「せいさんが羨ましくなりましたね。」

紫煙を吐き出して藤倉が染々いうと、

「いい人ですね、りえさんという人は。」

常は再び心の燃え上るのを覚えるのであつた。

た。

藤倉も五年振りに見るりえのろうつけた姿と豪奢な生活に驚いて居た。手紙に依って大体の事は知って居たのであつたが、五年間の歳月は彼女の美を完成し女性の羞恥は艶冶を加えて、手元に居た時には思いもなかった情感が、ぞくぞくとして感じられるのである。何か大きな落し物をした様な想いであつた。それぞれの思いにふけて居る時、盃を捧げて入ったり、えは髪を洋髪に変え、振袖をお召の訪問着に着更えて居た。つづれの帯を太鼓に結び、鹿の子の帯揚げは深く沈め、平打の帯締めを、さりげなく締めて居るのだ。

粹でなく野暮でなく、洗練された柄と着付けであつた。

「先程は見苦しいさまをお見せして申し訳ございません。お赦し下さいませ。」

淑やかに三指を突くと、膝で寄って銚子を取り上げた。

「お盃をお替えになつて……あら、どうなさいましたの？お二人共」

彼等の胸の中を知る由もなく異様な空気を感じ、不審の眉を曇らせるのである。

「いや、つまらん事を云つて反って心配をかけたねえ、済まなかった。」

「いいえ、あたくしこそ。お久し振りにお会したのに泣いたりして……御免遊ばせ。」

「りえさんも飲んだら」

「はい、頂きますわ」

常から貰つた盃を一口に飲み干し、盃洗で洗つて返した。

「着替えずに一舞い見せて欲しかったね」

座は再び賑やかさを取り戻して居た。

「お師匠さんにお見せ出来るあたくしじゃ御座居ませんわ。長い事、お稽古も休んで了つて……」

「こちらでは、誰の処へも行つてないらしいね。」

「こんなあたくしで御座居ましょう。恥しくて。」

「久し振りに何か見せて頂こう。何が好いかな。」

「はい、だつて……」

尻込むりえを促す藤倉であつた。常も興じて契めると、今は拒み兼ねて

「お師匠さん、お笑いにならないで」

と立上り、次の間の襖を開き、レコードに針を乗せると、前弾きの音が流れ始めた。舞扇を前に二人に向つて手を仕えた。藤倉も常も膝を正し、曲に乗って舞い進む姿に視線を

凝らしたのである。

曲は『岸の柳』であった。

「上手いじゃないか。ちっとも崩れてない」
舞い納めた彼女が両手を揃えるのへ言葉を掛けると、

「あら、極りが悪いわ」

「もう一つ、踊って御覧。そうだね、『春雨』が好いだろう。」

「はい、悪い所は叱って下さいまし。」

再び流れる旋律と共に嫋々と舞う姿は、情を含み艶にも亦可憐にもあった。

「立派だ！」

彼は呻る様にいつて、扇を帯に差し込み乍ら傍へ来て座ったりえを、まじまじと見るのである。

「お眼を汚しまして。」

仕える手の白さ、柔らかさ。我が側を離れて五年にもなり、誰の教えも受けて居ない筈である彼女の芸は、落ちる所か一段と進んで最近の藤倉の芸風迄加味されて居るのである。『岸の柳』は地味な踊りであり、悪くすれば野暮にもなるのを、静かな中に華やかさを見せ、いい知れぬ情を現して踊ったのである。

踊り方に依っては、下品にも野卑にもなる

『春雨』を優婉な中に高雅な品と風情を漲らせて舞い納めたのであった。数多い在阪の弟子の中に、え程の名手は誰と誰か？

「君は、ほんとに誰の処へも行っていないのかね？」

「あら、どうしてですか？」

「今、見て居るとね、最近、発表した新しい振り、が能く見えるじゃないか。」

「はい、其れは……時々会へ参りますし、テレビでも見せて頂きました。」

「ふうむ、それだけで？」

「はい！」

一寸見ただけでこれ程覚えられる弟子が外に居たであろうか？

藤倉とりえの話しを聞き乍ら、舞踊の事は知らない常にもりえが凡手でない事が判り、惚々と眺めつつ飽きない思いであった。

藤倉も常もそれぞれの立場から改めてりえを見直すのであった。

「四月三日にS会館でね、各派合同の名流会があるんだ。その打合わせにこちらへ来たのだが、君もそれに出ないかね」

「まあ、其んな所へあたくしなんか……」

「いや、君なら大丈夫だ！」

「だって、立派なお師匠さん方が沢山いらっ

しやるのに」

「そんな事は心配しなかったっていい。私に任せて貰いたい。」

彼は是非共りえを出演させたくなった。他派にも自派の人々にも我弟子としてりえを誇りたくなったのである。

「前売券をさばく当ても御座居ませんわ」

藤倉の思わぬ言葉に吃驚して、どうして断ろうかと、彼女は色々に逃げようとするのであった。

「それは、わたしが引受けましょう」

りえの心も知らず常が一膝、乗り出すのである。

常の思いも藤倉と同じであり、その為の負担等、望む所であったのだ。りえは愈々狼狽した。

「お師匠さん、堪忍して。あたし……そんな事がましい事は、赦して下さいまし。」

蒼くなつて断るのであった。不意の話しでもあり、性急に押し付けるべきでは無いと思つた藤倉は、

「まあ、考えて呉れないか。又、近い中に返事を聞かせて貰えば好いから」と打ち切つたのである。

いつ降り出したのか糸の様な雨が音もなく

降って春の夜は静かに更けて行った。三人三様な心も、やがて雑祭りの和やかさに溶け、桃の宴の盃を重ねたのである。

其の後、藤倉は根気良く訪れて、遂に尻込むりえを説き伏せたのであった。

ひっそりとしたりえの身辺は忽ち慌ただしさに包まれて、外出も度重って行った。

多くの弟子達への指図もあり関係者との接渉もあって、東京を離れて来阪して居る師の藤倉へ彼女は邸の一部を提供したのである。

そのため人の出入りも多く賑やかな毎日が続いて彼女の身辺は多忙を極めた為、見兼ねた常の言を入れて会の終る迄、一人の女中を雇ったのである。常もりえの相談役を以って自ら任じ家事の采配と人との応対を引き受けて泊って行く事も暫々であった。

藤倉は殆んどこの邸を我家の如く足溜りにしたが、りえに對し師弟の埒を乱す様なことはなく、りえも又、心から師に尽し、その指導の下に稽古を重ねて行くのであった。

自分に割り当てられた前売券の二百枚も、いつ、どこへどう捌いたのか常には一枚の負担も掛けなかった。常にしても藤倉にしてもそれは大きな疑問であったが、尋ねても微笑するだけで、その事に関する限り答えようと

はしなかつた。幾度かの打合せ会の時もりえは一言の意見も云わず常に師の影に隠れる様にして居たが、その控え目な慎しさと楚々とした美しさは、関係者に特別な印象を与え、忽然とした出現は驚きの眼を以って迎えられたのであった。

りえを得た藤倉は予定を変更し、演し物を『六歌仙容彩』と改めたのである。藤倉自身、遍照、文屋、業平、喜撰、黒主の五人を變化して踊り、小町と、お梶をりえに勤めさせたのである。藤倉に取っては野心的な演目であり大胆な趣向であつたが、それもりえという名手を得ての決心であつた。天保の昔の趣意へ新らしい創意を盛って、清元と長唄の掛け合いを如何に生かし、本来の洒脱さと艶美さをどこまで表現するか、慌ただしい中に工夫を凝らすのであつた。そうした師の苦心を知った彼女は、劇しい稽古の暇々に双方の地方や裏方へ心を配り、思い切った祝儀と音物を送って辞を低くして協力を願うのであつた。

羨望と反感、賞讃と嫉視の中に入りえの名取り名『花柳寿美春』は関係者の注視する処となり、藤倉の期待通りに人気を捲き起して行ったのである。

變合わせ、衣装合わせも無事に済み、盛り上った人気に華々しい名流会は幕を開いた。諸流派の師匠と名取り達は暗黙の中に鎬を削り、自流を誇示すべく、その子弟と最負と共に景気の渦を巻き起すのであつた。

諸流の目標は一つであつた。藤倉が出した大作『六歌仙』であり新人のりえであつた。彼等にとって始めて聞く名であり、亦自派の花柳の人々すらも馴染のない名であつた。

それが一躍、師の相手を勤めるのである。轟々たる期待と喧騒の中に師弟は舞台に起つた。藤倉の軽妙にして洒脱なる芸風は流石であり、人々の予期する通りであつたが、それに配する新人、寿美春の艶麗にして優雅な踊りは満場を酔わしめたのである。師の工夫を能く活かし間も呼吸も見事な出来映えであつた。万雷の拍手と異常なまでの賞讃は、諸人を瞠目させたのである。

楽屋へ降りた彼女は、その圧倒的な人気も他人の様に師匠達や人々へ挨拶を済ませ、内外の関係者へ礼と心付を贈って、化粧も落さず人眼を逃れるように、常と共に引揚げてしまったのである。

三日間に亘る名流会も無事に済み、『花柳寿美春』の名は一躍、大阪の芸能界に知れわたつたのであつた。

(未完)

創作

黒井チエの青春

(二)

近藤 一

左手でのドリブルが不自然に見えない程、チエの練習は積まれた。いつものように縄跳び用の縄が膨らんだ胸を容赦なく締めつけ、必要以上に高く右の手首を背筋に吊り上げている姿で、女囚のようなチエは、睦子の叱声に烈しく追い回されていた。

「さ、行くヨ。いいか!」

「ハイ! さっ来い!」

男の子のような激しい掛声でボールが飛び交う。相当に強いパスを、チエは叩き落とすように受けてドリブルにうつる。

「えいッ!」

「ハイ! あっつッ!」

一瞬チエの頬が引きつった。左手の親指の附根が逆に突かれて、激痛がビリリッと腋の下まで走り抜けた。思わずボールを怖れてしまふ。容赦の無い睦子のパスが意地悪く襲い、逃げ腰になったチエの背後から追う。

ビシン!

「ああッ!」

ビシン!

「あうン!」

一旦はボールの急迫を避ける意志を捨てたかのように蹲ったチエではあったが、やはり苦痛に耐えかねて、ヒョロヒョロと立ち上がって逃げにかかる。

睦子の瞳はギラギラ輝やいている。眼の前に投げ込まれた生き餌を馴りにかかる檻の中の猛獣のように、冷酷非情な眼差しだった。

ビシン! 「つウ!」

ビシン! 「い、いいッ!」

烈しいパスが、チエの右手を捉えた。痛みがズキズキと右手の中指と薬指の先から腕の付根へ伝わって来る。握れなくなった五本の指が、背中で不自由に震えた。

がくつとチエは膝を折った。手をつこうとして、左手で身を支えることができず、体育館の床につつまむように顔を伏せて、チエはポロポロ涙をこぼしていた。

「何だい、お黒。まだ早いヨ、バテるなんて。さ、立つんだ立つんだ。」

強烈な汗の匂いを体中から撒き散らしながら、ボールを左手にした睦子が、右の指でチエの肩を弾くように小突く。突かれるチエの体からも、若い娘の汗が絞り出る程に湧いていた。

「解いて、手だけ、ほどいて、ほどいて下さい。」

苦痛に喘いで、チエは上体をしなやかに捻じ曲げながら、睦子を振り仰いだ。

睦子は立ちほだかったまま、冷やかにチエを見下して、チエの哀願には応えなかった。その眼はゾツとする程美しかった。何ものかにつかれたような輝きがあつて、魅せられてしまいそうだった。

いきなり、睦子は足許に喘ぎ泣くチエの背を踏みつけた。

「う、ううっ！」

チエは呻きを噛み殺すのに必死だった。何故か声を上げることが憚られた。

グイグイと蹂躪が強まる。首筋も乱れかかった髪の毛ごと踏みつけられたし、ユニフォームの肩や腰の辺りが薄黒く汚れた。捻じまげられた右腕の手首さえ指先にかけてギューギュー痛めつけられたから、ヒップを思いきり蹴っ飛ばされて床につんのめったチエの頬

は、ほこりや泥を吸い取って斑らになってしまった位だった。

左手の親指の付根は紫色にふくれ上った。熱っぽく、まるで自分の手でないよう変形した掌だとチエは思った。きつと、右手の指も、関節の辺が痛々しく赤紫に脹れ上っているだろうと、自分を哀れんでみた。

蹂躪する睦子も、身をよじって休めるチエも無言だった。二人共ギューと歯を噛んで、時折、絞り出すような呻きに喘ぎながら、一体となって動いた。

「指が、指が。」

チエが呟やくように云ったのは、かなりのあとだった。

突き転がされて俯伏したチエの腰の辺に馬乗りになって、睦子がチエの右手の中指と薬指を邪慳に引っ張り続ける。凄く痛い。だがチエは体の芯から安堵して、背の重みも、突いた指の痛みすら、快いものに思っていた。

「キャプテンが指を抜いてくれる。」

チエは自らの心にそう云いきかせて幸せだなと思った。

チエの突指は酷かった。右手の指二本がなかなか治りにくく、しかも使わない訳にいかないだけに痛みが凝り固まった。左の親指の附根も時折は遺瀨なく疼く。ボールを持つことができなくなつて、チエはトレーニングをオミットされた。と云つても力の要る仕事ができる訳ではないからチエは大きな体をもて余し気味でコート脇にぼんやり立っていることが多く目障りだった。

国体の予選が近づいて、ハード・トレーニングは急ピッチになった。山崎部長もつきっきりでホイッスルを鳴らし続けたし、都合の

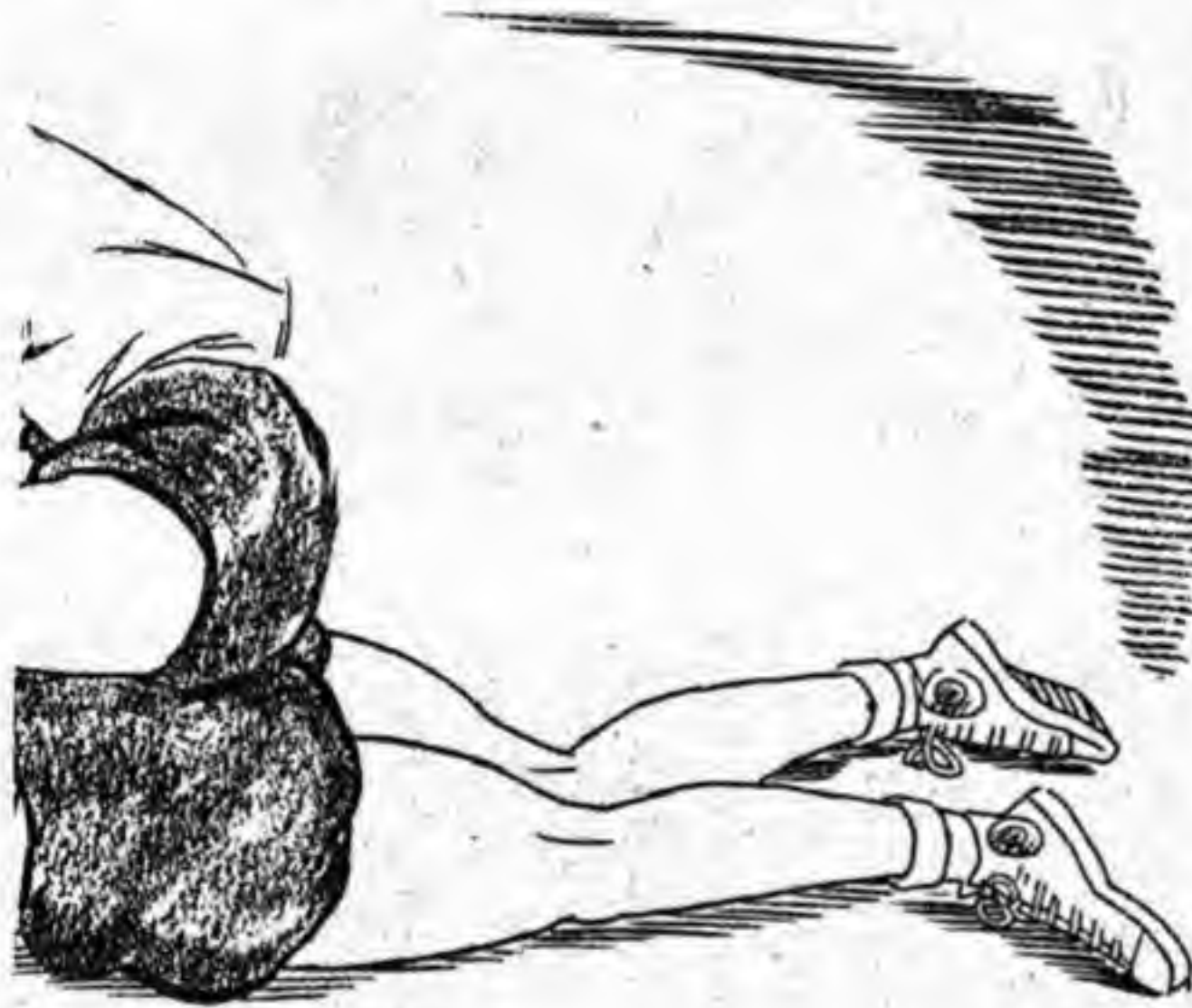
つく先輩達が烈しい叱声を後輩達の背に浴びせかけ、そして部員同志さえ上級生と下級生とは競り合い、同級生の一人一人が他人を蹴落とす努力の毎日だったから、チエの大柄な肉体を視て皆一様にイライラした。頭の芯まで烙きつくような猛暑の中で、息も絶え絶えな苦斗を繰返し続けている一同の眼からは、することもなく部員の汗みどろの練習を傍観しているようなチエが、極度に憎らしい存在として見えた。痛烈な非難がチエの一身に浴びせかけられたのも当然であろう。

「ノッポ！ あんた、たるんでるヨ！ あたしなんか今、障りがあるのサ。それだってトレーニングやってるんじゃないか！ 突指ぐらいでベソかいて、ぶらぶらしてるんなら、バスケットなんかやめてさっさと田舎へ帰っちまいなヨ！」

炎のような眼差しだった。こういうことをあからさまに口にして少しも憚らずにいられるような、そんな雰囲気の中で、チエは小突き回されてドギマギしていた。

体の大きいチエが相手では手を上げる者もないが、興奮しきった部員達は何かの機会によく衝突したし、チエは屢々面罵された。

考え様によって、部員一般の陽性の表われなのだろうが、チエは陰口を



TAK

きかれることに敏感でなかったから苦にならない代りに、男のように面と向ってガミガミいう部員が恨めしかった。気が立っている部員達の一時的な怒りなのだと思う程の余裕は、チエにはなかった。チエには、バスケット部の練習に出ることが、ただ苦痛になり、その間中、まるで地獄の責苦に遭っている心情だった。

それでもチエはよくやっていたのだ。水を汲んだりタオルをしぼったり、それにボール拾いに走ったり、準備や片づけや細かな心遣いに立働いていたし、それに紅白試合の度に必らずホイッスルを持って走り回っていたのである。部員にはそれぞれ相応の休憩はあってもチエにはなかった。選手が汗を拭く時は、見学のチエの多忙の時である。

チエは故障が悲しく、本当に恨めしかった。だがチエは決して睦子を恨んではいなかった。客観的には極めて常軌を逸した苛め方であつたけれど、それでもチエは当の睦子の視線を唯一の頼りにしているのだ。

睦子の瞳だけがチエの存在を認めてくれていた。チエは、勿論どんな日にも練習を休まなかったが、かなりの発熱があつた時も真先にボールに空気を詰めてワセリンで磨いて来たものだった。そんな時、睦子の瞳は声にこそ出さないが、いつも優しく「お黒、無理

するんじゃないヨ」と云ってくれた。それは単にチエの感じだけかも知れない。しかし、それが大きな支柱であったことは確かである。処がその支えが今は乏しい。主将であり、チームの要である睦子は余りにも忙がし過ぎて、チエと言葉を交わすことはおろか、視線を合わすことも少なくなった。

チエの胸の中で、何かしら満たされない想いが大きくなって行く。全国大会への出場を目指す時の異常な雰囲気、に馴れないチエは、部員全体が自分だけを極度に憎んでいるものと心から思った。自分を荒い言葉で罵った特定の部員に対しての反撥よりも、部員の誰彼に対して除け者にされた淋しさを感じ、睦子が忙がし過ぎることも悲しかった。

チエには、そのような自分の心情を巧みに表現する方法が無い。チエがまだ年が若く、人生経験に乏しいせいもあったが、田舎からバスケット一筋に出て来た彼女には周囲の洗練された雰囲気、眩しいようで、戸迷ってしまうのだった。

チエは、ふと想い浮かんだ郷里の中学の木下先生に手紙を書き始めた。木下先生によって今日のチエが作られたのだ。田舎の中学校へ女子のバスケットを持ち込んだのも、チエをバスケット一途に叩き込んだのも、そしてバスケットだけのために頑固な父親を説いてチエの上京を承認させたのも木下先生である。中学へ入った時からチエは困ったことは何でも木下先生に話して来た。口下手なチエの



かかってしまったのだ。

放課後、チエは真直ぐに部室へ行ってみれば、マネージャーの竹内淑子だけが、唯一人、帳簿の整理をしていた。無口で几帳面で誠実そのもののような淑子を充分に尊敬していたチエは、その時何故が淑子に甘えてみたくなった。

「アノ、わたし、頭が痛いんですけど、今日休んでもいいでしょうか？」

頭が重いのは事実だが、頭痛は嘘だった。本心は、練習を休みたいなど思ってもせず、唯、淑子から何かいたわりの言葉をかけて貰いたいと思い、また淑子ならそんな慰めの言葉をかけてくれそうに思えたのだ。

「頭が痛いって、練習に出られない位？」

淑子はチエの瞳を見上げて云った。

云うことでも先生はよく分ってくれ、別に解決の途を講じてくれなくても、それだけでチエは安心できた。

東京の大学で有望選手と云われ、将来を嘱望されながら身体を悪くして東京での就職を断念した木下先生には、自分の気持を分って貰えそうだとチエは思った。

木下先生への手紙を投函した翌朝、チエは寝不足で頭が重かった。傷ついた右手の指を見つめながら、考え考えチエは手紙を書き上げるのに深夜まで

「ええ、まア……。」

「そう。じゃ、帰んなさい。」

口ごもって甘えるチエに淑子はズバリと云い切った。

「でも、我慢していれば……」

「練習に出られるなら出なさい。出られないんなら帰って寝ること。今、みんな大事な時期なんだから病人の相手なんかできないわヨ。帰んなさい。睦ちゃんには云つといたげるから……。」

頭痛が嘘とは云えなくなつて、チエは帰宅しない訳にはいかなかった。どこか入って来た部員達がチエの頭痛を聞いて、軽侮と非難の入り混った視線を投げつけて来るので、それを逃れるためにもチエは手提鞆をひつつかむようにして下校しないではいられなかった。

一度トレーニングをサボってしまうと、益々部内の空気が耐えられないものになってしまった。誰もが眼を腫らせて真剣にハード・トレーニングを堪えているだけに、チエを受け容れてくれる余地が狭まり、自分だけが皆から取残され仲間外れになっているようなやりきれない気持ちに襲われた。

あの時、頭痛が嘘だと嘘をつかなければよかったと後悔し、更には多少横暴であっても練習を休むなど叱ってくればよかったのと、あの温厚な淑子までが恨めしくなった。

チエには部の空気が自分にとって何かよそらしいものに感じられ、何か余程強烈なきっかけでもない、最早溶け込みにくいものを感じていた。

国体の予選が迫り、登録メンバーの発表があった。主将の睦子以下十五名は合宿に参加した三年生を中心に選ばれた。合宿に参加し

なかった者でも三年生の部員にはやはり一日の長があったし、その上、女子の就職、進学に決定的な決め手となるだけに、三年生中心は当然のことでもある。

一年生は一人も登録されなかった。弱いチームなら兎も角、東京での覇を競うチームとしては一年生をすぐ入れる程のアナは無い。だがチエは不満だった。山崎先生も睦子もあれだけの好意を示してくれながら、大事な時に努力してくれないのだと思った。実際に試合に出られなくても仕方がないが、登録だけはしてくれてもよさそうなものだと思った。実力ではチエと大差ない部員が上級生というだけの理由でチエを蹴落としたことが堪え難かった。だがチエはそれに発憤して努力する気にはならなかった。今日報いられなかったことが無性に腹立たしく、努力をしても徒勞としか思えなくなっていた。

チームはシードされ、余程の番狂わせがない限り準々決勝の進出が予想されていて、トレーニングも登録メンバーに限って準々決勝以降を目標に進められた。

最初の試合をチエは観に行った。声をあげて応援するような気持ちになれなかった。隅の方で黙って観ていた。流石に睦子を軸にしたチーム・ワークは素晴らしく、フォワードの美代が特に当たっていたので、相手は手も足も出ない形だった。途中から交替選手として二年生がフォワードに二人とガードに一人出場した。いずれも二年生の中では上手な方だが、三年生とは隔りがあることをチエは自分の眼で見て来た。

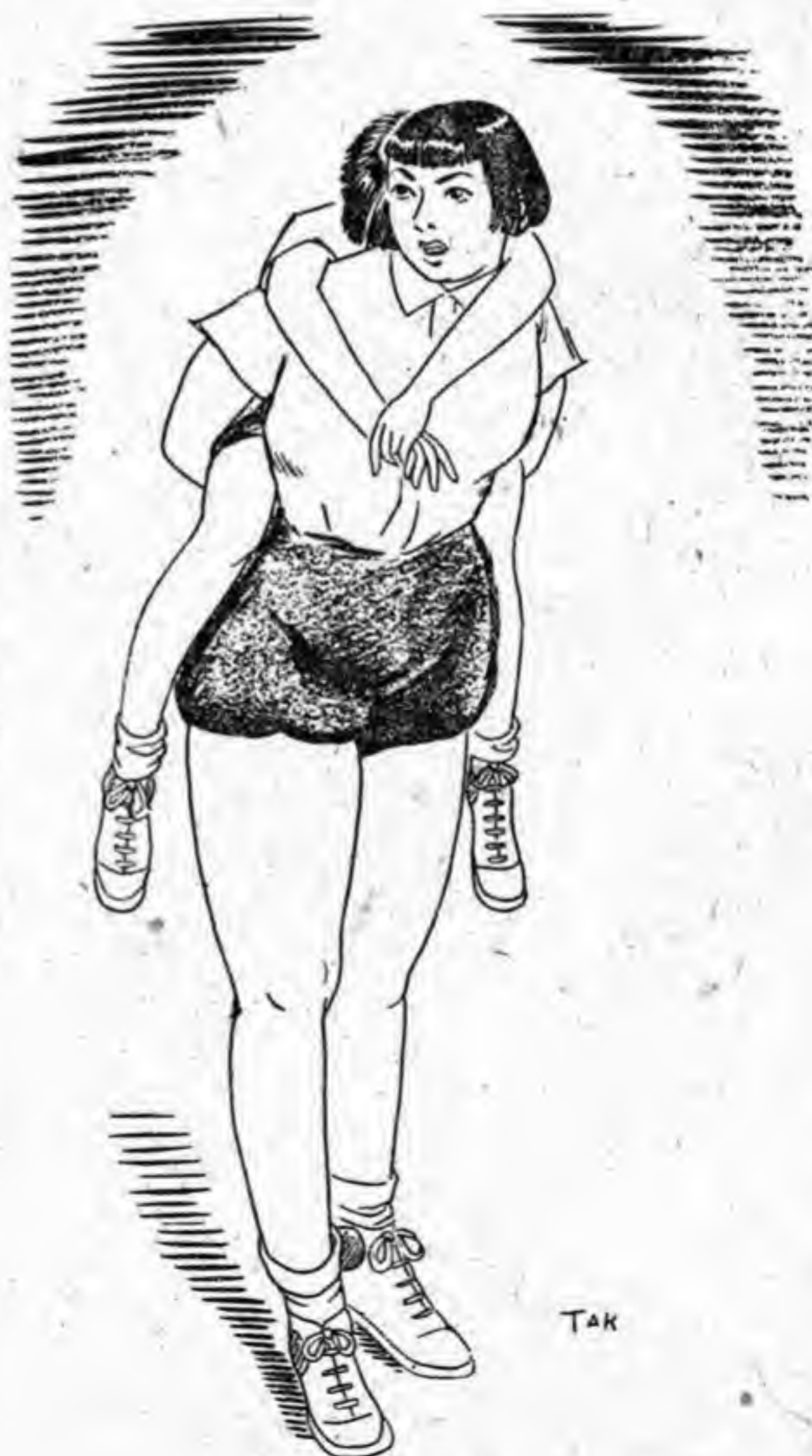
——練習しなくっちゃ、わたしも——

チエはそう感じた。然し練習は許されなかった。登録メンバーだ

けが独占した練習場を、登録されなかった部員がまるで女中のように怒鳴りつけられながら奉仕して回るのだ。皆の眼の前で頬に平手打を喰わされる者も珍らしくはなかった。

一年生で田中トモ子という娘がいた。まるで中学一、二年としか思えない貧弱な体格だったが、くるくると実によく立働いた。チエが、何故あんなに働くのだろう、あんなに迄しなくてもよいのに、と呆れる程、上級生の身の回りの世話に追い使われていた。汗になった肌着から、中には下穿きの洗濯まで、命令する二年生もあったが、トモ子は黙って云われたとおりやっていた。そのようなトモ子に、何が気に入らないのか、上級生の一人

が酷い制裁を加えた。初めは黙って叱られていたトモ子が一言弁解しようとしたのを口応えだといって暴力を振るったのである。左手でトモ子の髪の毛を鷲掴みにし、引き摺り回しながら右手の拳で顔や背中を殴りつけ、胸や腹を突き上げる。トモ子はヒイヒイ泣きながら、振り回されるままに頭からよろけて行って、何の抵抗もしなかった。トモ子は突きとばされてベンチにぶっかり、向う側へ頭から転げ落ちて動けなくなってしまった。上級生はトモ子の瘦せた小柄な体を足蹴にし蹂躪した。皆が駆けつけた時、上級生は完全なヒステリー症状で半狂乱だった。トモ子の倒れた上へ馬のりに跨がっ



TAK

て処嫌わず、つねりまくっていた。

トモ子の唇からは赤いものが滲んでいたし、左の眼の下に赤紫の痣が残り、そして上級生の左手の指にはトモ子のらしい髪の毛が五六本ギリギリ捲きついていていた。

チエは、いつつでトモ子をおぶって校医さんの処まで行くことになった。医務室がしまっているので校医さんの処まで行かなければならないが、トモ子は歩けないし、少し道のりもあるので一番体が大きいチエが指名されたのだ。

チエの背中でトモ子は声を立てずに哭いていた。チエはたまらなかった。

応急手当を受けての帰途、チエはトモ子に部にいる理由を尋ねた。バスケットと大して縁の無い酷使に堪えている理由を訊かれて、トモ子は恥ずかしそうに小声で答えた。

「だって、あたしだって三年になったら登録して貰えるかも知れないんだもの。」

チエは胸が詰まりそうだった。

国体予選、東京大会の第二戦のゲームを、チエは観に行かなかった。素直に熱中できない或る種の反撥を感じていたからである。登録から洩れた不満が原因になっているのかも知れない。確かにそういうことはある。トレーニングの激烈さに耐えきれない弱さもあるかも知れない。上級生達の理不尽な横暴を身を以て識って強い反感を抱いたことも事実であった。只管勝つことばかりを追いかけている練習方法にも疑問が湧いて来た。国体出場という夢、そしてそのために不可決な登録という憧憬、そのような精神的支柱を喪った瞬間から、打続いた無理に因る疲労が眼に見えない形で一度に押し寄せて来たのかも知れなかった。

いろいろな理由はあるけれども、だが根本にあるものは、紛れもない。甘えであり、我儘であったのだ。トレーニングの烈しさは何も今に始まったことではないし、伸び盛りのハイティーンに堪えられない肉体的負担ではなかった。上級生達の横暴に反抗する正義感が理由ならば、堂々と闘うべきで、練習から逃避するなどは筋が通らない。練習方法の改善は参加する者によってのみ初めてなされる筈のものだ。それに勝負はまず勝たねばならない。勝つための研究が練習であり、勝つための努力が尊いのではないか。国体出

場、そのための登録だって実力の問題であろう。もしチエがメンバーとして不可決な実力の持主ならば登録は必らず実現した筈だ。新入の一年生が追い抜ける程上級生は拙劣でなかったし、入部と共に十五名のワクにはいれる程の天分も努力もなかったことはチエ自身が一番よく識っていた。たとえそれが旧態依然たる練習方法のせいにして、事実なのだ。

つまり、チエが応援に行かず、練習の手伝いに出ないのは、唯、
「我儘病」が出たに過ぎないのだ。それはチエ自身も判ってはいるがそれをあからさまに認めることが怖ろしいだけなのだ。勝手に練習をサポートしておいて、それを正当化しようと自分の心で小理窟をこねまわし、そして変節を自認することがいやで練習に出ないだけなのである。

首に縄をつけて引摺られたら、恐らくチエは喜んで練習に出て行くだろう。自分の主義主張を曲げたのは任意でなく、自分の力ではどうにもならない強い圧力に因るのだと説明づけて、心からの忠誠献身的な奉仕を籠球部に誓うだろうに。

そんな契機がないまま、日が終った。

毎日が全く重苦しい気持で、チエはイライラした。放課後になると逃げるように校門を出る。偶々部員に出会うと視線をそらせて通り過ぎた。下宿へ帰ってもする事がない。予習、復習のつもりで教科書やノートを広げても頭の中はバスケットの想いで一杯だった。

チームは順調に予選を勝ち進んでいるらしい。女子籠球界の名門校として当然のことながら、休暇あけの学校では話題のトップであり応援の数も一試合ごとに殖えて行った。今や籠球部は学校中の花形であり、キャプテンの睦子を始め中心選手は素敵な存在だった。

だがチエは相変らずサボリ続けていた。

木下先生からの手紙が届けられた時、チエは何か縁遠いものを手にするような表情だった。右上がりの几帳面な楷書は、木下先生の誠実さを如実に物語っている。内容も温情に満ちたものであった。

選手の寿命は短い。殊に女子の運動選手の寿命は極めて短いものだ。そこに生甲斐を求めて飛込んだ以上、僅かの怠情も許されるものではない。部の活動の実際に多少の不満を抱いたからといって、下積の苦しみから逃れようとするのは馬鹿な我儘だ。下積の時の努力がなくて大きな飛躍ができるか。人生の青春は思い様一つだが、選手としての肉体は容赦なくすり減って行くのだ。木下先生の言葉はチエの胸を刺した。

「…………チエ、君は来年十七才になる。再来年は十八才だ。一年一年君は大人になって行く。君が十六才でいられるのは今年しかないのだよ。全生涯に一度しかないという時を、君は小さな迷いに費しているだろうか。いつも僕がいつていた。そしていつも君が実行してくれたように、自分の心に悔いることのないベストを尽くすことだけが、君のすることじやなかったのだろうか。」

聞く処によると君は時々勉強をおろそかにするそうだ。田舎の中学から上京した君には東京の勉強は大変だろう。だが高校で、勉強と運動と両立しないことなんかないと僕は思う。殊にチエのような丈夫な体を持っていて出来ないことじやあない。だから僕は、チエの奴は人が見ていないのをいいことに怠けているのだと思う。

チエの体は滅多にない素敵なものだ。磨けば光る玉だ。だが磨かなければ何の価値もない石ころだし、邪魔な存在に過ぎないのだ。

……………」

十枚余の便箋にぎっしり書かれた長文の便りを、チエは途中まで読んで心が痛くなったから封筒にしまつて机の抽出しに入れた。

勉強も手につかず、チエは夕食後フラリと街へ出た。土曜の宵は何となく緊張のとけた雰囲気は街中に漂っているようだった。

瀬戸物屋の店を覗いて茶碗をあれこれ眺めてみたり、植木屋の店の盆栽を懐しく見たりした。電車通りから一寸は離れた処にある映画館のステイルに見とれているチエを、その辺に屯ろしていた幾つかの視線が珍らしそうに撫で回した。

本屋の店先では、他の娘達に混って映画雑誌の変わりばえしないグラビアページをパラパラめくってみた。化粧品屋は気恥ずかしくて長居ができなかった代りに、アクセサリと袋物の店では、いろいろ思いに耽りながら品物を手に取ってみた。黒地に金色の筋を描いた牡鹿のアクセサリを見て、（宮部さんに、これ上げたらいいだろな）と、ふと心で思ったりした。

下宿へ戻ると、下宿の小母さんが友達の来訪を告げた。

「何でも明日試合だから一緒に行きたいっていったわヨ。」

「そうですか。でも、わたし、明日は用があつて都合が悪いんだけど……………」

「そう。チエちゃんも試合だつていうのに行かなくてもいいの？何だかこの頃あんまり練習にも行かないようだけど。」

チエは一時逃れの嘘を通しにくくて、いい加減の返事をしただけで自分の部屋へ逃げ込んだ。大方、トモ子でも誘いに来たのだろうと思つた。

翌日は朝からすることが無いのだが、小母さんの視線に咎められる想いがして、とにかく下宿を出たチエだった。といって何処とい

う行くあても無いまま、チエの足はいつしか昨日歩いた途を通って映画館へ向いていた。

時代劇二本に現代劇一本という三本建てで学割五十円という



入場料を払う間も、他人の眼に留まることを怖れたチエは、急いで場内に走り込んだ。東京へ来て初めて観る映画だった。館の中はチエの郷里の映画館と大差ないし、県庁前の通りにある洋画専門館の方が、ずっと立派だなと思った。

時代劇映画で善玉が最後には悪玉を滅すのが定道だが、その間に若い美しい女達が酷い目に逢わされハラハラさせて色をそえる。お姫様だの腰元だの町娘だのが縛られたり打たれたり何度も危難に曝された挙句、ヒーローと結ばれなければ命を落して片がつく。時代劇は両方とも、そういったものだった。現代劇は人身売買、それも若い女を外国に売飛ばす一味をめぐるアクション・ドラマである。夏向きに作られたらしく、無闇に肌を露わした女が出て来てチエの心を疼かせた。騙されたり脅迫されたりして無理矢理、集められた女達が、薄暗い地下の一室に閉じ込められている。逃亡者が出るが直ぐ連れ戻されて凄惨なリンチに遭う。逃亡を防ぐために女達は衣類を剥ぎ取られ、窓もない部屋に詰

め込まれる。リンチで半殺しにされた女は暫らくして、再び逃亡を企て、見つかつてまた残酷なリンチを受け、今度は重そうな鉄鎖で繋がれてしまう。その女の勇気を見て、一味の首領の情婦が心を動かされる。捕われの女達と同じ境遇であった情婦は、女達を救おうとするが、その頃、捕えられて来た女達の中に自分の妹の姿を見つけて、遂に裏切りを決意する。繋がれた女の鎖を解き自分の衣服を与えて逃がしてやる。処が挙動を怪しまれて容赦ない拷問を受け、その最中に姉妹であることが知れて妹が冷酷な責めを受け、見兼ねた情婦の自白で逃げた女も警察署へ着かぬうちに捉えられて三度目のリンチにあう。たとえ端役でも女優だけに美しい女達だが、それが、これでもかこれでもかというように苛められ痛めつけられる。最後には警察の出動があったが、要するに肌も露わな若い女体が苛責にのたうちまわるのが唯一の見せ場であった。それだけにリアルで凄惨でチエの体は小刻みに顫えた。鞭や荒縄はすぐ壁からはずされて女達の肌に絡みつき悲しい音を響かせたし、脇腹が裂けるかと思う程に強く宙に吊り下げられる女優もあれば、大詰めでは美しいヒロインが眼を腫らせて逆吊りにされたりした。チエはドキドキする鼓動を感じながら、(わたしなら、床につくかも知れないナ)と思っていた。

下宿へ帰ると案の定、昨日の友達が誘いに来たという。だが話の様子ではトモ子ではなさそうで、チエは一寸訝しく思ったが、その儘忘れてしまった。

火曜日の昼休にチエの教室へ睦子が来た。学校中の花形を一年生達は眩しように眺め、籠球部の宮部主将から直々の呼び出しを受けているチエを、今更ながら見直していた。

チエは唯、嬉しかった。切れ長の大きな眼、細いけれどクッキリと伸びる眉、長い睫毛と澄んだ黒い瞳、通った鼻筋、キリッと引締った口許、そして少し怒り肩の睦子に、チエは同性でない何ものかを漠然と感じていたのだ。いうならば、チエは睦子に恋をし始めていたのだった。

睦子が忙しい体であることが不満だった。睦子の顔を見る機会も少くなつて悲しかった。一目逢うことも憚ってしまう自分が悔やまれとならなかった。それが睦子自身からの、たつての呼出しである。チエの心は弾んだ。

水曜日の夕暮れ。人影もすっかり途絶えたような校内に、チエは睦子からいい付けられたとおりに待っていた。プール脇のポンプ小屋に隣接する空小屋が指定された場所だった、各種行事に使われたガラクタや壊れた運動用具などが雑然と置かれている。待ちくたびれて、チエは顔えが来る程切なくなっていた。

ガタッ！

扉に誰かの手がかかった。チエは倚りかかっていた柱からビクンと身を起す。建て付けの悪い戸がガタガタあけられて、戸口に睦子の姿が逆光で黒い影になって立っていた。

「おクロ、待ってたのね。」

感情を押し殺した低音だった。チエは何か応えようとして、声が喉にひっかかった。

二人は、無言のまま向き合って立った。そして、無言であるだけに、お互いにいうべきことやいわねばならぬことが、余計ひしひしと胸に喰入って来る。チエは睦子を怖れるように一寸後退りしたが、すぐ魅せられたのか、観念しきつたように相手の意欲のままに

身を委ねてしまった。

——脱いだ方がいいよ——

無言の指示に頷いて、チエは制服のボックスを脱ぎ、メリヤスの肌着とパンティだけになる。

——手を出しなヨ、縛るから——

——あまり痛くしないで！——

チエの伸びやかな両腕は手首の処で固く括り合わされた。両手を揃えて二巻き、それに直角に交叉するように二巻き、手頃なロープが締めつけられて、チエの両手はキツチリと固定され、骨までが痛んだ。

ロープの端が小屋の屋根の横木に渡り、睦子の手に握られて強く曳かれた。縛り合わされた手首を支点にして、チエの体重と睦子の腕力が争い、幾度が宙に吊り上げられたチエが暴れては睦子の新しい試みを誘って、結局はチエが自ら進んで爪立ちになった処で妥協した。

肘から肩にかけて堪らないだるさが襲い、それ以上に手首や脇腹が引きつって、チエは低く呻いた。睦子がハンカチを取出した。

——口をあけて——

——いや！　どんなことでも我慢する、きつと。だから、それだけは許して——

チエは唇をギョツと合わせて、十五糎も高さが違ってしまった睦子の瞳に見入った。涙さえ湧き出していた。

——ぶつの？　それで？　わたしを？——

睦子が革のバンドを手にして近づくのを見て、チエの頬は怖れに硬張った。

「おクロ、あたしはあんたを誘いに二度も下宿へ行ったワ。無駄足だった。……」

自分に聞かせる呟きのような低い声音が却って凄味を以て響く。二人の間で最初の、声になった言葉だったが、それきりまた沈黙に帰った。チエは何かいわなければいけないと思った。幾通りもの弁解が目まぐるしく頭の中を駆け、いいたいことは沢山にありながら、どれも睦子に向ってはいえない気がして、黙ったままじっと吊られていた。

「裏切者ッ！」

低く短かい叫びだった。同時にチエは腰のやや上の辺りに一線の熱さを覚えた。短かい肌着が両腕を吊り上げられている体には一層短かく作用して、打たれた辺りは素肌がのぞいていた。

バンドのムチを振りおろすのがヒップに集中されると、睦子も長身だけに斜めに叩かれる。睦子は知ってか知らずか、斜めに撻たれるのは、直角の鞭より遙かに痛い。だがチエは必死で呻きを嚙み殺していた。猿轡も怖ろしかったし、自分自身に対する意地もあった。声を立てて、もし人に怪しまれたら、という危惧もあった。だがそれ以上に、睦子の一言が胸の中を貫いていたのだ。

睦子の右腕が力一杯に撻ちおろす鞭にも、まるで烙けるような激痛を味わいながら、叫び声は喉で堰かれてしまった。それ程に、「裏切者ッ！」という一言は痛かった。正しくチエは睦子の心からの信頼や愛顧を裏切ってしまった自分が認識されていたのだ。

涙が、とめどなく流れた。ツ、ツと頬を伝う涙は、胸の辺りで肌着に吸い取られ、鼻孔の裏を疼かせる涙はゴクンゴクンと喉に落ちて行く。ヒップ一面に火のついたような熱さだった。もし明る

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判 (9×6.5cm) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	八〇円
五組五枚	三〇〇円
十組十枚	五五〇円
二十組二十枚	一〇〇〇円
三十組三十枚	一四〇〇円
四十組四十枚	一七五〇円
五十組五十枚	二〇〇〇円

Y1	全裸荷造棒しぼり	(大塚啓子)
Y2	乱れ黒髪裸見本	(大塚啓子)
Y3	観念した胡坐	(大塚啓子)
Y4	見事な飾り物	(大塚啓子)
Y5	浴室股間縛り	(大塚啓子)
Y6	麗しの緊縛裸像	(愛川悦子)
Y7	逆十字後手縛	(愛川悦子)
Y8	裸身の補われ人	(愛川悦子)
Y9	逆エビ後手足吊り	(愛川悦子)
Y10	全裸ねやの縛り	(田中芳代)
Y11	なまめかしき緊縛	(花坂道子)
Y12	全裸フトンむし	(大塚啓子)
Y13	蒲団貫通またぎ	(大塚啓子)
Y14	初々しき裸全身像	(岩井知子)
Y15	ヌード股間しぼり	(絹川文代)
Y16	全裸脚膝股間縛	(絹川文代)
Y17	セーラー後手吊り	(川辺砂登子)
Y18	庭園ヌード縛り	(絹川文代)
Y19	全裸全身裸自慢	(愛川悦子)
Y20	豊満双丘くらべ	(愛川悦子)
Y21	追いつめられた裸女	(愛川悦子)
Y22	逞ましきヒツパ	(愛川悦子)

Y23	大の字晒し	(絹川文代)
Y24	縛り正面正坐	(絹川文代)
Y25	胸のポリウム自慢	(愛川悦子)
Y26	麗人受難の巻	(益田房子)
Y27	もつこれで許して	(益田房子)
Y28	むしろれたスロース	(花坂道子)
Y29	全裸縛りの全身	(平野笑子)
Y30	鎮座する縛り女神	(平野笑子)
Y31	囚女後手柱縛り	(大塚啓子)
Y32	全裸強列股間縛	(絹川文代)
Y33	ベッド縛りのポーズ	(絹川文代)
Y34	開股一番一直線	(絹川文代)
Y35	縛り腰巻色模様	(絹川文代)
Y36	亀甲股間縛正面	(絹川文代)
Y37	全裸椅子またぎ	(田原美佐子)
Y38	妖艶闊のしぼり	(絹川文代)
Y39	椅子またぎ後手	(田原美佐子)
Y40	強烈第手首縛	(田原美佐子)
Y41	ハダカ縛り人形	(絹川文代)
Y42	濃艶ハダカ縛り	(絹川文代)

Y43	あられもなき開股	(大塚啓子)
Y44	全裸変形股間正面	(大塚啓子)
Y45	後手立木吊り	(村井知可子)
Y46	全裸後手壁ハリツケ	(愛川悦子)
Y47	全裸寝台養恥責め	(花坂道子)
Y48	振袖令嬢後手責め	(花坂道子)
Y49	長襦袢後手しぼり	(花坂道子)
Y50	ワンピース縛り	(花坂道子)
Y51	手吊り裸身の乱舞	(絹川文代)
Y52	柱縛り観念の図	(絹川文代)
Y53	不行儀姿態の美	(絹川文代)
Y54	カメラに晒す全裸	(大塚啓子)
Y55	緊縛女体の開陳	(絹川文代)
Y56	膨隆突出した臀部	(絹川文代)
Y57	前手錠全裸像	(大塚啓子)
Y58	股間縛開股の絵	(絹川文代)
Y59	聖壇のさし者	(絹川文代)
Y60	エビ責めの表情	(絹川文代)

い光の下で見たら、一帯に桜色し、そして赤紫のミミズ脹れが無残に綾をなしていることを識り得たに違いない。

ムチはなおも振り続け、鍛え抜かれた睦子の腕が疲労で硬直してしまふまで、激しく、熄まなかった。睦子は頻りに額の辺りを拭う。拳を握った手の甲で、ゴシゴシ、男の子のように振舞った。意識の乱れかけたチエが、皮の激痛に思わずのけぞって上げた視界で

は、あふれ落ちる涙で睦子の頬がベトベト光って見えたのだ。吊り上げられた両手に対して直角以上にガツクリ首を折ってしまったチエを、近寄ってあごに手をかけて覗き込んだ睦子の面上には悲哀が満ちていた。

息も絶え絶えに横たわるチエを抱き締めて、睦子は声もなく泣き入っていた。

(未完)



話 の 屑 籠

△緊縛モデルの素顔▽

辻 村 隆

縛り小説ともいい得る、大阪新聞連載の、角田喜久雄作「恋慕奉行」が東映で、佐々木康監督の許に愈々撮影にかゝった。片岡千恵蔵、東千代之介、長谷川裕見子、大川恵子等による推理時代劇と銘打っているが、果して原作がどの程度まで生かされているかが愉しみである。全編、縛りに終始するこの伝奇物語が、下手な脚色によって、縛り場面を制限したら、これはもう、気の抜けたビール以上で、後には何も残らない駄作になってしまうに違いない。

事実、角田氏は、小説の筋そのものより、

縛りのシーン毎の雰囲気や描写に、物凄く力を入れているので、恐らく原作者の意図も、縛り場面をカットすれば、お話にならないと考えておられる事だろう。

松竹のお盆映画、伝七捕物帳の「幽霊飛脚」が縛りを割愛している事によって、如何に面白くなかったか、その最もよき例である。

殊更に縛りを強調する必要もないが（新東宝は、むしろ殊更の方——）、殊更に縛りを敬遠するにも当るまい。必要があれば、可成り強烈なリアルなものを堂々と振ればよいのであって、変に気兼ねするからこそ、反って

変な目で見られるのではなからうか——。

編集部へ私の気付でS氏の日記帳が送られて来たのを、転送して貰った。

一九五八年の元旦から克明に綴って、十月七日で日記は一杯につまって終っていた。

この日記を発表しただけで、結構サジストの告白になると思ったが、他人の秘密を勝手に誌上にも掲載出来ない。二晩に亘って読破したが、一寸紹介すると、S氏は五十六歳、奥さんは後添えて二十九歳と、ざっと倍程も令の違う御夫婦である。先妻に女の子供二人

あつて、長女は養子をとって別居。二女も嫁ついで、御夫婦だけの気楽な生活で、今の処株と去年停年の時の莫大な退職金で暮しておられ、現在は無職との事である。

正月冒頭の感想に、

「吾、亦、人生の年輪に一つ輪をかけたなり。若き女房を御する事、豈夫難事ならん哉。貝原益軒の養生訓によらんとすれば……中略……豈悲しからずや。須らく嗜虐に惑溺して以て是に代うべし。惜しむらくは雅妻只管こいねがわず、何ぞ知らんこの愉しみを。」

と仲々愉快なことが書いてある。S氏に悪いが、二、三、引例させて貰う事にする。

『×月×日、暑くなし寒くなし、彼岸近し。

(前略)……昨夜炬燵除く。めっきり春めきたり。千恵に誘ひしに諾。『鍵』に真似て長女より借受けしカメラにて、千恵を撮す。魂胆なれど、現像如何にすべきかと、ハタと弱りぬ。何時か陽の目みる日もあらんと心に定め、床柱に湯文字姿の千恵を縛し、猿轡嵌めし姿、愛読の雑誌の口絵写真に勝るとも劣らず。次いで両脚を押し上げ、木刀に足を添え堅く縛りぬに、千恵の瞳、黒く輝きを増し妖艶いわんかたなし。無我夢中にカメラを構えぬ……(後略)』

『×月×日、雨、梅雨の近きを思わせる。午前十一時、起床。近來、日毎に懶惰なり。

千恵、腸の蠕動運動弱りたる為か、茲五日來、通じなし。今こそ浣腸の時機到來と、千恵に説くに諾也。すぐさま最寄りの薬局に走らしめ、イルリガートルを購いさせしに無しとかや。誠に遺憾の極みなり。己むなくエネマシリンジを漸やくにして買求め、温水にグリセリン若干を混入せしめ、約一升程の溶液を作りぬ。羞恥に煩染める千恵を急ぎ立て動かぬ様にと、うまき理窟つけて、両手を前にて合掌に縛し、その縄尻を引きて俯向に両膝を立てさせ、膝間に両手を引きて、余り縄で両脚に結び終る。浣腸に最も適せし姿勢なりと独り悦に入る。

約一升の温水、見事、完了。千恵の腹部は略々、妊娠四、五カ月の如く膨れる。便意忽ちなり。依而、合掌縛りの儘、後架に追う。千恵の羞恥極りなし。』

『×月×日、快晴、火曜日。

兼ねて試みんと欲せし野外行実施。千恵を首縄、菱形縛りに緝々と縛し、歩行困難ならざる状態に置きて、両手のみ自由を

与う。一張羅、着け終れば外見、更に異るところなし。帯は強くしめ上げ、緊縛の強からん様、仕組み終る。

裏庭より出で、五丁許りの小丘を一廻りせんとす。千恵の歩行ごちなく、そろ／＼歩む。この着物の下、緊縛のありと知る者果して有りや否や。数刻にして漸やく吾が家に辿り、直ちに衣を脱せしに、縄目いやが上にも強くしまりにしまりて痛々しさ、いわん方なし。縄を脱すれば、くっきりと白き肌に縄目跡を残して、その赤味、錦上華の趣き有り。うるんだ瞳は、吾に何を求めんと欲する呵。いわず語らず、意自ら通ず』

『×月×日猛暑激し、豊作ならん。

吾、越中褌のうたゝね姿を、千恵、野蠻なりと笑う。越中褌の便利さを知らず哉、君——。近來のパンツ如き、下の下なり。第一脱する手間入らず。忙中閑に、咄嗟に便利なり。

涼をとるに二人暮しはこよなく都合よし。千恵を前栽の松の根元に荒縄にて縛し、水道より十米許りも長々とビニール・ホース引き伸して、はい然と人工雨を妻の頭上より降らす。ホースの先を指先にて絞るに水勢強くバ

シ／＼と音を立て、千恵の全身を打つ。白き肌、漸時に赤く染まりて、長き黒髪は肌に纏わり付き、顔面に乱れて、凄艶そのもの也。二人きりの世帯、風呂焚く手間省け、実益と趣味の一石二鳥の避暑法といわんか——代りて、小生、人工雨に打たる。これで縛って上げましょうか、などと荒縄を差し出す千恵の戯れ、いとしさ弥増す思い』

『×月×日、晴、相変らず暑し。』

千恵を相手に縛り戯れる折しも、長女の来訪あり。大いにあわてふためく。玄関の錠おとせしに長女裏口へ廻り来て、お父さん／＼と大声にて喚く。急いでは念入りに縛りし千恵の縄目、容易に解けず、遂に庖丁にて断ち切る。愛惜措し能わざりし縄ともお別れ。

漸やく形整のえ、玄関を開けしに、長女のげんげなる顔付、困りたり。

況してや、千恵、顔面ほてり、夏の薄着とて、手首の縄跡蔽い隠す術もなく、ほと／＼弱りいりたり。長女にサイダー運ぶ小生に、節子愈々不審げなり。いかでか、子に知られざらん吾がさがを——。指を折りて数うるにうら盆の前日なり。長女帰り来るも無理なかりけるに、何ぞ先妻の供養すら忘却の彼方に

忘れ果て、千恵と戯れる吾れに、これも或いは亡妻の戒めならんか——。心すべき事なり。

想えば生臭き今日この頃なり。』

× × ×

S氏の日記を礼状と共に叮嚀に返送したら折返し、返事と共に、御夫婦の写真一葉及び、多分、奥さんのであらうと思われる後手縛りの写真とが同封してあった。何とか手廻を求めて現像、焼付したと見える。奥さんは渡仏した岸恵子によく似た人だ。ポリウムはないが、この端々しさのうちに芯のある身体が、S氏にとっては何よりの宝なのであらう。

「話の肩籠」の外、余り書かないが、どうした事か、昔日の様にドン／＼と発表して欲しと添書してあった。浅薄菲才の私にとって、耳の痛い言葉である。

日記や文には書けても、面と向えば仲々喋べれぬのが人情である。一度S氏に逢いたいとは思ふが、逢わぬうちが花で、逢えば反って氣拙いかも知れない。

× × ×

八ミリ映画はブームに乗った感じで、益々盛んになるのに、箕田編集長も私も、八ミリ

の方は近頃トンと御無汰沙勝ちである。

最近モデルを撮りに行っても、八ミリの方は全然持参しなくなった。所詮、映画は動、カメラは静で、両方撮ろうとする事自体が無理であるし、例え八ミリで傑作を撮っても、発表する機会の渺ない今、折角モデルを使い乍ら、一人愉しむだけでは、何だか勿体ない様な気がするからである。

先日の大塚嬢の泥ンコシーンなど、又、手錠で引張られて行く連続シーンなどは、八ミリに恰好の構図で、今更一寸惜しい気もしないではないが、諸氏の眼を愉しませた方が矢張り功德になるだろう。

それに、八ミリではフィルムを、いちいちサクラなりフジなどへ送るのが煩わしく、私達のハイド氏の面を曝け出す様で、そんな事でもこの所、遠ざかり勝ちである。

同好者相集い、八ミリ映画の観賞会でも開く機会があれば話は又別であるが……。

分譲出来る様になるのは何時の日の事か。

× × ×

「SADO特集号第二号」の反響からか、最近、又私宛への「モデルの素顔」を続けて書いてたらどうかとの御便りが多くなった。

私の「緊縛モデルの素顔」が昭和三十年の

三月号から始まって、書き続けて行く筈の処不幸にも五月号で休刊の憂目に逢い、その時編集部へ送っておいた続稿も、遂に陽の眼を見ずに終わったのは、今更乍ら返す／＼も惜しいと思われる。結局三月号で「川端多奈子」と「杉美美」。四月号で「川辺砂登子」と「伊吹真佐子」。五月号で「村田那美子」「坂口利子」とモデル嬢六名の紹介の儘、未完に終ってしまった。

私は引続き、「中富綾子」「萩千恵子」「春日ルミ」「雲井久子」の四人のモデルの素描の稿を送り、これが六月号、七月号に掲載される予定になっていた。

箕田氏は当時の原稿を、大切に保存されてはおられるが、あれから四、五年も経過した今となつては、モデル諸嬢も随分交つたし、それを発表して見た処で、既に旧聞に属するので、潔く機打ち、「話の肩籠」の合間合間に、最近誌上を賑わしている、モデル諸嬢について、そのラインアップを書いて見たいと思う。

彼女達のプライベートの、許される範囲内に於て深く掘下げて紹介して見るのも亦、諸賢にとって、愉しからずやではなからうか。

愛川悦子さんについて。

再刊以来、嘗ての「川端多奈子」に変わって、最も誌上を飾ったのが愛川さんである。

昭和三十三年の六月。初夏の太陽がアスファルトに熱い陽を投げかけていた午前十一時——。私と箕田氏は、アベノのある喫茶店にて彼女と落合った。髪はショートカットであったが、彼女から受けた第一印象は、その頃流行のカリブソスタイルであった。浜村美智子のカリブソスタイルが、爆発的人気であった直後のことで、私は早速、彼女に「カリブソ」という愛称を奉まつた。事実、彼女の体からはカリブソ的な、適當のバリリズムと、程々の投げやりな挙動を感じさせたのである。今迄のモデルが、すべて苗字で呼んだのにくらべて、この第一印象は消えず、ハママラ潤落の今も、愛川さんはカリブソで通っている。

昭和三十年以来、緊縛モデルから遠去かっていた私は、その日、大いに張切っていた。ポストンバッグは十数本の縄で嵩ばって、可成り重い。

箕田氏行きつけのA旅館の一室に落付いてすぐさま彼女は裸形になった。長らく渴えこがれていた緊縛モデルが、今私の眼前で憶す

る色もなくその姿を曝した。私は思わず呀ッと思をのむ。なんと素晴らしさであろう。ポリウムある胸部、均整のとれた肢態、それにもまして腰からヒップへかけてのなだらかなふくらみ——。

既に数度、彼女を撮った箕田氏は恬淡としているが、私は思わず、ぐっと生唾のみ込む。彼女とは初対面に、「やあ——、よろしく」と一言、言葉を交したに過ぎない。それから、ずっと口をきいていない。私は少し震える手で、バッグの縄をソロ／＼と取り出す。平然と彼女は、物おじしなないで突っ立った儘、私の動作を見つめている。

カメラの一切の準備は整った。

——久し振りに構成をやってもうからね箕田氏は私に笑いかける。私は怯々とカリブソに近附くと、

——若し痛かったら、遠慮なくいって下さいね。と声をかけて彼女の手に縄をふれた。無言でうなずいた儘、カリブソは両手を後に廻す。物凄く柔軟な腕だった。両手を後に縛って、ぐいと持上げると、いくらでも曲る。肩胛骨に指が届く程両腕を引き上げて胸に廻し、型通り縛って行く。また／＼間に箕田氏

のフィルムは一本を撮り終っている。私も間隙を縫って撮る。次々と変るポーズが、どれも型に嵌って素晴らしい一言に尽きる。

——彼女、どうやらマゾの様だから、相当強烈なものでも辛抱する様だよ。思い切ってやっても構わないだろう——。

縛られて転がっている彼女の顔は無表情だ——。その癖、その姿態は妖しくうごめいている。

この無感動さはどうであろう。粧える非情が、反って激しい迄に、妖しい構図を幻想させるのだ。

昭和三十三年六月号、掲載の口絵フォト「三味線」は、私の構成によるものだ。近代的な感じの女に、古風な三味線の配合と長襦袢の乱れが、反って非現実の美しさを浮彫りにしている。

豊富な胸元を縄で引き絞って、尚更に強調させ、異常な迄の海老責めの強烈な縛りにも彼女は喘ぎ乍ら、一言も止めてくれとはいわなかった。

数時間が瞬く間に過ぎて、殆んど休憩らしい休憩もせずに、私は鬱積されていたものをどっと一時に吐き出す思いで、次から次へと飽く事もなく縛りを続けた。

縄跡が、くっきりと両手首に残り、胸が縄目で赤くなっているのにも構わず、彼女は終ると、さっと見仕舞をした。

カリプソは終始無言に近かった。まるで喋べるのを懼れてでもいるかの様であった。縦横に巻きついた縄を、ぐいと強く引き絞って両後手の縄につないだ刹那、ウーツとうめいて、一言何か私にいいかけた様であったが、それ以外、逆に言葉らしいものには接しらずに終りを告げた。

——全然、喋べらぬ娘だな——。

私は些か無視された気持で、夕食を共にし乍ら箕田氏に問いかけた。

——さあ、そうでもないが、或いは喋べると幻滅を感じるかも知れんよ——。

——どうして？……

——大阪の河内の言葉が丸出しなんだ。それを自分でも心得えているからだろう。併し大体に口数の少ない娘だけだね。

箕田氏との会話中、私はカリプソの凡そのラインアップを知る事が出来た。彼女に興味をもった私が、強いて聞き出したといった方が当を得ているかも知れないが——。

大阪府下、北河内。四条畷といえば、楠正行で有名な処だが、鄙びた田園都市ともいい

かねる河内平野の小つばけな町だ。

——自分では、北大阪の方で洋裁店の下縫いをやっているといっているが、あのスタイルでそう思うかね。

——さあね。だけど、案外、大人しいじゃないか。何しろ、あの神妙さは又と得がたいおあつらえのモデルだね。上手く仕込めば、川端の再来だよ。私は、ひとしきり心の昂ぶりを覚え、次回を箕田氏に強要していた。

× × ×

私は前後三回許り、愛川さんを構成した。臘涙の激しさは今でも、まざまざと臉に残る程の強烈さであった。

最近、音沙汰がないと思ったら、彼女は大阪の戎橋詰のアルサロ「オアシス」で働いているそうだ。あの無口さで、どんな客扱いをするのかと、フト可笑しくもなるが、彼女の店での名前は知らない。純情な娘であったが、落ちて行く処へ落ちた様で一沫の淋しさは禁じ得ない。会者常離の例え、何時迄も偶に行う撮影だけに引っ張ってもおけない。荒稼ぎをし出すと、モデルなんかおかしくて……となるかも知れないが、頓に豊満になりつゝあった愛川さんを、今一度心行くまで縛って見たい気もする。

(完)



マゾヒズム百景

馬場好男

第25景 日常の生活から得た

マゾ

私の会社で、課は違うが、よく伝票やその他の書類を持ってくるので顔なじみのM子と云うのがいるが、これが背はそれほど高くないが、一寸肥っていて六十七、八キロ（十八貫）は楽にある身体をしている。年は二十三才らしいが、顔はマアマアと云つた処。身体を通り至極、健康そうで、肥っているとは云え、張りきって弾力のある身体を明快な性格そのままに社内を毎日かっ歩している。そのM子が、書類室のロッカーをあけて何

か探している時、ちょうど私がその背後を用品で通つたのだが、書類棚が並べてある処なので、その通る処が非常にせまく「一寸、ごめんよ」と云いながら私が、身体を横にしてM子の背中に身体を合わせる様にして通りすぎようとしたのだが、その時、探し求めた書類があつたらしく、身体を前に折る様にして腰をかめたので、M子のつき出たおシリが私を、ぐんと押しつけたのだ。

私は背中の書類棚とM子の間に、ぎゅうと挟まれた恰好になつてしまった訳だが、M子は急いでとびのいて「あら、御免なさい。痛くなかった？」と謝った。勿論、私の方は別

に痛くも何ともないし、感謝したいくらいで怒る理由は全然ない。

「うゝん、大丈夫だよ」と云つたが、そこは年の功で？（彼女より）

「でも、よかったよ」

「え？ 何が？」

「横からおしつけられたから何んでもないけど、上からMちゃんにおさえつけられたら、つぶれてしまうからさ」

「まあ、ひどい。失礼しちゃうわ」

M子は私の冗談に口をとがらせたが、「じゃ、ここへ遣いつくばんなさいよ。私が馬にして、ぎゅうぎゅう、つぶしてあげる」

「ウワ——大変大変」

私は大げさな身振りで、そこから逃げたが後で「ハイ、それでは馬になります」と冗談の様にその場に這えばよかったと一寸、残念に思った。書類室は誰もいなかったのだし、こうしてみると年の功も余りアテにならなかったと云う事か。

× × ×

ひどく雨の降ったあと、夏の夜空はもう星がキラキラ光っている。

私は家の近くまで帰って来て、商店街の通りから暗い横道に曲った。この住宅街の暗い道をすぎると、すぐ家につく。ふと気がつく。と私の目の前を派手な洋服を着た若い女性が歩いていた。夜目にも短いスカートの下の足がきれいに見えている。私は、この女性を追い抜くべくスタスタと歩いていったが、ちょうど追い抜こうと並んだ時だった。かすかに甘い女性の香を鼻に感じて、いい気持ちになりすぎたのか足許の水たまりに気づかず、勢よくパシヤンと足をふみ入れてしまったのだ。

「あっ」叫んだのは私より、この女性が先だった。ハネが、かゝつたのだ。

「あっ、すみません」瞬間だが全く私は恐縮してしまった。

女性は身体をのぞけらせて、自分の足許を片足を後に折りまげてのぞいた。

この時は、私は全く反射的にサッと自分のポケットからハンカチを出すと、急いで彼女の足許にうずくまった。

「どうも申し訳ございません。つい、あわてたものですから、とんだ事をしてしまいました」

私は、そう云い乍ら彼女の足を（素足だった）ハンカチで拭った。靴の汚れを手をかけた拭き出すと

「あらいゝんですよ。大した事ありませんから」

と彼女は、あわてゝ私の手を押さえようとした。

「本当に、どうもすみません」

私は、それにひるまず彼女の足を抱きかゝえる様に、丁寧な泥のハネを拭き、必要以上にその美しい脚を拭いたのだ。

「もう、いゝんです。却ってすみません。ごめんなさいね。ハンカチを汚して」

彼女は盛んに恐縮し乍ら、私のなすがまゝに足を拭かれていたが、私が立上るとニコニコ微笑んで又、謝った。

「貴方の方は大丈夫でしたの」

「いや僕の方は自分でやったことです。から。じゃ、失礼します。どうも、すみませんでした」

と云うと私は家の方に向ったのだ。

歩き乍ら私は、そのハンカチを口に、しながら彼女の足に接吻する様に唇をあてゝいた。そして彼女の足許にひれ伏す様にして足を拭いても、それが別に何でもなかった今の動作が、何だかおかしくも感ぜられたのである。

× × ×

従妹が遊びに来ていたが

「ね、お兄さん。これ、みてよ」

と足を出す。見ると水虫がひどい。

「かいくて、たまらないワヨ」

「女のくせに水虫が出来るのは変だな。僕をしろよ。水虫なんて全然、知らないよ」

「女だから出来ないなんて決ってないわよ。一種の流行よ。お兄さんは鈍感だからよ。でも困るわ、だんだんひどくなるので。いゝ薬ないかしら」

「そんなのは簡単さ。美っちゃんが早く結婚して旦那さんにキスしてもらってしろよ。すぐ直っちゃうよ」

「嫌だア、そんなの。ろくなこと云わないわ」

ね。じゃ、お兄さんが直してよ」

従妹は親戚乍ら美人だと思っっている私の前にニユッと、すんなりとのびた脚をつき出した。

「よし」

私が、スッと唇を足の甲につけようとする

と

「ハハハ」

と男の子の様に笑って足をひっこめると、

サッと立上って逃げていった。

「キスする相手が違うんじゃない？」

私は苦笑してしまつたが、ひよっとしたら

彼女は私の性癖を、うすうす知っているのではないかと思つたりしたものだ。

× × ×

海辺は全く大賑いだ。銭湯の混んでいるこ

とを芋を洗う様だと云つたが、現代の海辺がこれを表現している様だ。若い男女が青春を謳歌して真夏の太陽の下で躍りはねている。

ぐれん隊なるものがなかつたら本当に健全な平和な理想郷だと云えるのが夏の海だ。数人の男女のグループが沖に近い処で泳いでいるのをみて、私は思わず微笑んだ。

一人の男が、長い板の上に腹這いになって両手で水を掻いているのだが、その背中にはハッラッとした姿態の美しい女性が馬のりに跨って、キヤアキヤアと騒いでいるのだ。

別の一人が板をおさえて泳いでいたが、背中に跨っている女性のうしろに、これも赤い水着に包んだ若あゆの様な身体で跨り乗られ

た男の身体は、板を持っても二人の女性の重みには抗しきれず、ぶくぶくと沈んだが

すぐ浮き上って全く愉快そうである。前の女性が無邪気にユラユラするので、段々男の首の上に跨ると、ブルッと男は身体を横転させて、自分の身体に馬のりになった女性二人を海中にお

としてしまった。私はこれをみて自分もそうして遊びたくなつたが、私の場合はどうしても自分のマゾを意識するので、これが出来ないのだ。恐らくマゾでないこの男性は明るい

太陽の下、衆人環視の中で平気でこれが出来るのだ。何でもないことが意識すると、おかしくなるから妙だ。マゾも健全に陽の目をみたいものだ。

新作『血紅使用切腹フオト』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

女性『切腹風景十二態』

(9×13センチ)印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル

大塚啓子嬢

略号(せふ)

禪美切腹

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

女性自刃三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

切腹のプレイ

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

豊麗切腹三態

大手札判(9×13寸)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

本誌百号突破記念

懸賞募集原稿入選作品

乳房に火をつけるな

最後の激突

(最終回)

藤 木 仙 治

予告の電話

——リリリリリリ！……

廊下の電話が、ふいに、けたたましく鳴りひびいた。

庭さきに立っていた星島大五郎は、ギクリとして肩からふりかえった。

(きたな！……)

大五郎は、その予感に緊張する。顔が硬くなった。しかし、子分たちの手前、わざと頬に微笑をうかべて、庭から廊下にあがった。黒い受話器をにらみつけ、それから手をのばしてそれをつかむ。

——もし、もし……。

同時に、低い声が遠くからひびいてきた。まぎれもない、北条哲夫の声である。

「哲夫か。もうそろそろ、お前が現われる頃だと思って、待っていたんだ。かわいい女が二人、首をのばして待ちかねているぜ」無理に落着きをみせ、せせら笑いながら大五郎はこたえた。

「——そうですか。すると、美佐と真紀子はやっぱりあんたがたの網にさらわれていたんですね……」

箱根のホテルにいた哲夫は、桃華からの急報をうけて、美佐と真紀子の身に、また新しい危難が及んだことを知ったのだ。

(星島組の奴らだな！)

ピーンと感じ、電話でさぐりをいれた哲夫であった。

「哲夫、お前いまだどこにいるんだ？」

大五郎がきいた。敵の現在の位置を知ることが、迎え討つ側にとって、重要なことである。

「——ウフフフ……」

と、からかうように笑って、哲夫はその問いには答えず、ガチャリと電話を切った。

美佐と真紀子が、大五郎の邸に監禁されていることがわかった以上、哲夫にはもう言葉をかわす必要はない。

決闘、そして二人の女を救いだすこと——それだけである。

やくざの言葉でいえば、なぐりこみ、をかけるだけだ。

数々の曲折を経てここまでできたが、とうとう最後のどたん場まできたのだ。

「おい、哲夫、おいッ……」

もう返事はない。腹の中で舌うちして、大五郎は電話をおいた。

足を踏みしめて廊下をもどり、縁側に立って中庭を見おろした。

星島組幹部のズル松、チビ啓、野呂玄の三人が、不安と緊張のいりまじった顔で、大五郎を見あげる。

「おい、みんな気をつけろ。いまの電話は哲夫からだ。いよいよ油断はできねえぞ」

大五郎が一同を見渡しにいった。

「へい！」

血走った眼でうなずく子分たち。

その男たちの背後には、白木の十字架が二本並んで立っている。

そして、その五寸角の柱に、声もなく、くくりつけられている美佐と真紀子。

熱れきった肉体をもつ美貌の人妻と、清純な乙女の肌が、午後の太陽を浴びて、まばゆいほどの白さで光っていた。

こんなやくざどもとはかわりのない一般の市民が、もしこの光景をのぞき見たとしても、おそらく自分の眼を疑うであろう。

市民の平和な生活とは、あまりにもかけはなれた、無残な眺め。時代錯誤もはなはだしい、残忍な十字架の人柱——。

しかし、白昼夢とよぶには、あまりにもなまなましい肌のあえぎであった。

左右の腕は、大きくひろげられて水平にのび、その手首は背後の横木にしっかりと縛りつけられ、固定されている。

みるからに白く、やわらかそうな胸と腹部にも、むごたらしい数条の縄がかけられている。

ギリギリギリと、肉に喰いこみ、縄目が見えないほどの力で、背後の柱に縛りつけられているのだった。

「む、むむむ……」

二人とも声がだせないのは、猿ぐつわを噛まされている為である。左右にのびた両腕が、だるくなっていた。縛られてから三時間はたっている。

「むむむ……」

声にならない悲鳴は、咽喉だけがせつなくふるえてうめくのだ。

十字架に手足をくくりつけられ、無防備な全身をさらしている羞恥。しかし、二人の女にいま襲いかかっているのは、羞恥よりも苦痛であった。

時がたつとともに、しめつける縄目のきびしさは、死にまさる苦痛だった。



両膝がぬけるようにだるいのだ。足の力をぬけば、くぐられた手首に全身の重みがかかり、骨がきしむ。

しかし、この女二人のうめきにも、好色野卑の眼をそそぐだけの男たちであった。

「——咽喉がかわいたな。おい、千絵子、ビールでも持ってきてくれ」

大五郎が、縁側越しに奥座敷にむかってどなった。

「……」

しかし、返事はなく、娘の千絵子の気配もなかった。

「しようないやつだ。うちにじっとしているといっているのに……」

大五郎は、にがい顔でいった。

「なんなら、あつしがビールを持ってきましようか？」

ぬけめなくチビ啓が口をだし、身軽に庭石を伝って、勝手口へとんでいく。

縄の鞭

派手好きで遊びざかりの千絵子が、いくら大五郎から禁足を命じられても、うちに閉じこもったままで、静かにしていられるはずはなかった。

哲夫や王龍元一派の監禁から解放され、自分の邸にもどってきてから、すでに十日もたっている。

しみついてた縄の痕も消え、責めさいなまれた疲労もとれた。すると、ムズムズと遊び癖がでてくる。野放図気ままに育ったやくざの娘だ。恐怖の記憶を忘れるのも早い。

(ひさしぶりに銀座へでて、喫茶店でおいしいコーヒーを飲んで、それから……)

自由を得たうれしさに、千絵子の胸はふくらんでいる。

父親の大五郎や子分たちが、夢中になって美佐と真紀子を十字架にくくりつけているあいだに、裏の通用口から、こっそりと脱け出した千絵子である。

かくれた外出だから、大五郎の車を使えないのが残念だった。バスで私鉄の駅まででなければならぬ。そのバスの停留所まで、歩いて十五分もあるのだ。

「こんな石ころだらけの田舎道を歩いたら、靴がめちやくちやになるけど、でもしかたがないわ」

つぶやきながら、眉をひそめて、ハイヒールをいそがせる千絵子である。

このあたり、まだ武蔵野の面影が濃く残っていて、草木におおわれた丘陵の起伏が多く連なっている。人家はすくなく、道の視野をさえぎって雑木林が点在する。

「——お嬢さん、おでかけですか？」

通りすぎた杉木立ちのかけから、ふいに声をかけられて、千絵子は思わずふりむいた。

「あッ！」

口のなかで小さい叫びをあげ、千絵子の足が、ぎくりと立ちすくんだ。

暗い杉林のなかから現われた男が、ゆっくりとした足どりで近づいてくる。

北条哲夫であった。

口もとには、つめたい微笑をただよわせている。

「哲夫！ どうしてこんなところに！」

千絵子の顔から、血の気がひいた。身をひるがえして、逃げようとした。

「おっと、待ってくださいよ、お嬢さん」

哲夫の手が、すばやくのびて、千絵子の腕をつかんだ。

「なにするのよ！」

わめいて、千絵子は反抗した。声をあげても、他人が聞いてくれる場所ではない。

哲夫の手は、千絵子の腕を、ぐいっとなぐりあげていた。

「あッ、痛ッ！」

千絵子のからだは、道端からそのままズルズルと木蔭にひきずられた。

「静かにしてくださいよ、お嬢さん。あばれると痛いよ」

草むらの中で、哲夫は千絵子の脇腹にナイフを押しつけた。

その鋭くとがったナイフの先が、千絵子のスカートの上から、脇腹のあたりをチクリッと突いた。

「あッ！」

千絵子の全身から、反抗の力がぬけた。

——復讐に狂ったキチガイ犬だ。てむかえば、ほんとうに突き刺されるかも知れない……。千絵子の皮膚に、恐怖の粟が生じた。

千絵子の右手首を背中にねじりあげたまま、哲夫は足もとに落ちている荒縄をひろいあげた。ワラで編んだ一メートルばかりの荒縄である。

「お嬢さん、すまねえが、そっちの手もうしろにまわしてもらいた

いんだ。あばれられると困るンでね」

「……………」

いやだといえば、ナイフが脇腹を刺す。千絵子は観念して両手首を背中にまわした。

哲夫は、ひろった荒縄で、その手首をギリギリと一つに縛り合わした。

「ああッ！……………」

ザラザラした荒い感触が、手首に容赦なく喰いこみ、千絵子は身をよじった。

「騒ぐんじやねえ！」

哲夫は低い声で叱咤し、ぴっちりともるいタイトスカートの臀部を、ぴしリッと平手で叩いた。

「ううッ」

千絵子は、前のめりに膝をついて、唇を噛んだ。くやしい。

(パパのいう通り、家におとなしくしていればよかった！……………)

後悔が胸を襲ったが、しかし、哲夫がまさかこんなところにひそんでいようとは、誰が想像できたであろう。

「さあ、お嬢さん、一緒にお邸へいきましよう。お父さんお待ちかねだ……………」

千絵子を縛り終え、縄尻をつかみなおして哲夫がいった。

「むむッ……………」

背中にまわされた腕が、ひじからふかく折れまがり、手首はただかと肩のあたりまで縄にひかれて吊るしあがる。

(星島一家へなぐりこみ寸前に、千絵子を捕えたということは、まったく天の助けだ。こいつは、ツイてるぜ……………)

哲夫は、片頬をひきつらせて不敵な微笑をうかべた。美佐と真紀子を大五郎の手におさえられ、不利だった条件が、これでだいぶ立ち直ったのだ。

「さあ、歩いてくださいよ、お嬢さん」

そのていねいな言葉とは逆に縄尻とった哲夫が、千絵子の肩を、うしろからどんッと突く。また肩から前にのめって、千絵子は一步を踏みだした。

哲夫は、木蔭伝いに千絵子をひきたて、次第に大五郎の邸へ近寄っていく。

(誰か通行人でも……………)

と千絵子は必死になって眼で求めたが、もともと人影のすくないこのあたりだった。

「キヨロキヨロするんじやねえよ」

縄尻が、ぴしりッと鳴った。まるで、馬か牛でも追うような調子である。痛くはないが、屈辱的な縄鞭の音だった。

千絵子は、歯を喰いしばって歩いた。

拳銃を捨てろ

「きたッ、きましたぜッ、哲夫が！」

さけんだのは、樹の上で見張っていたチビ啓だった。この邸に近づいてくる者の姿が、堀越しに見えるのだ。

「なにッ」

大五郎が、眼を光らせてふり仰いだ。

「だけど、あッ、お嬢さんが一緒だ。おや、なんだかようすがヘンですぜ。あッ、縛られてる。お嬢さんがうしろ手に縛られて、哲夫

の奴にひきたてられてくる！」

チビ啓が、けたたましく樹上から報告をつづける。

「なに、千絵子が！」

大五郎は愕然となった。

（くそッ、あのバカ娘が！……）

あれほど外へ出るなといっているのに……大五郎は、顔をゆがめて舌うちした。

それにしても、わずかな隙に便乗してくる哲夫の抜け目なさ、すばやさに大五郎はたじろいだ。

だが、いまさら逃げることも、かくれることもできない。応戦するのだ。敵は一人、こっちには四人いる……。

「みんな用意はいいか！」

「へい！」

大五郎が頼みとする子分三人は、緊張のためにかすれた声でこたえる。

顔が青ざめ、拳銃を握る手がこきざみにふるえている。暴力が売り物のやくざでも、いざ命のやりとりの直前には、殺気をはらんだ緊迫感におののく。

身の軽いチビ啓だけは、樹上に身をひそめたままだ。

「きたぞ！」

千絵子を先にひきたてて縄尻をとった哲夫がその後からつづく。

邸の周囲にめぐらせた高い石塀の、その裏手に着いた。

通用口をくぐる。

庭をへだてて、母屋は雨戸をぴたりと閉ざして、死んだように静まりかえっている。

「美佐と真紀子は、どこにいるんだ？」

哲夫が、うしろから千絵子の耳もとにささやいた。

「中庭よ」

千絵子は、からだを硬直させてこたえる。

「よし……」

哲夫のからだは、さらに千絵子の背後に密着した。こうしていれば、どこからも敵の不意討ちをうけることはない。へたをすれば千絵子があぶないからだ。

この邸内の事情は、よく知っている哲夫である。三年前までは、大五郎の片腕の部下として、よく寝泊りにきたのだ。

塀の内側にそってまわりこみながら奥へすすみ、やがて母屋の角から中庭を一望するところへでる。

「おおッ！」

哲夫は、あつけにとられ、凝然と立ちすくんだ。

庭のまんなかに立っている二本の十字架。そこに、肌を噛む縄目もむごたらしく、ギリギリとくくりつけられている二人の女。

そして、その十字架を楯にして、背後には大五郎とズル松、野呂玄が、腰を低くおとし拳銃をかまえて眼を光らせている。

「くそッ、なんてひでえことを！」

哲夫が、犬のように歯をむきだしてうめいた。

「ひどいのはおたがいさまだぜ。お前もおれの娘をずいぶん痛めてくれたからなア」

大五郎がうそぶいた。

哲夫がこの中庭に姿を見せたたん、拳銃をぶっぱなす予定だったが、千絵子が前にいるので、それができない。

哲夫と大五郎一派は、そこから一步もうこけず、約三十メートルの間隔をおいたまま、にらみ合いの形になった。

「パパ、やめて、あたし、こわいわ!」

千絵子が、左右の肩をゆすってさげんだ。

三挺の銃口が自分に向られていては、怖えるのも無理はない。

「ムムッ、ムムムッ、ムムムッ……」

十字架上の美佐と真紀子も、哲夫の顔をみて、はげしくもだえはじめた。

頭をふり、体をくねらせてなにごとかを訴えようとする。

(やめてッ、殺し合いはやめて!……)

大きくみひらいた瞳が、そう叫んでいるのだ。

「もうすこしの辛抱だ、がまんしろ!」

哲夫が、悲痛な声をかけた。

「おい、哲夫、これを見ろ!」

ズル松が首をあげてどなった。

「なに!」

見ると、自分のからだを柱のうしろにかくしたまま、ズル松の右手だけが前にのびて、拳銃の先を真紀子の胸にむけているのだ。

グリグリ、グリグリ……と、固い銃口を、胸のふくらみに、ねじ

こむようにして突きつけている。

「ムムムッ、ムムムウッ!……」

真紀子は胸をのけぞらせてもだえ、そのために、土の中に埋められた十字架の根もとがぐらぐらと揺れた。

「うぬッ!」

哲夫の顔が、憤怒に紅潮した。ベルトから拳銃をひきぬくと、ズ

ル松に銃口をむけた。だが、さすがの哲夫も、そのまま銃口は固定させたまま、引金をひけない。ズル松の前にもがいているのは、肉親の妹なのだ。

「やいやい、どうしたい、さア、射てるものなら射ってみろ!」

にくにくしげに、ズル松がどなった。

そばから大五郎がニヤリとしていった。

「おい、哲夫。いくら意気込んでやってきても、どうやら勝ちみはこっちにあるようだ。さア、妹の胸に穴をあけたくなかったら、その拳銃をすてろ!」

「ばかいえ!」

哲夫がどなりかえした。

「千絵子はどうでもいいのか。真紀子を射ってみろ。そのときは、てめえの娘の命がなくなるときだ!」

「ふうん、よし、それじゃ、穴をあけてやるかわりに、すこし痛めつけてやろう」

大五郎は、拳銃を左手に持ちかえた。そして、あいた右手で、足もとに置いてある竹棒をつかんだ。

うなる竹鞭

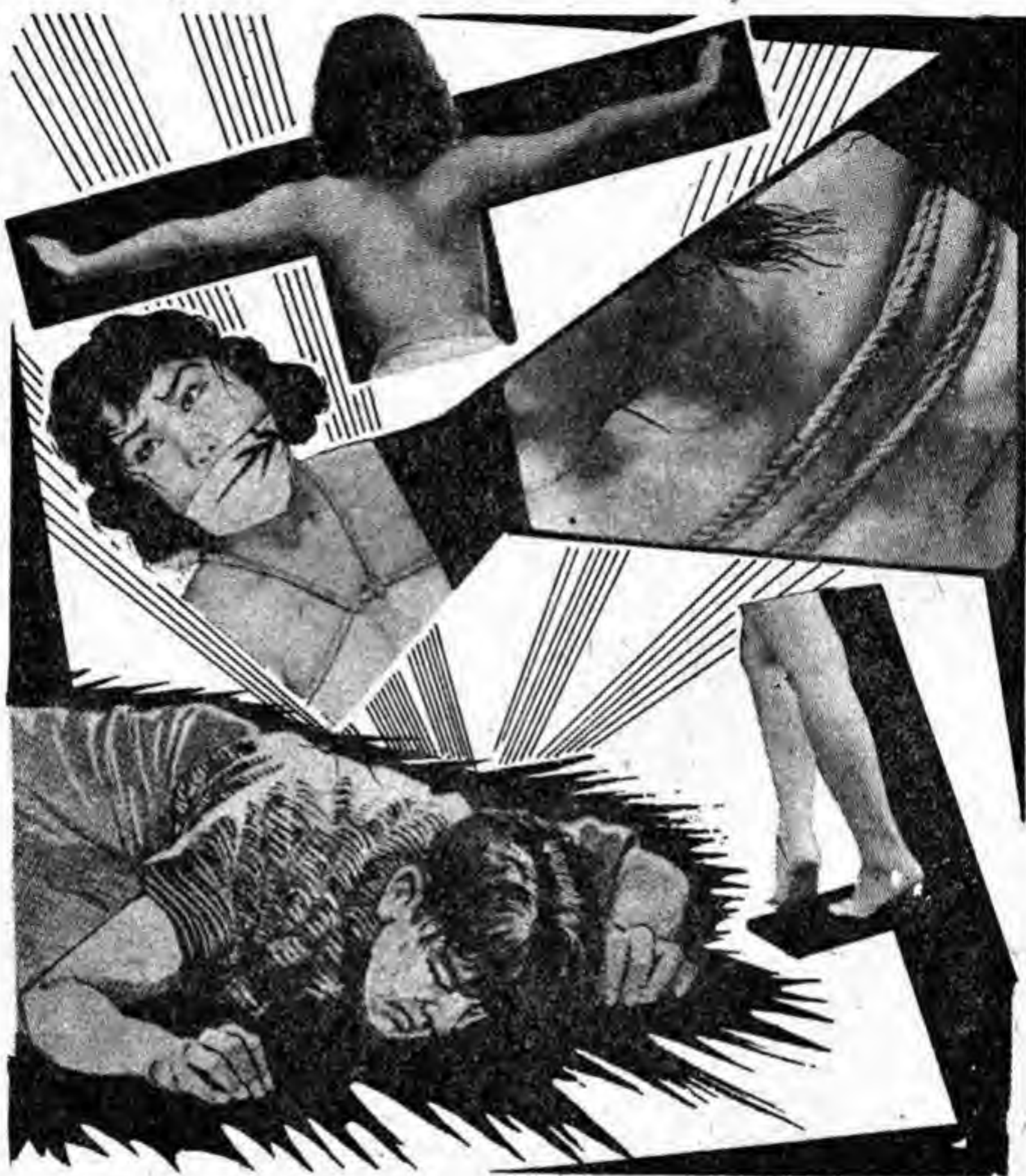
「フッフ……おい、哲夫、よく見ていろよ」

大五郎は残忍なふくみ笑いをすると、その竹棒の先端を、真紀子の縄目に、グイグイとこじいれたのだ。

「ムムムッ!……」

いっそうのはげしさで、真紀子はもだえ、体をのけぞらせた。縄にしめつけられた白肌。その肌と縄のあいだが、一ミリの隙も

なく喰いこみ噛みあっているというのに、大五郎のつかんだ竹棒は無理やりにその間にもぐりこんでくるのだ。ちょうど脇腹のところである。



すのだ。

ぐーりッ、ぐーりッ、ぐーりッ、ぐりぐりぐり……
非情の竹棒は、なおもはずみをつけて、こじりまわし、揉みまわすのだ。

「うふふふ……」
冷酷な笑いを洩らしながら、大五郎は、こじれたその竹棒を、ゆっくりとゆすりはじめた。
グリグリグリ……
竹棒の先で、胸の脇の横腹を、えぐるように小突きまわすのだ。
「ムウッ、ムムムムムウッ……」
真紀子の咽喉が、空にむいてのびあがる。これは、眼のくらみそうな激痛であった。皮膚がすりむけ、血がにじみでてくる。縄に締めつけられているだけでも苦しいのに、こんどは固い竹棒の先が、情容赦もなく喰いこんできたのだ。
しかも、大五郎の手は、まるで船でも漕ぐように、ぐーり、ぐーり、と次第に大きくゆすりはじめた。
「ムウッ……ムウッ……ムムムッ……」
真紀子の額から、あぶら汗がにじみでてきた。咽喉からも汗が湧きだし、粒が集って流れた。胸部から腹部へと、その苦汁の汗は筋をつくって肌にしたたる。
ぐーりッ、ぐーりッ、ぐりぐりぐり……

「ぐうッ、ぐうッぐうッ！」

猿ぐつわの下の口が、血を吐くようなうめきをあげた。

「うぬッ、やめろ、大五郎！」

たまりかねて、哲夫がどなった。

「うふふ……千絵子をこっちへよこして、拳銃を捨てろ。そうすれば、やめてやる」

大五郎が、得意気にうそふいた。

さすがの哲夫も、妹の苦悶を前にして、そこから一步も踏みこめず、無念の齒がみにうめくばかりである。

その気配を察した大五郎は、ますます調子にのった。

「おい、鶴松。真紀子の猿ぐつわをはずしてやれ」

頸をしやくって、ズル松に命令した。

一瞬、腑におちない顔をしたが、すぐズル松は大五郎のいうとおりにした。

「兄さん！」

口が自由になった真紀子は、あえぐようにさげんだ。その真紀子の身体に、こんどは横から竹棒がうなった。

びしりッ！——

大五郎がふりかぶって、力まかせに打ちおろした鞭である。

「ああッ！」

真紀子は、するどい悲鳴をあげた。たちまち一条の鞭痕が赤く走った。

「どうだ、哲夫。妹の悲鳴をききたくなければその拳銃を捨てろ。命だけは助けてやるぜ」

といいながら、大五郎はまた大きく腕をあげて竹棒をふりかぶっ

た。

猿ぐつわをはずしたのは、真紀子に悲鳴をあげさせ、勢いたった哲夫の闘志を動揺させるためであった。

真紀子の白い脚に、また、竹棒の鞭が、びしりッとなる。

「ひいーッ！」

逃げることも、避けることもできない十字架上である。真紀子の悲鳴は、哲夫の魂を痛烈にゆすった。

（真紀子、ゆるしてくれ！）

びっちりとそろえて縛られ、惜しげもなくさらされた脚に、二条の赤い鞭痕がつく。

「ああ、ううッ、ううッ！……」

真紀子は、獣の吠えるような泣き声をあげた。つぎの竹鞭を怖れて、きちがいのように肩をゆすり、腕をうごかす。胸をヒクヒクと波うたせる。だが、左右の手首は大きくのばして縛りつけられ、足首にも厳重な縄がかかっている身では、どうにも避けることはできないのだ。

びしりッ！——

三度目の鞭が鳴った。

「ひいーッ！……」

真紀子は頸をつきあげ、咽喉をふりしぼって絶叫する。乱れに乱れた髪の毛が顔に垂れさがり、それが汗に貼りついた表情は凄絶であった。

「くそッ！」

哲夫の激怒は、脳天から火柱となって炸裂した。忍耐の限界がきたのだ。

哲夫の眼が殺気に光り、拳銃をかまえた。四度目の鞭をふりかぶる大五郎の胸板に狙いをつける。

一寸狙いがそれでも、弾丸は真紀子に命中するのだ。

(真紀子、ゆるしてくれ！)

引金をひき、哲夫は眼をとじた。

ブスン！——

消音拳銃の不気味な発射音が、庭内の空気をつんざいた。

「わあッ！」

大五郎は、声をあげてのけぞった。竹棒がその手からはなれた。

弾丸は胸板に命中し、真紀子は一筋の血も流れていない。

ボスを倒されてあわてたのは、ズル松と野呂玄だった。

「やりやがったな！」

唾をとばしてわめくと、拳銃の引金をひいた。

ブスン！——

ブスン！——

二発の弾丸は、哲夫の耳もとをかすめた。哲夫は、千絵子のからだを突き倒し、自分も地面に這った。

大五郎の胸からは、ドクドクと血がふきだしている。

それを眼前にして血の匂いを吸いこんだズル松と野呂玄は、カーッと逆上した。

十字架の楯から大きく身をのりだし、哲夫を狙って乱射する。だが、逆上して手もとが狂っている。いたずらに引金をひき、弾丸を放つのみであった。

反対に、大五郎を倒した哲夫は冷静にもどっていた。寝そべったまま、ひじを地上にあてがい、残る敵にむかって、ゆっくりと狙い

をつける。

ブスン！——

ブスン！——

にぶい発射音とともに、二発の弾丸を、ズル松と野呂玄の咽喉もとにぶちこむのだ。

二人のやくざは、声もなくのめり、地上を血にそめた。

最後の一弾

「真紀子！美佐！……」

はね起きた哲夫は、ころがるように、二本の十字架のそばに駆け寄るのだ。

「兄さん！」

凄絶な殺人を眼前にした真紀子は、顔面を蒼白にしておののいている。

哲夫は、ナイフの刃をおこし、二人を十字架のいましめから解き放った。

「哲夫さん！」

美佐は、自分で猿ぐつわをむしりとると、よろよろと地上にくずれ倒れた。

そのまま、三人は声もなかった。

茫然自失、顔を見合わせて、ただ抱き合っているだけだった。

美佐と真紀子は、やがて、咽喉の奥から、むせぶような嗚咽をはじめた。さまざまな感情が重なりあい、もつれあい、感無量の涙だった。

二人の女の背中を両手でかかえ、哲夫は、うわずった声でつぶや

いた。

「とうとうやった！……とうとう……」

哲夫は、全身から力がぬけていくのを感じた。力だけではなく、魂もぬけていく。

張りつめていたものが、いどきに消え失せていくのだ。

東京湾の岸壁から海中に突き落とされてから今日までの三年間の出来事が、砂を噛むような索寞たる記憶となって、哲夫の胸にのみがえった。

（この日のためは、おれはいままで生きてきたのだ……）

復讐を成就した復讐鬼の表情に、しかし歓喜はなく、眼の色は灰色の壁を反射しているようにむなしかった。

勝利の快感よりも、いまはなぜか悔恨めいた憂愁が、この男の全身を包んでいくのだ。たたかいが終って、静寂にかえったこの中庭に二人の女のしのび泣きだけがひびく。

片膝を地に落として、力なくうなだれた哲夫は、数メートル背後の樹上から、一人残った大五郎方の子分が、ふるえる指さきで銃口をむけているのに気がつかなかった

（いまだ）

チビ啓は、満身の力をこめて、引金をひいた。

にぶい発射音が、樹上からななめに空気を裂き、哲夫は一瞬ピクリと背をのびしたが、やがて声もなく前にのめった。

「やったぞ」

チビ啓は思わずさけび、猿のように樹上で躍りあがった。

倒れた哲夫が、わずかに顔をあげた。

からだをねじり、右手の拳銃が最後の力をふりしぼって、背後の

チビ啓を狙った。

ブスン――

その一弾は、チビ啓の腹にぶちこまれ、彼は樹の上から、もんどりうって転落した。

「兄さん！」

「哲夫さん！」

二人の女は、悲痛な声をあげて、哲夫にとりすがった。

「……………」

唇をうごかしたが、哲夫にはもう、口をきく力はなかった。その背中からは、ふきこぼれるように血があふれている。

眼の前にうかぶ美佐の顔をみながら、哲夫は、

（とうとう、この女とは一緒にいられなかったな……）

と思った。

（愚劣な一生を過したあげく、やくざの最期は、やっぱりみじめなもんだな……）

哲夫の死相に、それが最後の自嘲めいた苦笑がうかんだ。

やがて――

美佐と真紀子は、たがいに力を寄せ合って立ちあがり、縁側から廊下へ這いあがった。

五人の男が血にまみれて昏倒している中庭に眼をやり、電話器をとると、ふるえる指で一一〇番をまわした

――終――

写真 磔

（ハリツケ） 三態 略号（はり）

大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

モデル 大塚 啓子

現代マゾヒスム芸術時評

原 忠 正

復刊第百十一項

「娘子軍の中で唯一人の男」

ジョフレイ・ランドオル記

米誌「戦場の叫び」四巻三号

五九年七月号十七頁

“ONE MAN IN A WOMAN'S ARMY”

BY GEOFFREY RANDALL

from “BATTLE CRY” Vol. 4

No. 3. Page 17.

この雑誌は、一、五、八の各月以外の毎月出る米国一流の戦記物暴露専門誌である。以前にも屢々興味のある実記らしきフィクションものを見たが割愛していた。

第一次大戦の末期、赤軍の女子部隊に捕わ

れた筆者の手記。但し、どこまで本当か判らないことを念頭に置いて頂きたい。

一九一八年八月二日、筆者は戦闘中にボルシェビキの女子部隊に捕われた。そして、戦が終わってから米国に帰った。その間の女子部隊の中での物語りである。筆者は、彼女達が頭髪を剃っていたこと、コザック兵と同じ服装をしていたこと。その中の二、三の女性と十分に愛し合い、又別れたことを語っているが、これらは恐らくは虚構であろう。如何に伝説的な旧式な戦場に在っても、こんな都合のよいロマンチックな話はある筈がないのである。それに女子部隊が頭を剃っているという事は、全員がそうであったという以上、こ

の様な記録に接した事がない。むしろ、アメリカ人らしい空想であろう。コザックと同じ様な服装は、十分にあり得ることである。私自身、全く誇張のないと思われる見聞記や旅行記、更に幾多の資料から知悉していることである。コザックの女は男の様に長靴をはき——それはコザックの住む土地の風土、氣候に由来するものである。——馬に騎る。彼女等は極めて優秀な騎手である。——これも女性の男装という様な意味はない。彼女等の穿く長靴は原始的なものであるし、又、馬に騎ることは生活の条件である。——そして男の様に踊る。——これも氣候から由来するものである。——

かくて、この実見談はその根拠は甚だ怪しいものとなって来るが、併し、女子部隊の存在は、確認されている。初期のゲーペーウーであるチェカの女士官が、捕虜を働かせて、後頭部をピストルで射って死刑を執行した例はビルリッゲルの著書にも記されているし、沼氏も言及した事がある。この赤露の女子部隊は多くの興味を中心となり乍ら、その実況を記した資料は少かった。その意味で、この読物は価値があると思われる。それから風俗上、たとえば架空であっても、男装の女に頭髪

を剃らせた例は未だ知らない。面白い着想と
いうより他ない。猶、この雑誌は女子部隊の
兵士の挿絵と、禿げ頭の女兵が、殆んど裸で
(長靴だけをつけて) ウォッカを飲み、踊っ
ている図が示されている。

復刊第百十二項

「私はカプールで女山賊に捕われ

た」 トム・ウイルキンソン記

米誌マンズ・ライフ誌七号

五九年四月号三〇頁

"I WAS A PRISONER OF FEMALE

BANDIT OF KABULH."

BY TOM WILKINSON.

from "MAN'S LIFE" Vol.7. No.6

Page.30.

米国のコロイ・アンド・ジェンセン建設
会社の技師トム・ウイルキンソンは、一九四
六年から、南アフガニスタンのヘルマンド河
溪谷での工事に従事していたが、一九五二年
バスの事故の為に同行の白人女性三名と共に
山賊に襲われた。

白人女性の一人は殺され、一人は針金の様
な細い革をより合わせた鞭で、胸部と背中を
打たれ、泥の上に蹴仆された。女山賊はウイ
ルキンソンを玩弄物と見ていたので、全部が

殺されるには至らず、救助隊に救われ山賊は
捕われた。

内容は、これも恐らく作り事であろう。し
かし、サド・マゾヒズムを刺激する場面は十
分にある。挿絵は二色版で、女山賊が、白人
女性を鞭で打っている場面を描いている。一
寸した、娯楽的な注意を惹くものと思われ
る。

復刊第百十三項

「モリノオ大尉の若い妻」

リチャード・ギャラガー記

米誌「メエル」九巻六号

五九年六月号二〇頁

"THE YOUNG WIFE OF CAPT.

MOLYNEAUX."

BY Richard Gallagher.

from "MALE" Vol.9. No.6.

Page. 20

米実話雑誌の雄たる「メエル」誌の特集で
ある。一九三九年、未だパリが独乙軍に占領
される直前、シリアのラカチアで、シカゴ市
の住民である商人、ジョゼフ・コリンスキイ
と英国船員、バーナード・ウイルソンとユー
ジン・タフトの三人は、仏軍に捕えられた。
逮捕は明らかに誤りであった。しかし、サジ

スチックな傾向を持つドイツ系の女性であっ
たクレエル・モリノオ(同収容所長の妻)が
この奴隷的な強制収容所の実権を握っていた
ために、抗弁が認められず、この女の残忍さ
の実態を見せつけられる。その中に、ドイツ
軍の進駐によって三人は解放され、モリノオ
とその妻は囚人達に殺される。

この一篇は恐らく、ダッハウ、ベルゲン・
ベルゼン、アウシュヴィッツ等の女看守やイ
ルゼ・コッホの話を経括的にアレンジしたもの
と思われる。特に、このクレエルが暑いさ
中に、決して革の乗馬用長靴しかはかなかっ
たという様な点、強制と鞭と、辱しめの関
連、特に、筆者が、長靴を、権力の象徴と見
做しているかの諸点、——この風土で革の長
靴は全く無理である。大体、ピタリした革
の長靴をはだかの脚にはいた場合、汗をかい
たら脱ぐことは殆んど不可能である。又、か
わがす為には十時間以上を要するものではあ
る。ブラジリアとブラウス、ショート・パンツ
と革の長靴という取合わせは、どうみてもイ
ルゼ・コッホの風俗である。しかし、コッホ
はポーランドにいた。——

無実の罪で、囚人を射殺するクレエル。革
鞭を持って、誇らしげに囚人の間を濶歩する

クレエル。そして、寝室でさえ、將軍に兵士の真似をさせるクレエル。それらは勿論、誇張ではあるが、私達には十分たのしめるものである。私はイルマ・グリーゼ（若しくはグレエゼ、又はイルマ、ギーゼ、何れかは不詳であるが）最近にない感動を感じて、前号に詳しくのべた。（ヒトラアの火葬場）

イルマと同じ様な女性の再現をここに見るとき、私は、何故に大衆誌がこの様な女性を描くかについて考える。それは需要が多いからである。需要者の中の半数はマゾヒストであろう。我々の共通の世界は遠く海外にも、はっきりと延びているのである。

復刊第百十四項

伊太利映画「剣闘士の返逆」

伊太利映画は、かつて「スキピオ」を又、戦後「ファビオラ」「テオドラ」等の史劇映画を世に送った。いわば、古典的史劇映画のベテランである。アメリカ映画が到底、今日の隆盛を思わせるべき何物も持たなかった当時、発明直後の幼稚な撮影器械をもって、仏、伊、独の三カ国が発表した映画の数は、おびただしいものである。そして小説の領域で、史劇が常に架空のフィクション以上の展

開とヴァライエティに富む様に、映画に於いても、この種の史劇は古代衣裳の仮面の下に現在に通ずる迫真性を持ったエロティック、グロテスク、或は美の正統的な具象を再現するのである。

この様な歴史と伝統を持った伊太利映画が現代の技術を集めて製作した史劇映画の一つが、この「剣闘士の返逆」である。剣闘士とは奴隸の中から、よりすぐった男達に、真剣勝負をさせ、大勢で之を観覧する競技に出演する選手のことである。沼正三氏がアンシクロペディックな作品「ヤプー」に於いて、この一つの変形を同じ「剣闘士」として、宮本武蔵を登場させた。しかし、あれは剣闘士の東洋趣味的なパロディにすぎない。沼氏風の変形には、むしろ宗教的でさえある白人崇拜の心理が、根強いコンティヌオとしてつづいているのである。昔日の剣闘士に於いては、屈辱に対する不満と怒りこそあれ、崇拜の念は全く見当たらないと思われる。

この映画に於ける剣闘士も亦、その例に洩れるものではない。従って、鞭は沼氏風の有難さを持たず、只苦痛を伴う強制にすぎない。しかし、実にマゾヒズムの本来の心理は、予想もせぬ、自己の意志に反した行為を、力

によって、行わされることにある。断じて、喜んで行うのであってはならないのである。

懲罰は又、同様にマゾヒストの最も喜ぶところである。特に緩慢な傾向を持つ人々にとって、自己の分身の処刑を見ることは、甚だ楽しいことである。曲馬に於ける調教、奴隸制時代の映画等が多く引例される所以である。本映画にも、約半ばごろに女性による女性への鞭打が一カットある。米映画の作り事めいた鞭打に比し、誠に迫力のある部分である。その部分の為に特に本作品に頁をさいた。

復刊第百十五項

米映画「メイム伯母さん」

＜AUNTIE MAME＞

ロザリンド・ラッセル当り狂言の映画化。原作はブロードウェイで大当たりをとったという。その片鱗がラッセルの慣れすぎたオーバーな演技にうかゞわれる。「恋の手ほどき」も十分気の利いた喜劇だったが、これはそれにもまして、気のきいた都会喜劇である。作中、南部の石油成金（フォレスト・タッカー）の邸での狩りの部分で、ライバルである南部の女性が、ラッセルに暴れ馬をあてがいその馬に乗せる処があるが、その前後二回

程、長い犬追い鞭を鳴らす場面がある。まことに美しい情緒と烈しさとの適度に混合した部分である。

復刊第百十六項

伊太利映画「口笛吹いて」

<LAUTA MANCIA>

犬と子供の物語り、伊太利映画独特のさび

しさと、現実的な温かさを持った作品である。本年八月上旬ロード・シヨウ予定であるが、子供が犬をつれて、さまよう内、曲馬団に入る。犬が芸を失敗する上、曲馬団長の妻が犬嫌いで、いじめられる。この新人の演ずる曲馬団長の妻（ラナチア・ステファン扮）はサド・マゾ好みの役柄である。私は、いわれな

く、チエコ国立サーカスの来日出来なかったシユプカ夫人を想い、ひいては、マゾツホの作といわれる。「チエコの女猛獣使い」を思い出した。連想と、空想は、サド・マゾの世界では必要な要件である。映画や演劇は只、そのヒントを与えるにすぎないことが多い。（都内ニユー東宝八月上旬ロード・シヨウ）

プロローグ

「カンチョウ」——この言葉は、妻子ある三十才の今日迄、私の心を常に占領し続けてきた。幼い日、記憶にのぼった三才の頃から、今日迄、私は浣腸器のあの魅力から離れることは出来ない。いや一生を終る日迄、私の心は浣腸器とともにあるであろう。

第一章 三才の夜

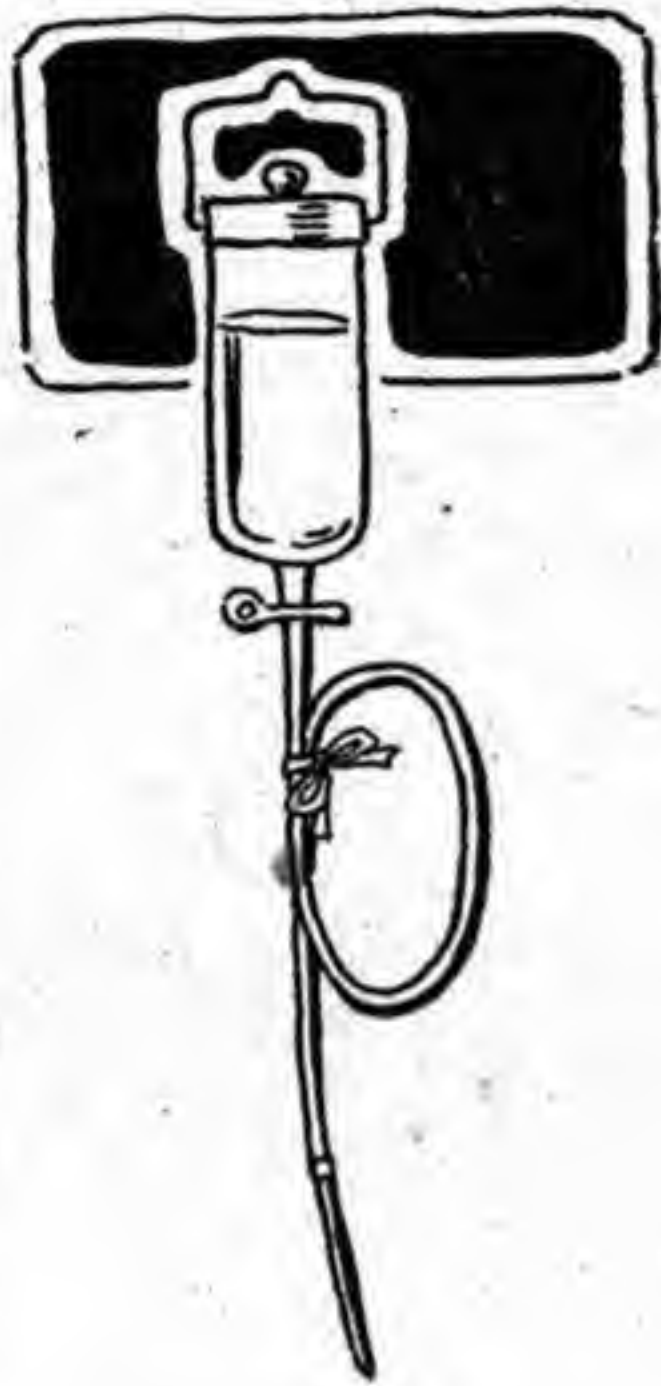
「浣腸してみましよう」

ちよび鬚を生やした医者言葉が今でも耳に残る。私の記憶では、その夜、はじめて浣腸を意識した。しかし既に何回か浣腸され、その不快感が既にあったのだらう。始めての記憶にも、それがどんなに恥ずかしいものであったか、心に鮮明に焼き付いているのだから。

告白

浣腸器とともに

（前篇）



栗瀬長

ら。

母は席を立てて台所の方へ行つたが、やがて、イルリガートルを持って帰つて来た。——今思えばあのイルリガートルは、後年、物心ついた時、物置の中で発見、現在でも私の秘蔵品である——医者に対しては極度の恐怖心をもっていた私は、ただ体を固くするばかり。蒲団がめくられ、当時三才の私の両足は母の手で軽く持ち上げられた。今は少なくなったが昔、子供の頃、はかされたコンビネーションでは、両足を持ち上げれば、パンツをぬがせる必要もなかった。チビの女中がイルリガートルを頭の上に支える。嘴管の先にはワセリンがぬられていたのだろう。痛いとも思わず生温い気味悪さを覚え、忽ちに来る腹痛、お定りの便器と、その記憶は可成り薄らいでいるが、

第二章 ああ、従姉の手で

——五才——

幼稚園の頃であった。午後から何となくだ

るかった夏の夕刻、小学校の休暇で来ていた従姉と遊び疲れた私は、夕食前だというのに食欲もなくゴロツと横になった。

「長ちゃん、なんだか変よ」

おしやまな従姉が母に告げたから、たまらない。夕食の支度をしていた母が、とんでくるなり検温。もうその時には女中が薬局にイチジク浣腸を買いに走り出していた。

「熱はあまりないけど、疫痢だと大変、すぐ浣腸しましょう」

と誰に言うともなく母は、つぶやいた。

「いやだ、いやだ」

でも私は「浣腸なんかいやだ」と言おうとして、「浣腸」という言葉を口にするのが恥ずかしく、只「いやだ、いやだ」を連発した。

「いい子だから浣腸をしましょうね」

そういうながら母は床をとって私を寝かしつけた。

「いやだ、いやだ」

私は、わめきながら、子供心にも何か思慕を感じていた従姉に哀願の眼を向けた。

或は助けて呉れはしないかと、ひそかな期待をもって。ところが従姉は、いかにも大人びた口調で、

「ポンポンが痛くなるといけないから、早く浣腸しましょうね。ね、いい子だから」

「いやだ、紀ちゃんのバカ、バカ」

「いけません」

いつもやさしい母が、今日は一言の下にはねつけた。

「いやだ」

私は体を固くした。手を握りしめ、足をピーンと伸ばして。

「ヨシや、両手を押さえて」

命令された女中は、

「坊ちやま。大人しくしなさいませよ」

といいつつ、仕方なく私の両手を押さえる。母は両足を抱くようにして持ち上げる。満身の力をこめてあばれようにも、大人二人にかかられては、五才の私はどうしようもなかった。

「紀ちゃん。叔母さまはこうして押さえつけてるから、すまないけど浣腸してやって頂戴な。ホラ、そこのイチジク浣腸、二個あるでしょう。私達が押さえている間に、早く。」

何と、ひそかに思慕する五つ年上の従姉の眼前で浣腸されるのすら、顔から火が出る程恥ずかしかったのに、暴れたばかりに今や、その従姉の手で浣腸されることとなってしま

った。

私は満身の力をこめて足を動かした。

「いけません、大人しくして」

母に押さえられた足は、痙攣するようにピクピク動くだけだった。今でこそポリエチレンになったが、当時のセルロイドのイチジク浣腸の、ペコッという音、あの実に不快な音がして薬液が従姉の手で押し出された。やぶれかぶれになっていた私は、腹に力を入れると思いきってきばってやった。今、施こされたばかりの薬液だけが、すぐ排出された。

「この子は」

母は思いきり私の足をつねると共に

「お医者様を呼びますよ」

この言葉は一瞬、私をシュンとさせるに充分だった。医者——必ず浣腸——それもあのいやなイルリガートル——この連想から私は黙ってうなずいた。

「さあ、紀ちゃん、早く。」

うながされて従姉は再び、もう一つのイチジク浣腸を取り上げた。私は遂に大人しく従姉の手で浣腸されたのだった。

今は既に三児の母となった紀ちゃん。生れてはじめてあの時、浣腸をしたのであろうが

自分の子供にも、今頃は浣腸しているであろうか。私は紀ちゃんに会う度に、五才のその日を思い起して、ひそかに顔を赤らめるのであるが、彼女には恐らくその日の記憶はないであろう。

第三章 お医者さんゴツコ

——七才——

「治子ちゃん、浣腸されたことある？」

「ええあるわ。お医者様にも、お母様にも、何度もよ。いやね、気持悪くて」

私は、ハッとしたり。お医者さんゴツコの或る日、私は思いきって一つ年下の近所の治子ちゃんに聞いてみたのだった。思いがけない返事。私は彼女が浣腸と聞いただけで恥ずかしがって逃げ出すかと思ったのに、彼女の返事は意外にも平然としていた。私は自分の顔が真赤になるのを、いとも平静を装いつつ、

「浣腸ゴツコしようか」

といってみた。胸は早鐘の如く、ドキドキと打っていた事を忘れない。

「本当にするの？」

「うそっこだよ。真似だけさ」

「恥ずかしいなあ。でも真似ならいいわ」

この答は私を狂喜させた。こわいもの見た

さ。冒険。この年になって、今ペンを持つ手さえ震えるような、その時の感情であった。治子ちゃんを寝かせ、型通り検温、診察の間が、どんなに長く感ぜられた事か。おなかを押さえて

「これはいけませんね、浣腸しなくちや」

「そうお、いやだなあ」

答までが型に、はまっていた。日曜の午後の日当りのよい二階。両親は知人の結婚式か何かで不在。女中は休暇。留守番の私にとっでは、今日は絶好の冒険の日であった。

「用意をしますから」

ワセリンのありかは、よく知っていた。浣腸器の代りは——そうだ、ペン軸！ワセリンをぬって——準備はできた。

何でもなく、この日のたわいのないお医者さんゴツコは終わったが、その夜は、なかなか寝つかれなかった事を思い出す。

その後も、いつ頃迄だったか、屢々治子ちゃんに浣腸の真似ごとをしたことを——やがて引越していった彼女は今何処にいるのだろう——或はどこかでこれを読んで、——そんな幼い日の思い出に、私の胸はうずく。

第四章 浣腸器——その一

—十才—

或日、私は物置で工作用の木箱が何かさがしていた。棚の奥に適当な木箱があったが、中の紙包を明けてみて驚いた。イルリガートル——まぎれもなく三才の私を苦しめた、あのイルリガートルが、よく洗われなかったのか、薄っすらと石鹼液の名残りを底の方に白くつけたまま、一米半もあろうかと思われる黒いゴム管、その先に嘴管をつけてひっそりと物置の奥深く眠っていたのだ。

工作も何もあったものではない。人目をしので二階の自室に持ち帰り、ためつすかしつ、しみじみと私はそのガラス製品を眺めた。弾力こそ失われているが、くねくねしたゴム管。それが何かゾクゾクしたものを感ぜさせる。太いガラス管、下部の丸み、赤い目盛りが冷く光る。生れて始めて手に入れた浣腸器。

さて、それをどこに隠すか。でも私は危険を考え、何くわぬ顔をして再びそれを物置に戻しておいた。しかし、その後、折りにふれて、物置に用をこしらえては、イルリガートルをながめに行くのだった。

そして今でも、これは私の愛玩物として、人目をしのいで、或は深夜に、或は家人の留守に、一、〇〇〇CC、二、〇〇〇CCの苦痛の追体験を蘇らせてくれるのである。

浣腸器——その二

—十二才—

イルリガートルを手に入れた私は、次にグリセリン浣腸器がほしくなった。薬局の前を通ると、——今でもハツとする感情を押さえ難いのだが——衛生器具の入ったガラスケースに浣腸器がある。僅か宛の小遣を貯めて、家から程遠い薬局に出かけた。いつも頭のはげた親爺のいる店、オヤどうしたとか今日は若い娘が店番をしているではないか。とても浣腸器などと言えたものではなくあきらめてその日は帰ったが、一度買いたくなかった以上、胸のときめきを押さえることは出来ない。

翌日、今日は親爺が新聞かよんでいる。あたりに人気もない。入ろう。店の前迄いったが何となく通り過ぎてしまう。駄目だ。もう一度引き返したが、恥ずかしくて入れない。その日もやめてしまった。ああ、浣腸器、その「浣腸」という言葉が出ないのだ。

その翌日、今度は意を決して、目をつぶるようにしてスツと入っていった。

「いらっしやいませ、何をあげましょう。」

サツと切り出されると、さあ出ない、浣腸という言葉が。もじもじしてはいけない。早く言おう。顔がはてるのを感じながら、

「あの、母に頼まれたんだけど、——浣腸器ある」

「浣腸器？、サア、丁度切らしてしまってるんですが、イチジク浣腸ではどうでしょう」

「そう、では」

あわてて飛び出してしまった。あれほど意を決して浣腸器といったのに、何と運が悪いことであろう。或は見すかされてしまったのではないか。逃げるようにして家に帰ったが何としても手に入れたい。

そうだ、あの店だ。今度は反対の方の住宅街の五十がらみの品のよい小母さんがやっている小さな薬局。今度は前の経験があるので割合、楽に入って行けた。

「浣腸器を下さい」

「グリセリン浣腸器ですか。今、三〇〇CCのしかないですが、いいでしょう」

ひったくるようにして、当時の金で五十銭払ってとび出そうする私に、

「お薬のグリセリンは？」

やっと浣腸器と言えたのに、グリセリンまで口に出せるわけはなく、「あります」というや否や駆け出したことを覚えている。

家に帰り、机の奥深く学用品を装ってしまっているが、その日は一日勉強が手につかなかった。

以来、私のマスコット、グリセリン浣腸器は、屢々落したりぶっつけたり、既に五個を破損した。今使っているのは五〇CC、六個目であるが、何度も薬局で求めながらも、やはり買う度に少なからず抵抗を感じるのである。

第五章 理科実験

——十二才——

「ここにあるのは浣腸器です」

小学校五年の或る日、理科の気体と液体という所であった。浣腸器に空気を吸い込んで嘴管の先を押さえて圧縮すると、空気ならば圧縮され、水だと殆ど圧縮されない、あの実験の日であった。

「ここにあるのは浣腸器です」

生徒はドッと笑った。が、私は顔が真赤になるような気がして笑うどころではなかった。

た。いや、皆の笑いが、何か私個人に向けられているような気がして、うつむいてしまったのである。

「なにがおかしい。疫痢の時、この一個の浣腸器が命を救うことが、たびたびある」

クリスチャンの教師が真面目くさってそう言った。皆は何でもなかったように静かになって、その時間の授業は終わったけれど、私の目は、その浣腸器に釘付けになって、その時間は何が何だか分らずに過ぎてしまった。

その後も理科実験器具棚を屢々のぞいたのであるが、どうしたことか浣腸器は遂に見当らなかった。誰か私のような浣腸マニアがいてひそかに持ち去ったのか、或はその日だけ教師が自宅からでも持ってきたものか、或は衛生室にでも置いてあるのだろうか、分らなかった。

第六章 看護婦の浣腸

——十五才——

中学三年の時、私は背中に大きな瘍が出来て病院の門をたたいた。

まだペニシリンなどない頃の事とて、ぐずぐずしていれば敗血症だと嚇かされ、即日入院、切開したことがあった。その時の事である。

る。

入院など始めての事とて、環境の変化と食事の少量さ、而も病状から脂肪分を制限されて、一日二日三日とカルテの便通欄は零の数字が並んでゆく。退院の二、三日前だったか、とうとう微熱が出てしまった。

午前の回診に来た医者が、

「おや、微熱があるな、そんな筈はないんだが——とカルテをみて——はあ、通じがないな、便秘だね、では浣腸！」

看護婦にそう言って出て行ってしまった。

何というへまな事をしてしまったのだろう。家にいれば一寸自分で浣腸出来るものを。くやんでも仕方がない。やがて三十分もすると、ノックするでもなく入ってきた看護婦二人、一人はイルリガートルをもち、もう一人はその支え台を。まさかイルリガートルとは気がつかなかった。グリセリンの三〇CC位いに思っていた私は、気が遠くならんばかりであった。しかも私の愛玩の五〇〇CC入りとは違って、病院のはゆうに一〇〇CCは入ろうかというしろもの。なみなみと入った白い液体は言わずと知れた石鹼液。

「浣腸しましょう、横を向いて」
サッと蒲団をめくるや否や、サッと準備を

する。その手早いこと。うんもすんもあったものではない。

「夏目さん、ワセリンと脱脂綿」

年嵩の方がそう言って、テキパキと処置を進めてゆく。あれ程大好きな浣腸も、うら若い二人の看護婦の注視の下では、羞恥に全身から冷汗の出る思いだ。寝台からは五十糎位の高さか、あまり圧力がかからぬとみえて少しづつしか減ってゆかないので、可成り時間がかかる。

この方が一時に腹痛を催さなくてよいのだが、五日間の便秘で既に直腸内は充滿しているのだからたまらない。早くも催してくる。しかし看護婦はそんな事はおかまいなし。

「暑くなつたわね」

「今度の休みは何処へゆくのか」

相手が子供とみてか、平然としてのおしゃべりだ。蒲団の上では患者が腹痛と恥ずかしさで、歯をくいしばって泳いでいるのもどこ吹く風かの様に。

この時程、看護婦を呪いたくなつたことはない。

「あの、我慢出来ません」

「まだ三分の二しか減っていませんよ。駄目です！」

ああ何たる無情。遂に一〇〇〇CCの容器をカラッポにされてしまった。苦しい。もう我慢出来ない。ひたいに脂汗がにじむ。

「そのまま我慢して下さい、夏目さん、押さえていて」

うら若いくせによくもぬけぬけとこんな冷酷なことが言えるものだ。五日の便秘に一〇〇〇CC、

経験のある方は想像もつくと思う。まして子供だ、これでは我慢出来るものではない。歯を喰いしばり懸命になつて辛抱するが、

「とても駄目です」

私はとび起きようとした。

「仕方がないですね」

苦々しく看護婦は言つた。廊下の端のトイレまで私は夢中だった。(未完)

臨時増刊号

「青い廃院」

定価 二百円 (送共)

「青い廃院」

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女団の魔手に陥つたレビュースター。

「与那国奇談」

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮ぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習。

四馬孝画「青い廃院」画廊

- 美貌の人
- 美女誘拐
- 苦悶する美貌
- 屈辱の責め
- 踊り責め
- 廃院の中
- モデル責め
- 救出

▲変ったレッスン (表紙裏)
▲受 縄 (目次裏)

本文内容主な項目

青い廃院 (弓沢俊二郎)

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手繰りの綱
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談 (永山久美雄)

- 女護ヶ島与那国
- 女百人に男一人
- 股裂きになる女
- 股裂きと火焙り
- 人肉の炙り焼
- 孤島の殺人
- 筏流しの刑罰

十三
デュージイ公爵夫人邸から、大きな体の侍
僕が迎えに参りまして、マギを伴って馬車に

乗りましたのは、それから四、五日もしてか
らだったでしょうか。
正直な所、始めて王宮から外出する嬉しさ

で、私はもう二度と戻らなくても悔いがないだ
ろうと思う程うちよう天でした。あの意地悪
な女官長が出かける前の私のお部屋へ来て、



王宮の浣腸室

(第四回)

柴崎 黎子

お城の内部にあった事を、誰にも話してはならないと、くどくどとお説教しておりましたのも、馬車に乗った途端に忘れてしまいました。

忘れていた大きな美しい空、あまい香りを含んだ大気、ガタガタと揺れながら勢いよく走る無蓋の馬車、私はいっぺんに生氣を取り戻したように元気になり、思わずあたりに微笑を振りまきたくなるのでした。馭車台の大男は、太い腕に長い鞭を握って、時々馬の背を打ちます。王宮には見られない、たくましい力がそこにはありました。

「あなた、何て名前？」

私は、故郷にいた頃のような無邪気さに返って、巾の広い背を見せている彼に話しかけました。

「ミルです。お姫さま」

彼は横顔を見せて、白い歯をむき出しながら答えました。お姫さま、などと呼ばれて、私はいっそう愉快になりました。生まれて以来、お姫さまになったのは、このときが始めてでした。

お城の門を出て、大通りに入りました。人々は忙しそうに歩いたり、楽しそうに談笑したり、私達の方を興ありげに眺めたりしてい

ました。そんな気儘な思い思いの姿が、いつのまにか自分に縁のなくなっている事を感じないでいられない私でした。

「ミル、あれを買って来て、おいしそうだと！」

果物の露天が出ているのを見つけると、私は思わずそう叫んでしまいました。日頃のつつしみなどはすっかり忘れてしまって、大空の下に出た途端に、昔のいたずらっ子の気持になっていました。私の目には、山のようにつまれたバナナやマンゴスチンがどうしても通り過ぎる事のできない魅惑として映ったのでした。

「お姫さまが、そんな事なさってよろしいのですか」

彼はたしなめました。ですが、私は駄々をこねました。

「だって欲しいのよ。買って来てくれないととび降りて自分で行って来るから」

「おどかさないうで下さいよ。困ったお姫さまだ。そのかわり、誰にも内証ですよ」

彼は渋々馬車を止め、両手にいっぱい果物をかかえて来ました。

「まあ、すてき！。私こんなにおいしそうな見た事なくってよ！」

大はしやぎでそれを膝の上に受け取りました。彼はそんな私を見て苦笑しました。

「あなたのようなお姫さま、見た事がない」

「あら、そんな失礼な事言うものでなくってよ」

「いいえ、風変わりだという意味です。すばらしいですよ、お姫さまは」

そして彼は好意的な高声で笑いました。

「じゃあ」

私も少しばかり照れて申しました。

「あなたにも一つ上げるわね、ミル」

「光栄です」

彼はさし出すバナナを取りました。

「じゃあ、行きますよ。うつむいてそっと召上がって下さい」

馬車は、ゆっくりと走り出しました。果物屋の老人が、五、六人のお客といっしょになって手を振ってくれました。私も朗かにそれに応じました。

「公爵家には、ちようどお姫さま位のお嬢さまがいらったのです」

ミルは、前を向いたまま話し出しました。

「三年前にお亡くなりになりましたが、お姫さまのように快活なお方でした。あなたを見ていると、そのリーザ様を思い出します。リ

「ザ様も、私がお供をするといつもおいたをなさって私を困らせました。私はリーザ様のおいたがお母様に知れぬよう、どの位苦心したかわかりません。あの方がお亡くなりになってから、その苦勞をする事もなくなっていて、私はどんなに寂しい思いをしていた事か。お姫さまは、リーザ様を御存じでしたか」

「いいえ、公爵様にはお子様があったなんて存じませんでしたわ」

私はバナナを口にしながら言いました。

「私のような者には、手数をかけるお嬢様の方がお世話甲斐があるんです。リーザ様が御存命なら、毎日がどんなに楽しいかと思えますよ」

「そのお嬢さまも、馬車の中でバナナを召上った？」

「バナナどころか……」

彼は思い出にふけながら首を振りました。

「インドグミを召上って、お口中まっかになさいましたよ。ですが、その辺のお嬢様とは違って、本当に愛らしい方でした」

「お気の毒ね」

「きようは、お姫さまにお会いして、何だか

リーザ様をしきりに思い出しますよ」

「まあ、私もそんなに愛らしくて？」

などと、お城にいる時の私には想像もつかない冗談をさえ、私は申しました。ですが、人の心には敏感な方の私には、その大男のミルが、少なからず私に好意を持っている事がわかるのでした。それは決して不快なものではありませんでした。

なおも大通りを進んで行くと、向うから大勢の兵士達が列を組んでやって来るのに出合いました。それは何百人という大部隊でした。皆鉄砲をかついで、鉄のかぶとをつけてものものしく戦場におもむくような様子でした。

「何かしら。」

私はマギに向かって言いました。

「何だか皆こわい顔してるのね」

けれどマギは一人の将校の姿を見て、まっかになってうつむいてしまいました。私は、いつかマギが検査をされた時に、その将校も見物に来ていたのだろうと察しました。

「もうじき戦争になるかもしれませんから、全国からこうして兵士が集められているのですよ」

ミルが説明しました。

「戦争になったって負けやしませんがね。わが国は一度だって他の国に敗れた事がないの

だから」

ですが、砂ぼこりを立てて王宮の方に去って行く隊列を見送りながら、私は何か暗い影を感じました。戦争ってどんなものか知りもしない私でしたが、今の私の平和をおびやす嫌なものだという感じはしていました。

「まあ、あなたよく来て下さったのね」

公爵夫人は馬車にかけよって私の手をとって下さいました。

「私、あまり寂しいものだから、あなたといろいろお話したかったのよ。さあ、お部屋へ行って休みましよ」

夫人は私の挨拶もお受けにならず、いかにも嬉しそうにはしゃいでいるのでした。

「私は、あなたのような可愛い方と、二人きりでお話したくて、毎日毎日、待っていたのよ。私ったら本当に一人ぼっちなんですものね」

私は馬車の中でのおしやまぶりはすっかり忘れてしまって、慎しみ深く振舞いました。で、夫人が王宮で見た時と違って心から楽しそうに碎けた態度で私にお話かけになるのに私はかえって無口になって固くなってしまったのでした。

「さあさあいっしやいな。ちゃんとお迎えの用意ができていてよ」

私の手を取りながら大きなお邸の中に招きこんで下さるのでした。夫人はグレーのイヴニングを召して、しっとり落ち着いた美しいお姿でした。私はちらと、あの流腸室での夫人の姿を連想しながら、この方があのよう……と不思議な気持ちになりました。けれども本来なら、こんな風に親切に手をとって頂くような身分の高い私ではないのです。何か身に過ぎた待遇を受けているようで、思わず固くなってしまふのでした。

お部屋にはおいしい飲物や、やわらかなソファなどが整えられていました。夫人は私の横にお掛けになって、お手ずからあれこれともてなして下さいました。そして少しアルコール分の含まれた冷い飲物などを頂いているうちに、だんだん気持ちも安らいで来て、私はやっと夫人に微笑を見せる事ができるようになりました。

「あんなところをお見せして、お聴しいわ。私をお嫌いになって？」

夫人はいつものまにか私の肩に手をかけながら、頬をぽつと染めておっしゃるのでした。「いいえ、私、始めてではございませんでし

たから」

漸く私も言いました。

「そう、よかったわ。私、あなたのいる間、あなたのお母様になりたかったの。いいお母様になれるかしら」

「まあ嬉しいですわ。私にはお母様がございませんでしたの」

私は答えました。夫人にそう言われてみますと、何だか本当に、お母様としてお仕えできそうな楽しい気持ちがして来るのでした。

「そう？。じゃ、本当のお母様になってしまつてよろしいのね。では、お母様に接吻して頂戴！」

夫人はニコニコ笑いながら、頬をお出しになりました。私は心の中では、ためらいながらも、そつとそこへ唇をつけました。

「じゃ、私も可愛い娘に接吻してあげましょうね」

夫人は私の顔を両手ではさんで、額と鼻に軽く口づけして下さいました。そして暫く私の顔を見つめてから、

「本当の子供みたい」

と呟いて、今度は私の唇に接吻して下さいました。

十四

「あなたは本当にお美しい事ね。羨しいわ」
晚餐が終つて、ルリ色のあまい飲物のグラスを手にながら、夫人の居間のソファに休んでいる時でした。夫人は眼もとをぽつと染めて相手の心をかき乱すような妖しいまなざしで私を見つめていらっしやるのでした。
「まあ、奥様だつてお美しくていらっしやいますわ」

私は困惑して申しました。

「あら、奥様だなんて。お母様と呼ぶお約束だつたでしょう。」

私を軽くたしなめてから、夫人はこんな事をおっしゃいました。

「もう年ですからね。あなた方と違って美しさを保つのに苦心するのですよ。ちょっと油断していると肥ってしまいますからね。私達の年になると、肥る事が一番こわい事なの。だから肥らないために、毎日特別な美容法をしなければならぬのです。あなた方から見たら、変だと思ひになるでしょうけど、この気持は今にあなたにだつてわかる事よ」

私は夫人の言う意味がわからない事はありませんでした。で静かに、うなずきました。

「この前、陛下にしていただいた事もよ。時

々なまけてしまうと大変でしょ。だからきちんと、日課にしていますの。わかって？」

再び、うなずきながら、私は内心、驚いてしまっていました。いくら美容のためだといっても、あんな事を毎日しなければならいなんて、何てつらい事なのでしょう。

「私が、あなたのお母様である間は、あなたがして下さるのよ。よくって？」

夫人は、ほんのりと酔った勢いで、そんな事までおっしゃるのでした。

「まあ私には、できませんわ」

「そんな事ないわ。とても簡単な事ですよ。」

さあ、美容室へいらっしやい。早速、あなたにお教えしなさいやあね」

夫人はしりごみする私の手を取って、隣室に行きました。そこは王宮の中のお部屋にも負けない程美しい立派なお部屋でした。お部屋全体に香をたきしめてあるのか、プウンとあまい香りがしました。

「さあ、お母様の着換えを手伝ってちょうだい。ガウンを着るのよ」

私は言われるままに、イヴニングをお脱がせし、豪華な飾りのついたコルセットをはずしてガウンをお着せしました。

「あなたも着換えなさい」

夫人は御自分で髪をほぐしながら、そうおっしゃいました。

「あの、私のお部屋はどこでございますか」

私はまだ自分に当てられた室を知らなかったの、そう聞きました。

「あなたは私といっしょよ。お母様と娘なのだからよろしいでしょ。恥しがらないでここで、ドレスをお取りなさい」

そう言われてお部屋の中を見まわすと、マギが持ってきた私の衣裳が隅に整理されてあるのです。仕方なく私は自分で着換えをしました。

「さあ、いらっしやい。」

夫人はにっこり微笑みながら両腕をひろげて、お立ちになりました。私は、こわごわ夫人に近づいて、その胸に顔を埋めました。

「かわいいレイ」

私は夫人にしっかり抱きしめられました。

中腰になって頬を胸に当てている私は、そのやわらかで豊かな感触が、くすぐったいように変な気持でした。

「あなたを娘として可愛がってみたかったのよ」

夫人は私の肩や頭髪をやさしく撫でて下さいました。そうされているうちに、胸のあた

りから快い安らぎが全身にまわって、私は本当の母親にでも抱かれているような錯覚に陥りました。

「じゃあ、寝む前に私に奉仕してくださいね？」

私はうなずきました。何でもして上げたいという気持になっていましたから。

夫人は化粧台から、既に薬液の入った流腸器を持って来て私に渡しました。そんなものを持ったのは始めてですので、私はおっかなびっくり受け取りました。無気味な形の嘴管が、油のようなものにぬれてつやつやと光っています。私はその先の方を眺めて、ブルブルと少し震えました。

夫人は寝台に横になって、ガウンの裾に手を伸ばしました。私はそこにかがんで、気おくれする心に鞭うちながら施術にかかりました。けれど、見るのに行うのでは全然、勝手が違って、私の手はまごまごするばかりで、どうすることもできないのです。

夫人は言葉だけでいろいろ説明をして、うまくやらせようとなさるのですが、しまいには私の手が震え出してしまって、どうにもならなくなりました。

「駄目ねえ。じゃ、そのボタンを押して頂

戴。ミルを呼んでさせてみるから。それを見てよく覚えるのよ」

私は言われるままにソファの横にある呼び鈴を押しました。するとすぐにあの大男のミルがやって来て、私に一礼すると、しなれた手つきで薬液を注ぎこみました。それを見て私は始めてこの侍僕が毎日夫人にこの奉仕をしているのだという事を知りました。

ミルは無表情に施薬を終ると、おやすみなさいと言って出て行きました。彼は本当にこんな事には少しも心を動かされないようでした。それに比べて私の方はただ見ているだけなのに胸が激しく動悸して、頬に血がのぼって来るのでした。

夫人は私をソファの上にあげさせて、私の手を握りしめながら熱っぽいお声で申しました。

「あしたはあなたがして下さるのよ。いい事ね」

私は首をたてに振りしました。その時、私の心には本当に自分でしてみたいという氣持が、かすかではありますけど動いていました。

「それからあなたもお母様の言う事を聞くですよ。でないと叱ってよ。いい事ね？」

夫人は私の耳もとに熱い息を吹きかけなが

らそうつぶやきました。

「あなたもここに居る間はこの美容法をするのです。そのかわり私がしてあげますから」

私はその言葉を聞いて、頭の中がじいんと熱くなるほどあわててしまいました。私がそんな事されるなんて、予期もしなかった事です。ので、極度の羞恥で何と答えていいのかもわからなくなりました。私は思わず夫人の胸もとに顔を押しつけながらかぶりを横に振りました。

「いや、いや、私はいやですわ、お母様！」

私の胸の中には、夫人に甘えて許しを乞いたい氣持が、わき上っていました。それで始めてお母様と呼んでしまったのです。それが夫人のお氣に召したと見えて、夫人は、

「うふっ、かわいい子」とお笑いになりました。

「だけど許して上げません。私のする事はお母様の権利ですからね」

そして夫人は私に枕を抱かせてお起きになりました。私はもう逆う術もなく、しっかり枕に顔を埋めて羞恥に堪えている外ありませんでした。

やがて夫人は悶えて逃げる私を押さえつけてしまいました。そして私の横に腰を下ろし

ました。手には呪わしい器具が見えました。「さあ、じつとしているのですよ。だめよ、そんなに動いちゃあ。そうそ、ほら、何でもないでしょ？、そんなに恥しがらないのよ。さあ、いい子だった事……」

その間中、私は苦しさに幾度呻いた事でしよう。それは身体の痛みではなくて心の痛みでした。それでも、王宮と違ってここにはトイレットがあります事は、何よりの救いでした。

その夜私は、さめやらぬ奇妙な氣持にとりつかれながら、夫人の傍らで眠りました。

十五

翌日、私は思いがけない方と会いました。それはあの舞踏会の席で知りあった若い貴公子スラヴ男爵でした。

夫人とご一緒に朝のゆあみをすませて、マギにお化粧させて、一番私に似合うグリーンドレスを身につけた後でした。夫人とテラスへ出て行くと、そこにりりしい乗馬姿で立っているのが男爵だったのです。

「おはようございます、伯母上。もう一走りして休ませて頂きに寄りました」
彼は夫人に挨拶しながら、私の方を見つめ

ていました。私がああ時のレイ・モールだとは気がつかない風でした。

「おはよう。けさの御機嫌はいかが？」

夫人も親しげに笑いかけて、

「この方はね、きょうから私の子供になったレイよ。かわいいでしょ？」

私を前面に押し出しました。

「こちらは、私の甥のスラヴ男爵。若い癖に女嫌いという変り者よ」

その夫人の紹介に、私は目礼をしました。

男爵は私の手をとって、儀礼的な接吻をし、
「相変らず伯母上は冗談がお好きだ。僕は、この方をどこかでお見かけした事がある。」と申しました。

「私、レイ・モールでございます。お城で目にかかりましたわ」

私は彼が思い出さない様子なので、自分からそう言いました。すると急に彼は顔を輝かせて、

「あ、そうでしたね。思い出しました。こんな所でお目にかかるからわからない。もう二度とお会いできないかと思っていましたのに……。伯母上、一体どうなさったんです？」

僕の為にお連れ下すったんですね」と高い声で言いました。

「あなた方、お知り合いだったの？。これはびっくりだわ。折角だけど、あなたの為に来て頂いたんじやなくてよ。でもよかったわ。レイが退屈しないように、いいお友達ができて。あまり長い間、居て頂けないけれど、あなた喜ばせてあげてね」

夫人は、にっこりお笑いになって、私の手と彼の手を重ねて下さいました。彼は、もうすっかり上気して、私の手を握りしめました。私も彼に負けない程赤くなってしまいました。そしてその時、昨夜、夫人にされた事がちくりと胸に甦えって、私を一層赤くさせるのでした。

「じゃ、お二人でお庭を散歩していらっしゃい。だけど、レイは陛下のお氣に入りますから氣をつけなくてはいいけませんよ」
「わかっています」

男爵は答えて、私の手を取ってテラスを降りました。夫人はその後で藤椅子にお腰をおろして、私達に微笑を投げていました。

花壇や灌木の繁みをまわって、テラスが見えなくなると彼は、こう申しました。

「あの時は楽しかった。長い間、あなたの事が忘れられなかったのですよ」

しかしその唐突な言葉に私は何と答えてよ

いか迷ってしまいました。それはうぬぼれてみれば、非常に親しげな愛の言葉とも受取れました。けれど、いったん王様にお仕えした以上は、そんなうぬぼれも許されないのでした。私は答に窮して黙っておりますうちに、少し悲しくなりました。

「この辺で休みましょう。そして、あなたのお話しを少し聞かせてくれませんか。僕は都以外の土地を余り知らないから、あなたのお国の事などをお聞きたいのです」

彼の言葉に従って、私は小さな泉水のふちにしつらえられたベンチに腰を下ろし、彼が問うままに王宮に入った経緯などをお話しました。彼は私がお話するどんな事にでも興味深そうに耳をすませ、そして巧みな合づちを打つのでした。私は話しているうちに、だんだん本来の陽気さを取り戻し、故郷の楽しい出来事などを思い出して、笑ったりするようになりました。私は本当はこのようにおしゃべりが好きなのです。おしゃべりしていれば幸福で、つらい思い出なども忘れてしまうのでした。

私が夢中で自分のおしゃべりの世界に没頭しておりますと、不意に彼は私の手をとってため息をつきました。私は驚いて口をつぐみ

手を引こうとしました。けれど彼は私の手の甲をしっかりと握って放さないのです。

「あなたのような方が宮中に入ったなんて、何かの間違いだったんですね。」

私はその言葉を聞いて、再び夢からさめたように寂しくなりました。そう言われてみれば、私が楽しいのはこうして稀に誰かとおしゃべりをする時だけで、あとは私らしくもないつましきと変化のない毎日のくり返しの中で暮らしていたのです。

私が黙ってしまおうと、彼も首を振り、しばらく沈黙していました。そのうち何を思っただか急に顔を上げてこんな事を言いました。それは先ほどまでの彼とは打って変わった態度で私を驚かせました。

「あなたはゆうべ伯母と一緒に寝みになったでしょう」

「まあ……」

「伯母愛用のチュベリウスの匂いがするからわかります。」

「あらそうでしたの」

私は思いがけなく秘密を見ぬかれた恥らいをとりつくろおうとして、つとめて陽気にそう答えました。けれど頬の辺りが熱してくるのを押さえる事はできませんでした。

「伯母は寂しい人ですからね。あなたのような方が来て下さると嬉しいのです。あなたは伯母の奇妙な遊びを、もうご覧になったでしょう？」

「まあ何の事でしょうかしら」

私は彼の口調が急に怪しげになって来たのを訝しみながら表をとりつくろいました。ですが、彼の言葉が何を言おうとしているのかは察しがきました。

「実は僕も利用される事があるのです。世の中には伯母のような女性も数多いのですよ。ですから伯母だけがとりたてて変だという訳じゃないのです。あれだって立派な一つの楽しみなんですからね」

彼の言葉がだんだん私を羞恥と困惑の中に追いこんで来るに従って、私は顔をまっかにしてうつむいてしまふしかありませんでした。そのくせ、そんな彼の言葉から逃げ出す事もできないで、じっとそこに腰かけているのはどうした訳でしょう。実は自分にも動けない理由がわからないのでした。

スラヴ男爵って、こんな事を平気で語る方だったのかしら、と思って私は自分の耳を疑いたくなってしまうました。けれど、その彼が別に憎いとも思えないのは、彼の言葉つき

や雰囲気が卑猥な感じを与えないからだだったのでしょうか。私はただただ困って、早くその話を止めて下さればいいと考えているだけでした。

「実は、僕は……」

と、彼は言いかけて私の肩に手を廻しました。私は何故か、これはいけない事だわと思しながら、その手を避ける事ができませんでした。

「あなたが欲しかった。こんな言い方は本当に失礼とは思うけれど……」

「失礼ですわ、本当に」

と私は面喰らいながら叫びました。

「あなたは私を又いじめようとなさいますのね」

「又とは？」

「皆さんが私をいいように悲しませるのですわ。私はいいおもちゃにされているみたい……」

私は自分で言いながら、自分の言葉に涙をにじませてしまいました。彼が私とその腕を払いのけようとして立ち上ると一層力をこめて握りしめ、尚もこんな事をいいました。

「僕もその一人になりたい。せめて……」

「いやです。あなたは、もっと美しい方でい

らっして！」

すると彼も叫びました。

「美しくいって？ 一体どうしたらいいんです？ あなたは僕の所へ来て下されるのですか？ 僕が待ってれば、そんな日が来るとでもおっしゃるのですか？」

そんな事は申し上げませんわ、と言おうとして彼の顔を見ますと、彼は真剣な表情の中に美しい眼を見開いて、苦しみをいっばいに湛えていました。それを見ると、私の心にも同じ苦しみが湧いて来るのを感じました。私は何も言えなくなつて、とうとう泣き出してしまいました。

「あなたも僕を好いていて下さっていたのですね？ ね、そうでしょう？」

私は答えませんでした。ですが否ともいえませんでした。私は彼に背を向けて涙を拭きました。

「だからせめて、一瞬の恋を、ね」

彼は後から私を抱いてそうささやくのでした。

「悪い事ではない。陛下にそむかないように伯母がするようなやり方で。僕はそれだけで諦めます」

彼の声も少し震えていました。私は弱々し

くかぶりを振りしました。私が、たとえどれ程に彼に情熱を捧げていたとしても、それだけは認容できない事でした。私はどうしようもない破目に追いこまれた時にだけ、諦めの中でそれも許したのであって、決して快いものではなかったのです。まして、このような美しい貴公子にどうしてその醜態を演じてみせる事ができましょう。

「そんなお言葉を聞いて、もう恥しくって、あなたのお顔も拝見できませんわ。私もう死にたい位ですわ」

私はそう言い残すと、彼の手を振り払って走り出しました。彼はしばらく私を追いましたが、諦めて歩き出しました。

十六

それからの数日は決して楽しいものではありませんでした。私は深い傷心の中に過しました。夫人がお母様ぶりを發揮して、私を赤ちやんのように扱いながら、つらいおつとめを受けさせる時にも、スラヴ男爵に覗き見されているようで、堪え得ない程苦しいのでした。そんな私を、夫人はいつそう熱心においつくしみになるのです。

やがて又ミルに送られて王宮へ帰りました

時には、正直の所、私はほんと致しました。けれど、それから、二、三日して、私は世にも恐ろしい光景にぶつかなければなりませんでした。

王様が私をお召しになりましたので、私はいつものおやさしいたわむれを予想して参上したのです。所が女官に連れて行かれましたのは、あの懲罰室でした。

不吉な予感に襲われながらそこに入りますと、いつものお眼とは違って無気味な程けわしい王様のお眼が懲罰台の方を見つめていらつしやいました。思わずそちらを眺めると、どうでしょう、一人の女性がそれはそれは、見るに忍びない姿で呻いているのです。私は恐しさにそこに立ちすくんでしまいました。

「レイ！、ここへ参れ」

王様は私を御覧になると、声も鋭くそうお命じになりました。王様は、私をひよいと抱きかかえてお膝にお乗せになると、

「そちはこのような慰みは始めてであろう。よう見い。おもしろいぞ」

とおっしゃいました。それは残酷な響きをもったお声でした。私はまだ、このように恐ろしいお声を聞いた事はありませんでした。けれどそれが王様の知られざる本当の一面だ

ったのです。

「私恐ろしいございます、陛下」

私は頭を下げて必死に目をつむって見まいとしながらそう申しました。すると王様は、

「あははは。別にそちをあのようにすると言うのではない。安心せい。」

とおっしゃりながら、私を軽々と持ち上げて後向きにお抱きになりました。で、いやでも私はその凄惨な懲罰台の方に面と向わない訳には行きませんでした。

「顔を上げて見学するのじゃ。さもないと、そちをあのように致すぞ、あははは」

仕方なく私は眼をあげました。

犠牲者は私の知らない若い女性でした。全体に小肥りした美しい肌の持主でした。その女性が何の罪によるのか、髪の毛を寝台の端に結いつけられ、両腕は後にくくられて、二つの膝関節は左右の端に固定され、腰を高々とあげたみじめな恰好で、動くこともならないでいるのです。もうずい分と鞭うたれたものらしく、至るところに、赤黒い灸痕が一面についていました。

黙々として何事か責めをつづけておりますのは、屈強な数人の武官達でした。彼らは何か実験しているかのよう、たくさんの鉢や

びんを床に並べ、そこに入っているものを調合してはその犠牲者の身体に塗っています。そのたびに犠牲者は叫びを上げ、自由にならない身体をくねらせて悶えます。

黙ってみていると気が遠くなりそうで、私は王様にお聞きしました。

「あれは何をしているのでございますか」

「うむ、余が考案した秘薬をためしておるのじゃ。鞭を使わざる鞭とでも申すかな。あれらを用うると、忽ち肌が焼けるように痛むのじゃ。見い、なかなか効験あらたかであるうがの」

「あの方がお気の毒ではございませんか」

すると王様はむっとなさった御様子で、
「余計な事は言わずともよい。それともそちがあの方の身替りとなるか」

とおっしゃいました。私はびっくりして口をつぐんでしまいました。

床の上には何本もの浣腸器も並んでおりました。それぞれ違った色の薬が少しずつ入っておりますのは、もうそれらも実験済みな事を証明しているのでしょうか。

「陛下、それではこれを？」

一人の武官が小さな壺を取り上げて申しました。王様はそれを見ておうなずきになりました。

した。

「む。それは量をまちがうと絶命致すぞ」

「は。」

武官は一本の浣腸器をとると、注意深く壺の中にさしこみました。

「あれは、腹の中を焼く薬じゃ、といっても本当に焼くのではない。焼くような痛みを与えるのじゃ。余の発明中では一番すぐれたものぞ」

王様はそう私に御説明になりました。

武官は寝台の後方に立ちました。私は目をつむりました。

やがて、ぎゃあという絶叫が起って、思わずその方を眺めると、彼女は全身から油汗を流して呻いていました。

武官も額に汗の玉を浮べて懸命に主命を遂行しています。

やがて彼女は失神してしまいました。私は余りの恐ろしさに青くなって、王様のお手にしがみついていたました。

「あははは……」

王様の御満足そうなお声だけが響きわたりました。



麻生保氏の生活と意見

—八十二—

麻 生 保

週刊文春九月七日号 グラビヤ

鈴木道子さんの乗馬姿が拝める。素晴らしい写真とは申し兼ねるが、マアマア、いい方でしょう。が、彼女の服装たるや夏なので開襟シャツのようなブラウスに、白の夏用の乗馬ズボンなのは何とも残念である。女性の乗馬は、貴族的なエレガンスとシックを中性的な線に包んで、しかもどこかに高雅なしとかさをのぞかせるところの、あの胴をキュッと切り切った、襟の小さい乗馬用上衣でなくては無意味のように麻生には思われ

る。乗杉貴代子さんも「乗馬をするからにはみすばらしいのは一番禁物です。一見して上衣は優雅を必要とします」と書いておられる。(三三年五月号「障碍への道」)

が、そのグラビヤに添えられた文章が一寸麻生の注意を惹いた。

「休日にはパレスクラブで馬に鞭をあてる。(中略)堂々とした乗りこなしぶりである。(後略)」

即ち、「馬に鞭をあてる」というのは、この場合「馬に乗る」「乗馬する」という意味

に解すべきであるらしいが、これはあまりきいた事のない表現である。「馬に乗る」と同義で「馬を責める」とは言うし、「馬をしほる」というのも極めて稀ではあるが、きかない事もない。が、「馬に鞭をあてる」と言えば少くとも今までは、字義どおり「鞭で馬を打つ」と解すべきだった。若し今後、この文章の如く「馬に鞭をあてる」というのが「馬に乗った」場合に、当然行われる行為としてこの二つが混同され、同義語となって会話の中に普通に使われる様にでもなったら一寸楽

しいと思う。

……
 (幻想その一)……「近頃お元気？乗馬はいかが？御上達なさって？」

「ええ、あんまり上手にもならないけど、ほとんど一日おきにPクラブで馬に鞭をあててゐるわ。とても気持ちよくってよ」

……
 (幻想その二)……麻生氏は煙草に火をつけた。桂子の家の応接間である。三時という約束なのにもう二十分も待たされている。ややあって、マントルピースの上のウエストミンスターーの置時計が三時半を鳴らした。と、ドアが開いて「ごめん遊ばせね」という声とともに桂子が入ってきた。

「あんまりお天気がいいので、おひるから一寸馬に鞭をあてて来ましたの、Pクラブで。着がえていたらすっかりお待ちせしちやったわ」

「お着かえにならなくてよかったのに……」

言ってから麻生氏はシマッタと思ったが、桂子は、

「まさか、あんなかつこうで」

と無邪気に答えた。麻生氏は桂子が馬に鞭をあてているのを一度も見たことはないが、どんなに美しかろうと常日頃から想像していた。(ワンピースを着てさえもこんなに美しい桂子。乗馬服姿はどれ程素敵だろう……)

……
 とに角、「よわい」、「いかす」などという品のわるい言葉ばかりが新造語なのは数かわしい。この素晴らしい新表現法を少し流行させたらどんなものだろう。

思いなしか、その鈴木道子さんの右手に握られた鞭は、やや長めに過ぎるがなかなかいい。細く、しなやかで、見るからに痛そうである。その鞭が、のり手の道子さんの意志を伝えて、馬の脾腹や首すじや尻を責める時に発するピシリッ、ピシリッという音まで聞えて来る様な気さえする。おお、可哀想な馬！きつと、あの鞭はヒリヒリと痛いに違いない。乗り手はそうした時にこそ鞭打つ手応えの快さを満喫し、「乗馬の楽しみ」は、「馬を鞭打つ楽しみ」となり、かくて「馬に乗る」イコール「馬に鞭をあてる」という公式が成立し証明されるのである。

……○……○……○……

週刊実話九月二十一日号

障碍馬術の事故で死んだ若い女性騎手、水田草苗さんのことが出ている。幾枚かの写真もあったが何れも記事の中の挿入なので、紙質のよくない同誌のこととて、はっきりせずグラビヤだったらなアと思わずにはいられない。彼女の乗馬姿は小柄ながら選手だけあって堂々と馬を御しているという感じが素晴らしい。又、女子学生馬術大会で優勝した青山学院馬術部員の写真もあったが、乗馬服に身を固め鞭を手にした、リリしい八人の美しい女性が優勝カップと共に写っていた。彼女等は皆、誇らかな、そして満足そうな微笑を浮べていて本当に美しい。ああ、このカップを得るためには、彼女等の鞭や拍車が、どんなにか働いた事だろう！

なお、九月三日附の「内外タイムス」にも水田さんの記事が乗馬姿の写真とともに出ていた。水田さんは相撲が好きで「……松蔵さん(お父さん)を座敷で投げとばしたり、乗馬できたえた両の太ももで息のとまる程締めつけたりした」とあった。又、彼女は縁談を持ちこまれると、「顔が長くなって、細心で、従順で、毛なみがいい人でなくちやイヤ」と

言つたと言う。従順というのが彼女の理想の男性の条件の重要な一つだというのは一寸愉快。ま、要するに馬のような男性がお好きだったらしい。

麻生は謹んで水田草苗さんの死を悼み、心から冥福を祈る次第である。

……○……○……○……○……○……

群像 九月、十月号

遠藤周作 「サド伝」

極めて真面目な態度でサドの生涯が浮彫にされてはいるが、文体が粗雑な事と、やや掘下げ方が足りず、事件の羅列に終っているのは、遠藤氏自身が恐らくノーマルな神経の持主だからだろう。そう言えば、同氏は、「月光のドミナ」「女王」更に「白い人」などでサド、マゾヒズムをよく扱っているが、いつも拵えものの感が深い理由がわかった様な気がする。「月光のドミナ」と、泉鏡花の「高野聖」と比較すれば、後者が如何に無理も銜いもなく自然に、自発的なインスピレーションを持って書かれているかがわかるだろう。

が、とも角、この「サド伝」は、一読をおすすめしたい。沢山の興味ある問題が提起されている。例えば、「マルセイユ事件」に於

て、サドはサディストでなく、ペダラストとマゾヒストを演じ更にコブロ的傾向まで見せるのである。遠藤氏は、「サドは女に自分の体を打たせ乍ら、その打撃の数を燐の壁に小刀で書きつけた事」を指摘し、サドは女から鞭打たれ乍ら冷静であったと断じ「打たれている自分を非情に見つめている別の自分を失っていた」故に、相手から打たれ、凌辱される事によって忘我の境地に達するところのマゾヒストとは、根本的に違ふと結論し、更にペダラスティーや露出趣味などが、よりサドの理想の世界であったと述べている。(サドのサディズムは、女性憎悪から来るものだから、ペダラスティーとは簡単に結びつく)

さて、遠藤氏の言う「打たれている自分を非情に見つめている別の自分を失っていた」か「た」というのは、けだし名言である。麻生は、ここで再び九月号の読者通信に見た天泥氏の自己分析の丁度、裏がえしをここに見るのである。

天泥氏の「通信」は、麻生にとって全く月ロケット以上の驚きであつた。長い間、どうしても割り切れなかつた問題が、ここで一度

に解決した感じである。麻生は、しばしば天泥氏と同じような心理状態になる度に、それをどう自分で納得の行くよう説明出来るか、今まで全く見当がつかなくなつたからである。

(十月号、十一月号の「生活と意見」参照) マゾッホに、サド的傾向があつた事は、あまり知られていないが、彼は毛皮を着た美少年を鞭打つことを著しく好んだと言われている。恐らくこの鞭打たれる美少年は、マゾッホ自身の分身であり、マゾッホの理想の姿、即ち「私が彼でありたい」(天泥氏の「馬」に相当する)姿なのであるまいか。そして、その際に、彼自身はドミナに転身しているのである。そしてその時は、「打っている自分を非情に見つめている別の自分を見失っていない」に違ひない。「別の自分」に主格を移すなら、それぞれ「傍観的サディズム」「傍観的マゾヒズム」と考える事も出来る。(「生活と意見」十月号参照。ただしその個所に誤植あり。)

また、天泥氏と似たような経験を、森本愛造氏も語っておられた。(二八年四月号)又沼氏のあの、時にえぐる様な辛辣この上ない評論も、同氏のマゾ的センスの反転と見ては

いけないだろうか。

ここで一寸思い出すのは、新東宝のO社長と、高倉みゆきの事である。O社長の横暴とその恐るべきワンマン振りはよく知られており、意にそわぬ社員や、俳優に対する残酷とさえ思える態度はあまりにも有名である。彼のために、されて生活権を奪われたと同然の俳優は何人いるかわからない。その彼は高倉に、ああまでも御執心である。それはいいのだが、O氏自身の演出と言われる高倉の主演映画の大部分は、乗馬服を着た女英雄か、さもなくば女王、又は皇后なのは、単なる偶然ばかりだろうか。「戦雲アジアの女王」から始って、一連の「天皇もの」で、アラカン天皇の皇后に数回扮し、「女間諜曉の挑戦」「嵐に立つ王女」皆、然りである。

O氏をマゾヒストと見做すのは、あまりにも早計ではあるが、いささか偏執の気味がありはしないだろうか？

Nさんという、まだ三十四、五の美しいミスの小唄のお師匠さんがある。彼女のお弟子には、会社で部下を朝から晩まで怒鳴りつけているような課長さんや重役さんが多いが、大変な人気である。彼女の稽古ぶりは、もの

すごい。重役さん達はいつも彼女に叱られ、時には扇子で禿頭をピシヤリとやられたりしているが、オジさん連中は、けっこう汗かき乍ら楽しんでる。これなども、その一例だろう。

又、今は亡きピアニストI氏は、稽古のきびしい事で有名だったが、いくつか年上の奥さんとの間の私生活に於ては、氏は完全なマゾヒストだったという。

.....○.....○.....○.....

主婦と生活 十月号

竹田恒徳氏と、江上フジ女史との対談「タツナとムチの呼吸で」の中の会話を少し拾おう。

竹田——（オリンピックの馬術の話をし乍ら）最近、女流選手が目立って来ました。スポーツで男性に勝ちたいと思ったら、女性は馬をするといひ。そうすれば男に勝てるチャンスがある。他の競技はミックスのおつき合いか、あとは男子と別ですから。

（中略）

江上——馬と人間の関係と……よく、たづなを締めるとかいいますね。女性の手綱の引き具合は馬と如何ですか。

（中略）

江上——男の方が雌馬に乗って、われわれ女性が雄馬に乗れば公平に行って、手綱も引き締めていいかと思って（笑声）

（後略）

カメラ毎日 十月号

「躍動美」と題して、杵島隆氏がK大馬術部の女子部員を撮っている。一枚は障碍飛びの瞬間を捕えたもの。もう一枚の方に、白い馬に跨った女性が見られるが、黒革の長靴に銀色のやや大きな目の拍車が痛（そうに）光っているのが、はっきり写っていて、一寸珍らしい。

十月号で、原忠正氏が、その現代マゾヒズム芸術時評で「……イルゼ・コッホの美醜について、かつて麻生保氏が異説をたてた」と書いておられたが、麻生はこれについては記憶がない。多分、原氏が思い違いをされたものと思う。

×

×

×

×

×

×



女 言 葉 礼 讃

兵 頭 庫 一

女性の持つ数々の魅力の中で、言葉の果す役割は相当大きいと思う。現代は、男性が女性化し、女性が男性化して行く傾向が著しいが、言葉の上でも、男女の差が次第に小さくなっている。男女間に言葉の差が殆どない事は英語始め殆どの外国語がそうであり、又日本でも田舎に行くとそうであるので、単に女言葉が聞かなくなるだけでは女性の魅力に大した影響はなさそうだが私にとっては随分淋しいことである。

日本語は勿論標準語だが、東京女性の言葉には素晴らしい魅力がある。京女の使う京言葉は柔か過ぎる為か余り魅力が感じられない。言葉と云っても、多くはテニオハの類であるが、其以外の品詞もある。先ず

自称はアタシであって漢字では妾の字を当てる。動詞の語尾にワをアクセントと共に付けるのは女語の特徴で、このワの一語が頗る魅力に富んでいることは見逃せない。

関西では男がアクセントを落して付けるが同じワでもアクセントの有る無しで随分違ってくる。このワにネを付けると確認の意味になる。マセと云う語尾は動詞の命令形につけて相手に尊敬の意味を表わすもので、デパート嬢や民放の女アナが盛んに使っている。これを訛ってマシとも云い、更にナを付けると愛情が表われて来る。「遊ばせ」は又、御（ゴ又はオ）を冠した動詞の語尾に附した優雅な女語である。動詞を否定した語尾に単にアクセントだけ附けて（文章では？を附して

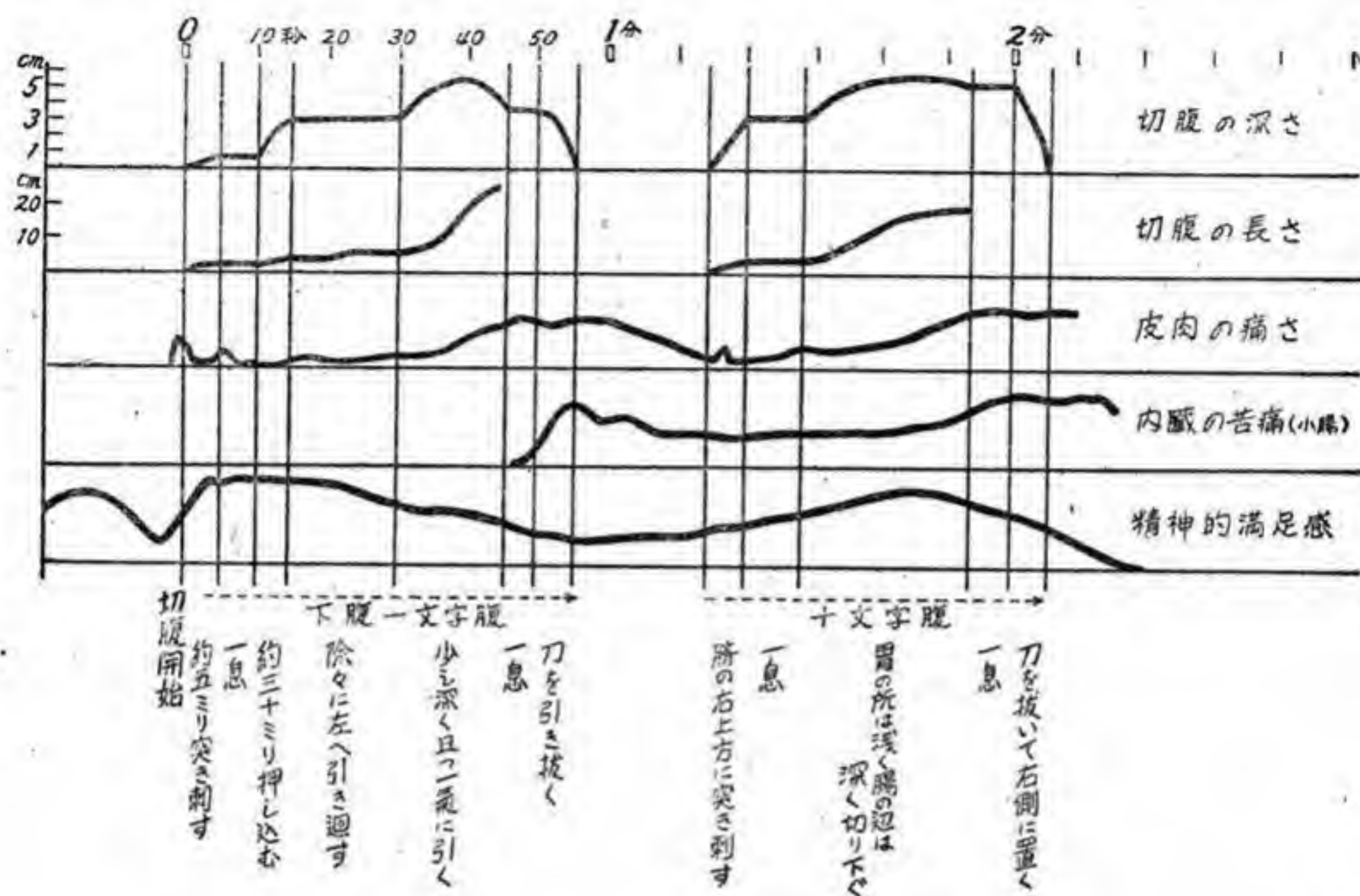
ある）相手の同意を求め、或は懇願を表わすことがある。動詞の語尾にノを付けるのもワと同様な意味だが、この場合はアクセントを附けない。

若し付けると疑問詞となる。ノの下に確認の意味でヨを付けることがある。ワネと云うのと、ノヨと云うのとは略々同じ意味である。

又、ワにヨをノにネを附することもあるが同様である。

以上の外、女性特有の優雅な表現が色々有ると思うが、この女言葉が男性に与える魅力は相当大きい。この事は女性として重要なセンスで無ければならないのに、現代のハイティーンには次第に失われて行く様なのは嘆かわしい。

女言葉は女性のアクセサリとして大切なものゝ一つである。女装マニアが女性の下着に狂熱するフェティシズムが有れば、当然女言葉マニアと云うフェティシストが存在しても良い筈である。今までのアブニストに、女言葉マニアが登場しなかったのは寧ろ不思議な感さえする。滅び行く女言葉へのノスタルジアとでも云うべきか。女言葉よ永遠なれ！



腹を切る事 (その二)

折伏下男

前回にも述べた如く、死ぬ為に腹を切るのではなく、腹を切って死ぬのである。この事はよく言われる如く、腹を切っただけでは死なないと言う事からもわかる事である。だから、一概に切腹と言っても、本当に腹を切り開くものから、只、単に腹に刀を突き刺すだけのもの、極端な例では、只、腹に微かな傷をつけるだけのもの迄ある。

然しあく迄もオーソドックスな考え方からすれば、切腹と言う以上、腹を自らの手で切り開くと言う事であって、死そのものを意味しない。

他の手段による死罪、又は自殺と、切腹による死罪、又は自殺とを比較した場合、武士道に於ては切腹に優位を与えていた、苛酷な形の死と言う点では、腹を切ると言う工程が一つ多いだけ、刑としては重く、自殺としてはうとまるべき存在たるもので、腹を切る事によって、同じ死から、名誉、と言う心の慰を得たのは、そも如何なる原因か。

それは、肉体的には苦痛に対する忍耐力、精神的には困乱に対する冷静さを、腹を切る行為の間に於て発揮せられるからである。故に見苦しい切腹、痛くない切腹は、共にオーソドックスな考え方からすれば、意味がなくなるわけである。

こゝに立派な切腹の一例としての分析図を示してみる。一文字腹に五秒、更に十文字腹に五十秒、合計約二分間。これが、正味腹を切りつゝある時間である。痛みと苦しみに耐え、冷静に刃を運ぶのである。殊に刑としての切腹では、立会人の面前に於て行なわれる。立会人は正面及両側面からその腹に視線を集める。

もう一つ、腹を切り開けば腸が出る。美観を損う事なき為には大腸を避け、小腸にとどめるべく、一文字腹は臍下で深く、又十文字腹は、上腹部で浅く下腹部で深く切るのが、心得の内的一条であつたらしい。

奇想をこらす

三流演劇の生態

鬼山絢策



M系観劇レポート

東京にばかりたてこもって、毎日々々仕事に追われてウロチヨロしていると、私の好きな三流演劇の研究も思うようにできない。

(註) 三流演劇、というのはドサ廻りの劇

団や、場末の映画館のアトラクションなどに臨時出演するグループなどという。

例えばストリップの如きも、東京浅草、新宿、池袋のような常打小屋では、看板は、かなり、きわどいものを掲げているが、中に入ってみると、それほどでもない。

ストリップでも、現在ではこんなものかと思ひ、昭和二十一、二年頃のストリップを、なつかしく想っていたものだが、週刊誌に、地方のストリップでは全ストは、もはや常態となっているという記事を読んで、東京のストリップばかり見ていたのでは、ストリップ界の全貌は、わからないと思つていたが、たまたま先月出張の機会に恵まれたので、東海道線沿線をチヨイチヨイ途中下車して、覗いて見て廻った。

N市、Y市、K市、O町と、たった四カ所を見てまわっただけであるが、非常に楽しかった。

勝手のわからぬ地方に出て、三流演劇の小屋を探すのは厄介だが、また楽しみでもある。

ある。私は旅に出ても名所旧蹟などをみるよりも、こうした演芸場や町並を、当てもなく歩く方が楽しみである。その土地の人情風俗にひたれるからだ。

ところで、地方のストリップ小屋を探すには、まず、その地方の新聞を買って広告を見るのが一番だ。中には私の記憶にある劇団の名前がみつかることもある。ああ、まだ相変わらずやってるな、と思うと、なつかし味を感じる。

近頃は、ふたあけの前の町廻りなどやっているのかしら？ やっているとすれば、そのP・Rの方法も、昔とは違ってきているであろう。暇があれば、そういう面もみたかったが――

町の辻々には相変らずの毒々しいポスターが貼られている。これを見るのが、また楽しみだ。このポスターに書かれてあるうたい文句は、それ相当に苦心して書くものだ。私もずっと昔は、このポスターを作った経験がある。

質のよくなつた地方ストリップ

さて、私の見てきたうちで、異色のあるシヨウを二、三を御紹介しよう。

今度みたところで、全般的に向上したことは、踊り子の質がよくなつたことである。

昔は踊りもろくに踊れず、からだの線もひどくずれたヤツが平気なツラして出ていたものだが、近頃は日劇のミュージックホールへ出しても羞ずかしくないような立派なポリウムのあるのが大抵揃っている。芝居は下手だが踊りは結構下地を積んできている。

衣裳も比較的金をかけているし、アイディアもなかなか秀抜なのがある。ただ相変らずお粗末なのはバックだ。

背景のお粗末さは前よりひどく手を抜いている。これは劇団よりも小屋側に罪がある。然し、こういうものを見にくる客というものは、バックなどは余り気にしないものだ。

全ストは確かに一般的である。それも実に巧妙なテクニクでやっている。

ストリップには、きわどい「みせ場」がある。いまにもバタフライがずれそうになる場面、バタフライも取ってしまったてうすもの一枚でかくして、それをズリ落すとか、両手でおおって、その両手の指を段々すばめて行くとか……そう云つたいわゆる「みせ場」では絶対に全ストをやらない。もし、みたという人があれば、恐らく「ハリバタ」をみたので

あろう。

(註)「ハリバタ」とは黒い逆三角形の布を貼ったバタフライである。

ひとびとの注意が、その一点に向けられているときは、防備は堅固である。

全ストをみせるのは、きわめて自然に、一見不用意に、思わぬところで見せるのである。例えば、初ッパナに衣裳をつけて、スッと出てくる。そのとき不用意にスカートのまくりがみせられたりして、チラリ、チラリとみせるのである。

ストリップ、女剣戟、女プロ

レス三本立

さて、こんなことを書いても本誌の読者には大して魅力はあるまい。私の好みの傾向をあらわしたストーリーを報告しよう。

K市でみたQ劇団でやっていた、人肌秘聞、というのは面白いアイデアだった。

芝居の筋は昔、池袋の「アバン」でやっていたようなものの焼直しで大したことはなく金持ちの好色爺が、町の娘達を百両の懸賞付でモデルに募集し、一人々々を裸にして皮膚を調べ、その中の一番よい娘の背中に観音さまの刺青をする。

その刺青の中に自分の全財産をかくした地図を彫りこんでおく。若い頃、家出した息子の次郎吉の背中にも刺青があり、それとこの娘の刺青を合わせると財産のありかがわかるといった構想だ。娘は、その次郎吉を探しに

旅に出て、好色爺の番頭から手ごめにされそうになるのが第二の見せ場。それを通りかかった男が助ける。それが次郎吉で、二人は江戸に出る。次郎吉には六人の情婦がいて、次郎吉は、七色パンティ、みたいに、この娘を加えた七人の女に毎日かわりばんこに世話させるといったところが第三の見せ場。ところが、この次郎吉は実は、にせ者で、最後に本物の次郎吉(それが何と鼠小僧次郎吉ということになっているのだが)が現われて、背中の刺青を合わせて財産のありかがわかるといった筋であるが、一番終いの「みせ場」が一寸観衆のどきもを抜く壮観なものであった。

くなつた娘が六人の女を相手に大立廻りとなる。

場所が墓場での乱闘なので、てんでに卒塔婆を引っこ抜いて殴り合う。これも面白い思いつきだ。

この乱闘場面から全部パンティ一枚となる皆、色が違う。いわゆる「七色のパンティ」である。だが主役の娘のだけはナイロン製である。

拳斗、相撲、レスリングと、いろいろな型をみせる、結局は女プロレスとなつたわけだ。結構、投げ業も練習したと見えて、首投げや腰投げ、ヘッドシーザー、ボディシーザー、ダイビングキックと多彩な業をみせる。このところが壮絶極まりない光景で、女プロレスと云えども最多数四人の殴り合いだがここでは七人の女が舞台せましと暴れ廻るのだから何ともはや、観衆は喜んで太喝采。女の子達も、はりきってあちこちスリ向いたり、オデコを床におっつけたり、テンヤワンヤの大騒ぎ。観てる方も楽しければ、やってる方もキヤアキヤアと結構、楽しそうである。

本誌のメトミファンなど楽しめるシーン。つまり、この演し物の中にはストリップと女剣戟と、プロレスと三つのショウを合わせ

たところがミソなのである。

MS 森の石松

次にY市でみた「石松道中記」。

筋は、おなじみの森の石松が都鳥の吉兵衛



に斬られて、小松村の七五郎のところへ転がりこむ。あの場面である。

石松が旅の女をからかう第一場は、大したことではない。

第二場は小松村の七五郎の家で、七五郎が

女房と二人でバクチの稽古をしている。賽ころを壺に入れてパツと振るその手つきは、なかなか堂に入ったものである。夫婦で賭をするが七五郎は女房にかなわない。女性特有のエロ戦術にひっかかるからだ。この場面が第一のみもので、とても映画の「女王蜂」でやった久保菜穂子のばくちのシーンなどは足もとにも及ばぬものである。

壺振りではかなわぬ七五郎が今度は別の賭を提示する。

「俺は、どうも石松が心配でならねえ。胸さわぎがする。無事でいればよいが……」女房の方は「石さんは強いから絶対大丈夫だよ」「そんなら石松が無事か無事でないか賭をしよう」「石さんに限って吉兵衛なんかにやられることはないよ。もしそんなことがあったら妾や、石さんとお前の前で全ストをやってみせよう」「こりや面白ええ。よし賭けた!」と言っているところへ石松がサンバラ髪で、戸を叩く。

「まあ、石さん。身体中斬られて、どうしたの?」「都鳥にやられた」

これをみて七五郎はコオドリして喜ぶ「有

がてえ。石松よく斬られてくれた。これで女房に勝つことができた。サア、お万、俺と石松の前で全ストを踊れ」「バカヤロ、石さんが死ぬか生きるかのときに何さ」「でも約束は約束だ。サア踊れ」「踊るよ、踊りやいんだろ」

と女房のお万が着物を脱いで腰巻一枚になり、正面に向って坐った七五郎と石松の前に立ち、舞台に背を向けて、二人の眼の前で踊り出す。

石松と七五郎の驚いた表情が、お万が体を左右に動すたびに、交互にみえる。音楽に合わせてお万は微妙にうごく。

「石松、キズはどうだ、痛むか」「痛むどころじゃねえ。おかみさんの踊りで、すっかり痛みも忘れちゃったよ」「アラ、石さん。ヨダレが垂れるよ」

と、お万が腰巻で石松の顔を拭いてやる。

そこへ都鳥の吉兵衛一家がやってくる。

「ア、とうとうやってきやがった。石、お前とお万はかくれている」と七五郎は二人をかぐす。吉兵衛は踏みこんできて「石松が来ているだろう」と型通りの芝居である。

「野郎、かくしやがると手前もタダジャアおかねえぞ」「疑うなら、狭い家だ、家探して

も何でもしてみろい」「よし奥の部屋を探してみろ」子分が奥へ踏みこもうとすると、女房のお万が腰巻一枚で出てくる。

「まあ騒々しい、何だねえ。折角、七さんと楽しんでいるところへ土足で踏みこんできやがって。てめえ達は何だい！」とたんかをきく。子分達はお万の姿に氣おされてタジタジとなる。

大体、こうしたアチャラカ芝居の面白さは全然意味のないギャグに秀逸なものが多い。

「イヤらしい奴だよ、お前は。都鳥の助平という名前通りの野郎だよ」

「助平じゃねえ、吉兵衛だ。だが、おめえが助平だというんなら助平になってやろうか。どうだい。」

この辺りのギャグは戦前にエノケンがやり出したギャグであるが、その後もシミキン、森川信、キドシンと一連のアチャラカ連が、ずっと継承してきた有名なギャグである。

「冗談じゃないよ。七さん、何とかしておくれよ」七五郎が二人をひき離して「とんでもねえ野郎だ。亭主の眼の前で口説くなんて日本レキシにねえことじゃねえか」

ここでまた本筋に戻って石松の悪口を散々言うので、石松がたまりかねて奥の部屋から

とび出してきて、入り乱れてチャンバラとなる。石松が子分共をみんな叩き斬るが、吉兵衛に後から斬られて倒れる。それから今度は七五郎と吉兵衛の決闘になるが、吉兵衛が強く七五郎がやられそうになるとお万が加勢して、吉兵衛の背後から首に腕をまわして、ひき倒した。「このアマ！」と吉兵衛は刀を振り廻す。

「あら、ごめんよ。でも、うちの七さんを斬っちゃいやだよ。お前さんは石松さえ殺せばそれでいいんだろ。七さんは妾に免じて勘弁しておくれ」片肌脱ぎの吉兵衛の首に白い両腕を巻きつけて、くどく。「そりや勘弁してやらねえこともねえが、そのかわり、おめえは俺のものになるかい」「なるともさ。ホラ、これ御覧！」と足を投げ出している吉兵衛の前に立ちはだかって、「ウヘエーッ」と驚く吉兵衛の顔へ身体をゆさぶって近よせると、吉兵衛は舞台へ長々とノビてしまう。ここで私の息をハッとのませるようなことをお万は、やってのけた。

お万は倒れた吉兵衛の顔の上にしゃがんで両手で眼をおおうと「サ、七さん！はやくはやくいまだよ。吉兵衛をやっておしまい！」と言うと、七五郎が刀を取り直して、吉兵衛

のお臍のあたりに切先を当て、刀を鎌もみのようにクルクル廻して刺す。「ウワア」という吉兵衛の悲鳴、もがく吉兵衛を上から押さえつけたお方は、「ざまあみやがれ！」と下を見下して、もがく吉兵衛を足で押さえつける。

この殺しの場面は、ユーモアを交えてはいが、見ようによっては非常に凄惨にもみえる。それからドタバタ喜劇になって、死んだ

石松や吉兵衛が生き返ったりしてテンヤワンのヤのうちに幕になるのであるが、私としてはこの珍しい演出のショウをみて、久方ぶりに満悦を禁じ得なかった。

地方の観客は、私などよりも、ずっと場馴れしているのかこういう刺戟の強いショウを見せつけられても比較的、平静で、たまに酔っぱらいが野次をなげるくらいのものであった。N市で観たショウも一寸変っていたが、そ

れはまた次の機会は発表するとして、いまやマンネリズムに陥りに映画に圧倒されて必死のあがきをみせる、これら地方廻りの、三流演劇、の群は、あとからあとから奇想を凝らして客寄せに苦心している。

そのアイディアは奇想天外、なかなか秀逸なのがあると思う。本誌の読者諸君も、地方で面白い芝居、変ったショウを観られた方は紹介されてはどうかと思う。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円

復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切▽
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切▽
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円

復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦唐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第二集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦唐第二集)	定価三百円
復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円

御希望の年月号御指定の上、御申込次第厳重包装の上急送申し上げます。御送金はなるべく現金書留か振替を御利用下さるようお願いいたします。

乙 女 櫓

(おとめやぐら)

桂 牧 次 郎

シタレドモ、センナキコトニテ、只々、念仏ヲソ申シケル。……
 ソレヨリ、城中ニ、奇怪ナルコトドモ、出デ来テ、皆々、怪シミ
 恐ルト語り伝エタルトヤ。
 (山吹城記)

鬼百合の章

乙女櫓ハ、モト、御留櫓ノ意ナリ。変事ニ備エテ、開ケズノ櫓ト
 ナシ、御留メアリシモノ也。サルヲ、ココニ、アワレナル、古老ノ
 語り草アリ。昔、美形ノ一侍女アリタリシガ、君主ヲノロイタル罪
 トカヤノ疑イアリテ、ココニ押シ込メラレケリ。日夜ノ苛責ニ、サ
 イナマルルコソ本意ナケレ。女、泣キ悲シメドモ甲斐ナシ。ソノ声
 ノモレ聞ユトイエドモ、人々近ズカズ。七日七夜ノ拷問ニ気色失イ
 タル女、遂ニ白状ニ及ビケリ。君主、怒リテ、刑場ノ河原ニ曳キ出
 ダシ、生胴吊リノ惨刑ニ処ス。女ヲ斬リ殺シタルハ、ソノ愛人ノ武
 士ナリト伝フ。君命ナリトイエドモ、人々、ソノ非情、残酷ヲ非難

恐ろしい話でございます。私がこのお城に御奉公に上ってから、
 もう三年になりまするが、本当に毎日が命のちぢむ思いでございま

した。こんな恐ろしいお城にどうしておつとめなどさせたのかと、今更、亡くなった父が恨めしく思われたり致します。

私のお仕え致して居りますのは、お百合の方様と申し上げる、殿の御愛妾の、いたって、羽ぶりのよろしいお局様ですが、事のほか御気性が烈しく、専ら、鬼百合の局様などとかげ口をなされて位でございます。

以前は、おやさしい上品なお方であつたと承つていますのに、こんな御性格になられましたのは、確かにあの事件があつた後でございます。あの事件さえ起きていなければ、勿論、乙女櫓の恐ろしい話はおこらなかつたでありましょう。その事件と申しますのは――江戸のお邸にいらっしゃる奥方様には和子がなく、松平十萬石のお世嗣に困つておいでなされた時、殿様お手付として、このお百合の方様が、お城づとめの間におみごもりになられたのでございます。大へんなお喜びようで、大そうな御出世の夢にお酔いになっていられたのでしようが、ふとしたことが原因で流産なされたのでございませう。それが五カ月の和子と申しますから、落胆も一入で、すっかり打ちひしがれたようになっていられますところへ、妙な噂がひろまったのでございます。それは、江戸の奥方様がお呪い遊ばしたのだと申すものでしたので、お百合の方様の逆上は、すさまじいものでした。そして、とうとう噂を裏付けるような事件が起きてしまったのでございます。奥庭の中に大きな杉の木立にかこまれて、うすぐらい所ですが、代々の殿様のみたまをおまつりした祠が安置してあるのです。平生は誰も近づけないように、しめ縄がしてあります。もっとも、本式のものは御城下にあるのでございますが、いつの頃よりか、お城内に便宜上、作られたものらしいのですけれど

――その杉の木立の一本に呪釘とワラ人形が庭番の下士によって発見されたのでございます。「巳年二十四才の女」とかいてありました故、お百合の方様は御自分以外にはないとお思いになり激怒なされ、きびしく犯人の探索をお命じになりました。こうして、雪路という十九になる新参の腰元が捕えられたのでございます。お吟味には直々お百合の方様がお当りになられましたたが、私は今でもその時の光景を忘れることは出来ませぬ。

雪路と申す女は色白の、むっちりとした、ふくよかな美しい女でしたが、嚴重に後手に縛られたまま、お庭先に引据えられて、うつむいている姿は、消え入るばかりの、なよなよとした風情で、痛々しく可哀想で、とてもそんな大それた事をした犯人とは思われませんでした。それが余計に不びんでした。お百合の方様のお顔は蒼白にひきつり、いかにも憎々しげに睨みつけておいでになるのをみますと、もう、どうしても、この娘は助かる筈はないと妙な予感に襲われて、私は目をつむりました。

『雪路と申したのはそちか』

『は、はい』

『そちの父、三木作衛門は江戸詰、奥方様付の武士であつたな』

『はい、でも……』

『よい、そちは、わらわの問いにだけ答えればよいのじや。そちがお城につとめ致すようになって、かれこれ半年。誰にたのまれて、わらわを呪いやつたか、つつまず申しや』

『ど、どなた様にも、頼まれは致しませぬ。』

『と、申すと、そち一人の所存でいいやるのか』

『……』

『そちに恨まれる覚えは、さらさらないわ。頼まれたのならば、神妙に白状いたせ。痛い目を見て、みぐるしく取乱さぬうちにキリキリ申してみや。さア』

『私が、わるうございました。ふとした出来心でございます。お慈悲です。……』

『だまりや。いらざる忠義立ては無用じやと申すに——。サア真実を申すのじや』

『……』

『えい、顔に似合わぬ強情なおなごよの』

雪路さんは拷問にかけられましたが、氣絶を二度もしましても口を割りませんでした。

それから三日三晩続け様に色々な責具にかけられたのだそうですが、私は一度だけそれを見ただけでございます。食事を運んだときですが、エビ責と申すのでございましょう。はずかしい恰好にされて、腰巻のスソもはだけたまま、二本の足は束ねて首に結びつけられ、後手にしめられた両手首が紫色になって、笞の打擲の下に身をくねらせながら、ヒイヒイ泣いておりました。



れ 雪

髪も乱れてちらしになった悲痛な姿でした。正視できず、私はお膳を入口においたまま、お百合の方様とお付の方に会釈して早々に引き下りました。最後に屈強の侍衆たちの手によって石抱きの責にかけられた時、女は遂に「恐れ入りました」と、がっくり首を折ったと聞いています。それから、どのような自白をしたのかは存じませぬが、お百合の方様の命によって御留櫓に押し込められたのでございませぬ。御留櫓と申しますのは、お天守の長（うしとらの方位）の方角にあたる二重の小さな非常櫓ですが、その昔、方位のよくない不吉の櫓として、いわゆる、あけずの櫓として伝えられて参った

ものでございます。明り取りの窓も少く、暗く陰惨な櫓で入口のくぐり戸も一つで、重い錠が鈍く錆ついているのでいつしか、近よりにくい櫓として、私どもにも何か秘密めいた印象さえ抱かせるような存在になっていました。庭番の武士に云わせますと、物怪につかれたような重苦しい感じに襲われるという不気味な櫓でございます。雪路さんはその櫓に閉じ込められたのです。それから時々若い女のすすり泣く声がするといつて、怪談じみた騒ぎが何も知らな

い人々によってもち上りましたが、お百合の方様は側近の腰元たち以外には別に話しもせず、何か思いつめられたようにキツと空中の一点をみつめなさるかと思うと、一人で口もとに薄ら笑いをお浮かべになっぺいらっしやることもありました。ある晩のことでございます。私たち六人の腰元をお部屋にお呼びつけになっぺ、

『皆のもの、あの新参者の処刑のことじゃが、いかが致したらよいか、わらわの氣持になっぺ申してみや』

『はい、大それた重罪人、なぶり殺しにしてやられましよう』
すぐ口を切ったのは小浪という腰元でした。

『どのような事をいたすと申すのじゃ』

『はい、みんなのみている前で最もはずかしいこらしめの刑の後、打首にいたしましたは、いかがと存じます。』

『あの、恐れながら、私は火あぶり、はりつけのどちらかが、およろしいと存じます。』

『いえ、今、玉菊さんのおっしゃったのは、ありふれてつまらぬと存じます。私は牛裂のような思い切った極刑はいかがかと申し上げます。』



『いえ、私は、裸にして逆さはりつけの方がよいのではな
いかと……』

『私は、いやしくも呪い釘を
うつ不届ものの事故、釘を体
に一本々々打ち込んで殺すの
が至当であらうかと……』

つい、つられて、私たちは
雪路さんをまるでなぶり殺し
にするのに異常な興味を持っ
ているかのように、めいめい
で話し合い、つとめてお百合
の方様の歎心をひこうとお互
いに努力しあいました。しか

し、私どもの思い付きの曲のない刑罰はお取上げにならず、次の
ような刑をお打ちあけになっぺたのには、私どもも思わず、うなりま
した。

『皆の考えも、それぞれ、とりどりに面白い。が、わらわは満足は
せぬ。あの女を罪するのは奥方様を罪するのじゃ。わらわは、もう
辛抱ならぬ。女の執念として報復しなければ気がすまぬ。よって、
わらわは考え抜いたのじゃ。雪路には明日から先ず刺青を致す。鬼
百合の花をじゃ。それができ次第に披露に及び、城下を引廻す。そ
して、家中の腕達者の若者、つまり、雪路の許嫁になる岡島新三郎
なのじゃ。彼によって、首を斬らす。打首と申しても生胴吊りに致
すのじゃ。ホ、ホ、』

生胴吊り。それは後手にしはった罪人を吊し、その胴を斬ると首のおもみで胴がくると廻転し、首が下に下がる所をすかさず返す刀で斬って落すという最も陰惨な斬罪で、極悪犯人か非人であっても、新刀のためし斬り以外には仲々行われなかった刑罰です。それを、うら若い娘に、わざわざ刺青の彩色を施し、衆人環視の中で刑を行うというのでございますから、私たちが震え上りました。しかも女の愛人に首を斬らすというのです。何と大胆にして思い切った見事な刑罰でございましょう。恐らく、お百合の方様は全力をあげて、この見世物を実行あそばす堅い御決意に違いありません。それは江戸の奥方様への、せい一ばいの挑戦ということにもなるのでございます。次の日、ただちに刺青師二名がお城に召され、御留櫓に入っていました。あと三カ月すると、江戸御出府中の殿様も御帰城になるのですが、それまでに処分なさるおつもりと拝察は充分できました。玉菊さんのお話によりますと、お百合の方様は、一針さされるたびに、身をのぞけらし苦痛にしばれゆく女の体を、心地よげにおながめになりながら、この所をもっと強く刺せ、などおっしゃったりなさるそうでございます。手燭をもってお側に侍っている腰元たちの方が身体がジーンとしてきて、恐ろしくてたまらなかつたとの由でございます。また時には、

『これ、刺青を致させるのは、わらわら心づくしの慈悲と思うがよい。雪の肌のまま人目の多い所で殺さるるのは、いかにも恥ずかしいであろうと存じてのう』

など、おっしゃったりして雪路さんをおなぶりになるとも聞きました。雪路さんは押し込められた時から、決して自殺のできぬように、口中に鉄の板をふくませ、鎖で足をつなぎ、手は後手に縛られ

たままにしてあったそうでございます。すすり泣くのが、せい一ばいであつたのでしよう。

其の頃、御城下には高札が辻々に立てられ大へんな評判になっていました。岡島様は再三、御辞退なされましたが、城代家老、太田主永正様の御厳命により遂に覚悟なされ、愛人の生胴を斬る役を仰付かつたと、これ亦、もろもろの憶測と共に色々と取沙汰されておりますのが、私どもの耳にも入って参ります。だが、刺青の秘密はまだ誰も知らぬようでございます。

私が雪路さんを見たのは、処刑の前々日、お百合の方様のお言付で、玉菊さんと二人で雪路さんを湯殿に連れていき、身体を洗い清めるよう命ぜられ、それを致しました時でございます。あざやかな刺青。大きな鬼百合の花が口を開いて、それをとりまくように四方から花卉がたれ下がっている図柄。背中から肩、脇にかけてくもの巣にかかった蝶の刺青。湯気に上気して艶々と純白の肌に浮彫りされて、異様な妖しさにぬれていました。私たちは始終、無言でありましたが、

『いろいろと、お世話になりました。これで、ほんに、さっぱりいたしました』

雪路さんは淋しそうに笑ってみせました。そして、罪人引廻し用の白い着物に着かえると、静かに手を背に廻し、

『どうぞ、お縄をおかけ下さいまし』

と、申すのでございました。

やがて、引渡し of 刻限になり、私と玉菊さんは、とも角、形だけは後手にグルグル巻にした雪路さんを引立てて御留櫓の前の庭にいました。吟味所役人は五人いましたが、

『腰元衆のかけた縄は生ぬるい。こんなかけ方では引渡し作法にはならん。作法の御定通り改めて本縄を打ち申す』

と、犇々と喰い込む程にきびしく雪路さんを高手小手にくくり上げました。見ている私たちの胸が、しまる思いでした。役人たちに引立てられながら、雪路さんは、もう一度、私たちに会釈してくれましたが、美しい愛らしい目もとが涼しく、可憐な少女であるだけに、可哀想でたまりませんでした。その夜、私は寸刻もねむることができなかった位でございます。

しだれ桜の章

どこから舞ってくるのであろう桜の花びらが、一ひら、二ひら、牢舎の窓から音もなく流れこんできては、雪路の黒い髪や肩のあたりに、ちらかった。春の名残りを惜しむのか、雪路の明日の命をとむらうのか、無心にどこかで桜が散っているのだった。

雪路は、その花びらは岡島新三郎の邸の庭のしだれ桜にちがいないと思った。そう思うのが、せめてものなぐさみだった。まあ、あんな遠くから——。雪路は、ひとみをかがやかせながら、身をよじった。よじると、縄目がよけいに肌をしめつけた。雪路は、前後菱形の本縄にしばられたまま坐っているのだった。しかたなく、雪路は、ひとみをとじて空想した。いろんなことが、とりとめもなく思ひ出されてきた。不思議と死の恐怖はなかった。

雪路の独白

『わたしは明日、お仕置になる。何か、言い残すことがあるように思うけど、いざとなると何もない。それでも一応、形だけはと思つて筆と紙を借りただけで、牛番たちは、縄をといてはくれなかった。『遺書をかくのなら、口で筆をくわえてかいてみる』と、まるで、わたしを騙りものにしている。いや、本当の騙りものは明日なのだわ。わたしを斬り殺す役目は岡島新三郎様とか、わたしは、笑つて死ぬつもりでいるが、そのとき、うまく笑えるかどうか。やはりまっ赤になって、わたしは、宙吊りにされたまま、羽をもがれた小鳥のように、みもだえするだろう。気を失うかも知れない。それよりも、わたしは、いれずみを衆人の目にさらされる。岡島様は、この、いれずみを御存知かどうか。わたしはこの、いれずみをされる時、何度も失神した。死ぬ苦しみの中で、岡島様の面影を思いうかべつつけてきたのだわ。そのせいかわかりませんが、妙な夢ばかりみるようになった。』

お百合の方は、わたしを憎い程、きれいなからだだといって打った。他の腰元も、眼の色を変えて折檻した。あの眼の色は、どういうものだろうか？

そういえば思ひ出すことがある。岡島様のお邸で、切支丹遊びをしたこと。わたしがバテレンの女信者、踏絵がふめなくて、捕われる役で、始めて庭のしだれ桜にくくりつけられた日のこと。母御様にみつき、わたしはすぐ助けられたけど、新三郎様は、ひどくしかられなさったっけ。

「よそ様の、お嬢様に対して、何という手荒なことを……」って。あの日のこと、新三郎様も、お忘れではあるまい。……わたしは今も縛られている。こうして坐っていると何か、ぞくぞくする不思議

議な衝動が、エレキのように伝わってくる――

ああ、わたしは、一体、何てことを考えてるのだろう。わたしは、ういういしい十九才の娘、武士の娘。恥をうければ死を選ぶべきなのに、しかし、やはり、わたしは悲しい女だ。今死ねば、新三郎にあえぬのだもの――』

雪路は、小さい唇をかみしめた。

『女、出ませい。最後のお慈悲であるぞ』

牢番が縄尻をとったのも知らなかつた。思わず、前にのめると、着物の裾がわれて、雪のようなはぎがのぞいた。そのまま雪路は牢役人の頭の部屋に引き立てられていった。

牢役人丸尾弾正の独白

『ふむ、雪路と申す女、十九に相成る由じやが、ほんに、いい娘じや。殺すなどもったい話じやて。さすがに、ぶるぶるふるえていたな。それが、よけいに、いとしゆうてのう。』

女は、何度も、高く低く、すすり泣いてな。そうだ。それ、今でも、耳をすませば、牢番たちの部屋から、ふるえるように伝わってくるではないか。

待て、あれは風の音かな。雨の音だな。

風まじり雨ふる夜の、なやましき春のおぼろの、しだれ桜が、しず心なく散っていく。こりやどうも、牢役人は風流は解せぬものじや。どれ、快よきねむりに入ろう』

落花の章

八丈河原は、大へんな人出だった。朝早くから城下はいうに及ばず、近郊から百姓なちも、ぞくぞくとつめかけてきた。そして、口々に、今日、ここで処刑される女のことを話しあっている。竹矢来がめぐらされ、正面に、お百合の方様が、棧敷に、腰元たちをつれて控えている。ひきつった顔に残酷な笑を浮かべて、何やら、お付の者たちとささやいている。中央には柱が立てられ、準備はすべて終って、非人たちが掃き清めている。

棧敷の横には武士が数名、床几に腰をおろし、後には足輕の鉄砲隊が十人あまり、万一にそなえて控えているといういかめしさ。

岡島新三郎は、紅潮した面持で、三方を武士に取かこまれて、少しはなれて控えている。

見物たちは、複雑な気持で、この若侍をながめていた。

舞台は全部揃った。あとは、主人公である主役の登場を待つばかりである。

『そろそろ、まいるところでございます。さきほど、山吹大橋南詰の番所前を通りましたとお知らせがありました……』

お百合の方は、にんまりと笑った。

群衆が、どよめいた。口々に何か叫んでいる。

異様な興奮が、うずまいて流れた。

『いよいよ、御到着だ』

一せいに、人々は視線をなげかけた。

嘲笑なのであろうか、歓声なのであろうか、同情なのであろうか、好奇に狂ったひとみに射すくめられながら、雪路はその姿を今や刑場にあらわしたのである。

一夜の中に雪路はすっかり、やつれていた。黒髪は、きれいに島

田に結ってあったが、元結は白紙。かえってそれが印象的だった。白い、やや太目の真新しい捕縄で、ひしひしと、からめあげられた背中には、怪しい鬼百合のいれずみが咲いていた、両手は後にまわ



女が、殿の寵姫をのろったという大罪を犯した罪人であることなど、どうでもよかった。

ただ、次に起る血の惨劇に、心のときめきをおぼえ、皆われを忘

して、背にねじまげ、思い切り吊り上げて縛ってある。生胴斬をしやすいように、ひじを上にはきつけてあるのだ。そのせいか、雪路は苦しそうに、前かがみになり肩で息をしていた。花卉の芯のようなしなやかな十指は、五本ずつにつかねられて、空しく虚空にむかって背中の上に花ひらいていた。

『リリン、チリリン』

人々は、美しい鈴の音色をきいた。それは雪路の胸の交叉した縄目に、とりつけてある銀の小鈴であることを知るのはわけはなかった。馬の歩み、女の身体の振動につれ、リズムカルに鈴はなった。哀れな縄目にはさまれて、鈴はかなしい音をたてた。猫の首につけた鈴のように、激しくゆれて、非情な音色をたててもいた。

群衆はだまった。声がでなかった。あまりの美しさ、凄惨なうつくしさに酔っていた。『まあ、かあいそうにー』町家の娘もそういいながら、たもとで顔をおおいながらも、視線は雪路のあとを追った。釘付けになったように誰も、何もいわなかった。

れて、かたずをのんで見守っているだけだった。

お百合の方だけが、自分の演出が見事、図にあたったのを、たしかめるように、あたりをみまわし、満足の笑をもらした。

雪路をのせた裸馬は、刑場内を特別に一巡させられた。お百合の方の指図である。

雪路は、じつと唇をかみしめ、青ざめた顔は、すきとおるほど白かったが、頬は、うっすらと桜色に紅潮していた。わるびれることなく、ぬれたひとみを、さすがに伏しめがちにしているのも、痛々しい。そこには、あきらめた女のやるせない美しさがあった。

岡島新三郎は、さすがに見るにしのびず顔を伏せ、手をぶるぶるふるわせていた。

『雪路、何故に、そなたは、死なぬ。なぜ生き恥をさらすまゑに死んでくれぬのだ』

いや、新三郎とても、もう理性を失っていた。わしは、今日の主役の一人だ。この大役は、一瞬ですむのだ。大根を二段斬りにする位のことだ。それが済めば、わしは上役に取立てて頂けるのだ。わしが悪いのではない。すべては運命だ。悪夢なのだ。あきらめるのだ。わしは卑怯かも知れぬ。わしは、やはり、わしが一番かわいいのだ。わしは出世したいのだ。わしの剣の技を城下に喧伝するの、あと一瞬だ。みんな白日夢と思って、あきらめるのだ。そんなことを思って必死に心をしずめようとした。人々には、そんな新三郎の姿が、実に同情的に見えた。

すべてが、ものぐるほしい空気につつまれていた。

雪路が、高々と宙吊りにされると拍手が、どっと起った。雪路の身体はクルクルと回転した。最後の姿を、公平に群衆にみせている

ようであった。足先が地上をはなれた時、むなしく両足は泳いだ。両腕が一べんにシビレ、縄目はギョツと全身の重みでしまった。

肩、腕、胸、胴、を一時に圧迫されたので、血がとまるような苦痛に思わず『ううっ』と、うめいた。

『リリン、リン、チャラ、チャラ』

小鈴は最後の乱調子を、風鈴のようになでた。雪路は、むなしい身もだえをつづけた。やがて力なく、だらりとのび切ると、島田まげが、がっくりと、くずれて、うなだれた。晩春のうす寒い風にさらされながら、雪路の身体は、お百合の方に正面をむけたまま、微かに揺れ終ったのか、その運動を停止して垂れ下っていた。

『オホ、オホ、オホ、』

お百合の方の、かん高い笑い声が静まると、うながされて新三郎は刀をとって進み出る。顔面蒼白、ひたいに汗が、にじんでいる。

『ゆ、ゆ、ゆきじどの』

『し、しんざぶろうさま』

『ゆるして、くれ。たのむ……』

『おめに、かかりたうございました。このような、はずかしめをうけても、一目おあいしとうございました。あわれに思い下さりませ。わたしは、本望でござります』

『ゆきじどの』

『く、くるしうございました。早く、お早く、お斬り下さりませ。』

この上の、はずかしめは……』

かなしそうに眼をふせると、肩をうめるようにして、むせび泣いた。

『何を、つべこべいたしておる。早々に斬って捨てい』

上役から下知がかかる。

新三郎は二、三步、後にさがりながら、片手なぐりの銀蛇一閃。

返す刀がまた一閃、目にもとまらぬ早業だ。新三郎は、へなへたと河原に坐り込んでいた。

『あっ』といって、人々は何事がおきたのか、よくたしかめようと



れ
き

『ひどい、残酷だ』

『鬼だ、畜生だ』

『人非人、人でなし』

見物は、悪魔の呪術から放たれたように、つぶやくのだった。先刻までの、自分たちの異常な陶醉を忘れさったように――。むしろ

した。一瞬の出来事なので、生胴吊がもう終了しているとは思わなかったのだ。

見よ、宙にぶら下ってゆれて
いるのは、真赤な肉塊で、半身
と首とはなかった。肉塊は鮮血
をふきあげながら、なおも、か
なしい鈴の音を、リリンリリリ
と、かなでていた。

新三郎が坐って、両手にもっ
ているのは、かっと目をみひら
いた、血まみれの女の生首であ
った。

群衆は茫然としていた。そし
て今、眼前で何が行われたかを
たしかめると、突如として人間
の心にかえった。恐怖の表情に
近かった。誰からともなく、念
仏の声がもれた。その声は、ま
たたくまに群衆をおおった。

その異常な陶醉から救われ、ほっとして人心にかえったものであるう。

その群衆の念仏浄化の中にあつて、ただ一人、お百合の方の哄笑だけが、一きわたかくひびいていた。

『オホ、、、オホ、、、』

血に狂ったような声であつた。うつろな響きをたてて、いつまでもつづいていた。

くちなしの章

岡島様が、いずことも知れず逐電なさつたのは、その夜の事でございます。それから奇怪なことが次々とお城の中外におこつたのでございます。そして、とうとう恐ろしい破局へと近ずいていったのでした。破局と申すのは、お百合の方様の最期でございます。

まず、乙女櫓から夜な夜な、女のすすり泣く声がきこえ、時には、あの鈴の音が響いてくるとの噂。この噂は忽ち、ぱつと拡がりました。それか、あらぬか、お百合の方様のお部屋に、女の亡霊がでるとの、何とも恐ろしい話が伝わり、最初に、それをみたのは、しのという新参の腰元ですが、これは丸尾弾正様の娘。しっかり者ですが、もう齒の根も合わず、ぶるぶるふるえて申すのでございました。たしかに雪路の亡霊にちがいありません。耳までさけたまっかな口で、ニタリとわらつて、お百合の方様の寢所近くに消えたと申し立てるのです。よって、武士たちの警戒もきびしくなりましたが、またまた、ゆうという腰元が、幽霊をみて気絶したのを助けられたのでございます。

甲斐に参案 四馬孝画 「涙のダイヤモンド」 略号 (なみ)

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

大中判印画紙焼付 二枚一組 三百円

甲斐に参案 四馬孝画 『涙のダイヤモンド』 略号 (かん)

○伸し責 ○苦悶のコルセット ○浣腸責

大中判印画紙焼付 三枚一組 四百円

御城下では、辻斬りの噂で、もっぱらでした。斬られるのは皆、お百合の方様付の武士か、その上役たちなので、これまた、タタリだろうと噂されました。しかし、不思議なことに、幽霊の方は姿をみたものが、ありますのに、辻斬の方は姿をみたものが、ないので。ただ、一刀の下に斬り下げていくのですが、相当の使い手だろとの由でございます。

犯人は、新三郎様ではないかとの疑いも当然おこりましたが、どこを調べても、城下に潜伏している気配がないのでございます。そして、あの二つの事件がおきました。

一夜にして二人が殺されたのでした。一人は丸尾弾正で、自宅の裏門の所で真二つにされていました。一人は、その娘の、しの。しのは乙女櫓の下で、真二つ。むごたらしい死体となっていました。まぎれもなく、これは復讐に相違ありません。はっきりと、雪路の生胴吊りを暗示しているので、私どもは恐ろしくなつて、ふるえ上りました。

お百合の方様も、うわごとをおっしゃるようになり、夢にうなさ

れるようになりました。

時々、「まけるものか、まけて何と致すぞ」などと、あらぬ事を口走られたりして、お付の私どもを気味わるがらされるのでした。ちようど、雪路の四十九日目の事でございます。八丈河原に、十数人の非人の死体が転りました。どれも見事に、一太刀で真二つにされてしまったので、もう城下は大へんな騒ぎになりました。その夜、城下の刺青師二人が行方不明になり、その生首が、お城の薬研堀に浮いておりまして、またまた大騒ぎ。その騒ぎの中で、お百合の方様は遂にその姿を、こつぜんと消しておしまいになったのでございます。

翌日は、殿様が江戸表より御帰城なさるので、その準備に大童でありましたので、お百合の方様のお姿に、みな気づかずになっていたのでございます。

ほんに、いまわしい事でありました。お殿様は城下の菩提寺に、まずお立ちよりなされ、そこで、お食事をなされる御予定と承っておりました。

その頃、わたしどもは乙女櫓の中で、お百合の方様の無残な死骸をやっと見付けだし、きもをつぶしていたのでございます。

それは恐しい御最期でございました。まるで雪路さんの最期を真似たような。

わたしどもは、雪路さんの亡霊の仕業だと話しあいました。それにしても、見事な太刀の跡は解せぬことではございました。烈しいお局様のあの御処置には、ふさわしいお返し——などと咳く腰元もございました。

その後、殿様は皆々の供養をいとなまれ、祠を立てて雪路大明神

をまつりましたので、それから絶えて、奇怪なうわさはなくなりました。

八丈河原の片ほとりで、新三郎様によく似た若い僧をみかけたものがあるとうわさも、ちよつとありました。が、誰も、その行方を存じているものはいません。

私も、罪の深さにおののいて、尼にでもなろうかと思っているのでございます。

え、私ですか、私は、この物語の最初にお話し申し上げました腰元でございます。

女の亡霊でございませうか、あれは、わたくしのいたずら。ほんとうは、わたくしが、江戸の奥方様のまわしものであったのでございます。

—おわり—

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

六枚一組 四〇〇円

☆ベッド変型縛り(略号しん1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸縛り(略号しん4)

五枚一組 三五〇円

☆全裸強烈縛り(略号しん2)

四枚一組 三〇〇円

☆セーラー服縛り(略号しん5)

五枚一組 三五〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号しん3)

四枚一組 三〇〇円

☆股間しばり(略号しん6)

四枚一組 三〇〇円

田中芳代嬢の巻



女体緊縛フォトアラベスク昨日無事落手致しました。その出来の素晴らしさには驚きました。此の後もこの種の限定版を続けて下さい。今回は引続いて「緊縛」をお送り下さい。お願い致します。次に私の希望を二、三申し上げます。一、今後限定版或は特集号でも良いです。すから、一つのテーマにもとずいた縛られる女を編集して頂けませんか。此の場合、勿論時代物でお願いします。(現代物では、犯人逮捕は手錠のため緊縛とは縁がないから)「仇姿黄八丈」のように和服着用、ロングヘアーならかつら

の使用には及びません。(頭に合わないかつらを使用する位なら使わない方がよい)山中に追われる女賊、これを追う女目明し。追いつめられた女賊が捕方の女に傷をおわしたが、ついに力つきて後手に捕縛され引き立てられてゆく。舞合は変り、番所の内部と思われる所へ高小手に縛られた女賊が引き据えられ、その側に女目明しが割竹を持って立っている。そして自分を迫るが、がんとして口を割らない。さんざん手を変え品を変えて拷問された挙句、遂に罪状を認めてお仕置になるといふ具合に一つのテーマで一冊の本を作つて頂きたいのです。此の場合、あらゆる縛り方をあらゆる角度から存分に見せて貰いたいものです。尚、一枚一枚に解説をつけて下さい。れば最上の本になる事でしよう。二、次に分譲品の中に小冊子の様な形式で女の縛り方四十八手という様なものを作つて頂きたいのです。私は何時も自己流で妻を縛つて居りますが、毎回同じ様な縛り方なので変化がありません。たまには変った縛り方をお願いします。手解きを受け様もなく困つて居ります。図解で縛の掛け方、締め具合等を解りやすく書いた本が一冊

位あつても良いのではないでしようか。三、分譲品目録について、大分以前の旧刊号の表紙裏に小さく、沢山の分譲写真がのつていた様に記憶して居りますが、今後あの様な目録を作つて貰えませんか。何故なら、活字で「後手高小手」と書いてあつても細のかけ方、ポーズ等がぜんぜんわかりません。同じ後手でも個人々々によつて縛り方、縄の掛け方、またポーズ等に好みのあるのは当り前です。表情とかこまかい処迄解らなくても、大体のことがわかれれば購入する方も便利なのではないうまでもありません。タテ十五ミリ、ヨコ十ミリ位の小型のものをぎつしりつめて集録し、勿論二百円位の価格で販売したら、自分の気に入らないものを購入するより良いと思ひます。以上、私の勝手なことばかり書きましたが、編集部の方々が御相談の上、お答を奇々誌上でお願ひ致します。では貴社の御健斗をお祈り申し上げペンをおきま

◎写真特写引受◎

特別に交つた着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他についてお返事いたします。(返信料同封下さい)

す。(横浜、山上武一)「編集部より」いろいろと御高説ありがとうございます。一から三迄、いずれも是非実現したい事柄ばかりです。急に全部とまではい cannot なくとも順次何らかの形で貴意にそうようにしたいと思ひます。

○私が最近読んだ雑誌の中で「傑作倶楽部」の戦慄地帯小説特集の三六八頁、その殺しは俺にまかせろ。が特に気に入りました。その一部を紹介しますと、ハルカは素裸にむかれた肌に、にぶい光をうけて、天井から逆さに吊り下げられて居る。しかもその下には、硫酸をみなみと湛えた湯槽が、ふつふつと音を立てて、不気味な煙を部屋いっぱいふきあげていた。V八三郎は逆さに吊つた女の頭目がけて、大斧を力をこめてかぶつた。V八天井から逆さにぶら下つた女体はもう死んだように、ぐったりとなつて居る。が、その天井がたえずゆれ動くたびに、みごとに裸体が震動するのは？船の中の証拠なのだ。V八殺し屋たちは、たぎりを

つ硫酸の不気味な液体と意識を失ってぶら下るルカの肉体をみくらべて、かたずをのんでふるえている。V私がこの小説を読んで殊に興味を覚えた事は、第一に、吊りおのころの描写が非常に刻明であること。第二に挿絵の描き方が非常に感情が籠っている。腹に掛つた縄で上体のぐつと反った姿、また伸びきった腕も興奮をそそる。それから、足首と腰を、いっしょにつけて縛ったもの、うまい考えだと思ふ。第三に腰布一枚で吊り下げられていること。第四に、大斧と硫酸というものによって、女の苦しみが一層出てくる。こういう吊り方は、実際には不可能だと思ふが、只眺めるだけであつたならば、本当の逆吊りよりはさらに実感がこもっている。また、手の指や、しなやかな曲線（絵によつて、又文からも想像できる）に大いに興味をもった。（大阪 黒山憲三）

初めてお便り致します。女だてらに一筆させて戴きます。私は十二才になる家事に従事しておられます娘でございます。幼い頃より人より（特に男の方に）いじめられる事に喜びを感じておりました。これが女性特有のマゾだと気がついたので最近でした。ある日男の方が貴誌を眺んでいるのを偶然見ましたので、この種の本がある事を初めて知りました。私は勇気を出し貴誌を手にしましたところ、この私の気持がマゾであることがわかりました。同時に多くの人がマゾでありサドであることがわかりました。昨日、新東宝の「九十九本目の生娘」を看板にひかれて見て参りましたところ、私を喜ばしてくれた個所が数々ございました。二人の娘がシユミーズ一枚で人々の面前でギリギリと縛り上げられ、木に吊されておる所などを見ていますと、まるで自分自身がその様にされてでもいるかの如く感じました。貴誌にも色々と緊縛の写真が出されておりますが、私も女性の立場と致しまして全裸よりも、シユミーズ、又はブラジャー、パンツ等を着けていた方が、女性としての美しさがあると思います。その美しさを持ちながら責められている姿の方がマゾ的な空気をより多くかもし出すものだと思います。花坂道子さんの美しさには本当に魅せられます。あの美しさこそ本来のマゾの美しさだと思います。皆様、いかがでございますか？ あんまり血なま

ぐさいものですと……、「九十九本目の生娘」においても、縛られた娘を刀でさし血が足につたわり流れるところなどは、いくら私でも、ぞつと寒気がいたしました。あまりいいものではございません。私も一度男の方に責めさいなまれないと思っておりますが、その機

会もなく残念に思いながら、毎日過しておりましたが、貴誌を唯一の心のなぐさめとして、今後過したいと思ひますので、もし私の我儘をお聞き下されるなら、写真等もさつき記しました様なものを一枚でも多くされるようお願い致します。（東京都新宿古屋喜代子）

ニユーモデル未発表緊縛フォト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みい)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 岩井知子

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みほ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みと)

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 田原美佐子
略号 (みろ)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 平野笑子
略号 (みに)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みへ)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
ニユー・モデル 絹川文代
略号 (みち)

私は二十五才の女性です。中年のフェチシスト御夫妻の同好の方がありまして是非お便り下さい。体験談の交換をしましょう。レスポンスに興味のある方もお便り下さい。(大阪 光沢登志子)

「家畜人ヤブー」が休載された事を全く残念に思います。私的環境に變動を生じたとありますが、氏程の学者になると公私極めて御多忙とは拝察しますが、然し折角の大作中絶する事なく何とか早急に完結していただく事を切望いたします。何だか「ヤブー」が赤クリムを前にしておあづけを喰ったようにやり切れませんね。それから編集部に御尋ねするのですが「家畜人ヤブー」を限定版として発行されたら無用の削除も必要ないものと思えますが如何ですか。それとマゾ特集号を早急に刊行していただけるよう御願いたします。もう一つ、景品に緊縛写真を御送りしていただいておりますがこんなものはマゾヒストにとって何の価値あるものでなく破って捨てる丈なんです。景品として贈っていただけではいけません、マゾ向のものを願います。最後に沼氏に

「ヤブー」を出来る丈早い機会に再連載していただく事を御依頼すると共に他の諸大家がマゾの大作をどしどし発表されますよう切望いたします。(兵庫 M・O生)

昨日、春日ルミと伊吹真佐子、春日ルミと愛川悦子到着いたしました。早速お送り下さって有難うございました。やはり直接印画紙に焼付けた写真の方が一段と見た感じが良いですね。R20の春日伊吹のコンビ写真では、伊吹が腰巻をしてるので、どうも気に入らない。私は伊吹のファンなので、春日、伊吹のもので外にもっと写真があつたら欲しいと思つています。伊吹が春日にいたためつけられて苦しい表情のよくあらわれている写真がほしいです。春日ルミが口にタバコか繻のハシをくわえていれば、もっと感じが出るのではないでしようか。私は、やはりサドの女とマゾの女の物が一番好きです。女同志の物が一番私は好きです。浜本喜美、三木敬子の「縄さばき」とてもよかったです。(猿ぐつわは口の中へ、上下の唇の間へ通してキツク縛った方がよかったのではないか。その方が顔がそれだけ良く見える故に)又、

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

- | | | | |
|-------|-----------|--------|-----------|
| E S 1 | ヌード緊縛集 | E S 6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| E S 2 | 三枚一組 二五〇円 | E S 7 | 剥れたスロース |
| モデル | 全裸悦庵集 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| E S 3 | 四枚一組 三〇〇円 | E S 8 | 乙女のすべて |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| E S 4 | 三枚一組 二五〇円 | E S 9 | 七枚一組 四五〇円 |
| モデル | 酒宴の弄者 | モデル | 女学生の縛り |
| E S 5 | 二枚一組 二〇〇円 | E S 10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 脱がされる娘 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 六枚一組 四〇〇円 |
| | 五枚一組 三五〇円 | | |

女性同志の場合、縛る方の女性は縛られる女性の方より年もずっと下で小さな方がよい。その為には縛る方の女性はハイティーン(十代頃のマンボスタイル)で、相手のポリウムある女性をギユウギユウいわせてみては如何です。又、ポリウムのある四十才の女性を若い女性がいためつけてみるのも良いではないでしようか。とにかく、いずれの場合でも縛られる役の女性には真に迫った気合の入った表情であること。それに「縄さばき」のように一から最後まで連続物で縛られてゆく女性の表情の一コマ

一コマをのがさないことが大切でこのような写真を見るのが非常に楽しみです。(福島、T・S生)

○

いつものことながら、私は女性の足、もちろん形がよい足線美にほっとして、私のいるような空想が飛躍してゆきます。ともすれば本当にさわってみたい気持を押して沈めつつスカートやストラップスにおおわれた太腿に続く豊かな線、ストッキングの喰い込んだ太腿、そしてヒップ、限りなく女性の体をおおう下着に執着して、いよいよ空想をたくましくするばかりで

す。女性の下着を身につけたくても、気の小さい私は洋品店でついはずかしさの余り、ストッキング程度しか買えなく、ブラジャー、パンティ、コーセット等は自分で作ったりしています。ウインドーに並べられた美しいものに比べて見おとりがして、いやになり本

当のものがほしくなります。私の体は女性的な線が良く出て居りまして、自分ながら感心して眺める事がしばしばあります。色は白い方ではありませんが、小麦色で身長に比較して足が小さく、毛のな

ブも丸く銭湯で他の人と比較しては、そのボリューム感に酔って遠慮なくじろじろと注がれる視線に満足して居ります。ウエストに続く線はヒップから急にしぼられて細くくびれて上半身は乳房こそありませんが、胸の部分は多少ふくらんでおります。肩巾はそんなに広

くなく、二の腕から指先まで細くすんなりのびて、掌も小さく首が細くすべて女性的です。顔は、鼻は高くありませんが、眼が大きくてまつげが長く、可愛い顔立です。以上が私の体のあらましです。時々女性の下着をつけて自分で縛ってみたりして居ります。しかし

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13)

各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R 10	鎖しはり晒責 (萩千恵子)
R 11	股間しはり正面 (伊吹真佐子)
R 12	女学生制服しはり (須川令子)
R 13	尻立後手しはり (萩千恵子)
R 14	開股しはり (川辺砂登子)
R 15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R 16	トイレでの縛り (須川令子)
R 17	立木野外しはり (村田那美子)
R 18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R 19	足場椅子せめ (伊吹真佐子)
R 20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しはり (萩千恵子)
R 22	強烈な梯子せめ (伊吹真佐子)
R 23	梯子責め (佐賀美智子)
R 24	逆さ本吊りせめ (伊吹真佐子)
R 25	後手吊りせめ (同右)
R 26	股間しはり後手 (中塚文子)
R 27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R 28	高小手しはり (加賀利江子)
R 29	変型足手しはり (萩千恵子)
R 30	松樹後手しはり (村田那美子)
R 31	くさりせめ (伊吹真佐子)
R 32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R 33	股間タテしはり (中富綾子)
R 34	首縛股間しはり (坂口利子)
R 35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R 36	和服の後手しはり (藤田節子)
R 37	仰向全裸悦虚責 (川端多奈子)
R 38	後手首縛シメ (加賀利江子)
R 39	乳房下しはり (村田那美子)
R 40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R 41	お灸せめ (春日)
R 42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R 43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R 44	コルセット縛り (中塚文子)
R 45	股間しはり (同右)
R 46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R 47	後手しはり (加賀利江子)
R 48	御開帳 (萩千恵子)
R 49	くさりせめ (川端多奈子)
R 50	折檻の魅力 (須川令子)
R 51	全裸の股間しはり (愛川悦子)
R 52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R 53	開股椅子せめ正面 (花坂道子)
R 54	振袖の緊縛 (村井知可子)
R 55	腰元の吊り責 (愛川悦子)
R 56	ヌードしはり (田中芳代)
R 57	本縛しはり (中塚文子)
R 58	股間しはり (萩千恵子)
R 59	落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子)
R 60	樹間のハリツケ (益田房子)
R 61	帆立舟のせめ (益田房子)

R 72	逆エビ責め (愛川悦子)
R 73	変形全裸股間縛 (花坂道子)
R 74	ヌード縛り (村田那美子)
R 75	全裸横臥緊縛 (萩千恵子)
R 76	ビクニツク (須川令子)
R 77	ハイヒール (村田那美子)
R 78	湖畔の宿にて (須川令子)
R 79	尻立逆しはり (大塚啓子)
R 80	下着の色模様 (田中芳代)
R 81	目隠し開股縛り (愛川悦子)
R 82	後手高小手 (花坂道子)
R 83	乳房しはり (愛川悦子)
R 84	開股ベツド縛り (愛川悦子)
R 85	全裸床柱縛り (萩千恵子)
R 86	亀ノ甲縛り (愛川悦子)
R 87	ヌード股間縛り (大塚啓子)
R 88	全裸乱れ髪 (川辺砂登子)
R 89	ガンジガラメ (愛川悦子)
R 90	背腰責め (中塚文子)
R 91	後手股間しはり (伊吹真佐子)
R 92	腹部丸出し猿轡 (坂口利子)
R 93	破れたシユミーズ (須川令子)
R 94	女学生しはり (萩千恵子)
R 95	仰向開股しはり (川辺砂登子)
R 96	乳房くさりせめ (村田那美子)
R 97	野外バンド責め (中塚文子)
R 98	トイレ正面排世縛 (伊吹真佐子)
R 99	開股正面いじめ (佐賀美智子)
R 100	乳房搾りせめ (佐賀美智子)

乳房がないということは大変残念です。そこで私は男性を女性化する第一の方法としてスキヤンテイの着物をしました。スキヤンテイの意味通り最少の布地で男性を女性的にします。次にヒップに魅力を感じて以来、もっとも女性にいう願望から局部的に大きくすることを考えつきました。最近の体のデーターは、身長一六五、ウエスト五八、ヒップ九一、太腿五二です。空想的にはヒップをもっと大きくしてみたく、実験中は確か一と廻り大きくなりましたので九七から九八位はありました。よう。私の実験しましたものは、手製によるヒップ拡大機並に乳房拡大機です。詳細につきましてはいずれ後程お知らせすることにします(東京 X・N生)

皆様、御元気でですか？ 日本を離れてから早や一年の年月が流れています。奇巧もその後順調な発展を遂げられていたことと思えます。ドイツへ来て感じたことは、奇巧の如き雑誌のないことで、これだけでも、日本はいいなあと思ったことでした。それは吾々の人間の底にある夢を満してくれるからです。「大奥裸女血斗」以来、こちらにもスランプで、余りよいアイデアも浮かんできません。いずれもこれらの重流ばかりです。その後、女斗美ファン、女性裸美ファンの方々も御元氣のことと思えます。又無惨絵、女性切腹ファンの方々も御元氣のことと思えますが、今日は女性切腹ファンの方々のために一寸珍しい物を御紹介したいと思います。同封のカラーフィルムはミュンヘン画廊「アルテ

女体『浣腸風景十二態』

(9×13cm) 印画紙焼付
十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

女体浣腸連続フォト

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円
モデル 愛川悦子嬢

絹川文代緊縛姿態集

大手札型印画紙焼付型

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

・ピナマテク」所蔵のデューラー筆「ルクレチアの自殺」と題する作品を撮影したものです。いずれも宗教的物語に材を求めたものと思われ、西欧絵画の材に女性の自殺を題材にしたものは珍しく、又、これは余り日本に知られていないものと思われ、且つ館内の絵葉書売場その他図録中にも見られませんので、撮影したわけであり、宗教的に自殺を禁じられている西欧社会に於ても珍しく思つた程でした。デューラー画くところの西洋の豊満な体格の裸女が、立腹を切る(正確には乳の下をえぐらんとしているのです)が、図は等身大の画の迫力と相俟って、見事な出来栄で、フィルム画面では少し見難いかもしれませんが、刃をつき立てたところから、鮮血がとんでいるのを明らかに画いています。表情もデューラー独特の目を大きく画いてあることも私には大きな魅力でした。この他に私の興味をひいたものはルーベンスの「アマゾン戦争」でこれは日本にもよく紹介されているので、皆様の中に御存知の方も、おありのことと存じます。伝説の中のアマゾン女兵とギリシャ兵との戦いを画いたもので、川原に全裸で、のどや脇腹をえぐられて斃れているアマゾンの女兵の屍、乳房の上に、川の水を紅に染めて息をたえている裸女の屍、白刃をふるって斗っているアマゾンの女兵等が画かれています。これは全く私の「大奥裸女血斗」のイメージも同じです。もし画中の女が、ふんどしをしめて、黒髪をなびかせていれば、全く私のアイデアそっくりの図になるでしょう。これも細部に亘って刻明にカラーフィルムに収めて成功しました。奇巧の今後の発展を望みつつ今日は、これで擱筆します。

(在ドイツ 京洛生)

油の乗り切った処でブツンと結末を迎えてしまったと云った感じの魔教圏N08、第十回からが、いわば本筋だったのにと惜しまれます。せめて、あと、三四回位卓越したアイデアでみっちり路子を教育して貰いたかったと思います。が、既載の分で一冊臨時増刊号を出して下さい。期待して首を長くして待っております。それと、あの素晴しかった例の限定版第二集

○浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

紅白まんだらの扱帯が後手の手首に喰い込んで苦痛にゆがむ文代嬢の美貌。身動きもできない捕われの姿態に襲いかかる三〇〇Cの硝子製浣腸器。空しい抵抗をあざ笑うエネマシリンジのゴム球。イルリガートルの嘴管。浣腸が終って便意の苦痛と戦う表情。文代嬢熱演の浣腸責フオート。

○浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組 三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

浣腸芸術という言葉があるとしたら、浣腸の苦痛に悶える姿態に美しさを発見するという狙いが、それに該当するかも知れない。紐と浣腸器のかもしれない。美しいコントラスト。白い肌に妖しくまといつく黒色のゴム管。若い女性の生理に激しい変動を期待するグリセリン溶液。夢の如き浣腸責アツプ。

つたと思います(福岡 小倉生)

○

横村氏のは甘いソドミヤとフェチシズムで私のは、オースドックスな男性責小説なので自然と趣がちがい、それぞれの人の好みに合うと思います。只今書いているものでは、ルバンダ島の二人の残存兵をソドミヤ小説風にあつかったマラド、薩摩侍と新撰組をあつかった、柳に雨、京の橋づくし、旧制高校生と青年将校のソドミヤを描いた、薩南館の人々、蕃地の女と日本軍人を扱った、蕃花、などの作品の用意してあります。又、かねてから書きたいと思った、加賀騒動の、大槻伝蔵仕末、百万石責、越中の五箇山の飯番所で責められる大槻内蔵助を描いたものなど、小生の机の抽出に下書きのままだ死蔵してあります。男性のモデルを募集しているとのこと、貴誌の口絵写真に男性の揮毫がのることを希望しています。東京の洋書屋を売っている処ならどこでも自由に買えるアメリカの本にT・M(トモロウ・マン)という男性の裸体写真を集めた小冊子がありボデビルの写真だという事です。どうも目的は他にあるようです。とにかく素晴らしい写真ばかりなの

【G】組 緊縛フオート

判紙付	一枚一組	一五〇円
中画焼付	五枚一組	六〇〇円
大印	十枚十組	一〇〇〇円

G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

で四、五冊持っています。以上かく一見をおすすめします。以上読者欄を通じて回答下されば幸いです。(菅良太)

△編集部よりV貴稿「狼紅匪」を掲載するに当り大幅に訂正、削除或は書き直し等を以て筆を加えましたことは事実であります。又、貴下のおっしゃるように、他の週刊誌、日刊誌、単行本等に於て、相当突っ込んだ描写の個所が散見するもの実状です。徒らに本誌のみに検閲が厳しいとお思いのようですが、現在、憲法によって検閲

はすべて禁止されておき、外部から何ら制約を受けるわけではありませんが。ただ本誌としましては、諸般の事情を考究して独自の立場から検討の上、公表すべきものとすべからざるものとの限界を確立しておきます。他誌が発表しているから追従するということでは、徒らに描写の深刻化、激化を誘発し、遂には世の指弾を受けるような結果となるものであります。不良週刊誌の激増ということも、その原因はかかるところに胚胎すると思えます。従って他誌にそういう逸脱した描写の個所があるからといって、本誌がこれを真似る必要は、いささかもないわけです。貴下の云われるように極力描写の婉曲化麗化をはかって頂きたいと思えます。貴稿につきましては、今後検討の上、誌面の許すかぎり掲載させて頂きます。以上の次第でありますから悪しからず御諒承願います。

○ 私は女装マニヤですから無論女装は大好きです。しかし、それにもまして、女装して責めを受ける事が私はたまらないのです。そして私は女装に於て着る物の布地はただざわりのよい絹とかナイロン

などすべすべとして光沢のある布地を選びます。そして私は主に洋装です。私は旅館の女中がさがるなり、かどの中の小鳥がはなれた様に、急いでスーツケースをあけて、下着やドレス、纏、手拭などいろいろな責め道具を部屋一ぱいにならべてしばらくの間ながめて楽しみます。さあ、私の男性よさようなら、心でそう言いながら背広、そしてワイシャツ、アンダーシャツ、パンツと全部ぬぎ、かわりにナイロンのパンティ、ブラジャー、コルセット、スリッパ。そして、今日はチャイニー・ズ・ドレス。顔も下地から、口、目、あそこまかい所まで完全にOKになったら、かつらをかぶります。そうすると、私の下から上までほとんど女、そして鏡を見ました。美人です。自分でこの様なことをいうのは変ですが、今迄私の女装を見た人は皆そういうのです。なかにはゲイバーにつとめてみないかという人もありました。だけど私は大勢の人の前に出るのがいやなのです。何にかこわくて、一度出てみたいとは思っているのですが仕度をするところもないし、とにかく私は前にも書きました様に女装で縛られるのがすきなのです。

まずつぎの間のかべ一面に今迄の私の縛り写真をよい物ばかりをえらんでびようではりつけて、その真中にひいてあるふとんの上で自縛してなるべく女性に近いセクシーな姿で、鏡にうつしてみます。淡い蛍光灯に照らし出されて、そこに一人の若い女性の縛られた姿がうかび上っています。今は、この旅館でもほとんど大鏡をそなえてつけてありますので便利です。私はいつも思うのです。どうしてこのように女装するという事が楽

しいのか、いや楽しいのではなくいい気持なのです。あの絹の肌ざわり、そして絹が体にぐるぐると巻きついた感じ。しかし、私はその縄目のいたさ、縛られるその事自体は女装しないときにはゼロにひとしいものです。女装してそれ着てこそ私の縛りは100%満されるのです。(女装マニヤ生)

○ 私は十月号。私は女性の自刃を見た。の筆者、東福次郎氏に心か

緊縛フオト新作発表

大手札型印画紙 焼付
各組三枚一組 二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

開股三番勝負

(その一)

△モデル

絹川文代V

カーテンの翳

略号(けろ)

開股三番勝負

(その二)

△モデル

大塚啓子V

艶姿色模様

略号(けは)

開股三番勝負

(その三)

△モデル

絹川文代V

浴場の欲情

略号(けに)

開股三番勝負

(その四)

△モデル

大塚啓子V

いけにえ

略号(けほ)

開股三番勝負

(その五)

△モデル

絹川文代V

のぞき見

略号(けへ)

開股三番勝負

(その六)

△モデル

絹川文代V

開股三番勝負

(その七)

らお礼を申し上げたいと存じます。私は本誌を知ってから大分になります。この一篇ほど私の気持ちを強くかきみだしたものは、本当に初めてです。これを読みました夜は文字通り一睡も出来ず、悶々として転々反側、空がしらじら明ける頃、やっと眠る事が出来ました。様な事で、小学校五、六年位の頃よりの切腹マニアである私には胸の痛くなるほどの感激でした。若しも私が文中の左右田律子さんの様な立場におかれたら、きつとむしろ喜んで律子さんの様に見事に切腹して異境の果てに死んで行ったことでしょう。異常なほど切腹にとりつかれた私にとっては、むしろ後の事を何も考える事もなく、存分おのれの腹を切り開き命を絶った彼女が、うらやましくさえ思われます。多くの切腹マニアの方々も、この一篇には文句なしに惹

きつけられた事でしよう。只、挿絵は穴を掘っているのを止め、切腹途中のものをに入れて下さったら申分なかつたと思います。私の様なマニアにとって嬉しかったのは「女性切腹についての雑感」を送られた皆川波苗子さんの存在でした。何といつても自分の腹を切る事であり相当の苦痛にも抱わらずそれをされた事は敬服します。もっとも私達マニアには、その苦痛すら楽しいものなのですが。波苗子さんはAさんという良き同好者いられるので本当に幸せです。貴女方が、ひそかに切腹の実験をやっておられるのを想像するだけでも胸がおどって参ります。実は私は徳川時代以後の切腹が、ほんの真似事になり、短刀を取り上げた時に首を落とすとか、突き立てた時にはもう首が落ちて居るとか、浅野内匠守の様に皮切りだけで介錯

美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

特高拷問

△破られたズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組 二五〇円

モデル 絹川 文代

花坂道子緊縛フオト集

大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円

されてる様な事では本当の切腹といえないと思つています。矢張り腹腔まで刃物を入れ完全に腹壁を裂き、腸が脱出してこそ本当の切腹と言える事で、私達マニアもそういう切腹に心をひかれ、特に私はそういう切腹によって命を絶ちたいと望むのです。お二人の実験された様に私も度々私の場合一人で切る訳ですが、脂肪の出る程の皮切りは、ずっと前から行つて居り、おっしゃる通り覚悟を決めた者にとつては刃物が鋭利であれば皮切りの切腹は左程、難事ではな

いと私も思います。只、私の経験では一文字に引き廻す時に切口が右上りになり易い事で、苦痛のあまり夢中になつてしまつた為と思います。波苗子さんは本当に切腹する場合の願望を述べておられますが、私も全裸で切るのを望みます。只、立ち腹は姿態としては非常に心をそそられますが、実際に

は立つて居れるのは始めだけで途中で崩れてしまふでしょうから、矢張り正座してお尻の下に座ぶとんをあてがい柱を背にして切るのが良いと思つて居ります。私は切腹する時は短刀か日本刀を使い度いと思ひます。それ以外の刃物では、どうしてもお腹に刺す気がしないのです。それと大きな鏡が必要なのです。私は以前から全裸で鏡に写るのが大好きなのです。そうやって腸が出る程の切腹をやりたいと本当に願つて居ります。その時は何とかして波苗子さんに介ぞえをお願いしたいものです。又体験記、お便りを是非お寄せ下さい。(伊勢 ある看護婦)

○ 本誌を買つて最初に禪シリーズを読むのが楽しみです。八月号の禪刑事捜査ノートの「殺人再現」は大変面白く、何回も何回も繰りかえし読みました。文の中の「相

手に要求されても決して禪をとっちやいけないうぜ」という処を見ると、私は胸の中がグツとこみ上げて来ます。その次の頁の挿画も、なかなかよかったです。真白い晒と思われる禪を、ぐいっと引きしめて尻に喰い込む様が目に浮びます。九月号は休みでガツカリでしたが菅良太氏の「猖狂匪」で又、かくべつにフンドシ姿を見せてくれた。柱に縛られた中尉が海老責にされたり、五十本のローソクの上を歩いて歩く男責めは上出来です。挿画も、いかにも汗で汚れた身に真白い六尺禪が固く締められているようです。十月号には又、青木様の文が掲載されました。私達フンドシマニアは男責めを心から喜んで読んでいます。毎月、一枚でもよろしいから四馬孝様の男責の挿画を載せていただくようお願いいたします。赤井輝樹様、もっと元氣を出して自分の夢を実現しようではありませんか。赤禪では恥しいから駄目だなどと、そのような弱氣では実現できません。カラーの写真を写したいとのこと、私も同感です。私もフンドシ姿を十数枚、写しているが、カラー写真がないのが残念です。いかがが私の写真と貴殿の写真を見比べをしまし

ようか。出来れば力になりたいと思います。私も知人がほしいのです。心から語り合って禪友を増しましょう。東京の今野正志様の希望を実現させてやって下さい。四馬孝様、毎月号とはいいいません。二カ月に一回でもよろしいから挿画をおねがいします。東京の八百拾吾様、大賛成です。出来ればお会いしたいと思います。禪も赤禪や水色の禪もあります。愛禪者の諸君、毎号の通信で語り合いましう。八月号に滝れい子様の「落城後日譚」があったが、十月号にも滝れい子様の「城壁に吊られた人質」が載せられました。それぞれ戦国時代の挿画です。もっと進んで切支丹の天草太郎の敗戦の無残な姿を挿画やグラフィア等に滝れい子様や四馬孝様の筆でおねがいいたします。出来れば男の禪一本の姿のコンテストを出して下さい。又、禪姿でエビ責の正面、横の写真を二枚、次号にでも出して下さい。愛禪者の皆様が好きととでしよう。是非実現して下さい。様おねがいいたします。私がいくら叫んでも出来そうにもないが石の上にも三年ということもありますから、それまで頑張って見ましよう。愛禪者の皆さん、しばらく

代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦唐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶闇の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

待つて見ようではありませんか。

(清水 ふんどし男)

○ 暫く御無沙汰いたしました。毎号、待ち兼ねている本誌十月号、早速入手いたし久方張りで横村氏の創作を拝読、我々同性の求める希望の内容に息つく間もなく読みつくしてしまいました。そして豊富な通信に堪能した次第です。七月号では同性のアクロ、着衣もキヤルマタ、サポーター、Gパンブレイにおける。それらの着衣を利用してのアクロ責めに関心のある同好者の多いのに意を強くした次第ですが、折角の意見、希望を交換したいと願っても単に一愛読者又は、こじつけのペンネームに居所さえ明記されず残念に思います。同好者相互に連絡出来て、各自の考え抱負を語り合えたら如何に楽しいかと思ひます。同じ思いに日夜、独り焦れている小生を満足させて下さる方はいないものでしょうか。キヤルマタと聞いただけでぞくぞくとする小生は、好んで日常着用しています。それも男子下着が年々露出過剰になる傾向途上にある昨今、バレエ・ダンス(男性)の使用する総ゴム、キヤルマタ式サポーター又はタイツ等

男性の肉体美を遺憾なく發揮するには、褲について最も効果的なものと思ひます。それらの着衣によつてアクロバットまではゆかずとも、運動選手の如く体操器具を用いた同性同志のプレイに、あらゆる光景を勝手に描いていますが、その気持が益々強くなるのを、どうすることも出来ません。キヤルマタのみのアクロバットの躍動美舞台でのタイツを着けた男性舞手の流動美サーカスの軽業師のタイツ、キヤルマタ・スタイルの躍動スリル。必ずこれ等の雰囲気と憧れと魅力をお感じの諸氏も多いと確信していますが、小生もキヤルマタ、タイツは持っていますし、変った色調、デザイン、生地によるキヤルマタのコレクションに最も関心をいだいています。地区の遠近を問わず同性のアクロ、キヤルマタ、タイツ等に関心ある方の文通を求めます。(八王子 柿沼 吾郎)

○ 編集部の皆様、及び全国諸兄の皆様は初めて御挨拶を申し上げます。僕は本誌の復刊を最近、知りました。早速、買求めて帰り一夜眠らずに、読んでしまいました。都会に出て来て未だ二カ月ほどで

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歎

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第嚴重包装の上急送申し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

田舎では本誌は見たことはなかったのです。それだけに僕の心に、ひそんでいた、或る種のもものが満ち溢れ来たことは事実です。僕の性格は中性とでもいいたししょうか、自分でもハッキリわかりません。本誌を読んでも男性のことばかり気が向いて、女性のものには一向に興味を持てません。男同志の愛情、アクロバット、女装、等に関心が湧いてきます。又、僕自身の体を自分で縛ったり責めたり色々

な色を塗ったりしたこともありましたが、自分一人が出来ぬこともしてみたいと思つていますが、知人もいない都会に出て来ての二カ月余りなのです。僕のような者が投書しても掲載されないと思ひますが、万一にも掲載されて多くの諸兄と交りが出来たら本当にうれしいと思つておきます。東も西も知らぬ土地に来て知人もなく僕の心身を慰めてくれる人のないことは、とても淋しく悲しいこと

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

結構です。今後とも御指導下さい。
(神戸 市瀬戸裕)

と思います。編集部の皆様、どうかこの文をぜひとも早く掲載して僕の心身を救って下さい。そして全国、僕と同じ傾向の諸兄と親しく交わることが出来ますよう御力添え下さい。尚、諸兄と交わりが出来るようになりまして、諸兄の良き兄、良き弟となつて諸兄の御自由にされるよう希望します。僕の性格等の詳しいことは、文通にて知らせますから、ぜひとも便り下さい。尚、編集部の皆様におねがいします。男性の写真をもつともつと多くのせて下さい。モデルが不足でしたら僕を使つて下さつても

十月号を拝読いたしました。毎月、誌上に紹介されております牧高志氏の映画作品「蜘蛛の巣屋敷」の写真は、今までにないほど素晴らしい緊縛美と女の苦しむ表情が出ており誠に頂きますし、勿論その作品よりも今回のものが大変よかつたと思います。同時に苦心して誌上に発表されました氏、及び編集部にご意を表します。さて本文、藤木仙治氏の「鮮血の対決」は、ますます面白く、女の苦しみ

と活劇調にのる「ページ」は大いに楽しませてくれますので小生、うれしく思っている次第です。次号が又々、待たれるところです。ついで南時夫氏の「秘めごと」は小生も、あんな風にクラブ活動に部員として入つてみたら、どんなにか愉快だろう、そして大いに研究も出来るだろうと思ひます。本文中の、立石信乃さんのモデルこれはうまく描き出しており、こんな写真どこかにないでしょうかとにかく上手な画でございました。次のページのモデルはマスクかけでした。少々変ですね。これはやはり本当の手拭で猿ぐつわにすべきでした。ただ縛られた姿態は前記と同様、誠によく画かれていました。ベテラン松井頼子氏の「自分をハダカにする」も面白く、全く同感いたしました。さき、今月号の口絵写真は、いずれも満足すべき写真はなく、がっかりしております。絹川文代嬢の写真は、いずれ緊縛感がありません。第一、縄の掛け方が悪く、大切な女の苦しみ、の表情が何一つ出ていない。悪口をいうようですが今月号の採点は零と申し上げておきます。次号の奮起を望みます。

しかし、それに代り滝れい子氏の画二組は、さすがベテランで、うまく画かれており、特に「山小屋美人失踪」の大木上の姿は、下の少年の叫び声と合つて（少し全体に調整がボケタ感じがしますが）よかつたし、第一、あんな風にシユミーズ一枚で無惨に縛れると、眺める方でも満足します。実際にはないでしょうが、画としては変つており、よく画かれていましたように思つております。ラストの「川柳難記」は「サルグツワと女」など、なかなか面白い川柳だと思つています。(名古屋 E・I生)

K誌の御発展、編集子の方々の御努力の賜と感謝する次第です。四日市の江木靖様、十月号で御便り拝見しました。ぜひとも御交際ねがいたいものです。おたよりを差上げたいのですが通信先をお教え頂けないでしょうか。又、ぜひお会いしプレーが楽しめたらと存じます。適当な場所がないでしょうか。当地の方へ出向いて貰うわけには参りませんか。さて僕は男性によるマゾを好む男性です。貴方の責め方、凌辱の方法など詳しくお知らせ下さい。(A・T生)